

インド密教文献における仏教・ヒンドゥー教間の相克と調和 Bhuta? amaratantra を中心として

著者	藤井 明
学位授与大学	東洋大学
取得学位	博士
学位の分野	文学
報告番号	32663甲第463号
学位授与年月日	2020-03-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00011979/

2019 年度
東洋大学審査学位論文

インド密教文献における
仏教・ヒンドゥー教間の相克と調和
—*Bhūtaḍāmaratantra* を中心として—

文学研究科インド哲学仏教学専攻博士後期課程
4120150002 藤井明

目次

第 I 部 本編.....	1
第 1 章 本論文の目的と方法.....	3
1.1 Esoteric Buddhism と Tantra の区分.....	3
1.2 密教と諸宗教との関わりに関する先行研究	10
1.3 本論文の目的と方法.....	19
第 2 章 密教経軌にみられる仏教とヒンドゥー教の関係.....	22
2.1 大自在天の記述を中心とした仏教とヒンドゥー教との関わり	22
2.1.1 『陀羅尼集経』における大自在天	22
2.1.2 『聖迦毘訶怒金剛童子菩薩成就儀軌経』における大自在天	27
2.2 大自在天の降伏譚	29
2.2.1 『三卷本底哩三昧耶』、『大日経疏』、『大日経義釈』『十八会指帰』中の大自在天の降伏譚	32
2.2.2 <i>Kāraṇḍavyūhasūtra</i> 『大乘莊嚴宝王経』中の大自在天の成仏	35
2.3 殺と降伏を伴った異宗教の取り込み.....	38
2.3.1 『初会金剛頂経』における「降伏」の語義.....	40
2.3.2 仏教諸文献に見られる「殺」の思想	42
2.3.3 初期密教経典に見られる殺を伴う修法.....	45
2.3.4 『初会金剛頂経』注釈文献に見られる殺と降伏	49
2.4 小結	53
第 3 章 <i>Bhūtaḍāmaratantra</i> における仏教、ヒンドゥー教間の関係.....	54
3.1 <i>Bhūtaḍāmaratantra</i> の先行研究とインド宗教史における文献的位置付け.....	54
3.1.1 仏教版 <i>Bhūtaḍāmaratantra</i> の先行研究と文献的位置付け	55
3.1.1.1 BBT の先行研究と文献分類	55
3.1.1.2 BBT を引用する諸文献.....	57
3.1.2 ヒンドゥー教版 <i>Bhūtaḍāmaratantra</i> の先行研究と文献的位置付け.....	59
3.1.2.1 HBT の先行研究とテキスト刊本.....	59
3.1.2.2 Ḍāmara 文献と HBT の関係性.....	61
3.1.2.3 BT の文献名を取り上げる例.....	62
3.2 仏教版、ヒンドゥー教版 <i>Bhūtaḍāmaratantra</i> の内容比較.....	64
3.2.1 <i>Bhūtaḍāmaratantra</i> のテキストと構成.....	64
3.2.2 両版の発話者の異同から見る両 BT の成立過程.....	71
3.2.2.1 発話者の異同.....	71
3.2.2.2 bodhisatva が示す対象	74

3.2.2.3 Ba 写本中の Śūnya の瞑想の記述	78
3.2.3 8 ヤクシニーの修法	85
3.2.3.1 BT の Yakṣiṇīsādhana と他文献の Yakṣiṇīsādhana	85
3.2.3.2 BBT, HBT, UDT 内の Yakṣiṇīsādhana の記述	86
3.2.4 マントラの暗号化	90
3.2.4.1 <i>Hevajratāntra</i> におけるマントラの暗号化	91
3.2.4.2 単語と種字の対応（母音の指定）	92
3.2.4.3 各文字の指定方法（子音の指定）	94
3.2.4.4 ヒンドゥー教版 <i>Bhūtaḍāmaratantra</i> におけるマントラの暗号化の法則	95
3.2.4.5 母音対応列挙	96
3.2.4.6 子音対応列挙	96
3.2.4.7 種字を暗号化した上でのその対応の列挙	96
3.2.4.8 HBT 本文中で暗号化されたマントラ	98
3.2.5 ekaliṅga の記述を通したシヴァ派との関連	111
3.2.5.1 <i>Bhūtaḍāmaratantra</i> における ekaliṅga	111
3.2.5.2 他密教経軌内に見られる大自在天の住处	115
3.2.5.3 ekaliṅga の定義	119
3.2.6 <i>Bhūtaḍāmaratantra</i> 中の行者像	122
3.2.6.1 BT における肉を売る修法	123
3.2.6.2 密教文献に見られる肉、酒を売る修法	123
3.2.6.3 インド文学における肉を売る修法	126
結論 異宗教間の混交のシステムの一端	136
謝辞	141
第 II 部 テキスト編 <i>Bhūtaḍāmaratantra</i> , BBT 10 章, HBT 11 章 梵蔵漢対照テキスト、 和訳	142
凡例	143
BBT 10 章、HBT 11 章サンスクリット対照テキスト	146
BBT 漢訳、BBT チベット語訳対照テキスト	186
BBT 10 章、HBT 11 章サンスクリット和訳	214
略号一覧 Abbreviations	234
参考文献一覧 References	236

第Ⅰ部 本編

第 1 章 本論文の目的と方法

1.1 Esoteric Buddhism と Tantra の区分

インド仏教内の密教的要素が明確化されてきたのは7世紀頃からであり、密教文献内に登場する尊格としてヒンドゥー教の尊格も多く組み込まれるようになる。本論文では、tantra の名を冠する *Bhūtaḍāmaratantra* (BT) を中心として、そこに見られる仏教とヒンドゥー教間の宗教的交渉の具体例を見ることを目的としている。そこで本論文の序論として、仏教とヒンドゥー教間の関わりに対して言及する先行研究を挙げたいと思う。しかし、日本において伝統的に用いられる「密教」という単語と、海外での研究史における Tantra や Tantrism という単語との間には意味合いの違いがあり、各々の単語が示す範囲と使用方法が異なっている。そのため、前段階として、本論文での「密教」や「タントラ」といった語の示す範囲について述べたい。

前者「密教」に対応する英訳としては Esoteric Buddhism が挙げられるであろうが、この術語は研究者の間で tantric Buddhism、Vajrayāna、Mantrayāna、Zhenyan(真言)、Shingon、Mikkyō、Yoga という語としばしば交替して用いられるとされる¹。Orzech *et al.*[2011]は、その序文の中で、esoteric と tantra という語の4つの立場からの使用方法を以下の様に提示している。

- 1) 一部の学者たちは、esoteric Buddhism と tantra を、3世紀あるいは4世紀以降に、仏教のアジア全域での特有の発展を含む包括的な術語として、事実上区別なく使用する。
- 2) 一部の者にとっては、esoteric Buddhism という術語は tantra 聖典に先行し、Mahāyāna 内で発展した別個の流れに言及している。この定義においては、tantra は8世紀以降に発展し、siddha の活動の台頭に関連した、しばしば超道徳的なものとして見られるイメージや修法で明らかに満たされている。
- 3) 他の者にとっては、esoteric Buddhism は仏教 tantra と同義語であるが、mantra、mandala、homa などを含む以前に発展した要素が、abhiṣeka を通して利用できるようになり、秘密を以て守られた包括的なシステムと一体となった6世紀以降に位置付けられる。
- 4) 4番目の立場は、近代以前の東アジアにおける有用なカテゴリーとしての「tantra」を認めず、中国における esoteric Buddhism が一貫した活動、学派あるいは宗派としてではなく Mahāyāna の新しい技術的な広がりとして理解されたと主張している。

¹ Orzech *et al.*[2011] p.3

Orzech による以上の分析を見れば、英語表記における esoteric Buddhism や tantra という語の示す範囲には時代や地域によって学者間で使用方法に揺れがあることが分かる。松長[1980]においても、「漢字文化圏以外の人々が密教について述べる時、それを秘教的な仏教 (esoteric buddhism) とか、仏教の中の秘教 (buddhist esoterism) という。最近ではタントラ仏教 (tantric buddhism) とか、仏教のタントリズム (buddhist tantrism) という呼称が一般に広く用いられるようになった」³と述べられるように、これらの述語の明確な使用の線引きはほぼ存在しないであろう。日本において多く用いられる初期密教(6世紀以前)、中期密教(7世紀)、後期密教(8世紀以降)という時代による区分は、英訳すれば early / middle / later esoteric Buddhism であり、この意味での「密教」(esoteric Buddhism) は、包括的で汎用的な術語と言える。また、この初期密教に割り当てられるものを、その特徴から Esoteric Mahāyāna と称する研究者もいる⁴。これは、初期段階の「密教」ではなく、秘教的な「大乘」という面に強意を置こうとする態度からの言及であろう。

これらの「密教」と「タントラ」という術語はいかに区別されるであろうか。この tantra という術語は、仏教、ヒンドゥー教、ジャイナ教といったインドの諸宗教に共通して用いられるものであり、その示す範囲も複雑な様相を呈する。ここで tantra という語の定義やその範囲に関して、日本において「中期密教」の代表的經典とみなされる『大日経』と『初会金剛頂経』の海外における研究史から、特に仏教タントラに的を絞って膨大な先行研究の蓄積の一端を提示しつつ見ていきたい。

Bhattacharyya, B.[1932]や Dasgupta[1946][1950]のような、20世紀半ば頃までの海外のタントラに関する研究においては、日本で中期密教の時代に組み込まれる『大日経』や『初会金剛頂経』(『真実摂経』)は主としてタントラの研究の中心には入らず、主に *Guhyasamājatantra* や *Cakrasaṃvaratantra* などの後期の文献に焦点が当てられ論じられてきたようである。しかし、研究史の早い段階においても、チベット文献やその文献分類などの伝統、漢訳にも重点を置いていた Tucci は、『初会金剛頂経』のサンスクリット写本の発見にも言及する 1935 年の *Indo-Tibetica* の第 3-1 巻中で「実際、Sarva-tathāgata-tattva-saṅgraha は最古のタントラの一つで、仏教の学派の中で最も普及した一つであり」として『初会金剛頂経』について述べる⁵。また L. Renou と J. Filliozat の編集による 1953

² Orzech *et al.*[2011] p.5

³ 松長[1980] p.17

⁴ Sørensen[2011] p.157

⁵ Tucci[1935] p.38。L. Chandra による英訳は Tucci[1988b] p.38。和訳はこの英訳に依った。Tucci が『初会金剛頂経』を tantra の枠組みから見ている記述に関しては Tucci[1999](first edition 1949)にも見られる。

年の *L'inde Classique* の第 2 巻中では『大日経』、『初会金剛頂経』（*Vajroṣṇīṣayoga-sūtra* として言及される）共に tantra として扱われている⁶。また、Snellgrove[1959]では *Hevajrat tantra* の研究から『初会金剛頂経』に注意を払っている。Wayman[1973][1977]や、Bhattacharyya, N. N.[1982]などではそのタントラ研究の中で『大日経』、『初会金剛頂経』への言及がなされるが、その研究の中心的なものではない。以上のように、両経典は仏教タントラと見なされてはいたが、海外での仏教タントラ研究の中心を占めるものではなかった。

このような状況は 1962 年時点で酒井真典によって「一般に国外人が密教と云へばサンスクリットの原典が多く存在する後期密教を指しており、仏教の中の初期の密教のことを知らない。まして漢訳の中に存在する蘇悉地経等の所作ギキ、大日経等の行ギキ、初会金剛頂経や理趣経等のユガギキを知らず、直ちに無上ユガギキの秘密集会（*Guhyasamāja*）経を唯一の密教の経典と思いこんでいることを知らねばならぬのである」⁷と述べられる。

また松長[1972]は「外国学者の手によって、タントリズムの領域における密教の研究は最近いちじるしく進歩した。しかし、かれらの研究も漢訳文献が比較的に重い位置を占めるインドの初期と中期の密教についてはきわめて貧弱である。したがって、仏教のタントリズムとして開花したインド後期密教と、それ以前の初期と中期の密教とのタントリズムを処理する手続を踏んではない」と述べている⁸。

『初会金剛頂経』に対する国内外における研究としては、早くは Tucci[1932]内の Appendix II に「*Vajrapāṇi* と *Mahādeva* の闘争」としてテキストとイタリア語訳が提示された⁹。これは『初会金剛頂経』内の「降三世品」の一部であることが後に酒井真典によって確認され、1958 年に白石真道と共に邦訳が提示されることとなる¹⁰。その後、1970 年代後半から 1980 年代にかけてサンスクリット写本の影印本及びテキストが世に出さ

⁶ Renou[1953] pp.423-424。邦訳はルヌー[1981] pp.100-101。邦訳では、原文で Tantra として言及される箇所を「密教（タントラ）」あるいは「密教」と訳し、後期密教に関する箇所の Tantra は「タントラ（密教）」あるいは「タントラ」として訳し分けていることが分かる。

⁷ 酒井[1962] p.220

⁸ 松長[1972] pp.21-22。また、この研究動向は塚本[1989]中の『大日経』の項目において「さらに欧米においても、最近までほとんど関心を持たれて来なかったために、見るべき研究成果は少ない」（塚本[1989] p.180）と言及され、また『真実摂経』の項目において「欧米におけるその研究は現在に至るまで不活発であり見るべきものはほとんどない」と述べられている（塚本[1989] p.190）。

⁹ Tucci[1932] pp.135-145。英訳は Tucci[1988a] pp.135-145

¹⁰ 酒井[1958]

れる¹¹。近年の海外における研究においては、例えば Isaacson[1998]は『初会金剛頂経』を「723 年に漢訳されたこのテキストは、最初のものとは言えずとも、おそらく解脱へのタントラの方法が説かれる、最初期の最も影響を及ぼしたテキストの一つである」¹²としてタントラへの影響を持つテキストとみなし、Sanderson[2009]は『大日経』『初会金剛頂経』共に tantra として言及する¹³。本文献に対するチベット語訳の経題から考えれば、『初会金剛頂経』は「大乘經典」(theg pa chen po'i mdo) の語を以て表現されているが¹⁴、8 世紀後半に活躍したと考えられている Buddhaguhya¹⁵は『初会金剛頂経』に対する注釈である『タントラ義入』(rgyud kyi don la 'jug pa / Tantrārthāvatāra)¹⁶の中でこれを de nyid bsdu pa'i rgyud (Tattvasaṃgrahatantra)として言及しており¹⁷、Buddhaguhya の時代には Tantra と見做されていたと言える。

『大日経』の研究史に関しては山本[2012]に詳しく、『大日経』の英訳は漢訳、チベット訳双方からなされている。Kiyota[1990]の *The Mahāvairocana-sūtra*、Yamamoto[1990]の *Mahāvairocana-sūtra*、及び英訳を含む 1992 年の Wayman, A. と Tajima, R. による *The Enlightenment of Vairocana* が出版された。2003 年には Stephen Hodge によって *The Mahāvairocana-Abhisambodhi Tantra* が、2005 年に Giebel[2005]が世に出されている¹⁸。『大日経』のチベット訳に提示されるサンスクリットの経題は、*Mahāvairocanābhisambodhivikurvitādhiṣṭhānavaipulyasūtrendrarājanāmadharmaparyāya*¹⁹で

¹¹ 出版されたテキストとしては、堀内寛仁による『初会金剛頂経の研究 梵本校訂篇』（下巻が 1974 年、上巻が 1983 年）や、1981 年の Isshi Yamada による *Sarva-tathāgata-tattva-saṅgraha-nāma mahāyāna-sūtra*、1987 年の Lokesh Chandra による *Sarva-tathāgata-tattva-saṅgraha* が利用可能である。これらテキストと前後して写本影印版が出版された。1979 年の酒井真典による『梵文初会の金剛頂上 S 本』及び、1981 年の Lokesh Chandra と David Snellgrove による *Sarva-tathāgata-tattva-saṅgraha* の 2 本がそれである。

¹² Isaacson[1998] p.4

¹³ Sanderson[2009] p.125

¹⁴ サンスクリット刊本においては四大品の終わりと教理分の終わりに経名が言及されるが、全て sarvastathāgatātattvasaṃgrahāt と言及されるのみである。経末のサンスクリット名は欠落しており、堀内[1974] p.421 においてはこれをチベット訳から補っている。堀内[1974]における第二編（続タントラ）以降では章名、項目名として tantra という語が用いられる。（堀内[1974] pp.222-224）

¹⁵ 越智[1974]

¹⁶ 東北 No. 2501. 大谷 No.3324

¹⁷ 東北 No.2501 1b3. 大谷 No.3324 2a2

¹⁸ 早くは 1936 年に Ryujin Tajima によってフランス語で *Étude sur le Mahāvairocana-sūtra*(*Dainichikyō*)が提出されている。

¹⁹ 東北 No. 494 151b2. 大谷 No.126 115b2.

あり、その題の中に mahāyānasūtra（大乘経）への変遷過程に見られる vaipulya（方広）²⁰という語を含んでいる。Hodge はこれに関して「Mahāvairocana-abhisambodhi はそのタイトルは sūtra と呼ばれるが、Buddhaguhya や後世の著者たちはそれを Mahā-vairocana-abhisambodhi-tantra と言及する」²¹と注記して Tantra というタイトルの元で翻訳を出版し、Sanderson[2009]は「我々の最初の主たる仏教タントラ」²²として『大日経』に言及する。

以上の様に、日本で「中期密教」の段階に組み込まれる両経は海外での研究においてタントラとして、あるいはタントラへの発展段階にある文献として近年明確に捉えられている。では、ある文献を「タントラ」とみなす基準はどこにあるのであろうか。先の Hodge[2003]はその序文で「インド-チベット語の側から仏教タントラの研究をなす多くの西洋の学者は、漢訳で残されたタントラテキストの膨大な数にほぼ気付かないでいることを知るの驚くことではないだろう」²³とした上でタントラ仏教の研究に際して漢訳密教文献に注目すべきことを述べ、「タントラ」の12の定義を挙げる。

- (1)タントラ仏教は標準的な大乘のそれに加えて、悟りへの新しい道を提供する
- (2)その教義は僧や尼僧よりもむしろ、とりわけ修法者に焦点を当てる。
- (3)その結果として、世俗的な目的や成就を認め、しばしばその特徴において精神的というより、より魔術的な修法を扱う。
- (4)悟りへの道として、特別な瞑想（sādhana）の方法を説き、この生涯あるいは短期間で個人を尊格の化身に換えることを目的とする。
- (5)そのような種類の瞑想は、真実の本質の具体的な象徴としてマンダラ、ムドラー、マントラやダーラニーといった種々の広範な使用をなす。
- (6)創造的な観想を用いた瞑想の間の種々の尊格の姿の形成は悟りへの過程において大事な役割をなす。これらの姿は、外部的あるいは内部的に存在するものとして見られるだろう。
- (7)ブッダや他の尊格の数やタイプに豊かな増殖がある。
- (8)グルの重要性や、彼から sādhana のための教えや適切なイニシエーションを受けることの必要性に非常な重点が置かれる。
- (9)言葉の性質や力への思索が、特にサンスクリットの文字に関して顕著である。
- (10)ホーム儀礼のような、多くの場合非仏教起源の種々の習慣や儀礼が組み込まれ、

デルゲ版では mahā vairocana abhisambodhi vikurvāti adhiṣṭhāna vaipulya sūtra indra rājā nāma dharmma paryāya と示され、北京版では mahā vairocana abhisambodhi vikurvati adhiṣṭhāna vaipulya sūtra indra rājā nāma dharma paryaya となっている。ここでは東北目録に提示される経題を用いた。

²⁰ 辛嶋[2017]

²¹ Hodge[2003] p.538 n.1

²² Sanderson[2009] p.128

²³ Hodge[2003] p.3

仏教の目的に改作される。(11)精神生理学が、変容の過程の一部として説かれる。(12)女性原理の重要性を強調し、性的ヨーガの種々の形を利用する。

24

以上が Hodge[2003]によるタントラ要素の列挙であるが、Hodge がこの列挙で参考としたとする 18 項目による広義の Tantra の要素が Goudriaan[1979]に提示されている²⁵。Hodge はプロトタントラあるいは初期タントラの段階ではこれらの要素のいくつかのみが見られ、中期、後期の段階ではより多くの要素が組み込まれるとする²⁶。ある特定の規定を以て「タントラ」を定義することは困難であるが以上のような項目が、ある文献を「タントラ」文献とみなす指標となるであろう。

『大日経』の先駆経典と考えられている『金剛手灌頂タントラ』²⁷は、チベット訳のサンスクリット名によれば *ārya-vajrapāṇi-abhiṣeka-mahātantra*²⁸であり、経名に *tantra* の名を冠している。また初期密教に配置される『蘇婆呼童子請問経』のチベット訳に示されるサンスクリット名は *ārya-subāhu-paripṛcchā-nāma-tantra*²⁹であり、同様に *tantra* を冠する。同じく初期密教に配される『蘇悉地羯囉経』のチベット訳内のサンスクリット経題は *Susiddhikara-mahātantra-sādhana-upāyika-paṭala*³⁰と示されており、*tantra* という語を備える。以上に挙げてきた文献は 9 世紀前半頃に編纂されたと考えられるチベットの仏典目録である『パンタン目録』(パンタンマ目録)及び同時期の『デンカル目録』(デンカルマ目録)において、以下の様に記述される。『大日経』(パンタンマ: *rnam par snang mdzad mngon par byang chub pa'i rgyud*. デンカルマ: *'phags pa rnam par snang mdzad mngon*

²⁴ Hodge[2003] pp.4-5

²⁵ Goudriaan[1979] pp.7-9。この 18 の要素は引田[1997] pp.22-24 に紹介される。

Brooks[1990]も、主としてヒンドゥータントリズムに関する 10 の要素を挙げている

(Brooks[1990] pp.55-72)。また Payne[2006]は Introduction の中で、この Brooks[1990]と Hodge[2003]によるリストを引用した上で、いくつかの問題点を提示している (Payne[2006] pp.9-14)。

²⁶ Hodge[2003] p.5

²⁷ 酒井[1962][1973]、頼富[1990]、伊藤[1994]、大塚[2013]。翻訳として伊藤[1995a][1995b]がある。

²⁸ 東北 No.496 1b1. 大谷 No.130 1b1. 尚、北京版では *ārya-vajrapāṇi-abhiṣeka-mahātāntra* となっている。

²⁹ 東北 No.805 118a1. 大谷 No.428 179b6. デルゲ版では *ārya-subāhu-paripṛcchā-nāma-tantra* であり、北京版では *ārya-subāhu-paripṛcchā-nāma-tantra* である。ここでは東北目録に提示される経題を用いた。

³⁰ 東北 No.807 168a1. 大谷 No.431 230a8. デルゲ版では *susiddhikara-mahātantra-sādhana-upāyika-paṭala*、北京版では *susiddhikara-mahātantra-sādhana-upāyika* である。ここでは東北目録に提示される経題を用いた。

*par byang chub pa*³¹)、『初会金剛頂経』(パンタンマ: *de bzhin gshegs pa thams cad kyi de kho na nyid bsdus pa'i rgyud phyi ma dang bcas pa*³²)、『金剛手灌頂タントラ』(パンタンマ: *phyag na rdo rje dbang bskur ba'i rgyud*. デンカルマ: *'phags pa phyag na rdo rje dbang bskur ba'i rgyud*³³)、『蘇婆呼童子請問経』(パンタンマ: *dpung bzangs kyis zhus pa'i rgyud*. デンカルマ: *'phags pa dpung bzangs kyis zhus pa*³⁴)、『蘇悉地羯囉経』(パンタンマ: *su siddhi ka ra'i rgyud*. デンカルマ: *'phags pa legs par grub pa*³⁵)。以上の様に『パンタン目録』では rgyud (tantra) という語を多く伴う。『デンカル目録』では『金剛手灌頂タントラ』以外には rgyud (tantra) の字が見られないが、その分類項目が「真言のタントラ」(*sang sngags kyi rgyud*) であることからタントラとみなされていたと言える。川越[2005a]による『パンタン目録』中の項目 27-1 から 27-9 (川越[2005a]の No.700 から No.959 まで) が 1322 年の『プトン目録』成立までの時代に付加された可能性が指摘されている³⁶。ここから、少なくとも『大日経』、『金剛手灌頂タントラ』は 9 世紀に rgyud (tantra) の語を伴っていた可能性が挙げられる。

以上に挙げた諸文献は Buddhaguhya による分類においてタントラとして言及され³⁷、

³¹ 川越[2005a] No.299. 芳村[1974] No.321

³² 川越[2005a] No.884.

³³ 川越[2005a] No.894. 芳村[1974] No.318

³⁴ 川越[2005a] No.904. 芳村[1974] No.325

³⁵ 川越[2005a] No.901. 芳村[1974] No.320

³⁶ 川越[2005b] p.119

³⁷ 例えば、Buddhaguhya 作と考えられる『上禅定品広釈』(*bsam gtan phyi ma rim par phyed ba rgya cher bshad pa / Dhyānottarapaṭalaṭīkā*) 中でこれらの文献が言及される。各々の文献名に rgyud の語は用いられていないが、上に挙げた『蘇悉地羯囉経』、『蘇婆呼童子請問経』は「一切所作のタントラの一般的な儀軌をまとめたタントラ」(東北 No. 2670 9a4. 大谷 No. 3495 11b1. *bya ba'i rgyud thams cad kyi spyi'i cho ga bsdus pa'i rgyud*) として示され、『大日経』、『金剛手灌頂タントラ』は「個別のタントラ」(東北 No. 2670 9a5. 大谷 No. 3495 11b2. *bye brag gi rgyud*) として提示される。『初会金剛頂経』は「瑜伽タントラ」(*rnal 'byor gyi rgyud*) の文脈で言及されており(東北 No. 2670 30b1-30b5. 大谷 No. 3495 34a2-34a6.)、rgyud (tantra) の枠組みから考えられていたと言えよう。『上禅定品広釈』の和訳は酒井[1973] pp.243-348 を参照。また、同じく Buddhaguhya 作とされる『大日経撰義』あるいは『大日経略釈』(*rnam par snang mdzad mngon par rdzogs par byang chub pa'i rgyud kyi bsdus pa'i don / Vairocana-abhisambodhitantrapiṇḍārtha*) においては『初会金剛頂経』は「聖真実撰タントラ」(*'phags pa de kho na nyid bsdus pa'i rgyud*) と述べられており、『初会金剛頂経』が tantra の語を伴って言及されている(テキストは Miyasaka[1995] p.12. 和訳は北村[1980] p.9、遠藤[2012] p.54 参照)。『大日経広釈』も含めた Buddhaguhya のタントラの分類に関しては越智[1973]、山本[2004]に示される。

その文献分類に従えばこれらは全てタントラと言い得るが、上述したようにタントラの研究史において「タントラ」を示す範囲には明確な区分が無く、幾分の揺れがあることが確認できた。本論文では汎用的な初期、中期、後期密教という時代区分³⁸を利用する。「タントラ」という語を単体で用いる場合は、ヒンドゥータントラも含めた「タントラ」という名称を備える文献群、あるいは個々の特定の文献を意味するものである。但し、先行研究を提示する際にはその先行研究に従う記述を用いた。また、密教文献という語を用いる際には、タントラという語を伴う文献に加え、Hodge の指摘する様な要素を備えた仏教の密教文献を示す。その文献に基づいた思想や儀軌を含む体系を密教としたい。以上の様な範囲の揺れを考慮した上で、密教文献と諸宗教との関わりに関する先行研究を見ていきたい。

1.2 密教と諸宗教との関わりに関する先行研究

本項では、密教と諸宗教の関わりに関する文献学的先行研究を見ていこう。日本において密教を中心とした異宗教間交渉の研究史を題材とした記述は多くはないため、少々煩雑になるがその研究史を概観していく。

密教が他宗教との関連の上から論じられてきた歴史は長いが、日本の密教研究においてはその関係性に関する論及が多いとは言い難いであろう。早い段階においては主として海外の研究者によってこの問題に関する研究が進められてきた³⁹。ここでは、密教と他宗教の関連性に関する先行研究を可能な限り時系列に沿って挙げて、いかにこの題材が扱われてきたのかを概観する。

早くは Burnouf が 1844 年の *Introduction du Bouddisme Indien* 内の第 5 セクションに "Tantras" という項を設け、Wilson[1828]のネパール仏教に関する論文や Humboldt[1836]⁴⁰等の論文を参照しながら仏教タントラとシヴァ教 (Śivaite) との関係に触れており、仏

³⁸ この時代区分による文献分類に関しても、その示す範囲は研究者によって異なっている。中期密教を中心とした各研究者の間の相違に関しては野口[2016]に詳しい。また、初期密教の区分は大塚[2013]によって更に最初期密教時代、初期密教展開時代、初期密教確立時代の 3 期に細分される。

³⁹ タントラに対する研究者の姿勢の相違、という観点からタントリズムの研究史について述べているものとして、松長[1961]が挙げられる。1976 年までの海外におけるタントリズム研究の文献の紹介としては梅尾[1976]に詳しい。また、Tantra という用語の西欧への導入の歴史に関しては金沢[2000]で示されている。

⁴⁰ Humboldt はその著書 *über die Kawi-sprache auf der Insel Java* 中の第 1 部 *über die verbindungen zwischen Indien und Java* におけるセクション 43 に「シヴァ教の観念と仏教との連関」という項目を設けている。

教タントラがシヴァ教の言葉と修法を借用したとしている⁴¹。

また、それより後の Austine Waddel は 1895 年の *The Buddhism of Tibet or Lamaism* 内で、「後 6 世紀の終わり頃、女性のエネルギーや、ヒンドゥーの神であるシヴァの配偶者への崇拝を伴うタントリズムあるいはシヴァの神秘主義が仏教とヒンドゥー教双方を色付け始めた」⁴²あるいは「タントリズムの崇拝がさかんになるにつれて、いわゆる仏教は最も墮落した段階に入った。女性のエネルギー（シャクティ）を偶像として崇拝することは、有神論的な大乘と、ヨーガの汎神論的な神秘主義の上に接ぎ木せられたもののなのである」⁴³とし、また同時代の Kern[1896]は、「タントラの発展は、その後世の段階において仏教とヒンドゥー教が共有して持つ特徴である」⁴⁴とする。以上のように、19 世紀において既に仏教タントラ内に見られるヒンドゥー的要素と仏教のその影響関係について言及されている。

19 世紀後半から 20 世紀前半の研究者である Louis de la Vallee Poussin は、1921 年の *Encyclopaedia of Religion and Ethics* 第 12 巻の "Tāntrism (Buddhist)" の項において明確に、「仏教ターントリズムは実際、仏教徒のヒンドゥー教であり、仏教の服を着たヒンドゥー教あるいは Śaivism である」⁴⁵と述べ、また Śaivite のタイプの「左道」(left-handed) タントリズムに属する仏教タントラを Śaivism および Śāktism と関連付けて、「仏教徒の神話と神秘主義は自由に śākta と混ざり合っている」⁴⁶とする。

Poussin と同時代の John Woodroffe (Arthor Avalon の名でも知られる)は、その著 *Shakti and Shākta* 内で Cīnācāra(Vaśiṣṭha and Buddha)という章を設けて、*Rudrayāmaratantra* や *Brahmayāmalatantra* における Vaśiṣṭha の説話を挙げて仏教との関連を述べる⁴⁷。

Winterniz は「おそらく仏教のタントラは、シヴァ派のタントラの影響のもとに七世紀あるいは八世紀になって初めて存在するようになり、また仏教がほとんど完全にヒンドゥー教に同化した時代に属するものであろう。仏教タントラの神々の名前そのものが、シヴァ派のタントラに依っていることを暴露している」⁴⁸として、Poussin と同様の視点

⁴¹ Burnouf[1844] p.552。英訳は Burnouf[2010] p.503

⁴² Waddell[1895] p.14

⁴³ Waddell[1895] p.129 この一文は松長[1961] p.131-132 にも引用されており、日本語訳はこれに依った。

⁴⁴ Kern[1896] p.133

⁴⁵ Poussin[1921] p.193

⁴⁶ Poussin[1922] p.196

⁴⁷ Woodroffe[1929] pp.179-190。猶、この記述は第 3 版の revised and enlarged edition 内のものである。同タイトルの 1918 年の first edition 中にはこの章は見られない。

⁴⁸ ドイツ語からの邦訳はヴィンテルニッツ[1978] p.301。和訳はこれに依ったが、1920 年のドイツ語対応箇所にはこの文に相当するものは見られない。後の英訳には対応する文を見ることができ、英訳の際に増補されたものであろう (Winternitz[1933] p.399)。

で仏教タントラを捉えていると言える。

先の節でも挙げた Tucci は、1932 年の *Indo-Tibetica* の第 1 巻中で、『初会金剛頂経』(Tucci[1932]中では章名の *Sarva-tathāgata-vajra-samaya-mahākālpa-rāja* として言及される) に詳細に記述される Maheśvara の降伏譚とその図像を挙げて、「神話的で戯曲的な形で、Śaiva のセクトに対する、タントラ仏教によって証明された対抗の跡を私たちに提供する故に、Śiva に対する Vajrapāṇi の勝利は非常に興味深いものである」として、この Vajrapāṇi による Śiva の降伏が重要なものであるとする⁴⁹。この降伏譚に関しては第 2 章で詳述したい。

一方、B. Bhattacharyya は先の Poussin の "Buddhist tāntrism is practically Buddhist Hinduism, Hinduism or Śaivism in Buddhist garb." という表現によく似た「ヒンドゥーの服を着た仏教の尊格たち」("Buddhist Deities in Hindu Garb") という論考を 1930 年に発表した。ここでは先の Woodroffe と同じく *Rudrayāmaratantra* および *Brahmayāmalatantra* 内の *Vaśiṣṭha* の物語を挙げ、また *Tārā* の宝冠につけられた *Akṣobhya* (阿閼如来) の姿、マントラの形式などを提示して、「仏教タントラがヒンドゥータントラに大いに影響を与えたということは十分に証明されており、それゆえ仏教が Śaivism の結果であったと言うのは正しくない」⁵⁰と述べて、仏教が先にありヒンドゥーが影響を受けたという主張をする⁵¹。また、B. Bhattacharyya は本論文の主題となる *Bhūtaḍāmaratantra* に関する論考 "The Cult of Bhūtaḍāmara" を 1933 年に提示しているが、これに関しては第 3 章で詳述したい。

同 1933 年には、日本における密教研究の嚆矢とも言える梶尾祥雲が『秘密仏教史』を世に出した。そこではインド密教の淵源として *Veda* 文献が挙げられることを述べ、「併し秘密仏教が初めて発生したとは云へ、それはただ萌芽たるに止まり、決して後代に見る如き独立の体形を完成したものではない」「その正純密教が分化し俗化するにつれ、漸次左道密教の傾向を帯び、波羅王朝 (Pāla-dynasty) の庇護を得て、東印度若くは中インド地方に栄えたけれども、それは已に正純なる密教の精神を失ひ、邪道に陥ったものである」⁵²とする。また 1930 年の『理趣経の研究』では經典中の性的表現を含む思

⁴⁹ Tucci[1932] p.93。英訳は Tucci[1988a] p.93。邦訳は英訳に依った。これは同様に Tucci[1999] p.218 においても言及される。

⁵⁰ Bhattacharyya[1930] p.1297

⁵¹ この論文は、Bhattacharyya[1932]内の第 14 章 *Influence of Buddhist Tāntrism on Hinduism* として同内容の論考が掲載されている。ここにおいても「タントラを自分の宗教に取り入れた最初のは仏教徒であり、そしてインド教徒はこれを後になって仏教徒から借用したのであり、したがってまた後期の仏教はシヴァ教 (Śaivism) の一産物だと云うのは根拠のないものである」(Bhattacharyya[1932] p.147。和訳はバッタチャリヤ[1988] p.192 に依った) という主張に変わりはない。

⁵² 梶尾[1933] pp.3-4

想について Veda や Upaniṣad の影響を挙げた上で、「その後、宇宙の威力 (Śakti) を女神として崇拜する女神派 (Śākta) の興起すると共に、ますますこの性交を宗教化し...これを宗教儀礼にまで用ふるに至つたのである」としてその歴史的背景を挙げるが、これら記述の目的は「これによりて、左道坦特羅に於ける邪義を破斥すると共に、此等の邪道に馳せたる人をも引入して正道に導き、その性交 (Maithuna) の本義の那邊にあるかを如実に知らしめんがためであつたらしい」⁵³とする。また、1927 年の『曼荼羅乃研究』内で先の Tucci が言及していた大自在天の降伏譚に関しても言及している⁵⁴。

S. Dasgupta は 1946 年の *Obscure Religious Cults*⁵⁵の中で、

一部の学者の間で、ヒンドゥータントラと仏教タントラのどちらが先行するものであるかを明らかにするという傾向が広く行われている。その異質性を持つターントリシズムはただヒンドゥー教のみ、もしくはただ仏教のみの起源でもないという事実を序で述べた。それは時には、ヒンドゥーの神学、思考やアイディアと関連付けられているものとして、時には後期の仏教の神学、思考やアイディアと関連付けられているものとしてそれ自身を示す、インドの古代の宗教的信仰である。この事実を考慮すれば、実際に一部の学者によって言われてきたような、ヒンドゥータントラはその起源において後世のものであり、仏教タントラに由来すると言うのは妥当ではないであろう⁵⁶

として、それまでの研究が仏教タントラとヒンドゥータントラの前後関係を殊に論題としてきたことに言及し、タントラの汎宗教的性質を挙げてヒンドゥータントラが仏教タントラに基づいて作成されたという説を否定している。上述の、仏教が先行し、ヒンドゥー教に影響を与えたという説は、先に挙げた B. Bhattacharyya の説を意識したものであろう。また、S. Dasgupta は 1950 年の *An Introduction to Tāntric Buddhism* 内で「要するにタントラは、それがヒンドゥー教であれ仏教であれ、関連性のある哲学的教義を利用した独自の宗教文献だと見なされるべきであろう。だが、その起源はいかなる学説や哲学体系のうちにも見出しえない。タントラは本来、極めて古い時代からインドに流布している宗教的な方法と実践から成り立っており」⁵⁷とタントラ自体の特徴を述べ、「仏教がある面において展開しているときに、その活動舞台のなかでターントリシズムとして知られる混合形態の実践を発展させたということは、どうみても事実とは思われない。

⁵³ 梶尾[1930] pp.436-437

⁵⁴ 梶尾[1927] pp.333-337

⁵⁵ 序文によればこれは S. Dasgupta が 1940 年にカルカッタ大学に提出した学位論文である。

⁵⁶ Dasgupta[1946] p.20

⁵⁷ Dasgupta[1950] p.1。邦訳はダスグプタ[1981] p.14 に依った。

むしろ仏教が大乗後期において、インドの土壌そのもののなかで成長し、それ自体ヒンドゥー教と仏教との双方共通の遺産でもあるこれらの実践の大部分を摂取した、ということの方が正しいのではなかろうか」⁵⁸として、仏教とヒンドゥー教のタントラに先行して存在した「共通する要素」の存在を示唆している。

また、Dasgupta は「仏教・ヒンドゥー教双方のタントラでのこの形態の類似性に基づき、一方の他に対する優先権に関連した学説を立てることは、非常に危険である。だが、その類似性には確かに目を見張るものがあることは認めざるを得ない」⁵⁹とする。ここで彼が言う「この形態」とは、男性の主導とその配偶者の間の対話形式とその内容であるが、その類似性から文献成立の先後関係を論じることの危険性を述べる。このように、Dasgupta はタントラ文献に見られる特定の要素の仏教タントラとヒンドゥータントラの親近性について提示するものの⁶⁰、その要素の起源や貸借の方向に関しては慎重な態度を取っていると言える。

P. C. Bagchi は、1956 年 (2nd Edition) の "Evolution of Tantra" 中の The Buddhist Tantra の項目において、7 世紀以降の仏教タントラを Vajrayāna、Sahajayāna、Kālacakrayāna という術語によって三分類し⁶¹、女性原理としての Śakti と Prajñā の対応関係、男性原理としての Vajra の要素に言及する⁶²。

同様に、密教と Śakti との関連から E. Conze は 1953 年 (初版 1951 年) の *Buddhism: Its Essence and Development* の中で「ヒンドゥー教の性力派はシヴァ (Śiva 教) と関係しており、このシヴァ教の教理が、佛教の性力派に大きな影響を与えた」⁶³と述べる。コンゼは、「左道密教」= Vajrayāna = 「仏教の性力派」(Buddhist Shaktism) という意識を持っており、『秘密集会タントラ』(Guhyasamājatantra) がその最初期の文献の一つであ

⁵⁸ 邦訳はダスグプタ[1981] p.15 に依った。この部分は初版の Dasgupta[1950] p.2 と第 2 版の Dasgupta[1958] p.3 では若干の修正がある。

⁵⁹ Dasgupta[1950] p.132。邦訳はダスグプタ[1981] p.119。訳文はこれに依った。

⁶⁰ 他にも彼は「仏教タントラにおいて、時には般若・方便がシヴァ・シャクティと同一視されていたことは明らかである」(Dasgupta[1950] p.112、ダスグプタ[1981] p.105) という様な対応関係についても挙げている。

⁶¹ この三分類法は当時の研究界において主流を占めていたようであり、S. Dasgupta は「仏教タントラは通常、三学派すなわち金剛乗、時輪乗、サハジャ乗に分類される」と述べる。しかしながら、彼は「だが、この分類はいかなるテキストを根拠としてなされたものなのか、われわれにはわからない」と続けて、その分類に疑問を呈している

(Dasgupta[1950] p.72。邦訳はダスグプタ[1981] p.75)。おそらく密教文献内に見られる「サハジャ (俱生/Sahaja)」の思想と Kālacakratānta というタントラのタイトルから派生して作られた分類であろう。サハジャ思想については野口[1993][2000]に詳しい。

⁶² Bagchi[1956] p.220

⁶³ Conze[1953] p.177。和訳はコンゼ[1975] p.265。訳文はこれに依った。

と考えていたようである⁶⁴。

1952 年及び 1953 年には梶尾祥瑞が「印度密教の一側面」、「印度密教の一側面(承前)」という論文を発表した。その中で怛特羅教 (Tantrism) を佛教怛特羅と印度教怛特羅に分け、上述してきた Arthur Avalon や Waddell, B. Bhattacharyya 等の説を提示しながら、双方のタントラについて論じている。その中において「ただにシャクター派のみでなく、シワ派、ヴィシュヌ派などの基盤となり、それを生みだすにいたった民俗信仰、或は大衆宗教がタントリズムそのものなのである」⁶⁵としてタントラを定義し、「この大衆宗教に対し、佛教は最初自己の修養にのみ専念する方向を辿ったが、次第に民衆教化の必要を痛感するようになり、自然に大衆宗教である怛特羅教の形式を摂取するようになって来たのである」⁶⁶として、仏教タントラの形成に言及し、汎インド的なタントラの形成という潮流の中での仏教によるタントラの採用という面からのアプローチであり、この説は先の S. Dasgupta の説と同様の視点であろう⁶⁷。

Eliade は 1954 年の *Leyoga* の中で、密教文献(主として *Guhyasamājatantra*, *Sādhnamālā*, *Hevajratāntra*, *Dohākoṣa*, *Kālacakratāntra*, *Pañcakrama* など) とヒンドゥーのタントラ文献内に見られる mantra, maṇḍala, nāḍī, maithuna といったパラレルな諸要素を取り上げている⁶⁸。

1972 年、1973 年に「密教の形成についての一考察」「密教の形成」という主題で異宗教と密教について論じた前田崇は、*Mañjuśrīyamūlakalpa* 中で Atharva-veda が権威として示されている記述や、Śaivatantra の説者が Mañjuśrī に帰されるという記述、同様に Vaiṣṇavatantra もまた Mañjughoṣa に帰せられる記述を提示する⁶⁹。また、*Mañjuśrīyamūlakalpa* 中の儀軌次第の記述を提示し、「密教が Śiva を利用、借用していることは明らかである」と述べて密教と異宗教との借用関係について言及する⁷⁰。

ヒンドゥー (主として Śaivite) 研究の方面から密教との親近性について言及しているのが 1972 年の Lorenzen による *The Kāpālikas and Kālāmukhas* であり、Kāṇha が Kāpālika

⁶⁴ Conze[1953] pp.176-180。和訳はコンゼ[1975] pp.264-271

⁶⁵ 梶尾[1952] pp.35-36

⁶⁶ 梶尾[1952] p.36

⁶⁷ また梶尾[1952]は、「思想の流れとしての怛特羅教」を淵源時代 (B.C. 500-200)、萌芽時代 (B.C. 200-A.D. 200)、形成時代 (A.D. 200-550)、大成時代 (A.D. 550-900)、普及時代 (A.D. 900-1250)、頽廢時代 (A.D. 1250-1500)、革新時代 (A.D. 1500-) の 7 つの時代に分類する。(梶尾[1952] pp.43-45)

⁶⁸ Eliade[1954] pp.205-273。英訳は Eliade[1958] pp.200-273。邦訳はエリアーデ[1975] pp.7-119

⁶⁹ 前田[1972]

⁷⁰ 前田[1973]

の地位を高めていること、Vajrayāna が骨や血、人肉、髑髏のような Kāpālika に特徴的なものを説くことを挙げて、「仏教タントリズムと何か関係があったに違いない」と述べるが、続けて、追加の証拠が無い時にこれについて思惑することは無駄であるとしている⁷¹。

Wayman(1921-2004)は 1973 年の *The Buddhist Tantras* 内でいくつかのヒンドゥータントラとの関係を挙げる。上述の śakti と prajñā の関係に関して、ヒンドゥーの śakti が神話的であり、仏教の prajñā が精神的であることを述べ、「Hindu の Śakti と仏教タントラの prajñā はある共通点を持つが、それらを同一視するのは適切ではない」⁷²とする。また、*Vajramālā* 中に Viṣṇu の 10 の化身が含まれることに言及し Vaiṣṇava と仏教の関係にも触れて⁷³、Dasgupta[1950]や先の Eliade にも言及される所の nāḍī のヒンドゥー教と仏教の対応表を挙げている⁷⁴。同様に、1980 年の *Yoga of the Guhyasamājatantra* においても、Wayman は「Prajñā を Śakti と呼ぶのは厳密には正しくないが...」として Prajñā の受動性と能動性の議論を提示し⁷⁵、先の nāḍī の対応表と cakra の対応表が挙げられる⁷⁶。

上記の Wayman と同時代の研究者である Snellgrove の 1987 年の *Indo-Tibetan Buddhism* においても、方便と智慧、śiva と śakti を対応させて言及している⁷⁷。あるいは、非仏教を仏教の中に取り入れる例として Snellgrove も Maheśvara (Śiva) の降伏譚を挙げている⁷⁸。更に、非仏教との関連に関する小項目を提示して、Heruka、Caṇḍamahāroṣaṇa、Bhairava という名前が Śiva と関連するものであることを述べて、Śaivite のコミュニティとの密接な関係について言及する⁷⁹。

上述の Wayman 及び Snellgrove と同時代の研究者 Padoux は仏教よりもヒンドゥータントラの研究を中心とした著作が多いが、1987 年の *The Encyclopedia of Religion. Vol.14* 中の "Tantrism" の項目の Overview の中で、仏教とヒンドゥー教のタントラ双方が、類似する精神的なアプローチと多くの共通する修法を共有していることを述べ、欲望や怒り

⁷¹ Lorenzen[1972] p.4

⁷² Wayman[1973] p.8

⁷³ Wayman[1973] pp.14-15。Wayman はこの中で、*Vajramālā* を 5 世紀のものとみなしているが、Kittay はこれを論拠が乏しいとしている (Kittay[2011] p.120 n.327)。

⁷⁴ Wayman[1973] pp.151-152

⁷⁵ Wayman[1977] pp.55-56

⁷⁶ Wayman[1977] pp.65-67。同書内には、それまでの研究史において誤って用いられていた術語に対する言及もある。それは五仏を指す際に用いられてきた Dhyāni Buddha という術語や、仏教タントラ内の右道 (right hand path) や左道 (left hand path) といった用語と分類、仏教タントラ内における śakti の記述などに関するものである。(Wayman[1977] pp.54-55)

⁷⁷ Snellgrove[1987] pp.131-132

⁷⁸ Snellgrove[1987] pp.136-141

⁷⁹ Snellgrove[1987] p.153

などの使用、あるいは精神的な師の役割の強調といった要素を挙げている⁸⁰。

宮坂[1995]中の諸論文や、宮坂[1998]においては、密教の反仏教的な要素、『大日経』中に見られる諸外道やマンダラ内に組み込まれたヒンドゥー諸神の記述を通して密教とヒンドゥー教の交渉の一断面を提示しようという試みがなされている。

Bühnemann が 1996 年に発表した "The Goddess Mahācīnakrama-Tārā (Ugra-Tārā) in Buddhist and Hindu Tantrism" では、Śāśvatavajra の *mahācīnakramatārāsādhana* がヒンドゥー教の *Phetkārīṇītantra* に組み込まれていることを論証している⁸¹。これは仏教の記述がヒンドゥー教に取り入れられた例である。

上に見てきたように、ヒンドゥー教、特に Śiva 信仰あるいは Śiva 教と密教との関係は長く論及の対象となっていたが、主に尊格の持物や双方の間で対応する概念、名称に焦点が当てられて論じられてきた傾向がある。この密教とシャイヴァの関係に新たな視座を与えたのが、A. Sanderson による一連の論文であろう。1988 年の "Śaivism and the Tantric Traditions" 中では、密教の Caryā タントラと Yoga タントラを Sadāśiva の Śaiva Siddhānta の信仰と比較することができ、Yogottara タントラと Yogānuttara タントラを、Śaiva における Bhairava のタントラである Mantrapīṭha と Vidyāpīṭha に比較できるとする。また、仏教タントラの低次の段階 (the lower level) では、Śaiva や Pāñcarātra-Vaiṣṇavism の影響があり、最終的な (最後の) 段階 (the final (and latest level)) ではその依拠が深く詳細になるとしている。更に、Yogānuttara タントラはパラレルな Śaiva の情報源からテキストの要素を借用していると述べる⁸²。また Sanderson[1994]では、主として *Laghusaṃvara*、*Sarvabuddhasamāyoga-Dākinījālasaṃvara*、*Samvarodaya* などの Yoginītantra を挙げて、多くの Yoginītantra の文献が、Śaiva の Vidyāpīṭha に分類されるテキストとパラレルな記述を備え、それらに基づいて書かれたことを論じている⁸³。大部の論文である 2009 年の "The Śaiva age" では、先の Yoginītantra 文献群以外にも *Mañjuśrīyamūlakalpa* 内の外教的要素を挙げ⁸⁴、『初会金剛頂経』内の āveśa や性的行為を伴う崇拝の形といった要素を示して Śākta Śaiva の密教への流入を論じている⁸⁵。

R. Davidson もまた、密教と Śaiva との関係について論じている研究者の一人である。2002 年の *Indian Esoteric Buddhism: A Social History of the Tantric Movement* 中で、大枠では A. Sanderson の議論に同意しつつ、いくつかの疑問を呈している。また、日本で初期密教文献に配される *Subāhuparipṛcchā* (『蘇婆呼童子請問経』) 中に Kāpālika の儀礼が認

⁸⁰ Padoux[1987]

⁸¹ Bühnemann[1996]

⁸² Sanderson[1988] pp.678-679

⁸³ Sanderson[1994]

⁸⁴ Sanderson[2009] pp.129-132

⁸⁵ Sanderson[2009] pp.132-140。『初会金剛頂経』中の āveśa の機能と詳細に関しては種村[2019]に詳しい。

められることを挙げている⁸⁶。

上記の A. Sanderson 及び R. Davidson は共に、異宗教間で共有される要素に関する「汎インド的な宗教的基盤」(pan-Indic religious substrate) というそれまで用いられてきた仮説に懐疑的であり、儀礼や要素の各文献への流入・貸借を語る際に具体的事例を提示している⁸⁷。

Samuel[2008]は以上に挙げてきたSanderson、Bühnemann、Davidsonの論文を含む先行研究を提示しながら、Śaivaと仏教が「互いに」要素を借用し合っていたと述べる⁸⁸。

Wedemeyer[2013]も同様に Śaiva と仏教の影響関係が「相互的な」ものであったことを示し⁸⁹、「インドの[宗教的]基盤」の仮説に批判的であることを明示している⁹⁰。また『大日経』(Wedemeyer[2013]中では *Mahāvairocana Tantra* として言及される)中の vidyāvratā の用例を提示し、*Guhyasamājatantra* あるいは *Yoginītantra* に連なる要素であることを述べる⁹¹。

以上に挙げられている、「汎インド的な宗教的基盤 (あるいは基層)」という概念は、主として Ruegg によって主張されている仮説であり、laukika (世俗) レベルで仏教、ヒンドゥーイズム/ブラフマニズム、そしてジャイニズムが共通して持つ要素を「汎インド的な宗教的基盤」(pan-Indian religious substratum) という理論から説明しようとするものである⁹²。また、Ruegg は自身の研究の中で、「借用モデル」(borrowing model (BM)) と「基層モデル」(substratum model (SM)) という2つの宗教間の共通性に関する分析のモデルについても言及している。

初期密教の大部の研究書である大塚伸夫による2013年の『インド初期密教成立過程の研究』においては、これまで等閑視されていた初期密教に割り当てられる文献の中に見られる多くのヒンドゥー教諸神、ヒンドゥー教的呪法・儀礼が示されており、初期密教に配される諸文献中への異教の流入という点にも新たな視座が提示されている

⁸⁶ Davidson[2002] pp.203-204

⁸⁷ Sanderson はこの「宗教的な基盤」という仮説に対して問題点を挙げており

(Sanderson[1994] pp.92-93)、Davidson は、仏教が他の情報源を利用したということを述べるために「汎インド的な宗教基盤」を仮定する必要はないとする (Davidson[2002] p.206)。

⁸⁸ Samuel[2008] p.232, pp.264-265

⁸⁹ Wedemeyer[2013] p.155, 163

⁹⁰ Wedemeyer[2013] p.164, p.256 n.110

⁹¹ Wedemeyer[2013] pp.161-163 また、Wedemeyer[2001]では、Hodgson、Wilson や Burnouf による仏教と Śaivism との関連に関する議論を詳細に取り上げている。また上にも挙げてきた Poussin、Tucci、Snellgrove などの先行研究者の主張も詳述している。

⁹² Ruegg[1964][2001][2007]参照

以上 19 世紀から近年までの、密教と他宗教との関連について言及する先行研究（その数は膨大であり、網羅することは甚だ困難を伴うものである）を挙げてきた。そこには、タントラという、思想・実践的潮流の中における仏教、ヒンドゥー教双方の中に見られるパラレルな諸要素に対する言及と、śakti と prajñā のような術語が異なるが近似する概念に対する論考が含まれていた。近年においては、文献内の具体的な文章の貸借関係についても言及がなされ、仏教とヒンドゥー教間の概念や要素貸借の実際が明らかになってきている。

先の大塚[2013]が挙げる密教形成の 4 つのプロセスと密教經典内に見られる 4 つの異なった特徴（1.大乘經典の思想的な影響のもとに展開した痕跡、2.部派より展開したと思える痕跡、3.ヒンドゥー教的特徴をもつもの、4.タントラとして儀軌化が進んだもの）⁹⁴のうち、仏教の外部からの影響が伺われるのが 3 と 4 の特徴であろう。即ち、密教の発展と展開過程に関する「外的要因による変容」であり、これまで提示してきた先行研究で言及される密教と他宗教との関連に関わるものである。そして、大塚[2013]に述べられる 1 と 2 の様なプロセスが仏教の「内的要因による変容」の要素であると考えられる。

この「外的要因による変容」の中に組み込まれるテキスト間の貸借関係の方向は、扱う主題によって左右されるものと言える。例えば、先の Bühnemann 論文では仏教からヒンドゥー教への要素の流入が示され、Sanderson 論文では仏教が Śaiva 文献から要素を借用したことが示されている。

以上のような異宗教間の相互関係に関する研究は、各々の扱うテキストの時代や内容によって様々な様相を呈している。現時点ではタントラのルーツと普遍的な相互関係について結論を出すことは難しい。以上を踏まえた上で、本論文の目的と方法を以下に示していきたい。

1.3 本論文の目的と方法

本論文では、密教とヒンドゥー教がいかなる方法を以て互いを取り入れていったかという問題に関して、タントラ内に見られる両宗教の実際の具体例を、仏教版、ヒンドゥー

⁹³ 大塚[2013]中でヒンドゥー教的修法との関連への言及が多く見られる。例えば、「<密教系ダラニ經典>群ではとくに五世紀末のころにインド古来の呪法を取り込んだヒンドゥー教的修法が顕著になるや…中略…ヒンドゥー教的修法はさらに多様化して、従来のダラニ系密教が大きくヒンドゥー教色に彩られた密教形態へと変容していった展開が見えてくる」（大塚[2013] p.727）という言及などである。

⁹⁴ 大塚[2013] pp.4-6

一教版の *Bhūtaḍāmaratantra* (BT)の比較検討を中心として提示することによって明らかにしていくことを目的とする。即ち、異宗教の要素の取り込みの方法論が主題となる。本論文ではタントラ文献の出現という現象、あるいはその起源、ルーツにおける仏教とヒンドゥー教の前後関係を論じることは意図していない。

他宗教を自宗教に取り入れる方法としては、概念、尊格、文章そのものの流用といった、いくつかの方法がこれまでの膨大な先行研究の中で示されている。その中における、尊格の取り込みに関する比較的古い段階の文献に対する主題が『初会金剛頂経』中の大自在天の降伏譚であろう。本論文第2章では、この降伏譚を中心とした異宗教の尊格の取り込みの方法論とその解釈を見ていく。

その前段階として、2.1「大自在天の記述を中心とした仏教とヒンドゥー教との関わり」では、これまで俎上にあげられることの少なかった密教経軌中の大自在天（摩醯首羅）に関わる記述を挙げ、仏教内での大自在天の扱いを見ていく。2.2「大自在天の降伏譚」では、先の大自在天の「降伏」と、シヴァ神を「如来へと昇華する」記述を挙げ、この記述に関連するパラレルな記述を他文献から提示し、異宗教の尊格の取り込みという方法論の展開を明らかにする。2.3「殺と降伏を伴った異宗教の取り込み」では、2.2で挙げられた「殺害」という思想が仏教内でいかに扱われ解釈されているかを明らかにする。これは、「調伏」や「降伏」という異宗教の取り込みの方法において無視できない論点である。

第3章以降では、*Bhūtaḍāmaratantra* の仏教版(BBT)、ヒンドゥー版(HBT)双方の記述を中心として、具体的な宗教間の要素貸借の理論と方法を検討していく。先に触れた様に、B. Battacharyya は仏教タントラ文献がシヴァ教に先立つものであることを論証することに努めた一人である。B. Battacharyya が仏教、ヒンドゥー教双方の *Bhūtaḍāmaratantra* を扱い、仏教を早い年代に位置付けようとしたのも、この理論を補強するための題材として考えていた可能性は否定できない。本論文でも BT の成立過程を検討するために文献の先後関係も考察対象としているが、前述の如くその前後関係を明らかにすることが目的ではなく、具体的な異宗教間の要素の取り込みの構造を提示することを目的としている。

3.1「*Bhūtaḍāmaratantra* の先行研究とインド宗教史における文献的位置付け」では、BBT と HBT に関する先行研究による言及と、BBT、HBT を引用する一次文献あるいは BBT、HBT に触れる記述を提示し、両 BT のインド宗教史における文献的位置づけを確認する。3.2「仏教版、ヒンドゥー教版 *Bhūtaḍāmaratantra* の内容比較」以降では、BBT と HBT の比較考察を行う。3.2.1「*Bhūtaḍāmaratantra* のテキストと構成」では、今回の論文で用いた写本、刊本の構成とその対照表を提示した。3.2.2「両版の発話者の異同から見る両 BT の成立過程」では、B. Bhattacharyya によって一言されるものの、詳述されることのなかった HBT 中の仏教的要素の記述箇所を提示する。また、BBT と HBT の

記述の相違とその変化について、「発話者」という点から考察する。また、Bhattacharyya による先行研究は HBT の Ba 写本のみを利用した論述であったため、Bhattacharyya によって言及される箇所を HBT の他写本の比較から論及する。

3.2.3「8 ヤクシニーの修法」では、8 ヤクシニーの修法の記述を通して、後代への BT の影響と変遷過程について論究する。3.2.4「マントラの暗号化」では、BBT 内で明確に示されるマントラが HBT 内で暗号化されて説かれることに関して、その暗号化の方法と理論について明らかにする。3.2.5「ekalinga の記述を通したシヴァ派との関連」では、BBT の中に見ることのできる「大自在天祠」や「大自在天廟」といった語に焦点を当て、仏教、ヒンドゥー教双方の他文献内の記述と対照させて、仏教内に流入する異宗教的要素について考察する。3.2.6「*Bhūtaḍāmaratantra* 中の行者像」では、仏教とヒンドゥー教あるいはインド文学内でパラレルな記述を認めることのできる「肉を売る修法」を中心として、その影響関係について考察する。

結論においては、以上の考察と具体的事例を踏まえ、密教とヒンドゥー教間の要素の取り込みの構造を分析し、異宗教間の混交のシステムのモデルの一部を提示する。以上が本論文の第 I 部の本編の概要である。

第 II 部では、特に 3.2.3 で扱った BBT、HBT の *Yakṣiṇīsādhana* の章のサンスクリット校訂テキスト、和訳、BBT の漢訳とチベット語訳の対照テキストを提示した。BBT のサンスクリット校訂に際しては写本 4 本を利用し、HBT のサンスクリット校訂には写本 5 本を利用した。BBT に関しては、これまでサンスクリットテキストが未発表であったため、本論文が初のテキストの提示となる。また、HBT に関しては、従来いくつかの刊本が出版されていたが、何れも依拠した写本の情報が明確ではなく、写本に戻ることができないものであったため、本稿では新たに各写本のロケーションも共に提示した。

以上の考察とテキストの提出によって、本論文の主題である密教とヒンドゥー教の関わりに関して、「ヒンドゥー教から密教」への要素の流入と、その逆方向の「密教からヒンドゥー教」への要素の流入の具体的事例を提示することが可能となるであろう。

また、異なる文化、信仰形態が対峙した際に、各々の宗教がどのような形態で異宗教に対応するかという問題に関して、一つのモデルを示したい。

次章では、密教文献内でヒンドゥー神がいかに扱われているかを見ていこう。

第 2 章 密教経軌にみられる仏教とヒンドゥー教の関係

2.1 大自在天の記述を中心とした仏教とヒンドゥー教との関わり

本項では、密教経軌中に見られる異宗教の尊格（外天）や儀礼に関わる記述を特に大自在天の記述を中心に提示して、密教内で異宗教がいかに扱われているか、あるいは仏教徒の異宗教理解とその対応を例示していきたい。これまで、漢訳でしか残らない文献内の異宗教の記述に対して焦点が当てられることは少なく、この具体例の提示によって、具体的な仏教の各経軌内での各々の異宗教理解を見ることができるだろう。

以下に『陀羅尼集経』および『聖迦毘訶怒金剛童子菩薩成就儀軌経』中の記述を提示していきたい。

2.1.1 『陀羅尼集経』における大自在天

『陀羅尼集経』は阿地瞿多により 653-654 年に翻訳されたとされる。この経典は「インド伝来の経典・儀軌を素材として、中国でひとつの経典の体裁に編纂されたものと考えられる」⁹⁵のものであり、本経典の中に引用されるものには異訳が存するものもある。

この節では『陀羅尼集経』内の大自在天の記述箇所を表にして挙げ、各々の箇所でするように大自在天が位置付けられているかを見ていく⁹⁶。表には『陀羅尼集経』内の大自在天の記述箇所と、大正蔵におけるロケーションを挙げた。それぞれの表は『陀羅尼集経』の巻毎にまとめた。論中に出す番号は表に付した番号に対応する。

（表 2.1.1.1－巻第一）

番号	記述	記述箇所
①	佛、諸比丘に告ぐ。此の呪は能く一切の諸呪を解く。若しは外道、若しは摩醯首羅の呪なり。亦た能く諸悪鬼神を除却し、亦た衆生の五苦八難を救う。	T No.901 786b18
②	此の三昧陀羅尼力は悉く能く一切の天魔外道の呪法を解除し、皆な能く一切怨敵及び摩醯首羅、諸天鬼神を降伏す。所説の呪術、悉く能く除滅す。	T No.901 786c11
③	又法は薫陸香を呪すること一千八十遍なり。前に准じて法を作せ。晝夜の五時四時にも亦得。七日満ち已るに、一切の梵王、摩醯首羅は大歡喜を生ず。	T No.901 794c12

⁹⁵ 佐々木[2013] p.58

⁹⁶ テキストは大正蔵 No.901 阿地瞿多訳『陀羅尼集経』を用い、『国訳秘密儀軌』（国訳秘密儀軌編纂局編、国書刊行会）第二十四巻、第二十五巻を参照した。

(表 2.1.1.2－巻第四)

番号	記述	記述箇所
④	若し婦人の兒無くして兒を得んと欲はば、五色粉を以て四肘壇を作り、壇の中心に十一面觀世音菩薩を安ず。東方に阿弥陀佛を安じ、北方に大勢至菩薩を安じ、南方に馬頭觀世音菩薩を安じ、西方に摩醯首羅天王を安ず。	T No.901 819a18
⑤	是の如く次に阿弥陀佛、馬頭觀世音菩薩、大勢至菩薩、摩醯首羅天王の名を念じ已んぬ。	T No.901 819b3

(表 2.1.1.3－巻第十)

番号	記述	記述箇所
⑥	又法あり、若し安悉香を取り、之を擣して丸と為し、酥を塗りて一千八遍并に呪せば、摩醯首羅及び傍邊の天一切歡喜す。	T No.901 873c15

(表 2.1.1.4－巻第十一)

番号	記述	記述箇所
⑦	是の会中に於いて、梵天王及び天帝釈、摩醯首羅、日天、月天、星天、地天、四天大王、火天等と俱に有り。	T No.901 877b6
⑧	摩醯首羅天法印呪第三（中略）是の法印呪、若し人有りて等しく日日に此の印を受持し呪を誦し、摩醯首羅天を供養する者は、種種に験を得。	T No.901 878a9
⑨	摩醯首羅天求馬古印呪第四（中略）又泥を以て摩醯首羅天像を作る。中央に摩醯首羅天像を安ず。	T No.901 878a24

(表 2.1.1.5－巻第十二)

番号	記述	記述箇所
⑩	次に其の門の北に摩醯首羅座を安ず。	T No.901 888c16
⑪	次に其の門の北の第一の座主は摩醯首羅天と名く。蓮華座の上に跋折囉を作り光焰圍繞せり。	T No.901 895a2

『陀羅尼集經』内の大自在天についての記述は上記の 11 例である。先ず、①、②は「大神力陀羅尼經釈迦仏頂三昧陀羅尼品」の釈迦仏頂身印第一において説かれるものである。ここでの大自在天の呪は解かれるべきものであり、大自在天は降伏する対象として挙げられている。

③は、一字仏頂法呪第三十二、七日作法において説かれる。この後の段で①、②と同様に諸鬼等と共に述べられているため、大自在天が殊に挙げられているわけでは無いと言えよう。また、供養によって歡喜を生ぜしめる対象とされている。

④、⑤は十一面觀世音神呪經、十果報印呪第十三で説かれるものである。ここで説かれるのは、子を得たいと願う際の作法であり、その果として婦人、優婆夷が良い男女の子供（好男女）を生じることが述べられる。壇の中心に十一面觀世音菩薩、東方に阿弥陀仏、北方に大勢至菩薩、南方に馬頭觀世音菩薩、そして西方に摩醯首羅天王を安置するという特殊な形が述べられている。又、至心に觀世音の名字を二十一遍念じ、加えて阿弥陀、勢至、馬頭に対しても念じることが述べられ、共に摩醯首羅天王の名を念じる

ことが述べられている。ここにおいて大自在天は調伏や降伏の対象としてではなく、自己の願望成就を求めて念ずる対象としてその作法内に取り入れられている⁹⁷。

⑥は、仏説摩利支天經において説かれる。ここでも、③と同様一千八遍呪を誦せば摩醯首羅及び傍辺の天一切が歡喜するとされる。又、同様の文脈において、鳩盤荼や夜叉等の鬼神、大惡鬼神が歡喜するとされることから、他の尊格と比して特別な存在として大自在天を挙げているわけではない。

⑦は諸天等獻仏助成三昧法印呪品の冒頭、衆会の中で、梵天王、天帝釈、日天、月天、星天、地天、四大天王、火天等と共に説かれる。

⑧は、摩醯首羅天法印呪とされ大自在天の供養を説くものである。大自在天の印と呪が説かれ、その験は一切諸病を癒すことだとされる。

⑨は⑧に続いて説かれている。ここでは馬古⁹⁸を求める者の行う印と呪が挙げられる。又、大自在天像を作り、同時に闍夜 (Jayā)、毘闍夜 (Vijayā)、阿自多 (Ajitā)、阿婆羅自多 (Aparājītā) の像を作り大自在天を中心に四方に安置するとされる。この四方の闍夜、毘闍夜、阿自多、阿婆羅自多の組み合わせは、『陀羅尼集經』卷四に闍夜印 (得勝印)、毘闍夜印 (最勝印)、阿自多印 (無能壓印)、阿波羅質多印 (無勝印) という形でも見られる⁹⁹。これらの印は、一切鬼神天等の降伏、病の治癒、一切諸外道等を破す効能と共に説かれている。この大自在天と jayā, vijayā, ajitā, aparājītā のセットは、Śiva 信仰の中に見ることができる。それは *Vīṇāśikhatantra* (VST)¹⁰⁰中に現れ、Śiva の四面の姿とされる Tumburu の配偶者として言及される¹⁰¹。この Tumburu が大自在天と同一視され

⁹⁷ この部分の異訳である耶舍崛多訳『十一面觀世音神呪經』(大正 No.1070)にはこの記述は見られない。

⁹⁸ ここで言われる馬古が何を指すかは明らかでない。

⁹⁹ 大正 No.901, 822c3-

又、『大樂金剛不空真実三昧耶經般若波羅蜜多理趣經』においては、惹耶、微若耶、阿爾多、阿波羅爾多という形で現れ、四姉妹の天女だとされる (大正 No.1003 p.616,b10-)

¹⁰⁰ Goudriaan[1985]において、12世紀後半あるいは13世紀頃の写本(MS A)の存在が報告されている (Goudriaan[1985] p.6)。VST 自体の成立年代に関しては明確ではないが、Goudriaan は 1052 年に位置付けられるカンボジアの Sdok kak Thom 碑文中における *Vināśikhā* の記述を示している (Goudriaan[1985] pp.24-25)。

¹⁰¹ この Tumburu という固有名詞は2つのグループに分けられることが Goudriaan[1985]において指摘されている。1つは Viṣṇu や Śiva の従者としての Tumburu であり、これは Gandharva である。もう1つの形態が4面の Śiva としての Tumburu であり、Jayā, Vijayā, Ajitā (あるいは Jayantī) そして Aparājita を伴う尊格とされる (Goudriaan[1985] p.18)。また、White[2011] p.582 や Goudriaan[1981] p.37、Sanderson[2009] p.46 においてもこの Tumburu と4妃の関係が言及されている。

るならば、先の『陀羅尼集經』中の大自在天、闍夜、毘闍夜、阿自多、阿婆羅自多の像を作成して修法を行うという記述に一致すると言えよう¹⁰²。

その他に、⑨の大自在天の記述では大自在天を中心に立て、夜、昼の作法を人に見せてはいけないとして、秘匿性を示している。

⑩及び⑪は仏説諸仏大陀羅尼都会道場印品において説かれる。其の門（西面の門）の北に摩醯首羅座を安置することや、座の主としての摩醯首羅天に関して述べられる。しかしながら、この前後で諸の天等の記述も同様に説かれる¹⁰³ため、ここでの大自在天の記述も大自在天を中心としたものではない。

以上がそれぞれの大自在天の記述箇所である。これら①から⑪までは、以下の3つに分類される。

A.降伏、調伏、除滅の対象としての大自在天 ①②

B.歓喜させる（供養する）対象としては挙げられるが、諸天、諸鬼神と同列で語られる大自在天 ③⑥⑦⑩⑪

C.修法の中心的尊格となる、或いは作法において重要な位置を占める大自在天 ④⑤⑧⑨

この様に『陀羅尼集經』内で、大自在天の存在は外道の尊格として敵対者として捉えられる反面、供養によって歓喜させる存在としても描かれている。また、特筆すべきは、その中には印や呪を伴った大自在天を中心とする作法が見られることである。④⑤の様に、十一面観音や阿弥陀と同列に大自在天が扱われるのは何故であろうか。おそらく④⑤で挙げられる「子を得る効能」と関わっているものと考えられる。この作法が描かれる際、その周辺の共通認識として大自在天に「子を得させる能力」が認められていたためではないだろうか¹⁰⁴。

⑧⑨はその作法が大自在天を中心とするものであり、印や呪についても他の記述より

¹⁰² 『陀羅尼集經』中の記述は「又以娑作摩醯首囉天像。中央安摩醯首羅。右邊安闍夜及毘闍夜。左邊安阿自多及阿婆羅自多。」（大正 No.901, 878b9-878b11）というものであり、摩醯首羅天の右に闍夜、毘闍夜を配置し、左に阿自多、阿婆羅自多を配置するという形である。この配置形は、Goudriaan[1973]内で挙げられる *Viṣṇudharmottara Purāṇa* の記述にパラレルなものであるが、*Viṣṇudharmottara Purāṇa* の4妃名は Jayā、Vijayā、Jayantī、Aparājitā である（Goudriaan[1973] pp.62-63）。

¹⁰³ 大自在天の記述の前で、西門の門の南に烏摩地毘座（ウマ—妃の座）を安ずることが説かれる。シヴァとウマ—の関わりから説かれていると思われる。

¹⁰⁴ 時代は下るが、『シヴァ・プラーナ』には、子供のできない女性が101個の土製のリングを作り池に投げ入れたところシヴァ神の慈悲で息子を得ることができたという話を見ることができる。（山口[2013]）

詳しくなっている。しかしながら、その果報は教理的に発達したものではなく病の治癒などであることから、これらの作法は仏教者の周囲の信仰体系を組み込んだ原初的なものと言えよう。

以上、『陀羅尼集經』における大自在天の記述についてその例を挙げ、その性質によって分類した。この中では、A群の様に「降伏」の対象として大自在天が挙げられ、またB群の様に、衆会の中の一存在としての大自在天、もしくは諸鬼神や他の諸天と区別されず、同等な存在として扱われる大自在天の姿を見ることができた。これはまだ特に重要視された存在としてではなく、『初会金剛頂經』中の「降三世品」に認められる様な、仏として昇華されるべき存在と考えられているわけではない。しかしながら、Cのグループのように大自在天を作法の中心、もしくは重要な存在として捉える記述もある。そこにおいて、他宗教の尊格が本来持っていた現世利益的効能を仏教側で受け入れていることは明らかであり、仏教内への大自在天の取り込みに至る一過程が認められるのである。

以上の様な大自在天の扱いには、「揺れ」が存在する。仏教の優位性を主張せんとする様な降伏の記述が述べられる一方で、大自在天の呪法の効果を期待する記述も見られ、その修法が仏教内に流入しているのである¹⁰⁵。これは、仏教者の中にさまざまなシヴァ観が存在していたことを示していよう。次に『聖迦毘訶怒金剛童子菩薩成就儀軌經』中の大自在天の記述を見ていこう。

¹⁰⁵ 大自在天に関しては不空によって『速疾立驗魔醯首羅天說阿尾奢法』(大正 No.1277)が訳されたとされ、又『摩醯首羅天法要』(大正 No.1279)などの訳されたものがいくつか残り、恵果阿闍梨が『速疾立驗魔醯首羅天說阿尾奢法』を行ったという記述も見ることができる。空海撰述とされる『秘密曼荼羅教付法傳』(廣付法傳)に「第七祖。法の諱は恵果阿闍梨耶...中略...代宗皇帝之を聞きて迎え入れ、之に命じて曰はく。朕疑滞有り。願はくば為に之を解け、と。和尚即ち両三童子をして法に依りて加持し、摩醯首羅天を請じ降ろさしむ。法力不思議の故に、即ち童子に遍入す。和上王に白して言く。法已に成れり。聖意に随いて請問せよ、と。皇帝座を下りて天に問はば、則ち三世の事を説く。委しく帝王の歴数を告ぐ...後略...」(佛書刊行会編『大日本佛教全書 第106巻』佛書刊行会、1917、pp.17-18)と述べられる。また、『真言付法傳』(略付法傳)に「第七祖。法の諱は恵果なり...中略...代宗皇帝之を聞きて追い入れ、之に命じて曰はく。朕疑滞有り。願わくは為に之を解け、と。和尚童子を加持して大自在天を鈎召す。法力不思議の故に。即ち童子に遍入す。皇帝一一之に問うに、天即ち随いて答う。委しく三世の幽事、帝皇の歴数を説く...後略...」(佛書刊行会編『大日本佛教全書 第106巻』佛書刊行会、1917、p.27)とある。この文書には「弘仁十二年九月六日書」とあり、弘仁十二年(821年)以前よりこのような伝承があったと言える。これより大自在天に現世利益を求める呪法の影響の強さが伺えるのである。

2.1.2 『聖迦柅忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經』における大自在

天

『聖迦柅忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經』¹⁰⁶は不空による訳出とされる¹⁰⁷。この儀軌は空海によって大同元年（806年）に記された『御請来目録』に「聖迦柅忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經三 卷廿八紙¹⁰⁸」と出ており、空海により日本にもたらされている。

当經の明本の題下に「蘇悉地經大明王教中第六品より出す」とあり、これは虚偽であるとされる¹⁰⁹一方で、広本の『蘇悉地經大明王教』の一部をなしていたとも考えられている¹¹⁰。經中には「量は蘇婆呼經に説くが如し¹¹¹」や「瞿呬耶經の所説の如し¹¹²」という文言が見られ、兩經の後の成立であると言える。

その内容のほとんどは、怨敵の調伏や修羅宮に入ること、戦に勝利すること、長寿を得ることなどの種々の願望を満たす呪法の説明である。以下が大自在天に関する記述を分類したものである。

A. 祈願および成就法の対象としての大自在天、B. 降伏の対象としての大自在天、C.

¹⁰⁶ 大正 No.1222

¹⁰⁷ 貞元十年（794年）に選集された『大唐貞元統開元釋教録』には「聖迦柅忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經三卷 四十八紙」とある。

¹⁰⁸ 大正 No.2161, 1062a7-1062a8

¹⁰⁹ 小野玄妙編 1933『仏書解説大辞典 第五卷』大東出版社、p.369b

¹¹⁰ ギーブル[2000]は『蘇悉地羯羅經』に関して「蔵訳の題名 (*Legs par grub par byed pa'i rgyud chen po las sgrub pa'i thabs rim par phyed ba*) から明らかな如く、これは『妙成就作大タントラ』中「成就法方便品」という意味で、高田順仁氏によって既に指摘されているように、「より大部な *Susiddhikaramahātantra* という聖典の一部を抽出したということを用意させる題名となっている。」と、高田順仁氏の説を挙げて大部の『蘇悉地經』があったことを示唆している（ギーブル[2000] p.104）。そして『聖迦柅忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經』の題下の文言について「題註にいう「蘇悉地經大明王教」を現行の『蘇悉地經』ではなく、蔵訳の梵題にいう *Susiddhikara-mahātantra* に関連付けて考えれば、必ずしも「全くの虚偽」とは断言し切れないように思われる。そして現行の『蘇悉地經』も、この『聖迦柅忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經』も元来「蘇悉地經大明王教」なる広本の一部をそれぞれ成していたと仮定すれば、後者の始めに見える「已説蘇悉地諸眞言軌則律儀教法」や「此經蘇悉地大明王教中第六品一品是」といったような文言も素直に理解できよう」（同上書 p.103）と述べる。

¹¹¹ 大正 No.1222, 103c15

¹¹² 大正 No.1222, 116a2

比喩表現としての大自在天、D. 対告衆としての大自在天。

以上A～Dに分類した。Aは、大自在天に願望成就を求める法が説かれたものである。心に願うところのものを成就するために大自在天廟において真言を誦すこと¹¹³や、大自在天の像の前で真言を誦すこと¹¹⁴、三戟叉を持して昼夜念誦すれば大自在天となること¹¹⁵などが挙げられる。

Bは、描いた大自在天の形像を左脚で踏むこと¹¹⁶や、大自在天を降伏することが述べられる¹¹⁷ものである。他の文献内に見られる大自在天の形像を踏むという記述に関しては、本稿3.2.5.1において他の文献内の記述も挙げて詳述する。

Cは、「自在」である状態を表す比喩表現として大自在天が挙げられたものである。Dにおいては、単に対告衆の一人として描かれるのみである。

当経中においても大自在天を本尊とした修法を見ることができ、密教行者が大自在天廟でも修法を行っていたことが分かる。本經典は、大自在天がこの様に願望成就をもたらす尊格として認めているものの、同時に降伏の対象としても捉えているという矛盾した内容を含んでいる。

上に挙げてきた『陀羅尼集經』『聖迦毘訶怒金剛童子菩薩成就儀軌經』内の大自在天の記述は、双方大自在天を降伏の対象として挙げるものの、同時に崇拝の対象としても捉えていた。崇拝の対象として挙げられるものには、修法の結果として「心に願うところのものを満足させる」というものや「子を得る」「寿を延ばす」という現世利益が述べられる。この傾向は、*Mañjuśrīyamūlakalpa*『大方廣菩薩藏文殊師利根本儀軌經』中の、大自在天の神殿での呪法などにも見ることができ、大自在天の呪的効能が仏教内で認められ、仏教内に組み込まれたものだと言えよう。この大自在天の神殿での修法に関しては3.2.5項で他文献内の修法と合わせて考察したい。

以上、これまで考察の対象とされることの少なかった密教経軌中の大自在天の記述を提示してきた。この中には、敵対あるいは降伏の対象としての大自在天の記述と、崇拝の対象としての大自在天の記述双方が存在し、ここに密教内の異宗教に対する態度の「揺れ」を見ることができた。崇拝あるいは修法の本尊としての大自在天の記述の中には、Śākta-Śaivaの信仰形態の中にも認められる Jayā を始めとする一連の明妃の記述も見られ、異宗教の信仰形態の流入の一端を確認できる。では、次に、大自在天を仏教内の一尊格へと昇華する過程を含む、『初会金剛頂經』『降三世品』中の記述を中心として、異宗教の尊格の取り込みという方法論の展開を明らかにしていきたい。

¹¹³ 大正 No.1222, 103a27-103a28

¹¹⁴ 大正 No.1222, 109b23-109b28

¹¹⁵ 大正 No.1222, 110b13-110b17

¹¹⁶ 大正 No.1222, 103b4- 103b26

¹¹⁷ 大正 No.1222, 113a12-113a15

2.2 大自在天の降伏譚

Sarvatathāgatatattvasaṃgraha (施護訳『仏説一切如来真實摂大乘現証三昧大教王經』¹¹⁸ (以下『初会金剛頂經』) の第二「降三世品」中における大自在天の降伏譚はこれまでの密教研究史において、ヒンドゥー教と密教との関わりを示唆する記述として多く取り上げられてきた。1 章でもいくつか例示した様に、この記述は梶尾[1927]や Tucci[1932]、Snellgrove[1987]、森[2004]、頼富[2005]、遠藤[2005]などによって取り上げられ、このストーリーが当時の仏教とヒンドゥー教間の実際の関係を反映したもの、あるいは当時の密教のヒンドゥー教理解の具体例として言及される¹¹⁹。

『初会金剛頂經』『降三世品』には、「唵遜婆爾遜婆吽屹哩恨拏屹哩恨拏吽屹哩恨拏播野吽阿那野呼婆誡鏝囉日囉吽發吒¹²⁰」(Om sumbha nisumbha huṃ gr̥ṇa gr̥ṇa huṃ gr̥hnāpaya huṃ ānaya ho bhagavan vajra huṃ phaṭ¹²¹) という明呪や、「唵爾遜婆囉日囉吽發吒¹²²」(Om nisumbha vajra huṃ phaṭ¹²³) という明呪、加えて「唵囉日囉遜婆爾遜婆吽發吒¹²⁴」(Om vajra sumbha nisumbha hūm phaṭ¹²⁵) という明呪が説かれ、これに関して梶尾[1927]は「此所に注意すべきことは、この忿怒金剛が自在天並に妃を降伏する説話と、布蘭那(Purāṇa) 文学中にある自在天妃が遜婆(Sumbha) 爾遜婆(Nisumbha) の阿修羅を降伏する説話との関係である」¹²⁶と述べ、*Mārkandeyapurāṇa* 中の *Devīmāhātmya* の説話

118 大正 No.882

¹¹⁹ 例えば、遠藤[2005]は「密教と領域を共有するヒンドゥー教との厳しい対立と烈しい相剋を見ることができるだろう。密教の優位性を主張するためこのような場を設定したと考えられる」（遠藤[2005] p.57）と述べる。

¹²⁰ 大正蔵 No.882 370b

¹²¹ 堀内[1983] p.328。堀内[1983]ではこの部分は *śumbha niśumbha* となっている。高野山大学図書館所蔵の写本影印の Tucci 本（堀内[2009]）では確かに *śumbha niśumbha*（堀内[2009] 173a2-173a3）となっているが、Snellgrove 本（酒井[1979]）では *śumbha* か *sumbha* であるか不明瞭である（酒井[1979] 50b5-50b6）。チベット訳では *sumbha nisumbha*（大谷 No.112 54b6, 東北 No.479 49b7）であり、漢訳でも *sumbha nisumbha* を支持する音写である。また、*Guhyasamājantra* においても *sumbhanisumbha* という語を用いているため

(Matsunaga[1978] p.65)、sumbha nisumbha を採用した。この事項に関しては、高野山大学の徳重弘志氏よりご指摘頂いた。記して御礼申し上げます。

¹²² 大正蔵 No.882 371b

¹²³ 堀内[1983] p.336

124 大正蔵 No.882 374a

¹²⁵ 堀内[1983] p.372

¹²⁶ 母尾[1927] p.335

を挙げ、「思ふに南方印度を経て、東北ベンガル地方に栄えて居った湿婆教徒を佛教に引入するために編成せられたものが、此の降三世品の教であるとも考えられ得るのである」¹²⁷と推測しているが、森[2001][2004]においてこの説に対する疑問も提示されている¹²⁸。

多くこの降伏譚に焦点が当てられてきたのは、仏教徒がヒンドゥー教(殊にシヴァ神)を強く意識していたことを暗示する記述であるためであろう。事実、経典編纂者に意識されていなければこのような記述が生じる理由が無いために、この背景に仏教とヒンドゥー教との関わりを見るのは妥当な見解であると言える。

この「降三世品」の降伏譚の大意は以下のようなものである。金剛手に従うことを拒否する大自在天に対し金剛手菩薩が hūṃ(吽)を唱え、大自在天等は地に倒れ命終する¹²⁹。その後、金剛手は vajrāyuh (嚩日囉喩)と唱え大自在天を蘇息せしめ、足下に踏み、降伏する。そして世尊が悲心を以て呪を誦し、大自在天の苦を鎮めると、大自在天は金剛手の足に触れたことによって解脱門に入る。大自在天は下方の Bhasmācchanna (跋娑摩餐那)という名の世界に向かい Bhasmeśvaranirghoṣa (跋娑彌莎囉爾哩瞿沙)如来となる¹³⁰。

¹²⁷ 梶尾[1927] p.337

¹²⁸ この説に対し森[2001]は、『デーヴィーマーハートミヤ』を背景にして降三世品のエピソードができたのであれば、なぜ、その主役で圧倒的な力をもった女神そのものを降伏の相手に選ばなかったのか。金剛手に最後まで抵抗を示した大自在天は、女神の夫であるシヴァに相当するが、『デーヴィーマーハートミヤ』はシヴァには重要な役割を与えていない。すでに女神信仰がシヴァへの信仰を凌駕していたからである」(森[2001] p.268)と述べて、梶尾[1927]の説に疑を呈している。また、森[2004]は『初会金剛頂経』に対するアーナンダガルバの注釈である『タットヴァローカカリー』に描かれる各尊格の特徴と「デーヴィーマーハートミヤ」に描かれる尊格の特徴が一致しないこと、「デーヴィーマーハートミヤ」内のウマーは「処女神」であり、シヴァの妃となるのは「デーヴィーマーハートミヤ」以降であることなど、5点の内容を挙げて梶尾[1927]の説を否定している(森[2004] pp.539-540)。

¹²⁹ 「是時金剛手大菩薩は亦自らの金剛心明を説いて曰はく。吽。是の心明を説ける時、普く三界所を盡くし集會に來たる大自在天等は皆悉く面を覆して迷悶し地に蹙れ苦惱の聲を發し、金剛手菩薩に向いて歸依し救いを求めて彼の大自在天等は既に地に蹙れ已る。諸識は行ぜず將に命終に趣かんとす」(大正 No.882, 371b6-371b11)

この箇所に対応するサンスクリットでは、大自在天は明確に mṛta (死んでしまった)と述べられる(堀内[1983] p.336)。

¹³⁰ 漢訳では、「又、金剛手菩薩の足心を以て觸れるが故に、時に無上悉地の勝妙灌頂及び三摩地、解脱、總持、神通智等を獲得す。是の如く一切如来の三摩地、解脱、總持の門に入ることを得已り、彼の大自在天身は金剛手菩薩の足心より出で、下方の三十二殑伽沙數

ここに特記すべき事は、大自在天が各マンドラ中に描かれるような多くの諸天の中の単なる一神としてではなく、仏教における如来にまでその地位を引き上げられていることである。

この大自在天の成仏に関するパラレルな記述は他の文献にも見ることができる。それは『底哩三昧耶不動尊聖者念誦秘密法』（大正 No.1201、以下『三卷本底哩三昧耶』）、『大毘盧遮那成仏経疏』（大正 No.1796、以下『大日経疏』）、『毘盧遮那成仏神変加持経義釈』（『續天台宗全書 密教 1』、以下『大日経義釈』）、*Kāraṇḍavyūhasūtra*（大正 No.1050、『大乘莊嚴宝王経』）の諸文献である。

『三卷本底哩三昧耶』とのパラレルな記述に関しては、早くは Tucci[1932]が一言し¹³¹、『三卷本底哩三昧耶』及び『大日経疏』の記述は神林隆浄（『佛書解説大辞典』「底哩三昧耶不動尊聖者念誦秘密法」の項目）に言及され¹³²、また渡辺[1975]によっても触れられている¹³³。加えて、『大日経義釈』における金剛頂経の引用の吟味という観点から『三卷本底哩三昧耶』と *Kāraṇḍavyūhasūtra* を除く文献が清田[1974]によって対照されているが、上述のようにこの記述はヒンドゥー教と密教の関係を論じる上で重要な記述であるため、以下にその内容を挙げていきたい。

の極微塵量等の世界を過ぎ、一世界に至る。跋娑摩餐那と名づく。佛の出世有り。跋娑彌莎囉儺哩瞿沙如來應供正等正覺と號す。時に大自在天は本身を出現し、彼の佛の前に於て伽陀を説いて曰く。大なる哉一切正覺尊 諸佛の大智は上有ること無し 若し法、文句中に墮さば 涅槃も亦是れ假施設なり、と。是の伽陀を説き已りて復た本處に還る」（大正 No.882, 372b20-372c2）とあり、サンスクリットでは「さて、大天は具徳[金剛手]の足底に触れたので、一切如来の三昧、陀羅尼、解脱の安樂を享受しながら、金剛手の足底にあるその大天の身を離れて、下方 32 のガンガー河の砂の如き世界の極微塵の塵に等しい諸世界を超えて、バスマーチャンナ（灰に覆われた）と名付ける世界があり、そこにおいてバスメーシュヴァラニルゴーシャ（灰自在音）と名付ける如来が生まれた。そこで大天の身よりこのウダーナが流出した。"おお、実に一切諸仏の仏智は最上のものである。字句に伏せしめて、確かに寂靜に住せしむ。"と。」（堀内[1983] p.349）となっている。

『初会金剛頂経』の釈タントラとされる『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』（*Vajraśekhara-mahā-guhyayoga-tantra*）の対応する箇所では「大自在天は金剛手の御足などで触れられたことによって、大地を得、ならびに三摩地と陀羅尼[と解脱の樂を享受した。...中略...[下方]三十二[を過ぎ、]恒河の砂程の仏国土に等しき灰塵で覆われた処（*Bhāsmācchanna*）と名づくる悦意の仏国土のその処に赴いて、大[自在]天は仏に生まれ、かつ[本身を]出現し、灰塵自在音声如来[応供正等覺]のその処に住する者となった」（北村[2012] p.309）と述べられる。

¹³¹ Tucci[1932] p.93 n.1。英訳は Tucci[1988a] p.93 n.1

¹³² 小野[1964] p.3

¹³³ 渡辺[1975] pp.187-189, 192-193

2.2.1 『三卷本底哩三昧耶』、『大日經疏』、『大日經義釈』『十八

会指帰』中の大自在天の降伏譚

『三卷本底哩三昧耶』（大正 No.1201）は不空訳とされる文献であり、承和 14 年（847 年）に恵運によって日本に請来されたと考えられる¹³⁴。この文献に言及する先行研究としては酒井[1973][1983]、松長[2000]、高橋[2004]、田中[2010]が存在する。

『三卷本底哩三昧耶』の関連経軌として一卷本の『底哩三昧耶不動尊威怒王使者念誦法』（大正 No.1200）が挙げられるが、『三卷本底哩三昧耶』の成立に関して松長[2000]は「三卷本は、一卷本をベースにして、不動摩訶薩の密印を結び、諸々の障礙を除くことを説く『大日經疏』の「息障品」の文を冒頭に付加することにより、不動尊に教理的な裏づけをし、再編されたと推測される」¹³⁵とし、また高橋[2004]は、『三卷本底哩三昧耶』中の『大日經疏』と等しい記述を指摘した上で「一々の字句の異同からすれば、『三卷本底哩三昧耶』は『大日經疏』を、さらには『立印軌』をも参照していることは、ほぼ確実に想定してよい」¹³⁶と述べる。

本文献の大自在天の降伏譚の記述部分は、先の松長[2000]が述べるところの『大日經疏』「息障品」と内容が重なる部分であり、サンスクリット原典からの翻訳ではなく、後に『三卷本底哩三昧耶』が編纂された際に付加された部分だと考えられる。

以上のような先行研究に指摘される本文献と『大日經疏』『大日經義釈』内の大自在天の降伏譚の記述は以下のようなものである。

『三卷本底哩三昧耶』（大正 No.1201 13c21-14b5）

瑜伽の會中の如く、佛初て正覺を成じて、大集會中の一切曼荼羅所攝の三界の衆に、摩醯首羅という者有り。即ち是れ三千世界の主にして三千界の中に住す。心慢るが故に肯て所召の命に従わず而も是の念を作す。「是れ三界の主なり。更に誰の尊有て我を召すや」。復た是の念を作す。「彼の持明の者は一切穢惡を畏る。我れ今一切

¹³⁴ 当文献は『恵運禪師將來教法目錄』（大正 No.2168A）には見ることができないが、『恵運律師書目錄』（大正 No.2168B）には「底哩三昧耶不動尊聖者念誦祕密法三卷複爲一卷」（大正 No.2168B 1091a6-1091a7）と出ている。二[1915]においては「承和十四年十月」の奥書を備える「安祥寺恵運僧都書目錄」の全文が示されており、そこにも「底哩三昧耶不動尊聖者念誦祕密法三卷複爲一卷」と記される。また安然による『諸阿闍梨眞言密教部類總録』（『八家秘録』）（大正 No.2176）には「底哩三昧耶不動尊聖者念誦祕密法三卷運」（大正 No.2176 1126b12）と出しており、恵運が将来したことになっている。

¹³⁵ 松長[2000] p.113

¹³⁶ 高橋[2004] pp.338-339

穢汚の物を化作して、四面に圍繞して其の中に住せば、彼が施す所の明術、何ぞ能く爲す所あらんや」。時に無動明王、佛の教命を承て彼の天を召す。其の此の如の事を作すを見て即ち受觸金剛即ち是れ不淨金剛なりを化して彼をして之を取らしむ。爾の時、不淨金剛須臾に悉く所有諸穢を噉い盡して餘を無らしめ、便ち彼を執えて佛所に來至す。彼復た言く。「爾等は是れ夜叉の類にして我は是れ諸天主なり。何ぞ能く爾が所召の命を受けんや」。尋で即ち逃歸る。是の如く七遍。爾の時、無動明王、佛に白して言く。「世尊。此の有情故らに三世の諸佛の三昧耶の法を犯す。當に何事をもって之を治すべきや」。佛言く。「即ち當に彼を斷ずべし」。時に不動明王、即ち彼を持えて左足を以て其の頂の半月中を蹈み、右足は其の妃の首の半月上を蹈む。爾の時大自在天、尋で即ち命終す。爾の時悶絶の中に於て、無量法を證して授記を得、灰欲世界に生じ佛と作る。日月勝如來と號す。

『大日經疏』（大正 No.1796 678c25-679b5）

瑜伽に云う所の説の如きは、佛初て正覺を成じて、大集會の一切漫荼羅所攝の三界の衆に、摩醯首羅という者有り。即ち是れ三千世界の主にして三千界の中に住す。心慢るが故に肯て所召の命に従わず而も是の念を作す。「我は是れ三界の主なり。更に誰の尊有て我を召すや」。復た是の念を作す。「彼の持呪の者は一切穢を畏る。我れ今一切穢汚の物を化作して、四面に圍繞して其の中に住せば、彼が施す所の呪術、何ぞ能く爲す所あらんや」。時に不動明王、佛の教命を承て彼を召す。其の此の如の事を作すを見て即ち受觸金剛即ち是れ不淨金剛也を化して彼をして之を取らしむ。爾の時、不淨金剛須臾に悉く所有諸穢を噉い盡して餘を無らしめ、執えて彼をして佛所に來至せしむ。彼復た言く。「爾等は是れ夜叉の類にして我は是れ諸天主なり。何ぞ能く爾が所命を受けんや」。尋で即ち逃歸る。是の如く七返。爾の時、不動明王、世尊に白して言く。「此の有情何が故に三世の諸佛の三昧耶の法を犯すや。當に何事を以て之を治すべきや」。佛言く。「即ち當に彼を斷ずべし」。時に不動明王、即ち彼を持えて左足を以て其の頂の半月中を蹈み、右足は其の妃の首の半月上を蹈む。爾の時大自在天、尋で便ち命終す。即ち爾の時に悶絶の中に於て無量法を證して授記を得。灰欲世界に於て成佛す。月勝如來と號す。

『大日經義疏』（『續天台宗全書 密教1』 pp.258-259）

瑜伽金剛頂經に説く。世尊初て正覺を成じて、金剛界の漫荼羅に於て三千世界の普門の大衆を攝召す。時に ma he śu ra 摩醯首羅天王有り。即ち是れ三千大千世界の主にして諸の世界の最中なる色欲二界の間に住する者なり。慢心を以ての故に肯て命に従わず而も是の言を作す。「我は是れ三界の主なり。更に何等の世尊有て、我を召すや」。復た是の念を作す。「彼の持呪の者は諸の觸穢を怖る。我れ今種種不淨の物を化作して、宮城の表を圍繞して其の中に住せば、彼の法術何ぞ能く爲す所あら

んや」。不動明王、佛の教敕を承て、彼が是の如の事を作すを見て即ち受觸金剛に命ず。舊譯に所謂不淨金剛なり。彼をして之を取らしむ。爾の時に、受觸金剛須臾に是の如の諸穢を吞滅し、時に佛所に至る。時に摩醯首羅猶お是の言を作す。「爾等は皆な藥叉の類にして我は諸天の主為り。何ぞ能く汝が教命を受けんや」。尋で即ち逃歸ること乃至七返。是に於て、不動明王、佛に白して言く。「世尊。此の有情故らに三世の諸佛の三昧耶の法を犯す。當に何の法を以て之を治すべきや」。佛言く。「其の命を斷ずべし」。時に不動明王左足を以て彼の頂上の寶冠の半月の中を踏み、右の足彼の妃の首冠の半月の中を踏む。爾の時摩醯首羅、尋で即ち命絶え、即ち悶絶の中に於て無量甚深三昧を證し、無生の記を得。灰欲世界に於て、正等覺を成じ、號して月勝如來と為す。

以上の大自在天の降伏譚の対応関係から見ても、『三卷本底哩三昧耶』のこの部分が『大日經疏』によく一致していることが分かる。

上に引用した『三卷本底哩三昧耶』に見られる「瑜伽の會中の如く」および『大日經疏』の「瑜伽に云う所の説の如く」という一文は、『大日經義釈』では「瑜伽金剛頂經に説く」となっており、『三卷本底哩三昧耶』『大日經疏』中の「瑜伽」は『初会金剛頂經』を指していると考えられる。しかしながら、『大日經疏』『大日經義釈』および『三卷本底哩三昧耶經』の大自在天の降伏譚は、堀内校訂梵本および施護訳『初会金剛頂經』『降三世品』の降伏譚と大枠では対応するストーリーではあるものの、若干の内容の差異がある。

『大日經疏』と『大日經義釈』の先後関係については多く論じられている所であるが¹³⁷、この大自在天の降伏譚の部分に関しては『大日經疏』『大日經義釈』共におおよそ同内容である。校訂梵本とよく対応する施護訳『初会金剛頂經』の漢訳年代は大中祥符8年（1015年）であり¹³⁸、『三卷本底哩三昧耶』が恵運によって将来されたという点から考えても、この記述は施護訳に先行するものであると言える。そのため、『大日經疏』『大日經義釈』『三卷本底哩三昧耶』の上記の降伏譚はおそらく施護訳の「降三世品」よりも古形の、あるいは『初会金剛頂經』の異本のストーリーだと推察される。

では、8世紀の不空による『金剛頂經瑜伽十八会指帰』（大正 No.869、以下『十八会指帰』）中においては、この大自在天の降伏譚はいかにこれを説いているだろうか。以下にその記述を挙げよう。

『十八会指帰』（大正 No.869 285a20-285a26）

時に金剛手菩薩、一切如來の請を受け已りて、即ち悲怒金剛三摩地に入る。大威徳

¹³⁷ 『大日經疏』と『大日經義釈』の関係性に関する研究史は清水[2008]に詳しい。

¹³⁸ 武内[1976] p.51

身を現して、種種方便を以て調伏し、乃至命終せしむ。摩醯首羅死に已りて、自ら下方を見て六十二恒河沙世界を過ぐ。灰莊嚴と名づく。彼の世界中にて等正覺を成ず。名づけて怖畏自在王如來と爲す。執金剛菩薩、脚を以て之を按じ、金剛壽命眞言を誦す。復た蘇を得。既ち受化し已んぬ。

ここで挙げられる大自在天の如来名である怖畏自在王如來のサンスクリットが、清田[1974]の指摘するように *bhīṣmeśvara* (あるいは *bhīmeśvara* だろうか) であったならば、『十八会指帰』の大自在天の降伏譚は、先の『三卷本底哩三昧耶』『大日經疏』『大日經義釈』よりも、堀内校訂梵本と施護訳『初会金剛頂經』にかなり近いものであると言える。以上に挙げてきた堀内校訂梵本、施護訳『初会金剛頂經』、『三卷本底哩三昧耶』、『大日經疏』、『大日經義釈』、『十八会指帰』の大自在天の降伏譚の記述の差異が以下の表である。表中の項目に対応する箇所は上記の引用文において下線を付した。

	堀内本、施護訳『初会金剛頂經』	『三卷本底哩三昧耶』	『大日經疏』	『大日經義釈』	『十八会指帰』
大自在天を降伏する者	金剛手菩薩/執金剛菩薩	無動明王/不動明王	不動明王	不動明王	金剛手菩薩
大自在天の赴く仏国土	Bhāsmācchanna(跋娑摩餐那)	灰欲世界	灰欲世界	灰欲世界	灰莊嚴
大自在天の如来名	Bhāsmēśvaranirghoṣa (跋娑彌沙囉儺哩瞿沙) 如来	日月勝如来	月勝如来	月勝如来	怖畏自在王如来

以上の差異に加えて、清田[1974]に指摘されるように、『三卷本底哩三昧耶』『大日經疏』『大日經義釈』に説かれる所の「受觸金剛（不淨金剛）」の汚物の除去の記述は校訂梵本及び施護訳『初会金剛頂經』には見られない。

校訂梵本、施護訳『初会金剛頂經』「降三世品」、『三卷本底哩三昧耶』『大日經疏』『大日經義釈』に説かれるこれらの降伏譚は、大自在天とその妃 (Umā) の降伏そして大自在天の成仏という枠組みで一致するが、『十八会指帰』と校訂梵本、施護訳『初会金剛頂經』「降三世品」に見られる降伏譚とは異なる系統に属するものであろう。

次に、これら記述の祖型と推測し得る *Kāraṇḍavyūhasūtra* 中の大自在天の成仏の記述を挙げて、上述の降伏譚と比較検討してみたい。

2.2.2 *Kāraṇḍavyūhasūtra* 『大乘莊嚴宝王經』中の大自在天の成仏

大自在天の成仏を説く文献として、*Kāraṇḍavyūhasūtra* が挙げられる。*Kāraṇḍavyūhasūtra* はネパール写本、校訂本およびギルギット写本が存在し、ギルギット

写本はその文字から 6 世紀あるいは 7 世紀初頭の写本であると考えられているものである¹³⁹。日本においては佐久間[2005]を始めとした一連の研究がなされており¹⁴⁰、非常に有用なサンスクリットの写本、刊本、チベット訳、漢訳のロケーション対照表が Sakuma によって提示されている¹⁴¹。

大自在天の成仏の記述はギルギット写本にもあるが、残念ながら大自在天の仏国土と如来名の箇所が写本の欠損により確認できない (...nāma tathāgato...となっているため、nāma の前に如来名が入っていたと推測される)¹⁴²。そのため、ここでは Vaidya[1961]の記述を挙げ、ギルギット写本は Mette[1997]のロケーションのみを挙げたい。Bhattacharya[2016]のテキストのこの部分は Vaidya[1961]と全同であるため、ロケーションのみを挙げる。またチベット訳 (DNo.116, PNo.784) を対照する。漢訳『大乘莊嚴宝王經』(大正 No.1050) にはこの部分が欠落している。少々煩雑になるが以下にその記述を挙げる。

サンスクリット¹⁴³

atha maheśvaro devaputro yena bhagavāms tenopasaṃkrāntaḥ upasaṃkramya bhagavataḥ pādaū śirasābhivandya bhagavantam etad avocat labheyāhaṃ bhagavan vyākaraṇanirdeśasya samuddeśam ? bhagavān āha gaccha kulaputra avalokiteśvaro bodhisattvo mahāsattvas te vyākaraṇam dāsyati / atha maheśvaro devaputro 'valokiteśvarasya pādayor nipatya.....atha avalokiteśvaras tam etad avocat kiṃ kāraṇam tvaṃ kulaputra tūṣīmbhāvena vyavasthitaḥ ? atha maheśvaro devaputras tam etad avocat dasva me vyākaraṇam anuttarāyāṃ samyaksambodhau / avalokiteśvaras tam etad avocat bhaviṣyasi tvaṃ kulaputra vivrtāyām lokadhātau bhasmeśvaro nāma tathāgato 'rhan samyaksambuddho vidyācaranasampannah sugato lokavidanuttarah purusadamyasārathih śāstā devānām ca manusyānām ca buddho bhagavān /

サンスクリット和訳

「次に、世尊がいる所その所に至った大自在天子は近付いて、世尊の御足に頭をつけて敬礼して、世尊にこう言った。「世尊よ。私は記別の説の完全な記述を得るであろうか」。世尊は言った。「行け！善男子よ。観自在菩薩摩訶薩があなたに記別を与えるだろう」。次に、大自在天子は観自在の両足に跪いて.....そして、観自在は彼（大自在天）にこう言った。「善男子よ。何故あなたは黙然としているのか」。そ

¹³⁹ Mette & Sakuma[2017] pp.xix-xx

¹⁴⁰ 一連の研究としては佐久間[2005][2006][2012][2013a][2013b]などが挙げられる。

¹⁴¹ Mette & Sakuma[2017] pp.xxx-xxxiv

¹⁴² ローマナイズは Mette[1997] p.132。写本影印は Mette *et al.*[2017] p.124 82, recto.参照

¹⁴³ Vaidya[1961] pp.303-304。Mette[1997] pp.130-133。Bhattacharya[2016] p.111。ギルギット写本影印は Mette *et al.*[2017] p.124 82, recto。

れから大自在天は彼（観自在菩薩）にこう言った。「無上正等覚に対する記別を私に与えて下さい」。観自在は彼（大自在天）にこう言った。「善男子よ。あなたは Vivrtā（開かれた）という世界で、Bhasmeśvara（灰自在）という如来、応供、正遍智、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏、世尊となるだろう。」¹⁴⁴

チベット訳¹⁴⁵

de nas lha'i bu dbang phyug chen po bcom ldan 'das ga la ba der song ste¹⁴⁶ phyin nas / bcom ldan 'das kyi zhabs la [P 268b3] mgo bos phyag [D 242a3] 'tshal te 'di skad ces gsol to // bcom ldan 'das bdag gis lung ston pa'i bshad pa thob par mdzad du gsol /¹⁴⁷ bcom ldan 'das kyiis bka' stsal pa / song shig dang khyod la byang chub sems [P 268b4] dpa' sems dpa' chen po spyang ras gzigs kyi dbang [D 242a4] pos¹⁴⁸ lung ston par 'gyur ro // de nas lha'i bu dbang phyug chen po song ste /.....de nas byang chub sems dpa' sems dpa' chen po spyang ras gzigs kyi dbang pos dbang phyug chen po de la 'di skad ces smras so // rigs kyi [D 242a7] bu khyod ci'i phyir kha rog ste 'dug / [P 268b8] de nas lha'i bu dbang phyug chen po 'di skad ces smras so // bdag bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub tu lung bstan pa stsal du gsol //¹⁴⁹ de nas ⁽¹⁵⁰⁻spyang ras gzigs ⁻¹⁵⁰⁾ kyiis gsungs pa /¹⁵¹ rigs kyi [P 269a1] bu khyod 'jig rten [D 242b1] gyi kham phye ba zhes bya bar de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas / rig pa dang rkang par ldan pa /¹⁵² bde bar gshegs pa / 'jig rten mkhyen pa /¹⁵³ bla na med pa skyes bu 'dul ba'i kha lo sgyur ba / lha dang mi rnams kyi ston pa¹⁵⁴ sangs [D 242b2] rgyas bcom ldan 'das dbang phyug ces bya bar 'gyur ro //

チベット訳和訳

「それから、大自在天子は世尊がいる所に赴き至りて、世尊の足に頭で敬礼してこの様に言った。「世尊よ。私が記別の説を得ることをなさって下さい」と。世尊は言った。「行け！あなたに観自在菩薩が記別をなすだろう」と。それから大自在天子は赴いて.....それから観自在菩薩は彼の大自在にこうおっしゃった。「善男子よ。あなたは何故默然としたまなのか？」と。それから大自在天子はこうおっしゃった。「私が無上正等菩提に至る記別を与えて下さい」と。それから観自在は言った。

¹⁴⁴ 筆者は藤井[2015]において一度この文の試訳を提示したが誤訳をしていた。ここに修正して提示した。

¹⁴⁵ D No.116 242a2-242b2, P No.784 268b2-269a2

¹⁴⁶ P te

¹⁴⁷ P //

¹⁴⁸ P po

¹⁴⁹ P /

¹⁵⁰ P bcom ldan 'das

¹⁵¹ P omit.

¹⁵² P omit.

¹⁵³ P omit.

¹⁵⁴ P pa /

「善男子よ。あなたは phye ba (開かれた) 世界という所で、如来、応供、正遍智、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏、世尊 dbang phyug と呼ばれる者となるだろう」と。」

以上のように、*Kāraṇḍavyūhasūtra* 中で、観自在菩薩は大自在天が *vivṛtā* という世界 (*jig rten gyi khams phye ba zhes bya ba*) で *bhasmeśvara* (チベット訳では単に *dbang phyug*) という如来になることを説く。先に述べたように、『初会金剛頂経』中で大自在天は *bhasmeśvaranirghoṣa* (跋娑彌莎囉儺哩瞿沙) 如来となるとされており、ここに如来名の類似性が指摘される。また、この大自在天の成仏の記述の後に、*umā* も同様に記別を与えられて *umeśvara* (*uma'i dbang phyug*) という如来と成ることが説かれる。*maheśvara* と *umā* がセットで扱われる点においても『初会金剛頂経』「降三世品」と同じである。

相違点としては、大自在天の如来となる仏国土の名前 (*Kāraṇḍavyūhasūtra* では *vivṛtā*。『初会金剛頂経』では *bhasmācchanna*) や、『初会金剛頂経』のように「殺害」を伴った「降伏」という形を採らずに、観自在菩薩による授記という形式を採る点が挙げられる¹⁵⁵。

先にも述べたように、6世紀あるいは7世紀初頭の写本と推測されるギルギット写本中では *bhasmeśvara* という単語自体は写本の欠損故に確認できないが、1196年の写本を利用した Vaidya 本¹⁵⁶に *bhasmeśvara* の語が認められ、この部分はギルギット写本とおおよそ対応する内容である。ギルギット写本の欠損部分、即ち *nāma* の前に *bhasmeśvara* の語があったとすれば、『初会金剛頂経』「降三世品」に先行するものである可能性が高く、「降三世品」の降伏譚の元となった物語であると推測される。

以上、ここではシヴァ神という他宗教の尊格を取り入れる方法としての「授記」あるいは「記別」による成仏と、「降伏」あるいは「殺害」という行為と結果を伴う成仏を見てきた。異宗教の尊格の取り込みを考える際の、このような行為の意味合いは検討の必要がある。そのため、次に、この方法における「降伏」や「殺害」が密教においていかに解釈されてきたかを見ていきたい。

2.3 殺と降伏を伴った異宗教の取り込み

周知のように、仏教では「殺」という行為は否定されるものであり、人を殺せば波羅夷 (僧団追放) となるものであるが、密教経典、儀軌において殺という結果を伴う「降

¹⁵⁵ この『初会金剛頂経』「降三世品」と *Kāraṇḍavyūha* の記述は Studholme[2002] pp.30-31 においても言及される。

¹⁵⁶ 正確には 1196 年の写本を利用した *Sāmaśrami* 本の内容を引き継いだ Vaidya 本である (Mette & Sakuma[2017] p.xxiv)。

伏」「調伏」という行為を多く見ることができる。その一例が、先に挙げた『初会金剛頂経』「降三世品」の一節であり、ここにおける異教—ここでは大自在天—を自派に引き入れる思想と「殺」という行為は不可分であり、それは降伏行為との関連の中で現れている。『初会金剛頂経』のサンスクリットの文脈において大自在天は明確に *mrta* (死んでしまった) と述べられ¹⁵⁷、仏教内で避けられる「殺」の思想を見ることができるのである。

本項では仏教で「殺」がいかに捉えられ扱われてきたかを考察し、この大自在天の降伏譚に連なる思想を探る。2.3.1 項では、上記のように密教経典で「殺」と密接に結びついている「降伏」という訳に充てられているサンスクリット語およびチベット語を対照することにより、その語義を明らかにする。2.3.2 項では、律や大乘経典内での殺害という行為に対する記述を見ることにより、「殺」の思想的背景を探る。2.3.3 項では、初中期密教経典内で「殺」という行為がどのような文脈で現れているかを見ることにより、「殺」というものがいかに捉えられていたかを明らかにすることを目的とする。2.3.4 項では、『初会金剛頂経』に対する註釈である *Buddhaguhya* による『タントラ義入』(*Tantrārthāvatāra, rgyud kyi don la 'jug pa*)¹⁵⁸、およびそれに対する *Padmavajra* による註釈の『タントラ義入釈』(*Tantrārthāvatāravākyāna, rgyud kyi don la 'jug pa 'i 'grel bshad*)¹⁵⁹、*Ānandagarbha* による『真性光明』(*Tattvāloka, de bzhin gshegs pa thams cad kyi de kho na nyid bsdus pa theg pa chen po mngon par rtogs pa zhes bya ba 'i rgyud kyi bshad pa de kho na nyid snang bar byed pa zhes bya ba*)¹⁶⁰、*Śākyamitra* による『コーサラ莊嚴』(*Kosalālamkāra, de kho na nyid bsdus pa 'i rgya cher bshad pa ko sa la 'i rgyan*)¹⁶¹、および「降三世品」の釈タントラとされる『降三世大儀軌王』(*Trailokyavijayamahākālpārāja, 'jig rten gsum las rnam par rgyal ba rtog pa 'i rgyal po chen po*) (以下、『降三世大儀軌』)¹⁶²および、その注釈である

¹⁵⁷ 堀内[1983] p.336

¹⁵⁸ 東北 No.2501 大谷 No.3324

¹⁵⁹ 東北 No.2502 大谷 No.3325

¹⁶⁰ 東北 No.2510 大谷 No.3333

¹⁶¹ 東北 No.2503 大谷 No.3326

¹⁶² 東北 No.482 大谷 No.115。『降三世大儀軌』は『初会金剛頂経』「降三世品」の釈儀軌と言われる瑜伽タントラとされる(川嶋[1989] pp.197-199)が、*Atīśa* は作タントラ(*Kriyā tantra*)と瑜伽タントラ(*Yoga tantra*)の双方に分類しているようである(遠藤[2008] pp.56-59)。また、酒井[1985]はこのタントラを広義の『金剛頂経』十八会中の第四会に相当するものとしており、同時に『理趣経』の祖典とも考えられる」としている(酒井[1985] pp.305-307)。サンスクリット本は無く、漢訳の部分訳と蔵訳が残る。『金剛頂降三世大儀軌法王教中觀自在菩薩心眞言一切如來蓮華大曼荼羅品』(大正 No.1040)が *Trailokyavijayamahākālpārāja* の4章觀自在の章に対応し、『金剛頂経瑜伽文殊師利菩薩法』

『聖降三世と呼ばれる注釈』(*Āryatrailokyavijayanāmaṃvṛtti, 'phags pa 'jig rten gsum las rnam par rgyal ba shes bya ba'i 'grel pa*) (以下、『降三世釈』)¹⁶³を用いて『初会金剛頂経』内での殺害という行為を含む「降伏」の意味とその思想的背景を明らかにすることを目的とする。また、それらの行為が仏教内でいかなる整合性をもって述べられているかを考察する。

以上を考察することによって、「殺」を伴う降伏という行為の成立背景を探ると共に、その行為がいかに捉えられてきたかを明らかにしたい。

2.3.1 『初会金剛頂経』における「降伏」の語義

そもそも、「降伏」とは何を意味するのであろうか。ここでは、「調伏」や「降伏」という漢訳語がサンスクリットではいかなる用語によって表されているかを数例挙げて見ていくこととする。また、同様にチベット訳も対照させる。この操作によって、「調伏」や「降伏」の単語レベルでの理解が可能であると考ええる。用いるのは、以下のテキストである。

- (1) 堀内寛仁編著『梵蔵漢対照 初会金剛頂経の研究 梵本校訂篇 (上)』(密教文化研究所、1983)における〔第二 降三世品〕
- (2) 大正蔵第十八巻 No.882 施護訳『仏説一切如来真實摂大乘現證三昧大教王経』
- (3) 西藏大蔵経、大谷 No.112, 東北 No.479 *de bzhin gshegs pa thams cad kyi de kho na nyid bsduṣ pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*

それぞれの用語を対照させ、表を作成した(表 2.3.1)。表は左から右に通し番号、堀内本のセクション番号、記述内容、漢訳の大正蔵における該当箇所、記述内容、西藏大蔵経における該当箇所、そして記述内容を記した。

なお、これは降三世品全ての箇所を抽出したものではなく、18 例を挙げるに留めている。

この表を見るに、*vinaya* という語に対して「調伏」という漢訳が用いられているのは通し番号 3、4、5、6、7 の 5 例である。その他、 $\sqrt{naś}$ より作られる *nāśaya* (破壊する、消滅させる、取り去る等々。通し番号 8、16、18) という語や、 \sqrt{dam} より派生した、馴

(大正 No.1171) 及び『金剛頂超勝三界經說文殊五字眞言勝相』(大正 No.1172)、『金剛頂經曼殊室利菩薩五字心陀羅尼品』(大正 No.1173) の 3 本が 7 章文殊童子の章に相当するとされる。尚、蔵漢を対応させた研究が酒井紫朗によって行われており、前者に対しては酒井[1950] pp.16-22 があり、後者に対しては酒井[1952] pp.28-37 がある。

¹⁶³ 東北 No.2509、大谷 No.3332。Muditakoṣa 造 *'phags pa 'jig rten gsum las rnam par rgyal ba zhes bya ba'i 'grel pa(Āryatrailokyavijayanāmaṃvṛtti)*

らすことやくじくこと、屈服させることを意味する *damaka*（通し番号 10、11、12）という語、或は征服や鎮圧、打倒などの意味を持つ *nigraha*（通し番号 13、14）といった語が「調伏」と漢訳されている。

また「降伏」という漢訳は、多く *vijaya*（勝利、征服等々。通し番号 15、17）という語に充てられている。

仏教において *vinaya* という語は、毘那耶、或は律と漢訳され、僧の守るべき規定を指すことが多い。しかしながら、この『初会金剛頂経』「降三世品」において「調伏」と訳される他のサンスクリット語（*nāśaya* や *damaka*、*nigraha* 等）の意味から考えるに、ここで用いられる *vinaya* という単語は、*vi*√*ñī* より派生した、離れる、除去するといった、より原義に近い用法で使用されている。

また、ここで挙げた調伏や降伏の対象は、大自在天等の悪有情（通し番号 1）や、一切悪者（通し番号 3、4、10、11、12）、諸衆生（通し番号 7）、一切有情（通し番号 14、16）であり、多くが自己の内に向けたものではなく、外の衆生、有情に対する言葉であると言える。

ここでは、『初会金剛頂経』「降三世品」における「調伏」と「降伏」の言葉の意味と、その言葉の対象を見た。

（表 2.3.1）『初会金剛頂経』「降三世品」に於ける「調伏」「降伏」の対照表

通し 番号	堀内本		施護訳 No.882		西藏訳 大谷 No.112 / 東北 No.479	
	セク ション 番号	記述内容	該当箇所	記述内容	該当箇所	記述内容
1	644	[na] <i>neyāḥ</i> ¹⁶⁴	370a26- 370a27	不能調伏	P 54a1 / D 49a4	'dul bar mi spyod pa
2	644	<i>pratipattavyam</i>	370a27	能調伏	P 54a1 / D 49a4	bsgrub par bgyi
3	648	<i>vinayāya</i>	370b9	爲欲調伏	P 54a6 / D 49b1	'dul ba'i phyir
4	653	<i>vinayaṃ kṛtvā</i>	370b20	調伏	P 54b3 / D 49b4	'dul bar byas nas ¹⁶⁵
5	654	<i>upāya-vinayaṃ</i>	370b23	方便善調伏	P 54b4 / D 49b5	thabs kyis 'dul ba yi
6	659	<i>satva-vinayād</i>	370c10	令有情得調伏	P 55a2 / D 50a3	sems can 'dul don du
7	691	<i>vinayana</i>	371b23- 371b24	調伏	P 56b6 / D 51b3	gdul ba'i don bya ba'i phyir ¹⁶⁶
8	702	<i>vināśayāmi</i>	371c14- 371c15	使我爲彼調伏	P 57a7 / D 52a3	chud gzan par bya ¹⁶⁷

¹⁶⁴ na は、堀内氏によって補われている。

¹⁶⁵ D では *gdul bar byas nas*

¹⁶⁶ D では *gdul ba'i don byas ba'i phyir*

¹⁶⁷ D では *chud gzan par bya*

9	728	[samāviṣṭaḥ] ¹⁶⁸	372b15	降伏	P 58b1 / D 53a4	btul lo
10	797	duṣṭa-damaka(h)	374a20	我已調伏一切惡者	P 61a2- 61a3 / D 55a7- 55b1	ma rungs pa 'dul ba po
11	813	sarva-duṣṭa- damanāyādhyeṣitaḥ	374c15- 374c16	已調伏一切惡者	P 62a1 / D 56a4	ma rungs pa thams cad thul cig ces bka' stsal na /
12	824	sarva-duṣṭa- damaka(h)	375a20	普爲調伏一切惡者	P 62b3 / D 56b5	ma rungs pa 'dul ba lags par bka' stsal na /
13	891	[nigrahītavyā]n nigrahīṣyāmi ¹⁶⁹	377c27	應調伏者我爲調伏	P 65b5 / D 59a7	tshar gcad pa'i rigs pa rnam ni tshar gcod do // ¹⁷⁰
14	899	sarva-satva- nigrahānugraha- samartho	378a20- 378a21	悉能隨應調伏攝受一切有情	P 66a3 / D 59b4	sems can thams cad tshar gcad pa dang phan gdags par byed nus par gyur ¹⁷¹
15	900	sakala-tri-loka-vijaya- samartho bhavati	378a25	善能降伏普盡三世	P 66a4- 66a5 / D 59b5	'jig rten gsum po mtha' dag las rnam par rgyal bar nus par gyur to //
16	907	sarva-satvān sa nāṣayet	378b15	一切有情悉調伏	P 66b2 / D 60a2	sems can thams cad brlag par byed // ¹⁷²
17	937	tri-loka-vijayī sa tu	379b14	即能降伏於三世	P 67b5 / D 61a3	'jig rten gsum rgyal ba //
18	943	bhṛkūṭyā nāṣayet sarvaṃ	379b26	顰眉善調伏一切	P 67b8 / D 61a5- 61a6	khro gnyer gyis kun ma rungs byed //

2.3.2 仏教諸文献に見られる「殺」の思想

殺害を伴った降伏を描く「降三世品」以前の仏教文献の中で「殺」という行為はどのように捉えられていたであろうか。律蔵中の「殺」に関する着目すべき記述を見ていこう。

法蔵部の律である『四分律』調部には、

爾の時、憍羅難陀比丘尼は晨朝に衣を著し鉢を持ちて白衣家に往く。一小兒有りて碓屋に在し中にて睡る。憍羅難陀往きて彼の歩碓杵に觸れる。杵小兒の上に墮ちる。即ち命過す。疑う。佛問いて言はく。汝何の心を以てす、と。答えて言はく。殺の心を以てせず、と。佛言はく。無犯なり。應に他の碓杵に觸れざれ、と¹⁷³

とあり、ここにおいて「殺心」を持たずに結果として殺に至ったものは破戒に当たらないことが分かる。説一切有部系の律の注釈書とされる¹⁷⁴『薩婆多部毘尼摩得勒伽』には

¹⁶⁸ [samāviṣṭaḥ]は、堀内氏によって補われている。

¹⁶⁹ [nigrahītavyā]は、堀内氏によって補われている。

¹⁷⁰ D では tshar gcad pa'i rigs pa rnam ni tshar gcad do

¹⁷¹ D では sems can thams cad tshar gcad pa dang phan gdags par byed nus par gyur

¹⁷² D では sems can thams cad rlag par byed //

¹⁷³ 大正 No.1428 982a23-982a27

¹⁷⁴ 平川[1999]

若し比丘、樹を斫らんと欲いて母を斫りて死ぬは不犯なり。母の如く、父、阿羅漢も亦是の如し¹⁷⁵

と説かれ、ここで「不犯」となるのは同様に「殺心」が無いことが理由となっていよう¹⁷⁶。

また、大乘經典中において特に目を引く「殺」に関する記述を、大乘涅槃經すなわち曇無讖訳『大般涅槃經』に見ることができる。この經典中で、

善男子よ。佛及び菩薩は殺に三有るを知る。謂はく下中上なり

として三種の殺¹⁷⁷が挙げられた後に、

善男子よ。若し能く一闍提¹⁷⁸を殺す者有りとも、則ち此の三種の殺中に墮せず。善男子よ。彼の諸の婆羅門等は一切皆是れ一闍提なり。譬えば地を掘り、草を刈り、樹を斫り、死屍を斬截して罵詈雑言するも罪報有ること無きが如し。一闍提を殺すも亦復是の如く罪報有ること無し。何を以ての故に。諸の婆羅門、乃至信等の五根有ること無し。是の故に殺すと雖も地獄に墮せず¹⁷⁹

¹⁷⁵ 大正 No.1441 613c22-613c23

¹⁷⁶ 律内の、誤って殺を行ってしまった際の記述に関する考察は、李[2014] (p.358-361) 参照。

¹⁷⁷ 三種の殺は以下のものである。

①下殺は蟻子乃至一切畜生を殺すことである。この因縁によって地獄畜生餓鬼に墮ちて下苦を受ける。諸の畜生にわずかな善根があるためであるとされる。②中殺は凡夫人から阿那含に至るまでの者を殺すことである。この業因によって地獄畜生餓鬼に墮ちて中苦を受ける。③上殺は、父母乃至阿羅漢、辟支佛、畢定の菩薩を殺すことである。この業因によって阿鼻大地獄中に墮ち、上苦を受ける。(大正蔵 No.374 460b5-460b15)

¹⁷⁸ この一闍提 (icchantika) が具体的にどういった者を指しているかは『大般涅槃經』内でも一定しておらず、確定し難い。石川[1959]は「一闍提は始めの程は教団内の者、就中、比丘及比丘尼を対象としたものであるが、不信放逸の在俗者も包含するに至ったものである。更に教団外の者に対しても、若し誹謗正法惡逆非道の不信の徒輩ならば、すべて一闍提と呼ばれるのである…婆羅門教徒乃至六師外道等あらゆる外教の徒輩を一闍提と称したのである…icchantikaの意味合からすれば、順世外道即ち路伽耶陀 (Lokāyata) の如きはその最たるものと云わねばならない」(石川[1959] p.6) と述べ、望月[1969]は「すなわち、一闍提とは、單的にここで、「利養貧著者」であると規定出来ると考えられるのである」(望月[1969] p.558) としている。

¹⁷⁹ 大正 No.374 460b15-460b21。慧嚴譯では、大正 No.375 702c20-702c25

とあり、「一闍提」の殺害に罪が無いことが述べられる。また、

善男子よ。若し惡心に因りて地獄に墮さば、菩薩爾の時實に惡心無し。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は一切衆生乃至虫蟻に悉く憐愍利益の心を生ずるが故に。所以は何ん。善く因縁、諸方便を知るが故に。方便力を以て衆生をして諸善根を種えしめんと欲す。善男子よ。是の義を以ての故に、我爾の時に善方便を以て其の命を奪うと雖も惡心にあらず¹⁸⁰

とも説かれ、憐愍の心を背景として惡心を持たずに行われる「殺」は肯定されているのである。また、

譬えば父母の唯一子有りて之を愛すこと甚重にして官の憲制を犯し、是の時父母怖畏を以ての故に若しくは擯け若しくは殺す。復擯け殺すと雖も惡心有ること無きが如し。菩薩摩訶薩の正法を護るが爲なるも亦復是の如し¹⁸¹

とも説かれる。加えて、諸の婆羅門が死して後阿鼻地獄に生まれ、大乘經典に信敬の心を生じて死して甘露鼓如来の世界に生まれ壽命が十劫備わる時、これがどうして殺と言えるのか、という内容も説かれる¹⁸²。『大般涅槃經』においてこのようなことが説かれる原因は、この經の中で繰り返し挙げられ惡の代名詞とも捉えられる「一闍提」という存在の台頭であると考えられる。

「殺心」や「惡心」によらない殺害の肯定の論理を見てきた。これらの例は、殺という結果には重きが置かれず、その行為を行った際の心の様相を判断基準としていることを示しており、その様な行為の要因や背景とも言い得る存在を示唆しているのである。以下より金剛頂經以前に漢訳された密教經典における「殺」に対する思想を見ることにより、それまでの密教経軌において「殺」の思想がいかに捉えられていたかを考察していこう。

¹⁸⁰ 大正 No.374 460a20-460a26。慧嚴譯では、大正 No.375 702b24-702c1

¹⁸¹ 大正 No.374 459c28-460a2。慧嚴譯では、大正 No.375 702b2-702b4

¹⁸² 大正 No.374 460a5-460a14。これらの記述は全て「梵行品」にあたる部分である。大乘涅槃經の成立自体は、「四世紀頃の成立は確かであろう」（望月[1988] p.17）とされる。この品は六卷本には存在せず、インド原典より訳されたとされる蔵訳（大谷 No.788）にも該当するものは欠落している。漢訳の重訳とされる蔵文（大谷 No.787）には該当の章が存在する。（佐藤[2012] pp.197-212 参照）

2.3.3 初期密教經典に見られる殺を伴う修法

ここでは初期密教に分類される密教經典中の「殺」に対する記述に関して述べる。例えば、様々な儀軌を集めた『陀羅尼集經』¹⁸³においては、以下のようなことが挙げられる。「金剛隨心大法身印呪」第四十七の中で呪が挙げられた後、

是の法印大呪は能く一切を伏す。若しは天、若しは龍、若しは諸外道、若しは神、若しは鬼、若しは藥叉、若しは羅刹、若しは乾闥婆、鳩槃荼等なり。種種の雜類、不善を爲す者、及與び人に病患を作す鬼神、障難を爲す者が是の呪聲を聞かば、皆悉く地に倒れ悶絶して死なん¹⁸⁴

と説かれる。また、「烏樞沙摩跋折囉法印呪」第七では、

又の法、毒藥と人血相和して、一呪一燒一百八遍せば、一切の鬼死なん¹⁸⁵

と説かれ、障害をもたらす鬼などを殺す法が挙げられている。このような、鬼神や天魔等が戦慄する、若しくは地に倒れる、悶絶して死ぬといった内容をこの『陀羅尼集經』内にいくつか見ることができる。

死を伴う修法が説かれる例には以下のようなものも挙げられる。『蘇悉地羯囉經』¹⁸⁶

¹⁸³ 『陀羅尼集經』は阿地瞿多により 653～654 年に翻譯されたとされる。この經典は「インド伝来の經典・儀軌を素材として、中国でひとつの經典の体裁に編纂されたものと考えられる」（高橋[2013] p.58）ものであり、本經典の中に引用されるものには異訳が存するものもある。

¹⁸⁴ 大正 No.901 850a21-850a24

¹⁸⁵ 大正 No.901 862a16-862a17

¹⁸⁶ 『蘇悉地羯囉經』は輸波迦羅（善無畏）により 726 年に翻譯されたとされる。『貞元新定釋教目錄』に「開元十四年譯」と出る（大正 No.2157 874c5）。また、松長[1969]は「七世紀の前半期には成立していたと思われる「蘇悉地經」「蘇婆呼童子請問經」「菴呬耶經」には、修法に関する事項がたくみに整理されている。息災・増益・調伏の三種の護摩法が確立し、それは「大日經」に繼承される」（松長[1969] p.47）として、『大日經』以前の成立としている。『蘇悉地羯囉經』は、大正藏中に三本入れられている。それぞれ、底本に高麗版大藏經を用いた正本、南宋思溪版を底本に用いた別本 1、応永二十五年（1418）の根本版を底本とした別本 2 である。大山[1982]は、高野山大学図書館に所蔵される『蘇悉地經』の写本を挙げ、この写本の書風及び各巻に見られる印影から天平十二年（740）の最古写本であると推察した上で、「善無畏訳本に極めて近い写經であるといえる」（大山[1982] p.42）としている。また、この写本は大正藏の中の別本 2 に相当し、「別本二こそ『蘇悉地經』の正本とすべきである」（同上書 p.43）と述べる。これに従って、本論文で

における阿毘遮嚕迦 (ābhicārika, 降伏) 法に関する記述である。この法は、『蘇悉地羯囉經』内の「被偷成物却徴法品」第十六において説かれるものであり、盗まれた物を返却させる修法である。

前の所説の阿毘遮嚕迦法の如く、此に於て應に作すべし...中略...其の偷物者、悼惶恐怖し、齎持し行者に親付せば、便ち應に彼に無畏を施せ。時に彼が與に扇底迦法を作せ。若し作さざれば、彼便ち命終せん¹⁸⁷

と説かれる。この修法は、曼荼羅の内院外院に安ずる諸尊格が説かれ、その曼荼羅の中央において「阿毘遮嚕迦法」をなすというものである。この法をなした後に、窃盗した者が盗んだものを返却したならば、行者は無畏を施し、「扇底迦 (息災) 法」をなすべきだとされる。この「扇底迦法」をなさなければ窃盗者は死んでしまうという内容である。また、以下のようにも説かれる。

盗物者の名を稱えて護摩を作し、八百遍を経よ。或いは但だ己の身血を用て、鹽に和して護摩を作せ。是の如く苦持し、若し物を還さざれば即ち應に更に死に至る猛法を作せ。阿毘遮嚕迦法中に説く所の殺法なり¹⁸⁸

と説かれるところのものである。以上が説かれた後に、盗んだ物を返却した際の対処法が述べられている。その対処法は次のものである。①盗んだ物を持ってきたならば法をやめて歡喜をあたえる。②盗んだ物の代わりの物を持ってきたも、法をやめる。③盗んだ物の代わりが無くとも、ただ来て悔いて謝れば、法をやめて歡喜を施す。④盗んだ物を損失し、分けて他に与えたその残りを持って返したならば、法をやめて歡喜を施す¹⁸⁹。この①から④までがその対処法であり、窃盗者が盗んだ物を返す、或いは悔いて謝った際には、歡喜を施すということが述べられている。

このように、『陀羅尼集經』や『蘇悉地羯囉經』内では、死を伴う修法というものを見ることができる。『陀羅尼集經』内においては、「降三世品」で見られるような、悶絶して死んだ天や鬼などの再生と成仏は説かれない。しかしながら、それに繋がる記述を

は大正蔵の別本 2 (大正 No.893) を用いることとする。また、英訳として Giebel[2001]が挙げられる。

¹⁸⁷ 大正 No.893 (別本 2) 678c15-678c28、東北 No.807 217b3-217b7、大谷 No.431 279b7-280a4、Giebel[2001] p.300

¹⁸⁸ 大正 No.893 (別本 2) 679b7-679b9、東北 No.807 218b6-218b7、大谷 No.431 281a2-281a3、Giebel[2001] p.302

¹⁸⁹ 大正 No.893 (別本 2) 679b10-679b14、東北 No.807 218b7-219a2、大谷 No.431 281a3-281a4、Giebel[2001] p.302

見ることができる。それは以下のものである。

「若し此の印を作さば、一切の惡人、惡鬼神等、皆悉く變心し、轉じて好心を作す¹⁹⁰」

「若し是の呪を聞かば、一切皆、菩提之心を發し、慈悲柔善にして惡念を生ぜず¹⁹¹」

「觀世音菩薩、佛前に在りて此の印を作す時、欲界の天魔皆悉く戰慄し、諸鬼神等は悉く皆地に倒る。諸佛菩薩金剛天等、悉く皆大喜し同時に讚歎す。爾の時、觀世音菩薩諸鬼に語りて云はく。汝等魔鬼、倒る莫れ怖る莫れ。汝等起きて坐せ¹⁹²」

「當に之を出す時、大千世界六種震動す。坐に現ぜる鬼神、一時に崩倒す。佛、鬼神に語る。汝等、怕る莫れ¹⁹³」

惡人や惡鬼神の心の変化や、戰慄し地に倒れた鬼神に対し、仏、菩薩が「倒る莫れ」と語るこの記述は「降三世品」に見られるような再生と成仏への発展段階とも言えよう。また、先の『蘇悉地羯囉經』の記述では、死に至る法をなしたとしても、その対象の行動によっては、扇底迦法を行うことや、歡喜を施すといった記述を見ることができる。これは罪をなす者に降伏法を以て善心を生じさせるという対象の「聖化」の内容に通じ、「歡喜を施す」という記述には修法の行為者の心中に「惡心」が含まれていないことを示していると考えられる。

このような、「降伏」と「息災」がセットで説かれるものには、以下のような記述もある。

「若し成ぜずんば、即ち阿毘遮嚕迦法を以て本尊を苦治し、蠟を以て其の形像を作り、其の眞言を取りて之を念誦せよ。…中略…若し尊來現して、其の成就を與え、本願を満し已んなば、則ち前の事を止めて扇底迦法を作せ¹⁹⁴」

「是の如く作法すること三日を経已りて、亦復來つて成就を與えずんば、又勇猛を加え、無畏の心を以て便ち己が肉を割いて護摩すること三遍せよ。…中略…成就を得已り、即ち應に速に扇底迦法を作すべし¹⁹⁵」

これは鬼魅を治罰するように本尊を治罰する法¹⁹⁶の中で説かれるものであるが、本尊が

¹⁹⁰ 大正 No.901 822b23-822b24

¹⁹¹ 大正 No.901 844a10-844a12

¹⁹² 大正 No.901 822c29-823a4

¹⁹³ 大正 No.901 803c6-803c8

¹⁹⁴ 大正 No.893（別本 2） 680c29-681a9、東北 No.807 222a7-222b1、大谷 No.431 284a8、Giebel[2001] p.309

¹⁹⁵ 大正 No.893（別本 2） 681a10-681a23、東北 No.807 222b2-222b5、大谷 No.431 284b1-284b4、Giebel[2001] pp.309-310

¹⁹⁶ 『新国訳大蔵經』ではこの記述部分に補注し、「本尊を苦しめ治めること。この箇所は恐らくインドの民俗による極めて特殊な呪法というべきであろう」（三崎[2002] p.261）と述べている。この様に本尊を罰するような、本尊よりも行者が優位に立つ、行者を中心と

現れ本願を満した時には「阿毘遮嚕迦法」を止めて「扇底迦法」をなすべきであるとされる。

即ち、降伏などの猛法をなし、その法が成就した際には、歓喜などを施す扇底迦法をなすべきであるとされ、「阿毘遮嚕迦法」の後に「扇底迦法」をなすというのが一般的なものであったと言える。

『聖迦毘訥怒金剛童子菩薩成就儀軌經』には「大悲愍の念をもって降伏法を作して、彼の人をして惡業を遂わざらしめ、亦た未來に三惡趣に墮するを遮せしむ¹⁹⁷」と説かれ、行為の動機として「惡心」ではなく「慈悲心」（大悲愍の念）を持つことを明らかにしている。

阿毘遮嚕迦法（降伏法）は、それ単独でなされるべきものではなく、法が成就した際には先の様な「歓喜を施すこと」を含めた扇底迦法（息災法）をなすべきことが説かれるのである。本尊治罰の法の中でも、成就がもたらされない際に本尊に対し阿毘遮嚕迦法（降伏法）をなすことが説かれるが、本願が満たされれば扇底迦法（息災法）をなさなければならない。

また『聖迦毘訥怒金剛童子菩薩成就儀軌經』内にも降伏の後の息災法が多く述べられている。その例を挙げれば、敵（敵軍）を殺す修法が述べられた後に「彼若し順伏せば、即ち悲愍の心を起こして息災法を作せ」と説かれ、息災法をなせば「彼の苦、皆息まん¹⁹⁸」と説かれるものである。

以上のように、初期密教の時代に区分され得る経軌において、その修法内に「死」という結果を伴う記述を見ることができる。しかしながら、そのような死を伴う修法も、無批判に受け入れられているわけではない。修法の対象に、修法者の望む変化（改心や願望の成就）があれば、息災法をなさなければいけないのである。

『初会金剛頂經』「降三世品」や『降三世大儀軌』内での大自在天の降伏譚もこの「降伏」から「息災」という一連の流れを継承したものである可能性があろう。この思想を背景に持つと考えれば、大自在天を降伏した金剛手に対し仏が「金剛手よ。あなたがこの様に衆生を調伏したことは善哉善哉」と述べた後に「その故に、調伏し息を出させよ（蘇生させよ）¹⁹⁹」と命じることは不自然ではない。この記述は先に挙げたところの魔鬼などに対する「倒る莫れ」という記述に通じるものであろう。

以上、初期密教経軌中のいくつかの「殺」の記述をみてきた。以下より、冒頭で述べたところの、「降三世品」中の大自在天の死と再生が、注釈者たちによっていかに捉えられているかを見ていこう。

した修法の例をインド宗教の中で見られるかどうかはより調査が必要であらう。

¹⁹⁷ 大正 No.1222 102b8-102b9

¹⁹⁸ 大正 No.1222 107b8-107b13

¹⁹⁹ 東北 No.482 12a5-12a6, 大谷 No.115 4a4

2.3.4 『初会金剛頂経』注釈文献に見られる殺と降伏

「降三世品」のストーリーに対応する『降三世大儀軌』の部分はおよそ同様の内容であるが、大自在天が如来となる場面は描かれていない。降伏の場面は描かれ、『降三世積』でその場面が解釈されている。

『降三世大儀軌』において、金剛手は世尊に対して

この故に、世尊よ。私は粗暴なる衆生を調伏するのです。何故かと言えば、私は貪欲の楽しみを持つ者達を、支配することなどによって調伏してから、無上の安楽に導き入れるのです。粗暴なる衆生たちを殺すことなどによって、浄化（陶冶）して、解脱につかせる様にします²⁰⁰

と述べている。また、「オーム、スンバ、ニスンバ、フーム²⁰¹」という真言に対して『降三世積』は「スンバは忿怒である。ニスンバは忿怒の無いこと（無瞋）である。フームは殺害である²⁰²」と釈し、「殺」の思想が強く表れている。加えて、『初会金剛頂経』「降三世品」の品末においても、金剛手は、

爾の時、金剛手菩薩摩訶薩は自らの秘密法を説く。一切の有情を利す爲の故に、佛の教法を以て正因と爲す。是に由りて諸有情を殺害せんに、此の中罪無く亦染無し²⁰³

と説き、殺害の正当性を挙げている。

先の『降三世大儀軌』の「殺すことなどによって、浄化（陶冶）して」という箇所に対して『降三世積』は、

『殺すことなどによって浄化（陶冶）して』という『殺すこと』とは、自性が変

²⁰⁰ de'i phyir na bcom ldan 'das bdag sems can ma rungs pa 'dul bar bgyid do // gang gi phyir zhe na / bdag gis 'dod pa'i bde ba can rnams dbang du bgyi ba la sogs pas btul nas / bla na med pa'i bde ba la dgod par 'tshal lo // sems can ma rungs pa rnams bsad pa sogs pas sbyangs te zhi ba la dgod par 'tshal lo // (東北 No.482 10a7-10b1, 大谷 No.115 2a4-2a5)

²⁰¹ om sum bha ni sum bha hūṃ / grī hṇa grī hṇa hūṃ / grī hṇā pa ya grī hṇā pa ya hūṃ / ā na ya ho bha ga bān ba zhra hūṃ phaṭ / (東北 No.482 10b4, 大谷 No.115 2a8-2b1)

²⁰² su mbha ba ni khro ba'o // ni su mbha ni khro ba med pa'o // hūṃ ni gsod pa'o // (東北 No. 2509 219a4, 大谷 No.3332 249b4)

同じ hūṃ であるが、真言によってその釈し方は変わり、「フームは常に輪廻することであり」(hūṃ ni gtan 'pho ba ste) と釈される場合もある。

²⁰³ 大正 No.882 398c11-398c13

化することである。[これは]殺生をすることではなく、かつての粗暴なる自性を除き、[大天などは]未来の寂靜の自性に変化する（解脱する）という意味である²⁰⁴

と釈し、「殺」に対し忌避しているような態度が見て取れるのである。『降三世大儀軌』における大自在天を蘇息せしめる場面に関しても、『降三世釈』は、

『それ故に、調伏し、息を出させよ（蘇生させよ）』と言うことは、大天などをその様に調伏したことは善[いことである]ので、その様に調伏し、結果として殺さずに蘇生させよという意味である²⁰⁵

と釈し、やはりここにおいても殺害という結果を避ける様な記述が見られる。

『降三世釈』の作者である Muditakoṣa は、『降三世大儀軌』の中で説かれる「殺害」はあくまでも自性（心）が変化することであると主張し、心を好心に変えさせるという対象の心の「聖化」を重視して説いたものであり、経内で説かれる「殺害」という行為を否定して取り込む「否定的合理化」を図ったものだと言える。

では、他の注釈者はいかに解釈しているだろうか。Ānandagarbha および Śākyamitra は、「降三世品」の大自在天の死に関する文（lha chen po zhes bya ba'i lha de ni sa la 'gyel te dran pa med par gyur nas shi'o //）を直接引いて、この「死」に対する註釈は施していない。そのため、他の箇所における「降伏」に関する注釈をみていく。

Ānandagarbha および Śākyamitra は双方、『初会金剛頂経』で

金剛手よ！この三界の円（衆会）にいる一切に帰依処を施せ。そして殺すことなかれ²⁰⁶

と世尊が金剛手に対して述べた内容に対し釈を施している。Ānandagarbha は

殺すなかれというのは、殺すことの[罪に]墮すことであり、殺すことをなすなかれという意味である²⁰⁷

²⁰⁴ gsad pa la sogs pas sbyangs te zhes bya ba bsad pa ni rang bzhin bsgyur pa la bya'o // srog gcod pa la mi bya ste snga ma'i rang bzhin ma rungs pa bsal te phyi ma'i rang bzhin zhi bar bsgyur zhes bya ba'i don to // (東北 No.2509 218b7-219a1, 大谷 No.3332 249a8-249b1)

²⁰⁵ de bas na thul la dbugs phyung shig ces lha chen po la sogs pa de ltar btul ba ni legs kyis de ltar thul la thal byung du ma gsad par slar gsos shig ces pa'i don to // (東北 No.2509 220a7, 大谷 No.3332 251a3-251a4)

²⁰⁶ phyag na rdo rje 'jig rten gsum po'i 'khor lo 'di thams cad la skyabs sbyin pa byos te ma bsad cig // (東北 No.479 51a7, 大谷 No.112 56b1)。サンスクリットは堀内[1983] p.337 参照。

²⁰⁷ ma bsad cig ces bya ba ni /gsod pa'i ltung ba ste /gsod bar ma byed cig ces bya ba'i don to // (東北 No.2510 243b6, 大谷 No.3333 280b3)

と釈し、また Śākyamitra は

それから世尊はこの様に知りということは、世尊が、決してこれを殺さないと、この様に知ってこれをおっしゃるのである。金剛手が、三界のこの円（衆会）一切に帰依処を施すことをなして、殺すなかれということである²⁰⁸

と釈して、殺を避ける態度を明らかにしている。加えて、Ānandagarbha は、『初会金剛頂経』中の「字句によって圧伏してから²⁰⁹」という箇所に対して、

勝義においては、私はここにおいて、色身の自性を金剛手の足によって圧伏することではない[と考えるのである]が、しかしながらまた、菩提心の記（標識）である字句、それを解することによって、所取（対象）と能取（対象を把握するもの）の一切分別を克服して、調伏されることを離れる結果となるものの、色身の自性は足の下に圧伏する、これは奇異なことであると思うのである²¹⁰

として、勝義では大自在天の色身を踏みつけることなく、「悪処から出た（涅槃の）仏に安立すること[であり]、それはこれを美しくすることである²¹¹」として、その自性の変化を指していると考えられる。これは、先の Muditakoṣa の解釈に類するものと言える。

Buddhaguhya も同様に、この「降三世品」の殺害と再生の文を直接に引いて解説を付すことはしていないが、随処に「殺害」に関わる釈を付している。その中でも顕著な部分が「諸部成就教理」に当たる箇所である²¹²。Buddhaguhya は「仏の教令を護ることと同様に衆生救護のため 忿怒をもって一切を害するものたちは 殺しても悉地を得るものになる」という文を引いて、これに対し

²⁰⁸ de nas bcom ldan 'das kyis mkhyen bzhin du zhes bya ba ni bcom ldan 'das kyis ci nas kyang 'di mi gsod do zhes mkhyen bzhin du 'di skad ces bka' stsal to //phyag na rdo rje 'jig rten gsum po'i 'khor lo 'di thams cad la skyabs byin pa byos te /ma bsad cig ces bya ba'o //(東北 No.2503 193a6-193a7, 大谷 No.3326 228a6-a7)

²⁰⁹ yi ge'i tshig gis mnas su //(大谷 No.112 58b7)、あるいは yi ge'i tshogs kyis mnas su //(東北 No.479 53b1)。サンスクリットは堀内[1983] p.349 参照。

²¹⁰ don dam par na bdag ni 'dir gzugs kyi sku'i ngo bor phyag na rdo rje'i zhabs kyis mnas du yod pa ma yin gyi / 'on kyang byang chub sems kyi mtshan nyid kyi yi ge'i tshig de rtogs pas gzung ba dang 'dzin pa'i rnam par rtog pa thams cad bcom nas gdul bar bya ba spangs su zin yang gzugs kyi sku'i rang bzhin ni zhabs kyi 'og tu mnas pa 'di ni ngo mtshar ba'o snyam du sems so //(東北 No.2510 244b7-245a1, 大谷 No.3333 281b8-282a2)

²¹¹ mya ngan las 'das pa'i sangs rgyas su bzhag pa de ni 'dir mtshar bar gyur pa yin no //(東北 No.2510 244b6-244b7, 大谷 No.3333 281b7-281b8)

²¹² 遠藤[2013] pp.244-262、北村[1993]および北村[1994]参照。

仏の教勅等と衆生調伏の事業をなすなら、その過失を具足するものにならないのは、医者等のように慈悲力をもって入るためであると考えられるのである²¹³

と釈している。これに対する Padmavajra の注釈では、

如来の御口から仰せられた教令を持続して護ることと、ある有情の中、救助が得られず苦しんでいる人たちを救護するために、忿怒心の相續なる暴悪者の誤った考えの瞋より普く退かせるために、正しき大忿怒門より殺したとしても障礙とならずして、その方便で悉地を得るであろうとの教示であり…中略…根なる大悲で摂受するとき、その者においては利益を成ずるけれども、悲痛させる心によるものではないから過失とはならないのであり…後略…²¹⁴

と釈され、大悲を背景とした殺害が肯定されている。この解釈は、「悪心」によらず憐憫（大悲心）を伴った実際的な「殺害」が不犯であるという立場から「殺害」を伴う「降伏」を解釈しているものであり、こちらは「殺害」の「肯定的合理化」を図っていると言えよう。

次に、先にも挙げた『大日経疏』中の大自在天の降伏譚に関わる「殺」の記述の解釈を見てみたい。大自在天の「命終」という語に対して、『大日経疏』は、

命終と云うは、是れ彼の一切心法、永く斷じて無生法性に入る故に、中に於て一切佛記を得。是れ殺に非ざるなり。²¹⁵

として、明確に降伏の結果が「殺ではない」という立場を採っている。

以上の様に、「殺」を伴った「降伏」の解釈に関し、その解釈方法にも二通りあったと言える。それは

- ① 「殺」は自性の変化であり殺すことではないとするもの
- ② 「大悲心」に依る「殺」を積極的に肯定するもの

²¹³ 訳文は遠藤[2013] p.248 に依った。この箇所に関しては既に論じられている（静[2006] p.156）。また北村[2016] p.815 参照。（東北 No.2501 76b7, 大谷 No.3324 82a6-82a7）

²¹⁴ 訳文は北村[2016] p.815 に依った。また北村[1993] p.19 参照。（東北 No.2502 315b1-315b5, 大谷 No.3325 339a6-339b3）

²¹⁵ 大正 No.1796 a15-a17

『大日経義釈』では「彼の命を斷ずるとは、即ち是れ一百六十心等、悉く皆な永寂して生ずること無し。是の故に、現に大菩提の記を授く」（『續天台宗全書 密教 1』 p.260）として、心の変容の比喩表現として「命を斷じる」という語を捉えている。

以上のように、殺害を伴った降伏に対して、大きく二つの解釈が施されていることを明らかにした。一つは、殺すことではなく自性の変化であるとする①のパターン、そしてもう一つは、大悲心を背景にした殺は肯定され得るという②のパターンである²¹⁶。

この双方の合理化の理論には、その思想的背景と考えられる記述があった。それが、2.3.2 項および 2.3.3 項で扱った一連の記述である。

「降三世品」中の、死を伴う大自在天の降伏譚のような、仏教で忌避される「殺害」を含む「降伏」の記述を解釈する際に、注釈者はこの思想を異なる視点から合理化し、整合性を与え、昇華したのだと考えられる。

「殺害」の記述に関していくつかの解釈が存するものの、その根本とする思想は「慈心」であり、そして「無上の安楽に導き入れる」という一切衆生の利益を求めるものである。この思想的基盤によることで、「殺」を伴う「降伏」は仏教内で容認され得るのであろう。

2.4 小結

以上に、密教経軌中の大自在天の記述を挙げた。ヒンドゥー教の大自在天は、降伏の対象として見做される一方で、崇拜の対象、あるいは修法の本尊としての特性も認められていたことを確認した。また、大自在天の降伏譚を中心として、異宗教の尊格の変容を通じた自宗教への取り込みの具体的事例を見てきた。これは「授記」あるいは「殺害」を伴った「降伏と再生」という手法によるものである。これは「ヒンドゥー教から仏教」への尊格の取り込みの流れの事例である。

この「授記」や「降伏と再生」による尊格の取り込みのシステム、特に殺害という行為を伴う記述に対しては、上記のように後世の仏教徒たちによって解釈を施され、合理化が施されていた。この合理化は、密教経軌に組み込まれた外的な尊格や修法を仏教的なものへと昇華するための一つの理論として機能していると言える。

次に第3章では、本章で述べた流れとは反対の、「仏教からヒンドゥー教」という流れを持つ *Bhūtaḍāmaratantra* を中心として、両宗教間の具体的交渉例を見ていきたい。

²¹⁶ 本論で挙げた諸例の他に、「仏教と暴力」あるいは「仏教と殺害」の問題を扱う研究で多く用いられるのが『大宝積経』「大乗方便会第三十八」や『慧上菩薩問大善権経』内の「悪人の殺害」の記述である。そしてこれらは慈悲に基づく殺害の例として挙げられている。(Gray[2007] pp.241-243, Schlieter[2006] pp.145-147, Tatz[2001] pp.73-74)

第3章 *Bhūtaḍāmaratantra* における仏教、ヒンドゥー教間の関係

3.1 *Bhūtaḍāmaratantra* の先行研究とインド宗教史における文献的位置付け

Bhūtaḍāmaramahātantrarāja あるいは *Bhūtaḍāmaratantra* (以下 BT) は、近似する内容を備えるヒンドゥー教版 (Hindu *Bhūtaḍāmata Tantra*=以下 HBT) と仏教版 (Buddhist *Bhūtaḍāmara Tantra*=以下 BBT) の両版が存在することから、両宗教間の関わりを考察する上で注目すべきタントラである²¹⁷。

仏教版には、サンスクリット写本、チベット訳、漢訳が揃い²¹⁸、ヒンドゥー教版はサンスクリット写本および、いくつかの刊本を利用できる²¹⁹。この両版では、登場する諸尊格に違いがあるものの、説かれる内容、マントラなど多く共通する内容を含んでいる。

このように、異宗教間で類似するテキストであるこの両版からは、仏教とヒンドゥー教との宗教間の関わりを見ることができ、異宗教間の具体的な要素の貸借例と変容の過程が引き出され得る。また、BBT 中では、対告衆として大自在天が描かれ、大自在天の住居などを成就に適した場所として挙げるように、大自在天 (シヴァ) 信仰との関連も見ることができる。以下に、この BBT と HBT それぞれの先行研究と文献的位置付けに関して見ていきたい。

²¹⁷ Bhattacharyya[1933]および神代[1988](p.214)においてこの文献に関する考察がなされている。また、Bhattacharyya[1933]を引いた Goudriaan[1981](pp.118-119)においても仏教版とヒンドゥー版の存在が言及されている。また、Goudriaan[1981]の p.119 n.31 で挙げられている R.M.Chattopadhyaya によるベンガル文字でのテキストがあり (Cattopādhyāya[2011])、こちらはヒンドゥー版のものである。ヒンドゥー版に関してはこの他に、英訳を含む Mishra[2016]が近年出版されたが、そのテキストの底本となったもの (写本など) に関しては言及されていない。また、英訳を含む Rai[2004]のテキストは、その冒頭部分のストーリーやマントラはこのタントラと近似するが、その後半部分は様相を異にしており、別の文献である。この本の preface において上記のベンガル文字のテキストが挙げられている (Rai[2004] p.iii)。また、この文献の諸写本に関しては塚本[1989](pp.146-147)に挙げられているが、その中にはヒンドゥー版のものも混在している。加えて、Bühnemann[1999]は仏教タントラとヒンドゥータントラ間の関係性を知る上での *Bhūtaḍāmara* の重要性を述べている (p.304)。

²¹⁸ 3.2.1 参照。

²¹⁹ 3.2.1 参照。

3.1.1 仏教版 *Bhūtaḍāmaratantra* の先行研究と文献的位置付け

3.1.1.1 BBT の先行研究と文献分類

BT の研究の嚆矢は Bhattacharyya[1933]であると言える。B. Bhattacharyya によって仏教版とヒンドゥー教版の BT の存在が明らかにされ、その後この文献を中心に扱った研究は、BT 中に説かれるマンダラの考察を含む吉崎[1981]まで出ることが無かった。吉崎[1981]は主として仏教版に関する研究であり、ヒンドゥー教版は考察の対象とはされていない。また、近年では名取[2018a][2018b][2018c][2019]において、仏教版 BT の諸写本間の関係性が提示され、BBT の関連文献とその著者の系譜に焦点が当てられ、BBT に関する研究が行われるようになってきている。

仏教版の成立時期に関しては、Bhattacharyya[1933]の中で、①*Sādhnamālā* 中の 4 つの *Bhūtaḍāmarasādhana* の著者として Vairocana と Trailokyavajra が挙げられており、この Vairocana を Vairocana Rakṣita²²⁰と比定できること²²¹、そして②本文献中に描かれる *Dīnāra* 金貨が、グプタ期の中期からインドで流通していた、*Denarii* の模倣のコイン名である²²²、という 2 点を主たる論拠として、このタントラが 7 世紀の初め、あるいは 8

²²⁰ この Vairocana に関して、Bhattacharyya [1928]でも Vairocana と Vairocana Rakṣita を同一人物として扱い、8 世紀に活躍した者と見ている (pp.CXX-CXXi)。Bhattacharyya [1928]はその注に Bose [2015]を挙げている。この Bose [2015]中では Vairocana Rakṣita をヴィクラマシーラの僧だとしており、またインドの人間だと考えているようである (Bose [2015] pp.40-46)。齊藤[2001]は「Vairocana rakṣita は *Blue Annals* および Bu ston の仏教史のなかの記述、またチベット大蔵経に収録されている、かれの翻訳作品に付されているコロフォンなどから、Khri sron lde btsan(西暦 742-797 年)の在世に活動したチベット人翻訳官であろうと推測される」としている (齊藤[2001] p.122)。Bu ston の仏教史においては、二つの説を挙げる中で「パコルのベローチャナ」と「パコルのベローチャナ・ラクシタ」と述べられており (芳村[1951] pp.33-34 および Obermiller[1932] p.190)、ここからは Vairocana と Vairocana Rakṣita が同一人物であると考えられる。Vairocana と Vairocana Rakṣita が同一人物であるとすれば、Bhattacharyya [1928]の言うように、*Sādhnamālā* 中の *Bhūtaḍāmarasādhana* の Vairocana という人物から BBT の年代は推定されるが、これを結論付けるには更なる調査が必要とされるであろう。これに関して名取[2018a]は 11-12 世紀に活動した Vairocanavajra の存在を提示して、より慎重な考察が必要だとしている (名取[2018a] pp.21-22)。

²²¹ Bhattacharyya [1933] p.353

²²² Bhattacharyya [1933] p.356

この金貨に関する記述は、確かに当文献中に散見される。一例を挙げれば、ヒンドゥー教版では「[行者に]1000 ディーナラを授けるのである」(N1 6b5, N2 4a7, Bo 8b2, Ba 7b7, N3

世紀のものであろうと推測されている。更に、ヒンドゥー版内で説かれるマンダラにおいて下位にヒンドゥー神が置かれていることや、同版内で多数の仏教用語が言及されていることなどを根拠として、仏教版がヒンドゥー版に先立つものであると結論付けている²²³。

現存する BBT の諸写本間の関係については、先に挙げたように名取[2018a][2018b]に詳しい。これら論文を参照しつつ、BBT の文献的位置付けについて見ていきたい。

BBT の文献分類としては、Abhayākara Gupta の *Āmnāyamañjarī* 中で BBT が *Trisamayārājatantra* と並んで Kriyā タントラに属するものとして挙げられていることが報告されている²²⁴。14 世紀の Bu ston によつては、Kriyā タントラ中の phyag na rdo rje'i rgyud (金剛手のタントラ) に組み込まれ²²⁵、14-15 世紀の Mkhas grub rje によつても Kriyā タントラとみなされているようである²²⁶。一方で、Sa skya 派の Ngor chen kun dga' bzang po は 1420 年の *spyod pa'i rgyud spyi'i rnam par gzhogs pa legs par bshad pa'i sngon me*²²⁷ 内で BBT を Kriyā タントラではなく Caryā タントラとして分類し、「'byung po 'dul byed (Bhūtaḍāmara) というタントラの大王は、広大な 16,000 のタントラから引き出された

4b3, M p.24) という記述がある。この部分は、仏教版では「[行者に]1000 デーナラーを与えるのである」あるいは「[行者に]ディーナナーナ (ディーナラーであろう) 金貨を与えるのである」(A 10b1, T1 8a1, T2 7a2-7a3, G 3b6, D 241a3, P 35b4, Ph 197b4, sT 50b5, 大正 1129 551c25-552a3)である。

このディーナラーに関しては『十王子物語』(7C 頃) 中にも「そして私は一万六千ディーナラー (金貨) を勝ち取り」(田中[1966] p.83) と出ている。また『ターラナータ仏教史』中にも「黄金デイナー (Dinara) を施與し」(寺本[1974] pp.300-301。英訳は Chattopadhyaya[2010]の p.280。蔵文は Schiefner[1963]の p.169) と出る。同様に、「各黄金デイナー (Dīnāra) を施し」(寺本[1974] p.358。英訳は Chattopadhyaya[2010]の p.334。蔵文は Schiefner[1963]の p.202) とも記されている。前者は Rāhulabhadra (Saraha) に関する記述の中で述べられているものであり、後者は Bhogasubāla 王、Candrasena 王そして Kṣemaṅkarasiṃha (Śaṃkarasiṃha?) 王の三王が施しを行ったという記述である。これら Dīnāra という記述から当タントラの成立年代を推定するには、これら記述を含めた他文献に現れる Dīnāra の記述を更に調べる必要があろう。

²²³ Bhattacharyya [1933], pp.365-366

²²⁴ 名取[2018a] p.13, pp23-24 n.1. および横山[2016] p.87

²²⁵ 西岡[1983] p.59 の No.1167 および名取[2018b] p.51, p.60 n.2

²²⁶ 「金剛部の主に属するタントラ」に分類される。また、「これらが[金剛]部の主に属するタントラのうち、主なるもので、なお多くの雑多な[タントラ]がいっしょに翻訳されている」(高田[1978] pp.220-222)。

²²⁷ Davidson[1981] p.86

と説かれる」²²⁸と述べている。これは BBT のチベット訳の末尾の記述²²⁹に対応する記述である。また Ngor chen は BBT の一節²³⁰を引用して、Caryātantra に分類されることを述べている。

3.1.1.2 BBT を引用する諸文献

次に、BBT を引用する文献を見ていきたい。BBT を引用する早い段階の文献としては、8 世紀後半から 9 世紀前半の人と推定されている Vilāsavajra²³¹ による *Nāmamantrārthāvalokinī* 中に *Bhūtaḍāmaratantra* からの引用があることが Tribe[2016]²³² に提示され、名取[2018a]においてこの引用の記述が現行の *Bhūtaḍāmaratantra* 中には見られないことが報告され²³³、当時この記述を含んだ別のヴァージョンの *Bhūtaḍāmaratantra* と呼ばれる文献が存在した可能性が挙げられる。

また、時代は下るが *Guhyasamājatantra* (以下 GST)への注釈である *Pradīpoddyotana* (以下 PU)に対する Bhavyakīrti²³⁴による注釈 *Pradīpoddyotanābhisamdhīprakāśikā* (以下 PUAP) 内に BBT への言及を見ることができる。一つ目の言及は、GST 中の「スリー、ナーギー（竜女）、マハーヤクシー（大夜叉女）、アスリー、マヌシーを、手に入れて、〔これらの女と〕明妃の禁戒を行ずるならば、三金剛智に依止する者となるであろう」²³⁵という記述に対する PU の「アスリーを、ということなどは理解し易い」²³⁶という部分に対する PUAP の注釈である。以下にその記述部分を挙げよう。

²²⁸ 'byung po 'dul byed ces bya ba'i rgyud kyi rgyal po chen po ni / rgyud rgyas stong phrag bcu drug pa las phyung bar bshad do // (Ngor chen 76b6)

²²⁹ 'byung po 'dul ba zhes bya ba'i rgyud stong phrag bcu drug pa las ji snyed pa(P ji snyed pa rnams) rdzogs so(P sho) // // (D 263a7, P 59a5-59a6)

²³⁰ 'byung po 'dul byed kyi rgyud las / de nas lha'i skur bsam mo // de nas khro bo'i bdag po'i phyag rgyas yan lag drug tu dgod par bya ste / zhes pa nas / de nas dkyil 'khor gyi lha'i snying pos spyang drangs te / zhes sogs kyis bdag lhar bskyed pa dang / (Ngor chen 78b3-78b4)。これは BBT の D 247a1-247a3, P 41b4-41b6 に対応する。

²³¹ Tribe[2016] p.25

²³² Tribe[2016] p.376 の *Nāmamantrārthāvalokinī* に引用される文献一覧の中に BT が提示されている。

²³³ 名取[2018a] p.26 n.22

²³⁴ Bhavyakīrti の活動年代は 10 世紀頃であると考えられている（静[2015] pp.141-142）。

Bhavyakīrti の年代に関する論及に関しては Tomabeche[2016]にも詳しい。

²³⁵ 訳文は松長[1998] p.174。テキストは Matsunaga[1978] p.95

surīm nāgīm mahāyakṣīm asurīm manuṣīm api /
prāpya vidyāvratam kāryam trivajrajñānasevitam /

²³⁶ Chakravarti[1984] p.202。蔵訳は東北 No.1785 174b2.

Skt. asurīm ityādi sugamam //

Tib. lha mo zhes bya ba la sogs pa ni go sla'o //

*lha mo zhes bya ba la sogs pa smos te / lha dang gnod sbyin dang dri za la sogs pa'i bu
mo rdo rje 'jigs byed dang 'byung po 'dul ba'i rgyud las gsungs pa'i rim pas bsgrub par
bya ba dang / ...*²³⁷

「lha mo (asurī)ということなどを言って、天と夜叉とガンダルヴァの女は、
Vajrabhairava と *Bhūtaḍāmara* のタントラに説かれた次第によって修されるべき
ことと…」

BBT 中には yakṣiṇī の修法が説かれているため、それを指していると考えられる。また、
GST 中の yakṣa、yakṣiṇī あるいは bhujagendrārājñī の三昧耶の記述²³⁸に対する PU の注釈
²³⁹に対応する部分で PUAP は、

*de ltar zhes bya ba nas bya ba'i bar du zhes pa'i bar du ni*²⁴⁰ *dpal 'byung po 'dul ba'i
rgyud kyi rim pas*²⁴¹ *rdo rje hūṃ mdzad*²⁴² *la sogs pa'i gzugs blangs te klu*²⁴³ *mtsho la
sogs pa'i 'gram du 'dug nas...*²⁴⁴

「de ltar ということから、bya ba'i bar du ということまでは、吉祥なる
Bhūtaḍāmara のタントラの次第によって金剛吽迦羅などの姿を得て、龍の湖な
どの近くに座って…」

として BBT を挙げている。この記述は BBT 中の nāginīsādhana の章に類似の記述を見
ることができる。次いで、GST が rākṣasastrī、bhūta の三昧耶を説く場面²⁴⁵に関して PUAP
は、sha za mo (piśācinī)、gnod sbyin mo (yakṣiṇī)、mi'am ci mo (kinnarī)、'byung po mo (bhūtinī)
などの儀軌について言及し、

*de yang rdo rje 'og dang rdo rje mkha' 'gro dang 'byung po 'dul ba'i rgyud las gsungs te
/ ...*²⁴⁶

「それもまた、*Vajrapātāla* と *Vajradākīnī* と *Bhūtaḍāmara* のタントラに説かれて

²³⁷ 東北 No. 1793 khi 122a2. 大谷 No.2658 ki 204b6-204b7

²³⁸ Matsunaga[1978] p.98、松長[1998] p.182

²³⁹ Chakravarti[1984] p.205。蔵訳は東北 No.1785 177a3-177a6.

²⁴⁰ D では de ltar zhes bya ba'i bar du ni...

²⁴¹ D pas /

²⁴² D mdzad pa

²⁴³ D klu'i

²⁴⁴ 東北 No. 1793 khi 126b3-126b4. 大谷 No.2658 ki 209b1-209b2

²⁴⁵ Matsunaga[1978] pp.98-99、松長[1998] p.183

PU は Chakravarti[1984] p.205。蔵訳は東北 No.1785 177b2

²⁴⁶ 東北 No. 1793 khi 127a5. 大谷 No.2658 ki 210a5

おり...」

と説く。ここから PUAP において BBT は bhūtinī や nāginī、yakṣiṇī の修法の典拠として用いられていたと言え得るであろう。

漢訳はインドの僧である法天によって「北天竺梵本」よりなされたとされ、大中祥符 8 年（1015 年）に完成したと考えられる『大中祥符法寶録』巻八の中に「[淳化]五年正月...金剛手菩薩降伏一切部多大教王等經三部...」（中華大藏經 No.1675）とあり、これによれば当タントラは淳化五年（994 年）の翻訳である²⁴⁷。この記述に従えば、当タントラの下限は 994 年と言えるであろう。

Bhattacharyy の推測する 7 世紀成立と言うのは現在残る資料から判断するのは難しいであろうが、先に挙げたように、8 世紀後半から 9 世紀頃にかけて Bhūtaḍāmara の名称を備える文献の可能性が指摘され、10 世紀には現行の BBT が存在していたと言えるであろう。また、当文献は Kriyā あるいは Caryā タントラとして見なされ、bhūtinī や yakṣiṇī の修法の典拠として利用されていたと考えられる。

3.1.2 ヒンドゥー教版 *Bhūtaḍāmaratantra* の先行研究と文献的

位置付け

ヒンドゥー教版の文献的位置付けは不鮮明である。それは仏教文献のように、他言語への翻訳あるいはその翻訳史といったものが見られず、下限年代や文献の関係性を設定することが困難であることが一つの要因であると言える。そのため、以下に先行研究の HBT に対する言及と、HBT と他文献との関係性からその文献的位置づけを確認していきたい。

3.1.2.1 HBT の先行研究とテキスト刊本

HBT に関して論じている先行研究としては、BBT と HBT の関係についての論考に先鞭をつけた Bhattacharyya[1933]が挙げられ、これが BT について最も詳細に論じている

²⁴⁷ 法天に関して、例えば、法天が梵学僧と共に開宝七年（974 年）に訳したとされる『七佛讚唄伽他』には「西天中印度摩伽陀國那爛陀寺傳教大師三藏賜紫沙門臣法天奉詔譯」と出る。これによれば法天は那爛陀寺の僧である。また、法天が中天竺の僧であることが『宋会要』、『佛祖統紀』、『続資治通鑑長編』に出ることが報告されている（永井[2015]pp.53-55）。『金剛手菩薩降伏一切部多大教王』の梵本に関しては『大中祥符法寶録』巻八に「上一部北天竺梵本所出」という記述が見られる。また、武内[1976] p.45 および横超[1935] p.294 参照

ものであろう。部分的に HBT に言及するものが Farquhar[1920]あるいは先の Bhattacharyya[1933]を利用した Goudriaan[1981]、そして Pal[1981]などである。

Bhattacharyya[1933]は、Bhūtaḍāmara が尊格名であることや HBT が BBT 起源の文献であることを理由として「ヒンドゥー教における Ḍāmara 文献とは何の関係もない」と述べて、ヒンドゥー教内の 6 つの主要な Ḍāmara 文献を挙げる²⁴⁸。ここで述べられる所の 6 つの Ḍāmara 文献は Śabdakalpādruma 内で引用される Vārāhītantra の記述であるが、これに関しては次章で見ることとする。

Farquhar[1920]においては参考文献の śākta 文献および śākta 仏教文献の項に HBT および BBT を配しており²⁴⁹、Śākta 派との関連を示している。

Goudriaan[1981]は「Bhūtaḍāmara (あるいは Bhūtoḍḍāmara) tantra」として、BT を Bhūtoḍḍāmaratantra と同一視しながら言及し、先の Bhattacharyya[1933]の論文を挙げている²⁵⁰。また、ベンガル語刊本 Brhadbhūtaḍāmara に言及し、このタントラと BT が「同じテキストであるか？」と注釈をつけている²⁵¹が、現在この文献を確認することはできていない。

Pal[1981]は「諸 ḍāmara は Śaiva tantras とみなされるが、それらに関してほとんど知られていない」と述べた上で、「おそらく、ヒンドゥーの Bhūtaḍāmaratantra は 11 から 15 世紀の間に構成されたに違いない」²⁵²と述べる。

BBT のテキスト刊本は未出版であるが、HBT の刊本としては現在確認できるだけでも Caṭṭopādhyāya[2011](初版は 1876 年)、Uttama[2002]、Rāya[2008]、Khaṇḍelavāla[2010]、Tripathi[2014]、そして英訳を含む Mishra[2016]の 6 本が出版されている。これら各刊本は各々依った写本については触れずにテキストを挙げており、それぞれの HBT の説明は簡略である。しかしながら、いくつかの示唆的な指摘があるため、ここでそれを取り上げたい。

Uttama[2002]はその序文において HBT の 15 章に見られる Tantracūḍāmaṇi の語を文献名の Tantracūḍāmaṇi とみなして、HBT がそれ以降の成立だとしている²⁵³。しかしながらこの語が用いられる文脈から考えれば、この語は Bhūtaḍāmara という語を修飾する語

²⁴⁸ Bhattacharyya[1933] p.353, p.353 n.5

²⁴⁹ Farquhar[1920] p.388, 398. この Śākta Buddhism という区分は、Shaw[1994]においても「仏教とシャクティズムの合流は、タントリック仏教が「シャクタ仏教」と当然呼ばれ得るようなものである」(p.33)として挙げられている。

²⁵⁰ Goudriaan[1981] p.118

²⁵¹ Goudriaan[1981] p.119, n.31

²⁵² Pal[1981] p.32 n.8

²⁵³ Uttama[2002]中 Bhūmikā 参照。Benerji[2007]は、文献としての Tantracūḍāmaṇi を Śākta-krama の代わりの題としており (Benerji[2007] p.204)、その Śākta-krama は 1571 年のものであるとする (Benerji[2007] p.191)。

であり文献名を示しているわけではない²⁵⁴。

また、Rāya[2008]の序文で他の BT として挙げられているシヴァとラーヴァナの対話形式の 28 章で構成されるものは、現在 *Bhūtaḍāmaramahātantra* という題で出版されている文献²⁵⁵がその内容に一致するが、Rāya の述べるように今回論ずる所の BBT や HBT とは全く別の文献である。

以上の先行研究の内容から言えることは、Ḍāmara という分類を含めて、HBT のヒンドゥー教内での位置付けが未だ不明瞭であり、また Goudriaan[1981]に言及される所の *Bhūtoḍḍāmaratantra* や *Bṛhadbhūtaḍāmara* といった似通ったタイトルを持つ文献との関連が未だ明らかではないという点である。

3.1.2.2 Ḍāmara 文献と HBT の関係性

この Ḍāmara という語を以て示される特定の文献群は、タントラ研究の先駆けとも言える John Woodroffe(Arthur Avalon)によって「Siddhi-Yāmala、Rudra-Yāmala、Brāhma-Yāmala や Bhūta Ḍāmara、Deva Ḍāmara、Yaksha Ḍāmara のような、あるターントリックシャーストラは Yāmala や Ḍāmara と呼ばれる」²⁵⁶と述べられる。しかし、これが何を典拠としているかは Avalon 自身は述べていない。

一方、Ḍāmara という文献の分類を提示するのは、先に挙げたところの *Śabdakalpadruma*²⁵⁷内の ḍāmara の項に引用される *Vārāhītantra*²⁵⁸であり、この記述を以て yogaḍāmara、śivaḍāmara、durgāḍāmara、sārasvataḍāmara、brahmaḍāmara、gandharvvaḍāmara

²⁵⁴ N1 38b5-38b6 unmattabhairava prāha bhairavī siddhipaddhatim // maṁtracūḍāmaṇau divyamaṁtre smin bhūtaḍāmara //

N2 22b-22b3 unmattabhairavaḥ prāha bhairavīm siddhipaddhatim / taṁtracūḍāmaṇau divyataṁtro smin bhūtaḍāmara //

Bo 52a4-52a5 unmattabhairava prāha bhairavīm siddhipaddhiti iti maṁtracūḍāmaṇau divyataṁtre smin bhūtaḍāmara

Ba 37b5-37b6 unmattabhairava prāha bhairavīm siddhipaddhatim // 21 // taṁtracūḍāmaṇau divyataṁtre smin bhūtaḍāmara //

N3 37b2-37b3 unmattabhairavaḥ prāha bhairavī siddhipaddhatim // taṁtracūḍāmaṇau divyatre 'smin bhūtaḍāmara // //

M p.181 unmattabhairavaḥ prāha bhairavīm siddhipaddhatim / taṁtracūḍāmaṇau divye tantro 'smin bhūtaḍāmara // 6-7 //

「ウンマッタバイラヴァは、タントラの宝石（or マントラの宝石）であり神聖なるタントラであるこのブータダーマラにおいて成就の道をバイラヴィーに説いた」

²⁵⁵ 刊本の Pāṇḍeya[2006]が Śiva と Rāvaṇa の対話形式のものである。また、Rāya のこの言及に関しては Rāya[2008]の Bhūmikā 参照。

²⁵⁶ Avalon[1952] p.86 n.6

²⁵⁷ 1822-1858 の Rādhākāntadeva による skt.-skt.辞書。（中野[1973] p.45 参照）

²⁵⁸ Farquhar[1920]によれば、*Vārāhītantra* は約 16 世紀にベンガルで書かれたものとされる。（Farquhar[1920] p.389）

という 6 *Ḍāmara* の分類²⁵⁹が存在したことが Bhattacharyya[1933]及び Chakravarti[1963]²⁶⁰においても言及される場所である。

また、*Sammohanatantra*（或いは *Sammohatantra*）において、Śaiva、Vaiṣṇava、Saura、Gāṇapatya の各派の文献が提示される中に Śaiva の 3*Ḍāmara* や Vaiṣṇava の 2*Ḍāmara*、Saura の 2*Ḍāmara*、Gāṇapatya の 1*Ḍāmara* として各派に各々 *Ḍāmara* と名付けられる文献が存在することが述べられている²⁶¹。しかしながらここでは具体的な文献名は挙げられておらず、この中に BT が含まれていたかは明らかではない。

以上のように、*Ḍāmara* という言葉によってまとめられる文献群が存在したことが確認できる。*Sammohanatantra* は具体的な文献名を挙げないが、このタントラの解釈では *Ḍāmara* 文献群は特定の宗派に属する文献ではなく各派に共通する文献群であったと言える。ただし、この中に BT が含まれていたかは明らかでない。

また、*Śabdakalpadrūma* 内の *Vārāhītantra* は具体的な *Ḍāmara* 文献名を挙げるが、その名称の中に *Bhūtaḍḍāmara* は見つけられない。以上に挙げた資料からの判断、および Bhattacharyya の言うように HBT の起源が BBT である以上、HBT の成立においてはヒンドゥー教内での以上のような *Ḍāmara* 文献という分類との関わりは認め難い。では、ヒンドゥー教内に組み込まれた *Bhūtaḍḍāmaratantra* はその発展過程においてどのような扱いを受けたのであろうか。これを明らかにするために HBT を引用する、あるいは HBT について言及する文献を挙げて考察を進めたい。

3.1.2.3 BT の文献名を取り上げる例

HBT の引用を行う文献を見ることで、ヒンドゥー教内での HBT の位置付けの大枠を把握することになろう。ここでは、BT の文献名を取り上げる例を見ていきたい。

単に BT の名前を挙げている文献がいくつか存在する。ここではそれら文献を挙げていこう。遅くとも 11 世紀には成立していたと考えられるシュリーヴィドゥヤー派の *Nityāśoḍaśikārṇava* (NŚA)²⁶²内に挙げられる 64 タントラ内では *Bhūtoḍḍāmara* が挙げられる²⁶³。NŚA のこの部分に対する注釈文献には *bhūtoḍḍāmaram iti bhūtoḍḍāmaratantram* と

²⁵⁹ Deva[1967] p.573

²⁶⁰ Chakravarti[1963] p.60 n.4

²⁶¹ この *Sammohanatantra* 中の文献の分類は、Bagchi[1939]p.100, Bagchi[1989] pp.18-19 において挙げられている。以上に挙げられる *Sammohanatantra* が Sdok kak Thom 碑文に描かれる *Sammohana* を指しているとするならば 9 世紀初頭に存在していたと考えられるがそれを確定する証拠は無い。Sdok kak Thom 碑文の記述に関しては Goudriaan[1981] p.21 参照。

²⁶² 井田[2012] p.17, p.223 n.44。一方で、島[2003]はこれを 9～10 世紀頃とする。（島[2003] p.97）

²⁶³ Dviveda p.44, 島[2004] p. 111.

いう読みを備える写本がある一方で、*bhūtaḍāmaram iti bhūtatantram ḍāmaratantram* とする読みも報告されている。即ち、NṢA の *Bhūtoḍḍāmara* の部分を *Bhūtaḍāmara* としていたテキストが存在していた可能性を示している。加えてその注釈は *Bhūtaḍāmara* を *Bhūtaḍāmaratantra* という1つの文献名ではなく *Bhūtatantra* と *Ḍāmaratantra* を指すものと考えていたようである²⁶⁴。

また、先の NṢA 内で 64 タントラの中の一つとしても挙げられている *Kulacūḍāmaṇitantra* (KCT) 内の 64 タントラの列挙の中に *Bhūtaḍāmara* が組み込まれている²⁶⁵。しかし、Avalon[1915]の提示する校訂本の kha 写本はこれを *Bhūtoḍḍāmara* としている。

また、遅くとも 12 世紀に位置付けられるとされる *Kularatnoddṛyā*²⁶⁶ 内に挙げられるタントラ文献の列挙の中に *Bhūtaḍāmara* が挙げられていることが Dyczkowski[1988]に指摘されており、この *Bhūtaḍāmara* が NṢA のタントラリスト中の第 50 番であると述べられている²⁶⁷。

第 3.1.2.1 項で挙げた様に Goudriaan[1981]は論中で *Bhūtaḍāmara* と *Bhūtoḍḍāmara* を同一視していたが、以上に挙げたいくつかの例がこの両タントラを同一視した理由であると思われる。各々の文献内では文献名のみが言及され、列挙される中の BT が HBT であるかは確認する方法が無い。

NṢA 中で言及される *Bhūtoḍḍāmara* や *Bhūtaḍāmara* が現在問題にしている所の HBT であったならば、仏教版の成立後 11 世紀までには HBT が作られていたこととなろう。また、Pal[1981]による時代設定である、HBT が 11 から 15 世紀の間に作られたという推測よりも少し前の時代に設定され得る可能性が提示される。加えて、HBT がシュリーヴィドゥヤー派によって利用された文献であったとも言い得るであろう。

HBT はヒンドゥー教内での展開過程に関し、大きく 2 つの点で重視されたと言える。それは、①マントラの暗号化の法則である *bīja* を説く文献の典拠として、そして

²⁶⁴ Dviveda p.44 n.18 において *bhūtoḍḍāmaram iti bhūtoḍḍāmaratantram* の読みが挙げられる。

²⁶⁵ Finn[1986] p.75, Avalon[1915] p.2

²⁶⁶ 時代設定に関しては Mallinson[2007] p.181 n.95, p.182 n.101

²⁶⁷ Dyczkowski[1988] p.185 n.177

Dyczkowski[1988]においては、他にも *Bhūtaḍāmara* という語に関する記述が挙げられている。*Jayadrathayāmala* 中の関連文献として *Bhūtaḍāmara* の語が出るのが指摘されており、「ここに載る *Bhūtaḍāmara* はおそらく、この名前の呪術と関連する良く知られたものである」と述べられている。(Dyczkowski[1988] p.114, p.199 n.34)

また、*Saundaryalaharī* への注釈の 64 タントラと、NṢA に対する Bhāskara の注釈 (*setubandha*) の 64 タントラ、*Kulacūḍāmaṇitantra* の 64 タントラ及び NṢA の 64 タントラがほぼ同じものであることも同様に指摘されている。(Dyczkowski[1988] p.155 n.248)

②Yakṣiṇīsādhana や Yoginīsādhana といった各 Sādhana の引用元として、である²⁶⁸。①のマントラの暗号化に関しては 3.2.4 項で詳述したい。また②の Yakṣiṇīsādhana などの他文献による引用関係については 3.2.3 項で見ることにする。

3.2 仏教版、ヒンドゥー教版 *Bhūtaḍāmaratantra* の内容比較

3.2.1 *Bhūtaḍāmaratantra* のテキストと構成

BBT 及び HBT の先行研究と各々の文献的位置付けに関して概観した。次に、今回扱った BBT 及び HBT の写本とそのロケーションと文献構成の対照について挙げていきたい。BBT の諸写本の情報については名取[2018a][2018b]に詳細に言及され、ゴル寺の G 写本がその奥書から 12 世紀のものだと特定されている。

BBT と HBT の写本間の関係に関して、吉崎[1981]に指摘されている BBT 中に説かれる Siddhimahāmaṇḍala の構造²⁶⁹との対比から考察しておきたい。吉崎[1981]は BBT 中の東大写本 No.273(T2)では Siddhimahāmaṇḍala の第 4 重が説かれるものの、東大写本 No.274(T1)、漢訳、蔵訳には第 3 重までしか説かれていないことを指摘している。G 写本においても第 4 重の記述は認められず、一方で A 写本には第 4 重が認められる。

HBT の各写本、刊本にも第 4 重の記述が認められないため、今回扱った N1, N2, N3, Bo, Ba 写本は第 4 重が付加される以前の BBT の系統にある文献を元に作成されたと考えられる²⁷⁰。HBT の写本に関しては、N2 写本、Bo 写本、N3 写本が多く共通する読みを備え、N1 写本は固有の読みを有するものであると言える。Ba 写本も N2、Bo、N3 写本と共通の読みを多く備えるが、随所に他写本に認められない固有の付加的な説明の記述が見られる。その中のいくつかは BBT の記述を補足的説明としてそのままに引用しているものであり、後に説明文として BBT から補われたか、このような記述を備えた系統の写本があったものと推定される。この Ba 写本中に認められる BBT からの引用に関しては 3.2.2 項で詳述する。また、BBT が HBT に先行するものであることについては 3.2.2 以降の項で詳述したい。

²⁶⁸ その他にも、HBT からの引用を行っていると推察される記述もいくつか存在する。例えば、*Phetkārīṇītantra* の第 21 章第 4 偈に viṣaṃ ca vajrajvālena hanayugmam ataḥ param / sarvabhūtān tataḥ kūrcaṃ astrānte bhūtamāraṇaṃ // 4 // (Kavirāja[1970] p.300) という暗号化されたマントラが説かれるが、これは HBT 中の viṣaṃ ca vajrajvālena hanayugmam ataḥ param // sarvabhūtān tataḥ kūrcaṃ astrāntaṃ manum īritam // (N1 2a7-2b1, N2 2a2, Bo 2b6-2b7, Ba 2b3-2b4, N3 omit., M p.6) にほぼ一致する。

²⁶⁹ 吉崎[1981] p.887 n.4

²⁷⁰ この HBT 中の maṇḍala の記述に関しては、N1 15a4-16a1, N2 8b11-9a11, N3 12a8-12b7, Bo 19b3-20b7, Ba 17b10-18b7, M pp.64-65

今回扱う各々の諸写本、刊本は以下のものである。

仏教版 BT (BBT)

サンスクリット

- | | |
|----|---|
| G | Bandurski[1994] Xc 14/50, 貝葉, 12 世紀 ²⁷¹ |
| A | A Catalog of Nepalese Manuscripts in the Asha Archives, dp.No.3695 / cd.No.ASK_BL_07, 紙本, Nepal samvat 1052(=A.D. 1932) |
| T1 | Matsunami No.274, 貝葉, Nepal samvat 671(=A.D. 1551) |
| T2 | Matsunami No.273, 紙本, 書写年不詳 |

チベット訳

- | | |
|----|---------------------------------------|
| D | 東北 No.747 |
| P | 大谷 No.404 |
| Ph | Phug Brag No.519 (Samten[1992]参照) |
| sT | sTog Palace No.698 (Skorpski[1985]参照) |

漢訳

大正 No.1129 『佛説金剛手菩薩降伏一切部多大教王經』

ヒンドゥー教版 BT (HBT)

サンスクリット

- | | |
|----|--|
| N1 | NGMCP Catalogue Reel No. B134-12, Inventory No. 11976, 紙本, 書写年不詳 |
| N2 | NGMCP Catalogue Reel No. B135-45, Inventory No. 11975, 紙本, 書写年不詳 |
| N3 | NGMCP Catalogue Reel No. A167-6, Inventory No. 11974, 紙本, Nepal samvat 802(=A.D. 1682) ²⁷² |
| Bo | Descriptive Catalogue of the Government Collections of Manuscripts. deposited at the Bhandarkar Oriental Research Institute No.295, 紙本, samvat 1909 (=A.D. 1852) |

²⁷¹ 名取[2018a]参照

²⁷² N3 のコロフォン (N3 37b5-) には、王 (nrpa) が息子の Bhūpatīndra と弟の Ugramalla を伴ったという旨が記されている。Ugramalla を弟に持ち、息子に Bhūpatīndra を持つ王は Jitāmitramalla 王 (在位 1672-1696) である (佐伯[2003] pp.372-379, p.708)。書写年代を記す部分は、dviśūnyā...に続く後半部分が欠落している。しかし、Jitāmitramalla 王との関連から考えれば、dviśūnyā[ga]であろうと推測され、ネパール samvat の 802 年 (A.D. 1682) であれば、Jitāmitramalla 王の在位期間とも合致する。このコロフォンの解説に関して吉崎一美氏よりご助言を頂いた。記して御礼申し上げます。

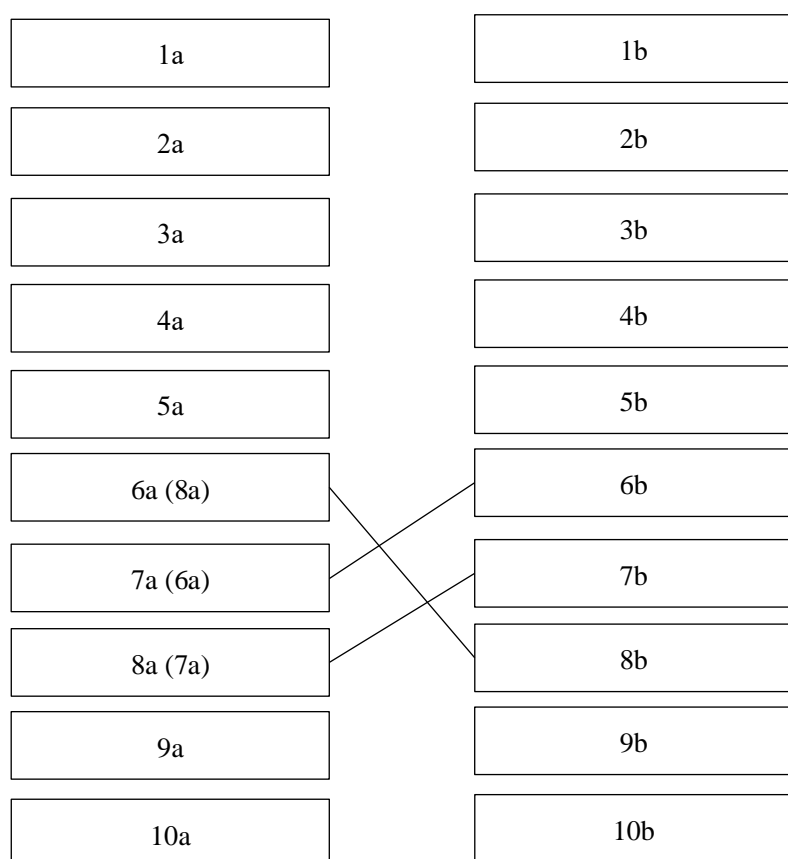
Ba	An Alphabetical List of Manuscripts in the Oriental Institute Baroda. Serial No.528 / Accession No.9168, 紙本, 書写年不詳
刊本	
C	Caṭṭopādhyāya R. M. 2011(2nd ed.). <i>Bhūtaḍāmaratantra</i> . Navabhārata Pāvalīśārsa(1st ed.1876)(Bengali script)
K	Khaṇḍelavāla, S. N. 2010. <i>Bhūtaḍāmaratantra</i> ; <i>hindīvyākhyopetam</i> . Caukhambā surabhārati prakāśan.
M	Mishra, G. R. 2016. <i>Bhūta-ḍāmara tantra</i> . Varanasi: Chaukhamba Surbharati Prakashan.
R	Rāya, K. K. 2008. <i>Bhūtaḍāmara tantram</i> . Prācya prakāśan.
T	Tripathi, H. S. 2014. <i>Bhūtaḍāmaratantram</i> . Varanasi: Chowkhamba Krishnadas Academy.
U	Uttama, A. K. 2002. <i>Bhūtaḍāmaramahātantram</i> . Bhāratiya vidyā saṁsthāna.

以上の内、HBT の刊本に関しては主として M を参照した。他の刊本に関しては、部分的に参照し、参照した際には適宜言及していく。

仏教版の全体的な章分けと、各章に登場する尊格の一覧は既に名取[2018b]に示されている。ここでは、この論文を参照しつつ、仏教版の梵蔵漢テキスト及びヒンドゥー教版の写本、刊本のロケーション対照表を挙げたいと思うが、その前にいくつかの写本データ上の問題点を指摘しておきたい。

仏教版 A 写本は 24b、25a が欠けており、Nepalese Manuscripts in the Asha Archives の CD-ROM データでは、23b、24a の写真の後に 25b、26a のデータが 2 回続けて入っている。おそらく撮影の段階で 24b、25a のフォリオと誤って 25b、26a を撮影し、その後再び 25b、26a を撮影した結果、同じものが二度続けてデータに組み込まれたものと推測される。

仏教版 G 写本は 11a-20a までは撮影された画像と、11b-20b までは撮影された画像が各々 2 枚ずつ撮影されている。また、裏 (b 面/verso) の右端には葉番号が振られており順番通りに撮影されているが、表 (a 面/recto) はその葉番号が無く、1a-10a までの写本の表 (a 面/recto) の順番が錯綜して撮影されている。そのため、上から順に読むだけでは他写本と対応しない。筆者はデータ上で写本を反転させて、裏 (b 面/verso) の形状と対応させ、他写本の記述と対照して確認した。正しい順番に直して裏面と対応させたものが図 3.2.1 である。()内の数字が修正した際の葉番号であり、()の前に付された番号が、実際のデータ上の数字である。



(図 3.2.1 G 写本フォリオ対照)

また、HBT の諸写本にも、写本のフォリオ自体の欠落、あるいは写本の撮影の際にその順序が混乱したまま撮影されたと推察されるものがある。

N1 写本は 37ab が欠落している。

N2 写本は裏 (b 面/verso) の右端にフォリオ番号が記されるが、フォリオによってはその番号が記されていない。撮影された順序を元とすれば、18a→18b→19b→19a→20b→20a→21a→21b→22a→22b という順番に直される。

N3 写本も同様に、正しい順番は、34a→34b→36a→36b→35a→35b→37a→37b という順番である。

以上の問題点を考慮した上で、以下に各々のロケーション対応表を挙げよう。A3 版の利用は「論文提出要領」で認められていないため、文字が小さいが A4 版で提示する。

仏教版(Buddhist Version)											ヒンドゥー版(Hindu Version)						
			サンスクリット写本ロケーション (Sanskrit Mss. Location)				チベット訳ロケーション (Tibetan Translations Location)			漢訳ロケ ーション (Chinese Translation Location)	サンスクリット写本ロケーション (Sanskrit Mss. Location)					刊本 (Publish ed book)	
細 分 番号	章分け (Chapters)	章タイトル (Chapter Title)	A	T2 (東大 写 本 No.27 3)	T1 (東大 写 本 No.27 4)	G	D	P	Ph	大 正 No.1129	章分け (Chapters)	N1	N2	N3	Bo	Ba	M
1	1	aṣṭabhūtarājñī (aṣṭabhūtarājñā) (八大部多女主成就之法)	1b1-	1b1-	1b1-	1b1-	238a1-	32a5-	193a3-	0548c01-	1	1b1-	1b1-	omit.	1b1- 2b5-	1b1- 2b2-	p.1- p.6-
											2	2a7-	2a1-				
											3	4a2-	2b11-	2a4-	5a5-	5a1-	p.14-
2	2	aṣṭaśmaśānapraveśinīmantra (住尸陀林部多女[真言])	12a2-	8a1-	9a1-	4a6-	241b3-	36a4-	198a7-	0550b26-	4	7b5-	4b6-	5b3-	9b7-	10a12 -	p.30-
3		mudrālakṣaṇavidhi	14a2-	9a4-	10a5-	4b5-	242a5-	36b6-	199a4-	omit.	9b1-	5b3-	7a4-	12a4-	11b7-	p.37-	
4		karmapiśācinībhūtinīśādhana (降伏毘舍遮女成就之法)	15a1-	9b6-	11a1-	5a3-	242b1-	37a2-	199b2-	0551a03-	10a2-	5b11-	7b5-	12b7-	12a5-	p.40-	
5	3	aṣṭau bhūtakātyāyanīvidyā (八大迦怛也二合野儼部多女真 言)	16a5-	10b3-	12a1-	5b2-	242b7-	37b2-	200a4-	0551a10-	5	10b5-	6a9-	8a5-	13b3-	14a2-	p.44-
6		aṣṭau bhūtakātyāyanīmudrā (八大迦怛也二合引野儼部多女 印相之法)	17b2-	11a7-	12b5-	*7a1(6a1)-	243a6-	37b8-	200b4-	0551b26-	12a1-	7a5-	9b2-	15b1-	15a12 -	p.49-	
7		aṣṭakātyāyanīśādhana (八大迦怛也二合引野儼部多女 成就之法)	19a2-	12a5-	13b4-	*7a6(6a6)-	243b5-	38a8-	201a7-	0551c15-	12b5-	7b5-	10a6-	16b1-	16a4-	p.53-	
8		ceṭīcetaśasādhana (降伏一切部多僕従成就之法)	22b5-	14b1-	16a4-	7b1-	244b7-	39b3-	203a6-	0552b04-	14b2-	8b2-	11a7-	18b3-	17a11 -	p.60-	
9	4	mahāmaṇḍalavidhi (including maṇḍalapraveśavidhi) (降伏一切部多曼拏羅儀軌)	25b1 ま で omit.	15a6-	17a3-	7b6-	245b1-	40a4-	204a4-	0552b27-	6	14b6-	8b6-	11b3-	19a1-	17b4-	p.62-
10		siddhimaṇḍalavidhi (降伏諸部多觀想成就之法)	28a 上 段 挿 入 部-	17a6-	19a2-	8b5-	246b4-	41a7-	206a1-	0553a21-	16a7-	9b6-	13a5-	21b2-	19a7-	p.70-	

11		mudrālakṣaṇavidhi (including mantravidhi) (降伏諸部多教王印相法)	30b1-	18b4-	20b3-	9b2-	247b2-	42a4-	207a6-	0554a23-		18a7-	10b10-	15a4-	24a6-	21b5-	p.79-
12	5	prathamāsādhanaṇavidhi (降伏部多成就之法)	37a3-	22a5-	25a1-	11a5-	249b2-	44a5-	210a6-	0555b06-							
											7	22a5-	12b11-	18b8-	29b1-	24b1-	p.99-
13	6	kimkarasādhanaṇavidhi (降伏諸部多僕從成就之法)	39a3-	23a6-	26a5-	11b6-	250a4-	44b8-	211a6-	0555c10-		22b6-	13a4-	19b1-	30a4-	24b10-	p.102-
14	7	ceṭṣāsādhanaṇavidhi	42a1-	25a1-	28a3-	12b3-	251a4-	45b8-	212b4-	0556a21-	8	24a1-	13b6-	20b4-	31b6-	25b6-	p.107-
15	8	aṣṭabhūtinīṣādhanaṇavidhi (降伏八部多女成就之法)	44b1-	26b1-	30a2-	13a5-	252a3-	46b7-	214a2-	0556b29-	9	25a2-	14a5-	21b7-	33a5-	26b2-	p.112-
16	9	aṣṭāpsarasāḥ sādhanavidhi (八天女成就之法)	48a3-	28b6-	32b3-	14a5-	253a7-	48a6-	216a2-	0557a21-	10	26b5-	15a1-	23b2-	35a4-	27b7-	p.120-
17		aṣṭāpsaraḥ sādhanavidhi (八天女成就之法)	51b4-	31a6-	35a1-	15b2-	254b5-	49b6-	218a4-	0558a05-		28b7-	16a6-	25b7-	37b8-	29a11-	p.129-
18	10	yakṣiṇīṣādhanaṇavidhi (夜叉女成就之法)	53a4-	32a5-	35b5-	16a1-	255a5-	50a7-	219a2-	0558b06-	11	29b5-	16b5-	26b5-	39a2-	30a5-	p.134-
19		yakṣiṇīṣādhanaṇavidhi (夜叉女成就法)	57a5-	34b6-	39a1-	17a4-	256b4-	51b7-	221a3-	0559b04-		32a6-	18a4-	29a6-	42a6-	31b11-	p.144-
20	11	nāginiṣādhanaṇavidhi (龍女成就之法)	58b5-	35b5-	39b5-	17b3-	257a4-	52a8-	221b8-	0559c10-	12	33a6-	*18b8- 18b12→19b1- 19b12→19a1- 19a13	30b1-	43b3-	32b9-	p.150-
21		nāginiṣādhanaṇavidhi (龍女成就法)	62b2-	38a2-	42a5-	18b4-	258a7-	53b6-	223b6-	0560b21-		35a2-	*19a13→20b1- 20b4	32b2-	46a2-	34a8-	p.160-
22	12	kinnarīṣādhanaṇavidhi (緊曩囉女成就之法)	62b5-	38a6-	42b3-	18b6-	258b2-	53b8-	224a2-	0560c01-	13	35a7-	20b4- 20b12→20a1- 20a10	32b6-	46a7-	34b1-	p.161-
23	13	krodhamāṇḍalavidhi (曼拏囉儀軌)	64a5-	39a4-	43b3-	19a6-	259a3-	54b2-	224b6-	0561a01-	14	*36b3- 36b7→(37ab omit.) →38a1-	*20a10- 20a13→21a1- 21a13→21b1- 21b12	*34a4- 34b8→36a1- 36a8→36b1- 36b8→35a1-	47b7-	35a11-	p.167-
24	14	kimkarasādhanaṇavidhi (僕從成就法)	68a5-	41b6-	46b1-	20b2-	260b2-	56a3-	226b8-	0562a07-	15 (Partially corresponding to Buddhist ver.)	38b3-39b7 (End of Ms. N1)	21b12-22b4 (End of Ms. N2)	*35a6- 35b8→37a1- 37b8	50b3-	36b9-	p.177-
25		siddhisādhanaṇavidhi	71b3-	44b4-	49a5-	21b6-	262a4-	57b8-	228a8-	0562c23-	From here, not corresponding to Buddhist ver.						
26		aṣṭānām bhūtanām mudrālakṣaṇa (八大部多印)	72a4-	45a4-	49b4-	22a3-	262b1-	58a6-	229b4-	0563a04-	16 (Published book has the 16th chapter as Yoginīśādhana)	omit.	omit.	omit.	52a6-	37b7-	p.183-

27	15	sādhana-vidhi (māraṇa-vidhi) (成就法)	73a3-	45b5-	50a5-	22a6-	262b5-	58b2-	230a2-	0563a15-	Mantrakoṣa	omit.	omit.	omit.	53a2- (Colophon is inserted into 57a3-57a4)	38a4-	omit.
28	16	vasi-vidhi? (including the names of 16 śūnyatā)	74b2-	46b4-	51b1-	22b5-	263a4-	59a2-	230b5-	0563b06-							
29		colophon	76b1-	-	52b4-	23a6-	263a7-	59a6-	231a8-	-							

*印＝写本の撮影の順序が錯綜、あるいはフォリオ自体が欠落している箇所。詳細は 3.2.1.参照。

3.2.2 両版の発話者の異同から見る両 BT の成立過程

3.1.2 項で HBT の文献名を取り上げる文献を例示したが、これに加えて、16-18 世紀の間に Vidyāranya によって作られたとされる *Śrīvidyārṇavatāntra* と、16-17 世紀に Kṛṣṇānanda Āgamavāgīśa に編纂されたとされる *Tantrasāra*²⁷³の中に当タントラが引用されていることが Bühnemann[2000]において報告されている。また、Pal[1981]は先の Āgamavāgīśa が BT より多く引用をしていることから、BT は「16 世紀までには権威付けられていた」としている。また、既述のように Pal[1981]は HBT の成立年代を 11-15 世紀としている。しかしながら、この HBT の年代の推定方法は、「*Niṣpannayogāvalī* や *Sādhanaṃālā* といった仏教タントラに説かれる Bhūtaḍāmara が 11 世紀までには既に重要な金剛乗 (vajrayāna) の神であった」²⁷⁴ということを前提として述べられている。即ち、仏教版の成立が先であるという前提による推定である。

以上のように、両版の先行研究で一貫して主張されているのは仏教版がヒンドゥー版に先行するということである。当項では、具体的なテキストを提示して HBT と BBT を対照することで、この説が妥当であるかということを考察したい。この操作によって、タントラにおける仏教とヒンドゥー教の関わり的一端を明らかにすることができると思われる。その方法として、Bhattacharyya[1933]が、「仏教版が先行するものである」とする根拠として例示する中の一つである、ヒンドゥー版の中で「mahādeva が菩薩と呼ばれている」²⁷⁵という一節に加えて、HBT 内で菩薩が記述される部分を挙げたい。この記述に関して氏は一言するのみであり、仏教版との詳細な比較はなしていない。筆者は氏の扱っていた Oriental Institute Baroda の Manuscript Library の写本²⁷⁶も入手することができたため、Nepal National Archives に保存される写本 3 本と Bo 写本、Ba 写本及びいくつかの刊本を基に考察を進めたい。

3.2.2.1 発話者の異同

先ず、各々の特徴を示す前段階として、両版の先の記述箇所を対照して共通点と相違点を挙げていこう。今回の論文で利用した本文の一節に関しては、適宜論中で挙げるが、

²⁷³ この *Tantrasāra* の編纂年代に関しては研究者間でいくつかの説があり、Benerji は 1580 年としており (Benerji[2007] p.208)、Pal は 1590 年頃に編纂された可能性を示している (Pal [1981] p.3)。Goudriaan と Bühnemann はこれを 17 世紀としている (Goudriaan[1981] p.239, Bühnemann[2000] pp.27-28)。

²⁷⁴ Pal[1981] p.32 注 8

²⁷⁵ Bhattacharyya [1933] p.366

²⁷⁶ Nambiyar[1950] p.1368, 1462

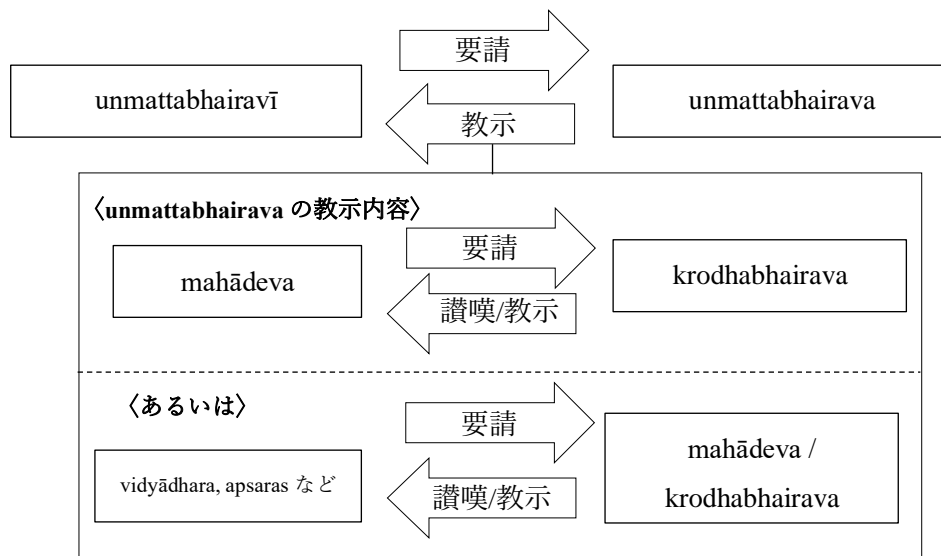
3.2.2 項末にも、3.2.2 参考資料としてまとめて挙げた。

Bhattacharyya[1933]がその論中で言及する HBT の Ba 写本の fol.9 の mahādeva bodhisatvaḥ という記述は、HBT の N1, N2, N3, Bo 写本そして刊本には認められず、Ba 写本に特有の atha ṭikā という記述以下に説かれるものである。この挿入された ṭikā 部分は、それまで説かれてきた韻文の形ではなく散文で記述され、確認した所 BBT 中の記述をほぼそのままの形で引用してきているものであった²⁷⁷。ここから、Ba 写本は BBT を ṭikā と見做して引用しているものと考えられる。先にも述べたように、この部分は HBT の他写本に認められず Ba 写本特有の記述であるため、HBT の他写本あるいは刊本に認められる他の「mahādeva が菩薩と呼ばれる」記述部分について以下に見ていく。

本項末に挙げた部分は、忿怒尊（仏教版では vajradharamahākrodhādhipati, 即ち金剛持または金剛手、ヒンドゥー教版では krodhabhairava）に対して、mahādeva（大天）が敬礼し、教えを請うという場面である。両版でのこの場面における情景描写と対話の内容は、散文と韻文という形式の違いや用いる語の異同はあるが、ほぼ同一のものであり、このタントラが近似していることは明らかである。

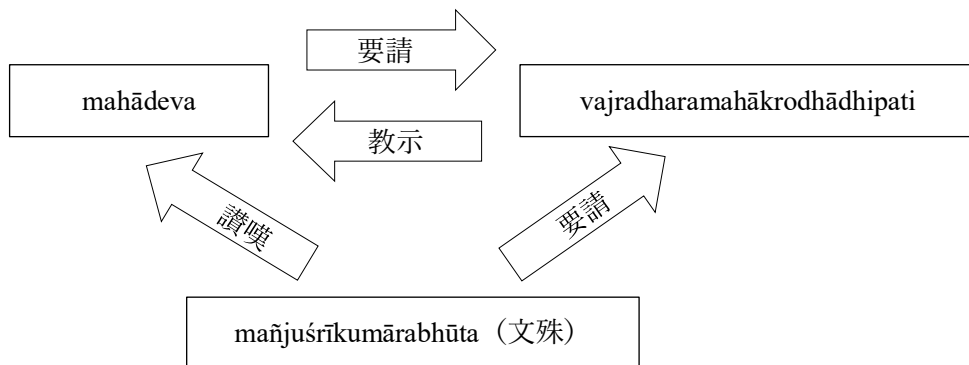
このような共通性の中でも特に興味深いのは、先にも述べた通りヒンドゥー教版の中で、mahādeva に対して讃嘆の言葉「善哉（sādhu）」を与える場面において‘bodhisatva mahādeva’と述べられていることである。ヒンドゥー教の版におけるこの場面の状況としては、unmattabhairavī が unmattabhairava に対し、大マンドラの成就法を説くことを要請し、それに対し unmattabhairava が、krodhabhairava と mahādeva の間での成就法に関する対話を説くというものである。即ち主としてその内容に関わっているのは四者である。あるいは、N3 写本では vidyādhara や apsaras たちが mahādeva である krodhabhairava に成就法を説くことを要請する構造であると言える。（図 3.2.2.1-1 参照）

²⁷⁷ Ba 写本のこの ṭikā 部分は、Ba 8b1-10a11 であり、これに対応する BBT 各写本のロケーションは A 2a4-8a1, T1 2a2-6a5, T2 2a1-6b4, G 1b4-3a5 である。



<図 3.2.2.1-1 ヒンドゥー教版 *Bhūtaḍāmaratantra* に登場する神格の相関図>

では、仏教版でこの場面はどの様に説かれているのであろうか。仏教版でのこの場面は、梵蔵漢共に mahādeva が金剛手に教示を請う場面である。そして、その mahādeva に「善哉(sādhū)」の言葉を発するのは文殊童子大菩薩(mañjuśrīkumārabhūtamahābodhisatva)である。こちらは主たる話者が三者である。(図 3.2.2.1-2 参照)



<図 3.2.2.1-2 仏教版 *Bhūtaḍāmaratantra* に登場する諸尊の相関図>

上記の2つの図からも分かるように、近似する内容を持つものの、登場する話者に変更が加えられ、ヒンドゥー教、仏教各々の教理に合わせられた形になっていると言えよう。当タントラはこのような、各々の文脈に即す形に変化を加えられているが、両宗教に重なる存在として、共通して登場する mahādeva および krodha の語を備える krodhabhairava、そして vajradharamahākrodhādhīpati という尊格を見ることができる。

ここでは両版において類似性を持つ一節を挙げ、その中での「主たる話者」を中心とした相違点を示し、当タントラが双方の教理に沿うような形に整えられた近似するものであることを指摘した。では、このような操作がなされた当タントラがどのような特徴

を有し、どのような方法を以て変容されているかを次に見ていこう。

3.2.2.2 bodhisatva が示す対象

前節と同様に、資料として末尾に挙げた場面を中心に、このタントラの特徴を見ていこう。ここでは、前節で一言した bodhisatva という語を含む箇所から考察を加えてみる。この「菩薩」と漢訳される単語が果たして仏教文献のみに特有のものであるかはより調査が必要であるが、この問題とは別に、この単語が用いられている場所を比較することによって考察を進めていく。先に挙げた箇所では、ヒンドゥー教版、仏教版それぞれ2か所で bodhisatva という語が用いられている。それは以下のものである。

①mahādeva (あるいは vidyādhara たち) が、krodhabhairava あるいは vajradhara に呼びかける場面

②mahādeva (あるいは vidyādhara たち) の要請に対し「善哉」の語を与える場面

以上2点である。上記の①に関しては、仏教版では mahādeva が「[金剛持]大菩薩は...一切秘密のマンダラの成就に関するものを説いて下さい」と請う場面である。また、ヒンドゥー教版では、mahādeva が krodhabhairava に対し「菩薩たるマハーカーラよ...成就[法]を語れ」と請う、あるいは vidyādhara や apsaras たちが krodhabhairava bodhisatva に対し請うものである。

上記②に関しては上述①に続くものであり、仏教版では「文殊童子大菩薩は、ブータの主マハーデーヴァに称賛を与えた。『善哉善哉、マハーデーヴァよ。...』』という記述である。この記述は BBT 写本間でも若干の差異がある。また、ヒンドゥー教版のここに対応する箇所にも、写本間の記述に異なりを見ることができる。HBT 写本 N1 では、*bodhisatva mahādeva sādhvīti* と説かれ、写本 N2, N3, Bo, Ba では *bodhisatvo mahāprājñāḥ sādhu sādhu iti* と説かれ、そして刊本 M, K, U, T, C では *bodhisattvo mahādevaṃ sādhu sādhvīti* と説かれ²⁷⁸、刊本 R では *bodhisatvo mahādeva sādhu sādhu iti* と説かれる²⁷⁹。即ち、この異なりは以下の通りである。

②-1 写本 N1 を採るならば、「菩薩よ、マハーデーヴァよ」となり、マハーデーヴァを菩薩として捉えている。

②-2 写本 N2, N3, Bo, Ba および刊本の記述を採るならば、「大いなる智を備える菩薩は」あるいは「菩薩はマハーデーヴァに」、または「菩薩は、マハーデーヴァよ善哉善哉と...」となり、「善哉」の語を与える者が菩薩であると捉えている。

²⁷⁸ M p.63, K p.31, U p.39, T p.40, C p.32

²⁷⁹ R p.34

上記の②-1 と②-2 それぞれを仏教版の対応する箇所と再度見比べてみよう。
仏教版では

G 写本	<i>atha parṣanmaṇḍale mañjuśrīkumārabhūtaḥ / bodhisatvena mahāsatvena bhūteśvaraṃ mahādevaṃ sādhuḥkāram adāt</i> ²⁸⁰
A 写本	<i>atha parṣatmaṇḍale mañjuśrīkumālabhūtena mahābodhisatvena bhūteśvaramahodevasya sādhuḥkāram adāt</i> ²⁸¹
T1 写本	<i>atha praṣatmaṇḍale mañjuśrīḥ kumārabhūto mahābodhisatvo bhūteśvaramahādevasya sādhuḥkāram adāt</i> ²⁸²
T2 写本	<i>atha parṣamaṇḍale mañjuśrīkumārabhūtena bodhisatvona bhūteśvaramāhādeva sādhuḥkāram adāt</i> ²⁸³

ここは漢訳の記述や、チベット訳の「文殊菩薩がマハーデーヴァに善哉の語を与える」という記述が自然であると考えられるため、*atha parṣanmaṇḍale mañjuśrīkumārabhūto bodhisatvo mahāsatvo bhūteśvaraṃ mahādevaṃ sādhuḥkāram adāt* という形が対話の流れとしては自然であろう。以下にこの記述と HBT 内の記述を対照していきたい。

ヒンドゥー教版②-1 では、

unmattabhairava uvāca // bodhisatva mahādeva sādhuḥvīti pūjayet tataḥ ²⁸⁴

(ウンマッタバイラヴァは言った。「菩薩よ、マハーデーヴァよ。善哉」とそのように[クロダバイラヴァは]敬意を払うべきである)

と説かれており、文殊菩薩の発言が *unmattabhairava* による発言に対応するようになっている。しかしながら、ここまでの話の流れでは、*unmattabhairavī* の要請に対し、*unmattabhairava* が *mahādeva* と *krodhabhairava* の対話を説いており、この場面はその対話の途中である。そのため、ここでの唐突な *unmattabhairava* による発言は不自然である。これは、先の節で述べたところの発話者の変化に由来するものだと考えられる。「発話者たる文殊菩薩の不在」即ち、「善哉」の言葉を発する菩薩を描けない故に *bodhisatva*

²⁸⁰ G 7b5

²⁸¹ A 24a3-24a4

²⁸² T1 17a1-17a2

²⁸³ T2 15a3-15a4

²⁸⁴ N1 15a4

という語が mahādeva に結合しているのだと言えよう。この写本 N1 での混乱は、bodhisatva という語が mahādeva に付加されていることである。

次にヒンドゥー教版②-2 の場合であるが、称賛を与える者が bodhisatva であることは仏教版と同様である。

写本 N2, N3, Bo, Ba では、

bodhisatvo mahāprājñāḥ sādhu sādhv iti pūjayan ²⁸⁵

(大いなる智を備える菩薩は「善哉、善哉」と敬意を払って)

と説かれており、bodhisatva=krodhabhairava である。

また、刊本 M, K, U, T, C では、

bodhisattvo mahādevaṃ sādhu sādhvīti pūjayan ²⁸⁶

(菩薩はマハーデーヴァに「善哉、善哉」と敬意を払って)

と説かれ、先と同様 bodhisatva=krodhabhairava と考えられる。①でも krodhabhairava に対して「菩薩」の語が用いられているので、その使用対象が一致している。

仏教版で「菩薩」と呼ばれているのは金剛持菩薩と文殊菩薩である。また、上述したように、ヒンドゥー教版の②-2 の場面においては bodhisatva=krodhabhairava であり、更にこれを仏教版と対応させれば bodhisatva=krodhabhairava=mañjuśrīkumārabhūta という関係である。この krodhabhairava=mañjuśrīkumārabhūta という図式は、当タントラの引用をしている *Tantrasāra* 内に見ることができる。Pal[1981]は、*Tantrasāra* 中に引用された *Bhairavatantra* および *Kukkūṭeśvaratantra* の一節を挙げて、mañjughoṣa が bhairava と同一視されていることを指摘し²⁸⁷、mañjughoṣa が bhairava としてのシヴァ神と同一視されヒンドゥーパンテオンに組み込まれたとしている²⁸⁸。この記述に依るならば、mañjughoṣa と同一の尊格と考えられる mañjuśrīkumārabhūta が krodhabhairava に置き換えられたのだと言えることができるであろう。

²⁸⁵ N2 8b10, N3 11b8-12a1, Bo 19b2-19b3, Ba 17b9-17b10

N3, Bo 写本のこの箇所は N2 写本に全同である。但し Ba 写本は pūjayet とする。

²⁸⁶ M p.63, K p.31, U p.39, T p.40, C p.32

²⁸⁷ Pal[1981], p.103

²⁸⁸ Pal[1981], p.104

Bhairava と文殊の関連ではないが、シヴァ教タントラが文殊によって説かれたとされる

『文殊師利根本儀軌經』における記述が、Sanderson[2009](p.130)および種村[2013](p.79)において述べられている。

では、②-1 の場合はどうであろうか。これは mañjuśrīkumārabhūta を、同じ bhairava の語を持つ unmattabhairava に置き換えた場合の形であろうと推測される。

これまで述べてきた両版の主たる話者を対照すれば以下のようなになる。

	ヒンドゥー教版	仏教版	
		写本 N1 との対応	写本 N2, Bo, Ba、刊本との対応
1.要請者①	unmattabhairavī	なし	なし
2.説示者①	unmattabhairava	mañjuśrī	なし
3.要請者②	mahādeva (N3 では vidyādhara たち)	mahādeva	mahādeva
4.説示者②	krodhabhairava (N3 では mahādeva である krodhabhairava)	vajradhara	vajradhara および mañjuśrī

このように、写本間において、bodhisatva という語が mahādeva に付加される（写本 N1）、もしくは krodhabhairava に付加される（写本 N2, N3, Bo, Ba、刊本）、あるいはその話者に混乱が見られる原因として挙げられることは、元来仏教タントラで述べられていた mañjuśrīkumārabhūta を bhairava に置き換えたものの、bodhisatva という語を残してしまったためである、ということである。

以上のように、仏教、ヒンドゥー教両版で共通性を持つ箇所を挙げ、その類似点と相違点を挙げた。その文脈中における bodhisatva という語を含む箇所について考察を加え、主として発話者という点から、その内容の変化について考察した。このタントラにおける内容の変化について扱う、あるいはこのタントラの成立の前後関係を考察するには、今回扱った内容では甚だ資料不足ではあるが、その端緒としては今回の内容はある程度有効であろう。即ち、Bhattacharyya[1933]が主張するところの「仏教版が先行する」という説は、「発話者の相違」に由来すると考えられるヒンドゥー版における「文章の混乱」という点から見ても妥当だと言い得るということである。

仮にヒンドゥー教版内における当該箇所の混乱が、仏教版の「文殊童子」という語を置き換えて利用し主たる話者を変えたことに基づくと考えても、なぜ bodhisatva という語を削らなかったのでしょうか、という疑問もまた生じるが、この疑問を解消するにはヒンドゥー文献内における bodhisatva という語の多くの用例を抽出して精査する必要があるため、今回の論文では扱うことができない。

以上、ここでは HBT に見られる bodhisatva の用例と、BBT と HBT の発話者の対照を通じた考察を行った。次に、「発話者」という主題からは外れるが、同様に Bhattacharyya が Ba 写本中に見られる仏教的要素の一つとして取り上げる「Śūnya の瞑想」の記述箇

所を仏教版と対照してみたい。

3.2.2.3 Ba 写本中の Śūnya の瞑想の記述

Bhattacharyya[1933]は、HBT 内の仏教的な特徴として「崇拜者は Śūnya の瞑想をすることさえ勧められる」²⁸⁹として、Śūnya の瞑想の例を提示している。これは Ba 写本の fol.20 の記述であることが示されている。該当箇所を確認した所、先の mahādevobodhisatvaḥ という記述と同様、この記述は Ba 写本に特有のものであり、Ba 写本の *atha maṃtradarśanam āha*²⁹⁰以下の記述は HBT の N1, N2, N3, Bo 写本、刊本には認められない記述であった。仏教版の類似の箇所と対照した所、先の Ba 写本の *ṭikā* 部分と同様に、この部分も BBT を引用した補足的説明部分であると言い得る。以下に該当箇所の HBT と BBT の記述部分を挙げよう。

HBT (Ba 写本)

tatra śiṣyaḥ // oṃ hana 2 vidhvamsaya 2 nāśaya 2 pāpaṃ hūṃ phaṭ // iti pāpanāśanamamṭraḥ // tataḥ samanaṃtaram śūnyam bhāvayet //²⁹¹

BBT (T1, G 写本)

*oṃ hana vidhvamsaya*²⁹² *hūṃ nāśaya pāpaṃ*²⁹³ *hūṃ phaṭ // tataḥ *samanantaram*²⁹⁴ *śūnyam*²⁹⁵ *bhāvayet* //²⁹⁶

この記述は、BBT では T2 及び A 写本には見ることはできず、T1 及び G 写本に認められる。このように、Ba 写本は付加的説明として多くを BBT に依拠し、śūnya や sarvatathāgata といった仏教に特有の術語とも考えられる記述をそのままの形で HBT に組み込んだようである。付加的部分と見做され得るこれら Ba 写本特有の BBT からの引用は、HBT の成立を BBT 起源と見做す証拠としては挙げられにくいものであろう。

以上、Bhattacharyya の指摘した HBT 内の śūnya 瞑想の記述に関して、他写本との比較を通した補足を挙げた。このように、Bhattacharyya が、BBT が HBT に先行すること

²⁸⁹ Bhattacharyya[1933] p.366

²⁹⁰ Ba 20b2

²⁹¹ Ba 20b7-20b8

²⁹² T1 vidhvamsaya

²⁹³ G pāpa

²⁹⁴ Emendation. G samanantara; T1 samanaram

²⁹⁵ T1 śūnya

²⁹⁶ T1 19a4-19a5, G 9a1

を証明するのに使用した Ba 写本の記述には問題点が指摘される。しかし、本項で提示してきた他写本の記述も併せて考えれば、BBT が HBT に先行するという主張は妥当であると言える。

次に、8 ヤクシニーの修法を説く記述部分の BBT と HBT との対照と、他の文献に引用される 8 ヤクシニーの修法の記述の比較を通して、両版の特徴を考察していきたい。

<3.2.2 参考資料テキスト>

① 【仏教版】

①-1 BBT チベット訳

de nas dbang phyug chen po [D 245a4] lha chen po²⁹⁷ rig²⁹⁸ 'dzin²⁹⁹ bye ba du mas
yongs³⁰⁰ su bskor [Ph 203b5] te / lha'i bu mo du ma dang / gnod sbyin dang / klu dang
/³⁰¹ mi'am ci dang / lto [sT 56b1] 'phye chen po³⁰² khri phrag³⁰³ brgya³⁰⁴ stong du ma
dang lhan cig tu³⁰⁵ 'khor gyi dkyil 'khor [P 39b8] chen po der³⁰⁶ [Ph 203b6] dpal rdo rje
'chang³⁰⁷ khro bo'i bdag po chen po la lan gsum³⁰⁸ [D 245a5] bskor ba³⁰⁹ byas te³¹⁰ /
zhabs la mgo³¹¹ bos phyag 'tshal nas³¹² bcom [sT 56b2] ldan 'das la 'di skad ces gsol to
// byang [Ph 203b7] chub sems dpa'⁽³¹³⁻sems dpa'⁻³¹³⁾ chen po rnams la mi phyed³¹⁴ [P
40a1] par bstan pa / kham s gsum pa'i rgyal po⁽³¹⁵⁻chen po⁻³¹⁵⁾ 'byung po dang / klu dang
/³¹⁶ gnod sbyin dang^{/317} [D 245a6][sT 56b3] rig³¹⁸ 'dzin³¹⁹ rnams 'jig³²⁰ par byed pa³²¹

297 Ph po'i
298 Ph rigs /
299 Ph 'jig rten
300 Ph yong
301 P omit.
302 Ph po dang
303 sT omit.
304 sT brgyad
305 Ph tu /
306 Ph der /
307 Ph 'tshang
308 Ph gsum du
309 D pa
310 Ph ste
311 Ph spyi
312 Ph te /
313 Ph omit.
314 Ph phyad
315 Ph chen po chen po
316 P omit.
317 D omit.
318 Ph rigs
319 Ph 'jig rten [Ph 204a1] rten
320 Ph 'jigs
321 Ph dang

/ bgegs ^(Ph omit.) thams cad 'joms pa / sdug bsngal ba dang ^{/322} nyon mongs pa thams [P 40a2] cad sel ba / gdon thams cad dang / ro langs dang ^{/323} lus srul po rnams [sT 56b4] gsod pa³²⁴ / dkyil 'khor gsang chen^{-Ph omit.)} thams cad grub³²⁵ par³²⁶ [D 245a7] byed pa bshad du gsol ^{/327} de nas 'khor gyi dkyil 'khor³²⁸ der gnas pa'i byang chub sems [P 40a3] dpa' sems³²⁹ ^(330-dpa' chen⁻³³⁰) po³³¹ 'jam dpal [sT 56b5] gzhon nur gyur pas³³² 'byung po'i dbang phyug³³³ lha chen po la legs³³⁴ so³³⁵ zhes bya ba byin te³³⁶ legs³³⁷ so legs³³⁸ so // [Ph 204a3] lha chen po³³⁹ ma 'ongs pa'i³⁴⁰ [D 245b1] dus na³⁴¹ 'dzam bu'i gling gi³⁴² mi rnams la [P 40a4] phan pa'i [sT 56b6] don du 'byung po thams cad dang / klu dang ^{/343} gnod sbyin dang / mi'am ci rnams bran [Ph 204a4] mor sgrub³⁴⁴ pa'i thabs khro bo'i bdag po chen pos gsungs shig /

(和訳：それから、大自在たる大天は、一億ほどたくさんの持明者によって普く圍繞されて、多くの天女、ヤクシャ、ナーガ、キンナラ、マホーラガ[などの]10億ほどのものと共に、集会のその大衆において、聖金剛持たる大忿怒主を右邊三匝して、足元に額づいて、世尊にこう請うたのである。「菩薩摩訶薩たちに不壊のものを説いて下さい。三界の大王よ。ブータとナーガとヤクシャと持明者たちを破壊し、一切魔を滅し、苦と一切煩惱を断じ、一切魔鬼と、ヴェーターラと、カタブータナたちを殺す、一切を成就する、大いなる秘密のマンドラを説いて下さい」と。それから、その集会の集まりに居る菩薩摩訶薩たる文殊師利は、ブータの主たる大天に「善哉」という言葉を与えて[次のように言った]、「善哉、善哉、大天よ。未来時に、瞻部州の人々への利益のために、

322 sT omit.

323 P omit.

324 P ba

325 Ph bsgrub

326 P bar

327 Ph //

328 Ph 'khor [Ph 204a2] chen po

329 Ph omit.

330 D dpa+ +en; Ph omit.

331 Ph omit.

332 Ph, sT pas /

333 Ph phyug chen po

334 Ph leg

335 Ph so legs so

336 P, Ph, sT te /

337 Ph leg

338 Ph leg

339 Ph po //

340 Ph pa'i che ma 'ongs pa'i

341 Ph na /

342 Ph gyi

343 P omit.

344 Ph bsgrub

一切ブータと、ナーガと、ヤクシャと、キンナラたちを使いとするための成就法を、大忿怒主は説け」と。)

①-2 BBT 漢訳

爾時自在天。與無數俱胝天人圍繞。復有無數天女龍神緊曩羅摩睺羅伽等在大會中。爾時自在天。即從座起五體投地。禮金剛手大忿怒主足。右繞三匝白菩薩言。復爲我說調伏三界一切部多。及天龍藥叉天人衆等。令生大怖除諸魔障。能殺一切星曜及吠多拏布怛曩。成就祕密曼拏羅法。爾時文殊師利菩薩讚言。善哉善哉自在天。汝能利益未來法末之時。閻浮提內一切衆生。能問菩薩調伏三界諸惡部多。天龍夜叉緊那羅等。成就祕密大曼拏羅法。時金剛手菩薩。即爲説此曼拏羅成就法。³⁴⁵

①-3 BBT サンスクリット

[T2 14b7] atha maheśvaro³⁴⁶ mahādevo³⁴⁷ *(³⁴⁸nekavidyādhara³⁴⁸koṭiparivṛtaḥ /³⁴⁸)
*anekāpsaraḥkinnaranāgamahoragānekaśatasahasraṃ³⁴⁹ tasya [A 23b4] parṣa-[G
7b4]nmaṇḍale³⁵⁰ /³⁵¹ śrīvajradharamahākrodhādhipates³⁵² triḥpradakṣiṇīkṛtya³⁵³ pāda
śīrasābhivanditvā³⁵⁴ [A 23b5] bhagavantam etad avocat³⁵⁵ /³⁵⁶
bhāṣayatu³⁵⁷ [T2 15a2] mahābodhisatvo³⁵⁸ *'pratihatāsādhanasya³⁵⁹ traidhātukama-[A
24a1]hārājasya³⁶⁰ sarvabhūtanāgayakṣavidyādharabhayaṅkarasya³⁶¹ sarva-[G 7b5]vi-
[T2 15a3]ghnavināyakaduḥkhakle-[A 24a2]śa-[T1 17a1]nāśanasya³⁶²

³⁴⁵ 大正 No.1129 552b17-552b28

³⁴⁶ T2 maheśvara

³⁴⁷ T2 mādādevā

³⁴⁸ Emend. A 'nekavidyādhara³⁴⁸koṭiparivṛtāṃ; T1 'nekavidyādhara³⁴⁸koṭiparivṛtāṃ; T2 anekavidyādhana;
G anekavidyādhara³⁴⁸koṭiparivṛtaḥ /

³⁴⁹ Emend. A sapa-[A 23b3]rivārān anekāpsarayajanāgakinnaramahoragān anekaniyutaśatasahasrān;
T1 anekāpsavānyakṣanāgakinnaramahoragān ekaniyutasata-[T1 16b4]sahasra; T2
yakṣanāgakinnaramahoragān anekaniyutasatasahasrān; G anekāpsaraḥkinnaranāgamahoraga
anekaśatasahasraṃ

³⁵⁰ A parṣatmaṇḍale, T1 parṣatmaṇḍale; T2 parṣa-[T2 15a1]maṇḍalam;

³⁵¹ A, T1, T2 omit.

³⁵² T1, T2 -patis; G -pataiḥ /

³⁵³ A tripradajīṇīkṛtya; T1, T2 tripradakṣiṇīkṛtya

³⁵⁴ A, T1 śīrasā vanditvā; T2 śīrasā vanditvā

³⁵⁵ A, G -cata

³⁵⁶ A //; T2 :

³⁵⁷ T1 bhā-[T1 16b5]śante; A, T2 bhāṣate

³⁵⁸ G mahāmo bodhisatvo

³⁵⁹ Emend. A, T1 'pratihatāsāsanasya; T2 apratihatasāsanasya; G apratihatasādhanasya

³⁶⁰ T2 traidhātukamāhārājasya

³⁶¹ A sarvabhūtanāgayajavidyādharānām bhayaṅkarasya; T2 sarvabhūtanāgayakṣavidyādharānām
bhayakarasya

³⁶² A sarvva-vināśanasya; T1 sarvva-kleśanāśanasya /; T2 -vināśanasya

sarvagrahavetāḍakaṭapūtanādimāraṇasya³⁶³ (364- maṇḍalaṃ rahasyaṃ sarvasādhanaṣya³⁶⁴) [A 24a3] /³⁶⁵

atha parśanmaṇḍale³⁶⁶ *mañjuśrīkumārabhūto³⁶⁷ mahābodhisatvo³⁶⁸ (369- bhūteśvaraṃ mahādevaṃ³⁶⁹) sā-[A 24a4]dhukāram³⁷⁰ adāt /³⁷¹ sādhu sādhu³⁷² mahādeva³⁷³ paścime³⁷⁴ kāle³⁷⁵ paścime³⁷⁶ samaye jambudvīpakā-[G 7b6]nāṃ³⁷⁷ (378- manuṣyāṇāṃ hitārthāya³⁷⁸)

sarvabhūtanāgakinnaṛayakṣacetīśādhanaṃ³⁷⁹ (380- mahākrodhādhipatir vadatu maṃtramudrāsādhanaṃ vidhivistaratantraḥ // 7 //³⁸⁰)

(和訳：さて、非常に多くの持明者に囲まれた大自在たる大天は、10 万程多くのアプサラス、キンナラ、ナーガ、マホーラガのいるその衆会の集まりにおいて、聖金剛持大忿怒主を右邊三匝して、[金剛持の] 両足に頭で敬礼して、世尊にこう言った。「大菩薩は、不壊の成就法の、三界の大王の、一切ブータ、ナーガ、ヤクシャ、持明者たちを恐怖させる、一切障礙、ヴィナーヤカ、苦、煩惱を破壊する、一切魔鬼、ヴェーターラ、カタプータナなどを殺害する、一切成就の秘密のマンダラを説いて下さい」と。それから、衆会の集まりにおいて、文殊童子大菩薩は、ブータの主マハーデーヴァに称賛を与えた。「善哉、善哉。マハーデーヴァよ。後の世、後の時代における、瞻部州の人々の利益のために、一切ブータ、ナーガ、キンナラ、ヤクシャを使いとする成就法を、偉

³⁶³ Emend. A sarvagrahavetāḍukaṭapūtanādimāraṇasya; T1 sarvva-katapūtanamāraṇasya; T2 – pūtanāgādimāraṇasya; G omit. 漢訳の記述に従い、A, T1, T2 写本の記述を採った。

³⁶⁴ A sarvvarahasyamaṇḍalasādhanaṃsyā; T1 maṇḍalarahasyaṃ sarvvasādhanaṣya; T2 sarvvarahasyamaṇḍalasādhanaṣya

³⁶⁵ A //; T2 :

³⁶⁶ A parśatmaṇḍale; T1 praśatmaṇḍale; T2 parśama-[T2 15a4]ṇḍale

³⁶⁷ Emend. A mañjuśrīkumālabhūtena; T1 mañjuśrīḥ kumārabhūto; T2 mañjuśrīkumārabhūtena; G mañjuśrīkumārabhūtaḥ /

³⁶⁸ A mahābodhisatvena; T2 bhodhisatvona; G bodhisatvena mahāsatvena

³⁶⁹ A bhūteśvaramahodevasya; T1 bhūteśvaramahā-[T1 17a2]devasya; T2 bhūteśvaramahādeva

³⁷⁰ T2 sādhaḥkām

³⁷¹ A //; T1, T2: omit.

³⁷² A, T2 2

³⁷³ T2 mādādeva

³⁷⁴ T1, T2 paścima

³⁷⁵ A kale

³⁷⁶ T1, T2 paścima

³⁷⁷ A jāmbudvīpakānāṃ; T1 jāmbudvīpakā; T2 jāmbudvīpakā-[T2 15a5]nā

³⁷⁸ A, T2 manu-[A 24a5]śyānāhitārthāya

³⁷⁹ A sarvabhūtanāgayaḥ kinnaṛavetīśādhanaṃ vaktum; T1 sarvabhūtanāgayaḥ kṣa-[T1 17a3]kinnaṛacetīśādhanaṃ vadatu; T2 sarvabhūtanāgayaḥ kṣa kinnaṛacetīśādhanaṃ vaktu

³⁸⁰ A mahākrodhādhipatamaṇḍala-[A 25b1 まで omit.]; T1

mahākrodhādhipatimaṇḍalamudrāvidhīśādhanaṃ vistaratantraḥ // 7 //; T2

mahākrodhādhipatimaṇḍalamudrāvidhīśādhanaṃ vi-[T2 15a6]stāmantra idaṃ // //

大なる忿怒主は説け」と。マントラ、ムドラー、成就法の儀軌の広大なるタン
トラ。)

② 【ヒンドゥー教版】

(³⁸³-unmattabhairavy³⁸¹ uvāca //³⁸² -³⁸³)
*(³⁸⁴-surarāja jagadvandya⁻³⁸⁴) jagatām³⁸⁵ upakāraka³⁸⁶ /³⁸⁷
śrīmahāmaṇḍa-[N1 14b7][Ba 17b5]lam³⁸⁸ brūhi *sarvasiddhividhāyakam³⁸⁹ /³⁹⁰
(³⁹¹-unmattabhairava uvāca /⁻³⁹¹)
[N3 11b5] *vidyādharaṣaroyakṣapretagandharvakinnaraiḥ³⁹² /³⁹³
maho-[Ba 17b6]ragaiḥ³⁹⁴ parivṛto³⁹⁵ (³⁹⁶-mahādevas trilo-[Bo 19a4]canaḥ⁻³⁹⁶) /³⁹⁷
krodham³⁹⁸ [N1 15a1] pradakṣiṇī-[N3 11b6]kṛtya³⁹⁹ namaskṛtya punaḥ punaḥ /⁴⁰⁰
pādaḥ [N2 8b8] śiro vidhāyātha⁴⁰¹ bhā-[Bo 19a5]ṣate *krodhabhairavam⁴⁰² /⁴⁰³

³⁸¹ N1 unmattabhaiva; N2 bhairavy; Bo unmattabhairavī

³⁸² N2 /

³⁸³ M omit.

³⁸⁴ Emend. N1, Bo, Ba surāsurajagadvandya; N2 surarāja [N2 8b6] jagadvandya; N3 surarāja [N3 11b4] jagatvannya; M surāsurajagadvandya

³⁸⁵ Bo jagadām

³⁸⁶ N1 upakārakā; Bo u-[Bo 19a2]pakārakaḥ

³⁸⁷ N1, Bo, Ba //

³⁸⁸ N2 mahāmaṇḍalakam; Bo śrīmahāmaṇḍalam

³⁸⁹ Emend. N1 sarvasiddhipradāyakam; N2 sarvasiddhividhāyakam; Bo sarvasiddhipradāyakam; Ba sarvasiddhipradāyaka; M sarvasiddhipradāyakam

³⁹⁰ N1, Bo //; Ba, M // 1 //; N3 // //

³⁹¹ N1, M omit.

ここはウンマッタバイラヴィーとウンマッタバイラヴァの間での対話であるため、この文は必要であろう。

³⁹² Emend. N1 vidyādharaṣaroyakṣapretagandharvakinnaraiḥ; N2 vidyādharaṣaroyakṣa-[N2 8b7]pretagandharvakinnarāḥ; Bo vi-[Bo 19a3]dyādharaṣaroyakṣapretagandharvakinnarāḥ; Ba vidyādharaṣarau cakṣapretagandharvakinnarāḥ; N3 vidyādharaṣaroyakṣapretagandharvakinnarāḥ; M vidyādhara 'psaroyakṣapretagandharvakinnaraiḥ

³⁹³ N1, N2, Bo, Ba //

³⁹⁴ N1 mahoragai

³⁹⁵ N3 parivṛtā

³⁹⁶ N1 mahādevātrilocanam; N3 mahādevam trilocanam

BBT の記述に近いものとして、mahādeva を主語とする N2, Bo, Ba, M の記述を採った。

³⁹⁷ N1, Bo //; Ba // 2 //

³⁹⁸ N1 krodham

³⁹⁹ Bo pradakṣiṇa // kṛtya; N2 pradakṣiṇīkṛtya+

⁴⁰⁰ N1, Ba //; Bo omit.

⁴⁰¹ N1, N2, Bo, Ba ni-[Ba 17b7]dhāyātha

⁴⁰² Emend. N1 krodhabhairavam; N2 krodhabhūpatim; Bo, Ba krodhabhūpatih; N3 krodhabhairavam; M krodhabhūpatim

⁴⁰³ N1, Bo //; Ba // 3 //; N3 // //

bodhisatvamahākāla⁴⁰⁴ duṣṭagrahavimardaka⁴⁰⁵ /⁴⁰⁶
 *kaṭapūtanavetālasarvagrahavighāta⁴⁰⁷ /⁴⁰⁸
⁴⁰⁹ paścime [Bo 19b1] samaye⁴¹⁰ kā-[N1 15a3]le⁴¹¹ jambūdvīpe⁴¹² kalau yuge [Ba 17b9][N3 11b8] /⁴¹³
 martyānām upakārāya⁴¹⁴ duṣṭadurjananigrahaṃ⁴¹⁵ /⁴¹⁶
 bhūtinīyakṣiṇīnā-[N2 8b10]gakanyakāsādhanaṃ⁴¹⁷ vada /⁴¹⁸
 bo-[Ba 17b10]dhisatvo⁴¹⁹ mahā-[N3 12a1]prājñah⁴²⁰ (421- sādhu sādhv iti⁴²¹) pūjayan⁴²² /⁴²³

(和訳：ウンマッタバイラヴィーは言った。「神の王よ、世界の称賛を受ける者よ。諸世界の利益を与える者よ。一切成就を与える聖大マンダラを語れ」と。ウンマッタバイラヴァは言った。「持明者、アプサラス、ヤクシャ、プレータ、ガンダルヴァ、キンナラたちによって、マホーラガたちによって囲まれた三眼を持つ持明者マハーデーヴァ（大天）は、クロード[バイラヴァ]を右邊して、何度も敬礼し、[彼の]両足に頭を置いてから、クロードバイラヴァに言うのである⁴²⁴。「菩薩たるマハーカーラよ。悪を捕え破壊する者よ。カタプータナやヴ

⁴⁰⁴ N3 bodhisatvaṃ mahākāla; M krodhīsa tvam

⁴⁰⁵ N1 duṣṭagra-[N1 15a2]havimarddaka; Bo, Ba duṣṭagrahavimardakaḥ; N3 duṣṭagrahavimardakaḥ; M mahābhūtaḥ duṣṭagrahavimardaka

⁴⁰⁶ N1, Bo, Ba //

⁴⁰⁷ Emend. N1 kaṭapūtanavetālakleśavighnavighātaḥ; N2 kuṭhabhūtanivetālasarvagrahavighā-[N2:8b9]taka; Bo katham pūjanave-[Bo 19a6]tālasarvagrahavighātaḥ; Ba kaṭapūjanavetālasarva-[Ba 17b8]grahavidhātaḥ; N3 kaṭapūtanavetālasarvagrahavighātaḥ ; M kaṭapūtanavetālakleśavighnavighāta

⁴⁰⁸ N1, Bo //; Ba // 4 //; N3 //

⁴⁰⁹ N1 add. prasīda devadeveśasamsārṇavatārakaḥ //; Bo add. prasidda devadeveśasamsārṇavatārakaḥ //; Ba add. prasīda devadeveśasamsārṇavatāraka //; M add. prasīda devadeveśasamsārṇavatāraka /

⁴¹⁰ Bo samaya

⁴¹¹ M prāpte

⁴¹² N1, N2, Bo jambūdvīpe; Ba jabhūdīpe

⁴¹³ N1 //; Ba // 5 //

⁴¹⁴ M upakārārtham

⁴¹⁵ N1 duṣṭadurjanavigrahaṃ; N2, Bo, Ba duṣṭadurjananigrahaṃ; N3 duṣṭadurjjananigrahaṃ

⁴¹⁶ N1, N2, Ba //; Bo omit.

⁴¹⁷ N1 -yakṣanī-; Bo bhūti-[Bo 19b2]nīyakṣiṇīnāgakanyakā / sādhanam

⁴¹⁸ N1 // //; Bo /; Ba // 6 //

⁴¹⁹ N1 bodhisatva; M bodhisattvo

⁴²⁰ N1 mahādeva; M mahādevam

⁴²¹ N1 sādhvīti; M sādhu sādhvīti

⁴²² N1 pūjayet tataḥ; Ba pūjayet

⁴²³ N1, Bo, Ba //

⁴²⁴ N3 写本では、vidyādhara や apsaras たちが mahādeva に言葉を発するという形になっているが、bhāṣate という sg.形の動詞が用いられている。そのため、ここでは vidyādhara などによって囲まれた mahādeva が krodhabhairava に言葉を発するという読みを採った。

エーターラ一切を捕え撃退する者よ。後のカリユガの時代、瞻部州における人々の利益のために、悪と悪人を捕える[そのような]、ブーティニー（ブータ女）、ヤクシニー（ヤクシャ女）、ナーガカンニャー（蛇の少女）の成就[法]を語れ」と。大いなる智を備える菩薩（クロードバイラヴァ）は「善哉善哉」と敬意を払って...後略...）

3.2.3 8 ヤクシニーの修法

3.2.3.1 BT の *Yakṣiṇīsādhana* と他文献の *Yakṣiṇīsādhana*

先の 3.1.2.3 項で言及したように、HBT は *Yakṣiṇīsādhana* や *Yoginīsādhana* といった各 *Sādhana* の引用元として利用された形跡を見ることができ、これが HBT の特徴の一つであると言える。各 *Sādhana* の引用元の例としては、16-17 世紀の人と考えられている *Āgamavāgīśa* による *Tantrasāra*⁴²⁵ が BT 内の *Yoginīsādhana* を引用しており⁴²⁶、その内容は HBT 中の *Yoginīsādhana* とほぼ一致する。同様に、同時代の *Brahmānanda Giri* による *Śāktānandatarāṅgiṇī* 中にも BT が引用される⁴²⁷が、この引用は現在のところ BT 本文中には見ることができない。

また、Dehejia[1986]⁴²⁸や、それを引用した Mcdaniel[2004]⁴²⁹に言及されるところの Kaula 派の *Uddīśatantra* (UT)内の *Yakṣiṇīsādhana* に関して Dehejia[1986]は、これが BT から派生した *Yoginīsādhana* と同じ形式を備えるとする。

Goudriaan[1981]によれば、この UT は多くの別名を持つ文献であり、*Uddīśa* 群とも呼ばれる種々のヴァージョンを備える文献である⁴³⁰。多くのヴァージョンの中の 1 つが

⁴²⁵ 注 273 参照

⁴²⁶ Dehejia[1986] p.221 n.87 に一言される。HBT 内の *Yoginīsādhana* は Mishra[2016] pp.183-207。写本 N1、N2 には欠。*Tantrasāra* のロケーションは Śrīvāstava[2007] vol.2 pp.70-83, Rai[1985] pp.331-335。

⁴²⁷ Rai[1993] p.183. BT が *Tantrasāra* と *Śāktānandatarāṅgiṇī* に引用されることは Banerji[1992] p.278, Kapoor[2002] p.408 においても言及される。

⁴²⁸ Dehejia[1986] p.36, p.221 n.87

⁴²⁹ Mcdaniel[2004] p.84

⁴³⁰ Goudriaan[1981]によれば、この UT は多くのエディションが存在し「文献学者たちにとって困難な例」の文献として紹介される。また、UT は *Rāvaṇoḍḍīśa*、*Vīrabhadra Tantra* あるいは *Uddāmaratantra* といった別の名前で呼ばれ、*Uddīśa* 群という枠組みに収められる。Goudriaan[1981]はそれを以下のように分類している。1. *Uddāmara* あるいは *Uddāmareśvara Tantra*、別名 *Mantracintāmaṇi*。2. *Uddīśatantra*、別名 *Rāvaṇoḍḍīśa*。3. *Vīrabhadra Tantra*、別名 *Mantrakośa*。3a. *Uddīśavīrabhadra*。4. *Indrajit* による *Kriyoḍḍīśatantra*。(Goudriaan[1981])

Uḍḍāmara あるいは *Uḍḍāmareśvara tantra* (別名 *Mantracintāmaṇi*) (UDT)であり、この文献の刊本としては Zadoo による *Uḍḍāmareśvara tantra* が利用可能である。この UDT 中に 8Yakṣiṇī の sādhanā が説かれている⁴³¹。

この UDT と BT の Yakṣiṇīsādhana は非常に似通っているが、Zadoo 本には Yakṣiṇīsādhana の引用元が記述されておらず、その引用関係と相互の貸借関係は判断できない。一方、Bhandarkar Oriental Research Institute (BORI)の写本図書館に保存される UDT の写本 B36 及び B39⁴³²の記述によれば、これが *Bhūtabhairavatantra* からの引用であることが明記されている⁴³³。

この *Bhūtabhairavatantra* という文献名に関して挙げられる可能性は以下の 2 点である。①Yakṣiṇīsādhana を説く *Bhūtabhairavatantra* という文献が存在した、あるいは②引用元としての BT の別名が *Bhūtabhairavatantra* であった、という二つである。それを確認するために UDT 内の Yakṣiṇīsādhana と BBT 及び HBT 内の Yakṣiṇīsādhana を対照していこう。

3.2.3.2 BBT, HBT, UDT 内の Yakṣiṇīsādhana の記述

ここでは BBT、HBT 及び UDT 間で相互に類似している Yakṣiṇīsādhana の記述を対照させる。8Yakṣiṇī の名前はそれぞれ①Surasundarī ②Manohārī(Manohārīṇī) ③Kanakavatī ④Kāmeśvarī ⑤Ratipriyā(Ratikārī) ⑥Padminī ⑦Naṭī ⑧Anurāgiṇī である。

Zadoo による UDT と BORI の写本図書館に保管される 2 つの写本は語の異同や内容の増減がある。顕著な異なりとしては、BORI の 2 写本では最初に 8Yakṣiṇī のマントラがまとめて述べられた後に各サーダナの詳細が説かれるのに対し、Zadoo 本では各サーダナの冒頭部分に対応する Yakṣiṇī のマントラが描かれており、整備された形を採っている。BBT、HBT、Zadoo 本 UDT そして BORI の 2 つの写本の各々の Yakṣiṇī の sādhanā の細かい記述内容に異同は存在するが、各 sādhanā の構成はほぼ同じである。特に着目すべきは、各 Yakṣiṇī の sādhanā を修する場についての記述である。例えば、BBT における Surasundarī-Yakṣiṇī の修法場所は Vajrapāṇigṛha であり、これは HBT、UDT にも共有されている。以下が各々の記述である。

pp.119-参照)

⁴³¹ UDT 内には他にも 36Yakṣiṇī に関する記述が存在する。Yamano[2013]は、この UDT の 36Yakṣiṇī の記述と *Kakṣapuṭatantra* 内の記述がパラレルな関係にあることを指摘している。

⁴³² Sharma[1976]はカタログ中でこれら B36、B39 写本に対して、「それは奥書に基づいて *Uḍḍāmaratantra* と誤って呼ばれる」と述べ、写本タイトルを *Uḍḍīśatantra* と修正した上でカタログに載せている。(Sharma[1976] pp.45-50)

⁴³³ B36 32a3-32a4. iti śrībhūtabhairave mahātāmtre yakṣiṇīsādhanam //
B39 26b3-26b4. iti śrībhūtabhairave mahātāmtre yakṣiṇīsādhanapaṭalam

BBT⁴³⁴

vajrapānigrhe⁴³⁵ gatvā gugguludhūpaṃ⁴³⁶ datvā trisaṃdhyāṃ⁴³⁷ sahasraṃ⁴³⁸ japet /⁴³⁹

HBT⁴⁴⁰

vajrapānigrham gatvā datvā⁴⁴¹ dhūpaṃ⁴⁴² ca guggulaṃ⁴⁴³ /⁴⁴⁴
(⁴⁴⁵-japet trisaṃdhyāṃ⁴⁴⁵) *māsānta⁴⁴⁶ āyāti⁴⁴⁷ surasundarī⁴⁴⁸ /⁴⁴⁹

UḍT (Zadoo)⁴⁵⁰

vajrapānigrham gatvā gugguladhūpaṃ dattvā trisaṃdhyāṃ pūjayet, sahasraṃ trisaṃdhyāṃ
māsaparyantaṃ japet

UḍT (2Mss. in BORI)⁴⁵¹

vajrapānigrham⁴⁵² gatvā guggulena⁴⁵³ dhūpaṃ datvā trisaṃdhyāṃ japet (⁴⁵⁴-sahasraṃ ca
japet //⁴⁵⁴)

そして、BBT 内の Padminī-Yakṣiṇī の修法では、svagrha（自分の家）の śiraṣsthāna（写本 A 及び写本 T2 では śirasthāna）にチャンダナでマンダラを作成することが説かれる。この śiraṣsthāna の記述部分は、チベット訳では rang gi khyim du mgo'i gnas su と説かれ、漢訳においては「於自本舍臥床頭邊」（自らの本舍の臥する床の頭邊に）⁴⁵⁵と説かれる。

⁴³⁴ A 53b5-54a1, T1 36a4, T2 32b3-32b4, G 16a3-16a4

⁴³⁵ A, T1 vajrapānigrham; T2 vajrapānigrham

⁴³⁶ A gurggulīdhupaṃ; T1 guggulīdhūpaṃ; T2 gurggurudhūpa

⁴³⁷ T2 trisaṃ-[T2 32b4]dhyā; G trisaṃdhyāṃ

⁴³⁸ T2 omit.

⁴³⁹ A //; T2 omit.

⁴⁴⁰ N1 30b1-30b2, N2 17a3-17a4, Bo 40a1-40a2, Ba 30b5-30b6, N3 27a8-27b1, M p.136

⁴⁴¹ N1, N3 omit.; M dattvā

⁴⁴² N1, N2, Bo, Ba dhūpaṃ

⁴⁴³ N1 gurggulaṃ dahet; N2 guggulumaṃ; N3 gulgulumaṃ illeg.; M guggulumaṃ

⁴⁴⁴ N1 //; Bo, N3 omit.; Ba // 13 //

⁴⁴⁵ N1 japetrisaṃdhyāṃ; N2 japet trisaṃdhyā; Bo, Ba japet trisaṃdhyāṃ

⁴⁴⁶ Emend. N1, N3, M māsānte; N2 māṃsāṃpte; Bo, Ba māsāṃpte

⁴⁴⁷ N1 mā-[N1 30b2]yānte māyānti; M hyāyāti

⁴⁴⁸ N2, Bo, Ba surasumaṃ-[Ba 30b6]darī

⁴⁴⁹ N1, Ba //; Bo omit.

⁴⁵⁰ Zadoo[1947] p.34

⁴⁵¹ B36 29b3-B36b4, B39 25b4

⁴⁵² B39 vajrapānīgrahaṃ

⁴⁵³ B39 gugālena

⁴⁵⁴ B39 omit.

⁴⁵⁵ T No.1129 559a13

しかし、現在確認することのできる HBT の写本⁴⁵⁶、刊本全て⁴⁵⁷がこの箇所を śiraḥsthāna ではなく śivasthāna と説いている。以下が該当の記述部分である。

BBT⁴⁵⁸

svagrhe śiraḥsthāne⁴⁵⁹ candanena⁴⁶⁰ maṇḍalakaṃ kṛtvā

HBT⁴⁶¹

*svagrhe vā śivasthāne maṇḍalaṃ⁴⁶² candanātmakam⁴⁶³ /⁴⁶⁴
kṛtvā⁴⁶⁵ gugguludhūpaṃ⁴⁶⁶ ca⁴⁶⁷ dattvābhyarcya⁴⁶⁸ vidhānataḥ⁴⁶⁹ /⁴⁷⁰*

UDT (Zadoo)⁴⁷¹

svagrhe candanena maṇḍalaṃ kṛtvā śiraḥstham kārayet

UDT (2Mss. in BORI)⁴⁷²

svagrhe candanena⁴⁷³ maṇḍalaṃ⁴⁷⁴ kṛtvā svaśiraḥsthā kāmayet⁴⁷⁵ //

また śiraḥsthāna は BBT 中の 8 Kātyāyanī の成就法部分でも挙げられているため、以下にその部分を挙げる。

*saptame divase^(476-nityam āgacchati / aṣṭame divase⁻⁴⁷⁶) *śiraḥsthāne⁴⁷⁷ maṇḍalakaṃ⁴⁷⁸*

⁴⁵⁶ N1 31b4, N2 17b7, Bo 41b1-41b2, Ba 31a12, N3 28b3

⁴⁵⁷ M p.141, C p.70, K p.68, R p.74, U p.90

⁴⁵⁸ A 56a3, T1 38a2, T2 34a2-34a3, G 16b5

⁴⁵⁹ A, T2 śiraḥsthāne

⁴⁶⁰ T2 candanena

⁴⁶¹ N1 31b4, N2 17b7-17b8, Bo 41b1-41b2, Ba 31a12-31b1, N3 28b3-28b4, M .141

⁴⁶² N1, Bo, Ba maṇḍalaṃ; N2 maṇḍala

⁴⁶³ N1 candanārthakaṃ; N2, Bo, Ba candanātmakaṃ

⁴⁶⁴ N1, N3 //; Bo omit.; Ba // 34 //

⁴⁶⁵ N1 mudrā

⁴⁶⁶ N1 gugguludhūpaṃ; N2, Bo gugguludhūpaṃ; Ba gugguladhūpaṃ; N3 gulgulūṃ dhūpaṃ

⁴⁶⁷ Bo caṃ

⁴⁶⁸ M dattvābhyarcya

⁴⁶⁹ Ba yathāvidhiḥ

⁴⁷⁰ N1, Ba //; Bo omit.

⁴⁷¹ Zadoo[1947] p.35

⁴⁷² B36 31a3-31a4, B39 26a6

⁴⁷³ B36, B39 caṃda-[B36 31a4]nena

⁴⁷⁴ B36, B39 maṇḍalaṃ

⁴⁷⁵ B39 kāmayāt

⁴⁷⁶ A, T1, T2 omit.

⁴⁷⁷ Emendation. G śiraḥsthānena; A, T1 śiraḥsthā-[T1 13a6]ne; T2 śi-[T2 15a2]raḥsthāna

⁴⁷⁸ T1 maṇḍalaṃ

*kṛtvā gugguludhūpaṃ*⁴⁷⁹ *dattvāṣṭasahasraṃ*⁴⁸⁰ *japet*⁴⁸¹

この部分のチベット訳は *de bzhin du [sT 55a6] nyi ma brgyad pa la sngas [D 244a7] su maṇḍala*⁴⁸² *byas la gu gul gyi bdug*⁴⁸³ *pa byin te*⁴⁸⁴ であり、śiraḥsthāna は sngas (枕) という語を以て訳されている。また、漢訳は先と同様「於自臥床頭邊」(自らの臥する床の頭邊に)⁴⁸⁵である。これらの例から考えれば、この śiraḥsthāna は寝所の頭が置かれる場所(即ち枕のある場所)を指すと言えよう。この箇所 HBT の記述も同様に śivasthāna と説かれる⁴⁸⁶。

HBT が BBT を利用する際に śiraḥsthāna 或いは śirasthāna の記述を故意に śivasthāna に修正した可能性が挙げられるが、写し間違えたものが流布した可能性も否定できない。

ここで、Zadoo 本 UDT そして BORI の 2 写本中で Padminī の修法に対応する部分を見てみれば、校訂本では śiraḥsthaṃ と説かれ、BORI の 2 つの写本では svaśirasthā と説かれている。

HBT が韻文であるのに対し、Zadoo 本 UDT そして BORI の UDT の 2 写本が散文であることや、先の例のように、BBT の記述に対応する śiraḥsthāna という語が用いられることから、Zadoo 本 UDT そして BORI の 2 写本が BBT 由来の Yakṣiṇīsādhana を利用したものであると推測される。しかしながら、BBT と UDT の記述が完全に一致するわけではない。そのため、UDT が依った文献として BBT の Yakṣiṇīsādhana を用いた文献 X の存在が想定される。そして、BORI の 2 写本が引用元として挙げる *Bhūtabhairavatantra* とは、この文献 X の名称であると仮定される。

BBT がヒンドゥー教に受け入れられた過程には 2 つの流れがあると考えられる。1 つの流れとしては Yakṣiṇīsādhana を引用した UDT に連なる流れである。UDT 自体は Īśvara と Pārvatī の対話形式のタントラであり、ヒンドゥータントラである。そのため、筆者はこの UDT 中に説かれる Yakṣiṇīsādhana は HBT からの引用であると仮説を立てていたが、既に述べたようにこれは HBT からの直接の引用ではなく、BBT 由来の Yakṣiṇīsādhana を利用したものである可能性が示される。

そしてもう 1 つの流れが、登場する尊格名の変更やマントラの暗号化といった操作を行った HBT を利用する流れである。

BT は仏教、ヒンドゥー教内で同じタイトルを伴って存在するタントラであるが、こ

⁴⁷⁹ A, T1 gurggurudhūpaṃ; T2 gugguludhūpaṃ

⁴⁸⁰ A, G datvā a-[A 20b5]ṣṭasahasraṃ; T1 datvā aṣṭasahasraṃ; T2 datvā ṣṭasahasraṃ

⁴⁸¹ G 6b6, A 20b4, T1 15a1-15a2, T2 13a5-13a6

⁴⁸² P ma ṇa ḍa la

⁴⁸³ Ph gdug

⁴⁸⁴ D 244a6-244a7, P 39a2, Ph 202a7, sT 55a5-55a6

⁴⁸⁵ T No.1129 552a10

⁴⁸⁶ N1 13b4, N2 Bo Ba N3 omit., M pp.56-57

の文献が引用される際当然のことながら「仏教版の *Bhūtaḍāmaratantra* からの引用」あるいは「ヒンドゥー教版の *Bhūtaḍāmaratantra* からの引用」とは言及されず、単に「*Bhūtaḍāmara* からの引用」と述べられるのみであり、それが BBT を指すのか HBT を指すのかを明らかにするのは困難を伴うものである。特に 3.1.2.3 項で挙げたように、内容が引用されずに *Bhūtaḍāmara* という文献名のみが言及される場合、引用している文献がヒンドゥーに属するものであれば HBT についての言及であろうと推測するに留まる。

一方で、次項の 3.2.4 項で挙げる例の様に、HBT に特徴的なマントラの暗号化という要素に関わる引用はヒンドゥー教版を利用したものと言い得る。また、引用が長い場合は BBT と HBT を対照させることで、仏教版とヒンドゥー教版どちらからの引用なのかを判断することが可能である。

上述の様に、HBT は後世いくつかの文献によって引用元として言及されてきた。またヒンドゥータントラの UḍT 中の *Yakṣiṇīsādhana* の引用元として仮設される文献 X が HBT ではなく BBT からの派生形であることを考えれば、この *Yakṣiṇīsādhana* が仏教とヒンドゥー教で共有され得るものであったと言える。

BBT、HBT 中の *Yakṣiṇīsādhana* の章（BBT では 10 章、HBT では 11 章に該当する）の対照テキスト、和訳、BBT の漢訳チベット語訳の対照テキストに関しては第 II 部に提示した。

次に、HBT のもう一つの大きな特徴である、マントラの暗号に関して言及していきたい。

3.2.4 マントラの暗号化

タントラ文献がその秘匿性を保つ方法としては *sandhyā-bhāṣā* (あるいは *sandhā-bhāṣā*) という隠語の機能を備えた密意語 (あるいは、たそがれの言葉、含みをもった言葉) という術語が挙げられる⁴⁸⁷。またタントラ仏教文献で、ある単語が特殊な意味合いで用い

⁴⁸⁷ Eliade[1958]によって *saṃdhā-bhāṣya* や *saṃdhā-vacana* という語が『法華経』中に見られることが示され、この述語に対するいくつかの先行研究が挙げられている。また、*Dohākoṣa* 内のいくつかの対応単語が列挙されている (Eliade[1958] pp.249-254, 『エリアーデ著作集 第十巻』 pp.76-77)。また Bharati[1965](pp.164-180)では *sandhābhāṣā* と *sandhyābhāṣā* に関する議論が提示され、pp.174-175 には HT 中のいくつかの *sandhā-bhāṣā* の対応単語 (Bharati はこれらを「*sandhā* 用語 (*sandhā-terminology*)」と呼んでいるようである)、pp. 175-176 には *Dohākoṣa* などの対応単語が挙げられる。加えて、Wayman[1968] pp.794-795 や Davidson[2002] pp.263 にも HT 中の単語が挙げられている。

られる文脈が存在し⁴⁸⁸、暗号の様に用いられる語が見受けられる。

以上の様な方法以外にタントラ仏教の秘匿性を守るものとして、マントラの暗号化とその解説の法則を含む *mantroddhāra* が挙げられる⁴⁸⁹。これは特定の語や図形を用いてマントラを暗号化、観想する法則も含み、類似の方法はヒンドゥータントラ文献に多く認められる。

mantroddhāra に関わる暗号化に関しては Avalon による *Tantrābhidhāna* の出版や、Padoux[2011]、Raghu vira と Taki による、種々のタントラ文献からの引用によって構成された *Uddhārakośa* (Vira[1938]) の記述⁴⁹⁰、*Hevajratantra* 内の *mantroddhāra* を扱った酒井[1955]や頼富[1977]による研究、*Vaiṣṇava* の伝統における *mantroddhāra* の研究である Tokunaga[1990]、*Sātvatasamhitā* を中心とした *mantroddhāra* を提示する引田[1997]、*Sarvabuddhasamāyogatantra* と Śaiva の *Vīṇāśikhatantra* 中の図形を用いたマントラの暗号化を扱った苦米地[2007]による研究などが挙げられる。

本項では、仏教タントラ内の *mantroddhāra* の例として先行研究に頻繁に取り上げられる *Hevajratantra* (HT) 内の暗号化の法則とヒンドゥー教版 *Bhūtaḍāmaratantra* (HBT) のマントラの暗号化の法則を提示し、HBT の暗号化の特徴を明らかにすることを目的とする。仏教版 *Bhūtaḍāmaratantra* (BBT) では、HBT に見られるようなマントラの暗号化はなされておらず、マントラはそのままの形で記述される。そのため、BBT 内のマントラと、それに対応する HBT のマントラを対照することで、HBT がいかに BBT のマントラを取り入れているかも考察する。

3.2.4.1 *Hevajratantra* におけるマントラの暗号化

HT 中の 2-9-14 偈からマントラの暗号化の法則が説かれる。デーヴィーが金剛手に対して「マントラの抽出 (*mantroddhāra*) がどのようなものであるか説明して下さい」⁴⁹¹と

⁴⁸⁸ 例えば *mudrā* という語が女性パートナーを指すと考えられるような文脈が存在する (HT 1-5-4 (Snellgrove[1959] part.1 p.16)や Wedemeyer p.440 に見ることができる)。

⁴⁸⁹ Snellgrove[1959] part.1 p.117 に、HT 中のマントラの暗号化の法則が略述されている。また酒井[1955]、頼富[1977]にも HT 中の法則が挙げられる。加えて Bharati[1965]は各種字に対応する主要な単語を提示している (p.119)。

HBT 中にも *mantroddhāra* という語が出るが、ウンマッタバイラヴァが「*mantroddhāra* を詳説しよう。正しく聞きなさい」(*mantroddhāraṃ pravakṣyāmi yathāvad avadhāraya* / (N1 4a4, N2 3a2-3a3, Bo 5a7-5b1, Ba 5a3-5a4, N3 2a6, M p.15)) と述べた後には、暗号化された *Kulasundarī* のマントラが述べられるのみである。そのため、HBT 中の *mantroddhāra* の定義は不明瞭である。また、BBT 中にはこれに対応する文は見られない。

⁴⁹⁰ appendix 8 に単語と種字の一覧が提示される。(Vira[1938] pp.93-108)

⁴⁹¹ Snellgrove[1959], Fallow[1992] 2-9-14.

質問を行い、金剛手はこれに答える。この応答は HT のテキストを見るだけでは全く意味の分からないものであるが、注釈の *Yogaratanmālā* を見ればこの部分はマントラが暗号化されたものであると理解できる。

Hevajratantra 中のマントラの暗号化の方法あるいは解読の方法には大きく 2 つの方法があると言える。それは①単語と音の対応と、②各文字の指定方法である。この 2 つの方法を組み合わせて暗号化がなされ、また解読がなされる。また、これらの方法を用いずに、*hūṃ-kāra* や *ghu-kāra* と直接に文字が述べられる箇所もあるため、全てが暗号化の法則によって説かれるわけではない。

テキスト中には述べられていないが、この 2 つの法則を詳細に見てみれば、基本的には母音や聖音 *om* を指定する時は①の方法、子音を指定する時は②の方法が用いられていることが分かる。

この暗号化に関わる章節は *Hevajratantra* では 1 か所にまとめられているわけではなく、いくつかの章に点在して説かれている。1-2 章の暗号化されずに示される各マントラは 2-9-14 偈以下で暗号化されたマントラにほぼ一致する。また、2-4-20~23 偈で説かれる各女尊と各母音の対応関係が 2-9-14 章中のマントラの暗号を解読するのに必要となるものとなっている。

この暗号化されたマントラの着目すべき点は、マントラの各文字が明確に示されている点にある。マントラで多く混用される *hum* と *hūṃ* 字は明らかに区別されて説かれており、全てのマントラに用いられる *hum* 或いは *hūṃ* をどちらかに統一できるものではないと言えよう。

3.2.4.2 単語と種字の対応（母音の指定）

以下に①の単語と種字の対応関係に関する対照表を挙げた。母音あるいは *om* 字、*am* 字、アヌスヴァーラは、尊格名や *sūnya* といった単語で言い換えられている。

種字	対応単語、尊格名	HT ロケーション (Snellgrove[1959]に従う)	YM ロケーション (Snellgrove[1959])
om	vairocanaṃ	2-9-16	p.157
		2-9-19	-
		2-9-23	-
		2-9-28	-
		2-9-30	-
		2-9-32	-
		2-9-34	-
		2-9-35	-
		2-9-36	-
		2-9-37	-
	varṇādhīpaṃ	2-9-17	p.157
	(vedānām ādimam)	2-9-18	p.157

	varṇeśvaram	2-9-20	p.157
	varṇajyeṣṭam ⁴⁹²	2-9-21	p.157
	(mohakulam)	2-9-22	-
a	nairātmyā	2-4-20	p.147
	nairātmyā <nairātmā>	2-9-34	p.157
ā	vajrā	2-4-20	p.147
		2-9-32	p.157
		2-9-36	p.157
		2-9-37	-
i	gaurī	2-4-20	p.147
	vārī ⁴⁹³	2-9-19	p.157
	abhyantaragaurī	2-9-30	p.157
ī	vāriyoginī	2-4-20	p.147
u	ḍākinī	2-9-20	p.157
	vajraḍākinī <vajraḍākī>	2-4-21	p.147
		2-9-23	p.157
		2-9-24	-
		2-9-29	-
		2-9-33	-
ū	pukkasī	2-4-21	p.147
		2-9-16	p.157
		2-9-27 ⁴⁹⁴	p.157
r	śavarī	2-4-21	p.147
ṛ	caṇḍālī	2-4-21	p.147
l	ḍombinī	2-4-22	p.147
ī	gaurī (dvipaṇcaka と表現される)	2-4-22	p.147
e	caurī	2-4-22	p.147
		2-9-25	p.157
		2-9-26	-
		2-9-33	p.157
ai	vetālī	2-4-22	p.147
		2-9-32	p.157
o	ghasmarī	2-4-23	p.147
	(ghasmarī)	2-9-28	-
		2-9-32	-
au	bhūcarī	2-4-23	p.147
aṃ	khecarīm <khecari>	2-4-23	p.147
		2-9-17 ⁴⁹⁵	p.157
r (repha)	vahni	2-9-31	p.157

⁴⁹² varṇajyeṣṭham (Fallow[1992] p.280) こちらを採用すべきであろう。

⁴⁹³ YM ではこれを i に対応させているが、gaurī が i であるため、ī のミスであろう。HT 2-9-19 ではこれを i とした場合 jriṃ となるが、HT 1-2-15 のマントラでは jriṃ となっている。また、HT 2-4-20~30 偈では vāriyoginī が ī に対応させられている。これらから考えても ī に対応すると考えるのが妥当である。

⁴⁹⁴ Snellgrove は Pukkāsī とするが、Fallow の Pukkaśī が正であろう。

⁴⁹⁵ khecarīm (Fallow[1992] p.279)

ṁ		2-9-37	-
	hutāśana	2-9-32	p.157
	śūnya	2-9-16	p.157
		2-9-18	-
		2-9-19	-
		2-9-20	-
		2-9-27	-
		2-9-29	-
		2-9-33	-

*表中の（ ）は、YM 中でその種字との対応が明確には示されていないものである。しかしながら、HT 2-9 章で暗号化されたマントラは HT 1-2 章に挙げられるマントラとよく対応するため、（ ）内に HT 1-2 章内に説かれるマントラからの推測による単語を挿入した。Snellgrove[1959]による HT と YM で記述が異なるものは< >内に YM の記述を記した。

3.2.4.3 各文字の指定方法（子音の指定）

子音の指定方法は、以下の表を用いれば、行→列の順で文字が指定される。例えば、prathamasya dvitīyakam と記される場合は第 1 行目の第 2 列目を指し、kha を指定している。同様に dvitīyasya tṛtīyakam は第 2 行目の第 3 列目を指し ja を指定していることになる。また、歯擦音 (śa, ṣa, sa) と気音 (ha) は uṣman として言及され、uṣmāṇāṇ ca caturthakam と説かれる場合、uṣman 行の第 4 列目の ha を指定している。

また、同じ種字の繰り返しの場合、triguṇita や dviguṇīkṛtya といった形でその倍数が示される (hūṁ 字の triguṇita の場合は hūṁ hūṁ hūṁ となる)。以上が HT の暗号化の法則である。

	prathama / agraka	dvitīyaka	tṛtīyaka	caturthaka	pañcamaka
prathamasya	ka	kha	ga	gha	ña
dvitīyasya	ca	cha	ja	jha	ña
tṛtīyasya	ṭa	ṭha	ḍa	ḍha	ṇa
caturthasya	ta	tha	da	dha	na
pañcamasya	pa	pha	ba	bha	ma
anthastha (半母音)	ya	ra	la	va	
uṣman (歯擦音+気音)	śa	ṣa	sa	ha	

3.2.4.4 ヒンドゥー教版 *Bhūtaḍāmaratantra* におけるマ

ントラの暗号化の法則

BBT でそのままに示されるマントラが HBT 中で暗号化されている事象に関しては、既に 3.1.2 で指摘したところであるが、以下にそのマントラの暗号化の詳細について述べよう。

HBT の Bo 写本及び Bhattacharyya が先行研究において使用していた Ba 写本⁴⁹⁶は、最後の章として Mantrakoṣa (Manukoṣa)という章を備えている。この章は HBT の N1, N2, N3 写本には見る事ができず、BBT にも対応する章は存在しない。この章は、Tāntrik Text series の *Tantrābhidhāna*⁴⁹⁷としてまとめられた書籍中で *Bījanighaṇṭu* というタイトルで引用され、Bo 写本、Ba 写本とほぼ対応した内容である。この Mantrakoṣa は *Bhūtaḍāmaratantra* 及び *Yakṣaḍāmaratantra* 中の Mantrakoṣa であると言及され⁴⁹⁸、HBT のみでなく *Yakṣaḍāmaratantra* にも類似のものが存在した可能性を示している。

当該章は3つのパートから構成されていると言える。それは各々異なった対応単語を提示している。それぞれのパートは更に3つの内容から構成される。構成としては、①母音それぞれに対応する単語が列挙され、その後②子音に対応する単語が列挙される。その後に、③それぞれの対応単語を用いて種字を提示して、それに対応する単語を挙げる。即ち①と②の単語を利用して、各尊格の種字が提示されているのである。以下がその全体像である。

HBT における Mantrakoṣa の構成

- 1st part
 - ① 母音対応列挙
 - ② 子音対応列挙
 - ③ 種字を暗号化した上で、その対応の列挙
- 2nd part
 - ① 母音対応列挙
 - ② 子音対応列挙
 - ③ 種字を暗号化した上で、その対応の列挙
- 3rd part
 - ①-1 母音対応列挙
 - ①-2 母音対応列挙

⁴⁹⁶ Bhattacharyya[1933]

⁴⁹⁷ Avalon[1937]

⁴⁹⁸ mantrakoṣam idaṃ bhūtayakṣaḍāmaratantrayoḥ (Avalon[1937] p.34)
mantrakoṣam idaṃ bhūtayakṣaḍāmaratamtrayoḥ (Ba 41a10-41a11)
mantrakoṣam idaṃ tu bhūtayakṣaḍāramamtramtrayoḥ (Bo 58b7-58b8)

② 子音対応列挙

③ 暗号化した種字の提示

以上の3つのパートを①母音対応列挙、②子音対応列挙、そして③種字を暗号化した上でのその対応の列挙という点から以下に暗号化の詳細を見ていこう。

3.2.4.5 母音対応列挙

①の母音対応列挙では a, ā, i, ī, u, ū, ṛ, ṛī, ḷ, ḷī, e, ai, o, au, aṃ, aḥ のそれぞれの文字に対応する単語が列挙されるのみであり、複雑な過程は見いだせない。1st part 及び 3rd part では一つの母音に一つの単語が割り当てられるが、2nd part では基本的には3つの単語が割り当てられる。刊本、Bo、Ba 写本の各々の母音に対応する単語の表を項末に（表 3.2.4-1）として提示した。

3.2.4.6 子音対応列挙

②の子音対応列挙では ka, kha, ga, gha, ṇa, ca, cha, ja, jha, ṇa, ṭa, ṭha, ḍa, ḍha, ṇa, ta, tha, da, dha, na, pa, pha, ba, bha, ma, ya, ra, la, va, śa, ṣa, sa, ha, kṣa に対応する単語の列挙であり、1st part、2nd part、3rd part において一つの子音に一つの単語が割り当てられている。3rd part では kṣa に対応する単語の後に halī あるいは hanī という単語が追加されているが、これに対応する音が何かは現在の所不明である。刊本、Bo、Ba 写本の各々の子音に対応する単語の表を項末（表 3.2.4-2）として提示した。

3.2.4.7 種字を暗号化した上でのその対応の列挙

以上の母音と子音の対応単語を利用して om̐, hūṃ, phaṭ や śrīm̐ といった種字がどのような単語に対応するのかを説いているのが、③の過程である。上記の母音と子音の列挙と比べて若干複雑なものとなっている。ここで 1st part 中の一例を見てみよう。

*caṇḍīśaḥ kṣatajārūḍho*⁴⁹⁹ *dhūmrabhairavyalaṅkṛtaḥ*⁵⁰⁰ ⁵⁰¹
*nādabim̐dusamāyuktaṃ*⁵⁰² *bījaṃ viṣṇupriyātmakam̐*⁵⁰³ (504-// śrīm̐ //⁵⁰⁴)⁵⁰⁵

⁴⁹⁹ Bo latajārūḍho

⁵⁰⁰ Bo dhūmrabhairavyalaṅkṛtaḥ, Ba dhūmrabhairavalaṅkṛt

⁵⁰¹ Bo omit., Ba // 9 //

⁵⁰² Avalon[1937] nādabindusamāyukto

⁵⁰³ Ba omit., Avalon[1937] viṣṇupriyā matam

⁵⁰⁴ Bo śrīm̐, Ba omit.

⁵⁰⁵ Bo 53b7-54a1, Ba 38a12-38b1, Avalon[1937] p.28

「Caṇḍīśa(=śa)が Kṣataja(=ra)の上に乗り、Dhūmrabhairavī(=ī)に飾られ、
Nāḍabindu(=ṁ)と結びついている種字(=śrīm)は、ヴィシュヌの愛する者を本質と
するもの(viṣṇupriyātmaka)である。」

以上の様に、母音と子音の対応単語を用いて śrīm を示して、それに対応する単語
viṣṇupriyātmaka を提示している。刊本、Ba 写本、Bo 写本には各種字の説明の後に対応
する種字が記述されるが、説明文とその種字が対応しないことも多い。

また、①母音と②子音の対応単語の列挙の中で言及されなかった単語が用いられるこ
ともある。この点に関して、似通った言葉の言い換えが同一の文字を示すものとして使
用されていた可能性を指摘し得る。例として、1st part 中の hūṁ を示す種字の説明を見
てみよう。

(刊本) *vidārīyuktam vyomāsyam rudrarākinyalaṅkṛtam*⁵⁰⁶

(写本 Bo) *vidārīyuktam abhrāṁsyam rudraḍākinyalaṅkṛtam*⁵⁰⁷

以上の暗号を母音と子音の対応単語に当てはめれば、刊本は vidārī=ū、rudrarākini=am で
ある。対応文字表では ha は vyoma-vaktra であるが、ここでは vyoma-āsyā となっている。
vaktra も āsyā も共に face の意味を持つため、言い換えられて ha の意味を持つものとし
て使用されていると言える。

また、写本 Bo では、vidārī=ū、rudraḍākini=am である。そして ha は abhrāṁsyā となっ
ているが、これは abhrāsyā の誤りであろう。ha を示す vyomavaktra が vyoman (sky) と
vaktra (face) に分解されるように、abhrāsyā も abhra (sky) と āsyā (face) に分解され
る。この様に、ある単語は同様の意味合いを持つ別の単語に入れ替えられて使用されて
いたと言える。

また、母音、子音の列挙で用いられた対応に無い文字が用いられることがままある。
例えば pha を示すものは、列挙では karālāgni あるいは pralayāgni であるが、種字 sphem
の説明では pha として kālāgni (刊本)、kālagni (写本 Bo) あるいは vikālāgni (写本 Ba)
が用いられる⁵⁰⁸。

それぞれの種字に対応する単語が項末の (表 3.2.4-3) として提示した表である⁵⁰⁹。

⁵⁰⁶ Avalon[1937] p.28

⁵⁰⁷ Bo 54a3-54a4. 写本 Ba は *vidārīyuktam annāsyam hadgaḍākinyalaṅkṛtam* (Ba 38b2) となっ
ているが、かなりの誤写を伴っていると言える。

⁵⁰⁸ Bo 54b5, Ba 38b12

⁵⁰⁹ これら種字に割り当てられる単語がどのような理由から選定されたかについては不明
な点が多い。しかし、例えば phaṭ という音に対して astra の語が対応することに関して、
phaṭ 自体が攻撃的な意味合いを含むものであり astrabīja と呼ばれることが Bharati[1965]

以上の様な種字に対応する単語を以て、HBT 中のマントラは暗号化されて説かれている。以下に HBT 本文中の暗号化されたマントラを見ていこう。

3.2.4.8 HBT 本文中で暗号化されたマントラ

以上に提示してきた法則を以て、HBT 中のマントラは暗号化されている。BBT 及び、HBT の対応するマントラをいくつか挙げて、この暗号化が HBT 本文中でいかに扱われているかを見ていこう。

先ず、BBT 中で *sarvabhūtamāraṇamantra* と呼ばれるマントラを挙げよう。

<サンスクリット>

*oṃ vajrajvāle hana 2 sarvabhūtān hūṃ phaṭ*⁵¹⁰

「オーム 金剛焰よ 殺せ 殺せ 一切ブータたちを フーム パット」

<漢訳>

唵^引 嚩日羅入嚩^{二合引}隸^去 賀曩 賀曩 薩哩嚩^{二合}部旦^引 吽 發吒^{半音}⁵¹¹

このマントラは HBT において以下のように示される。

*viṣaṃ ca*⁵¹² *vajrajvālena*⁵¹³ (⁵¹⁴*hanayugmam ataḥ*⁵¹⁴) *param*⁵¹⁵ //⁵¹⁶
*sarvabhūtān*⁵¹⁷ *tataḥ*⁵¹⁸ (⁵¹⁹*kūrcam astrāntam*⁵¹⁹) *manum īritam*⁵²⁰ //⁵²¹

「*viṣa*(=*oṃ*)、*vajrajvālena*、次に、一対の *hana* を、
それから、*sarvabhūtān*、*kūrcā*(=*hūṃ*)、*astrā*(=*phaṭ*)で終わるのが呪であると言われる」

p.116 において指摘される。この様な、ある一定の法則を以て単語が種字に割り当てられていたと考えられる。

⁵¹⁰ A 2a1, T1 1b5, T2 1b6, G 1b3

⁵¹¹ T No.1129 548c24-548c25

⁵¹² M *oṃ*

⁵¹³ N2 *vajrajvālena*

⁵¹⁴ N2 *halaṃ yugmam ataḥ*, Ba *hanayugma tataḥ*, M *hanayugmam tataḥ*

⁵¹⁵ N1, N2, Bo, Ba *param*

⁵¹⁶ M /

⁵¹⁷ N1 *sarvabhūtān*

⁵¹⁸ Ba *ataḥ*

⁵¹⁹ N1 *kūrcamamtrāntam*, N2 *kūrcam astrānta*, Bo *kūrccam astrāntam*, Ba *kūrcam astrāntam*, M *kūrccam astrāntam*

⁵²⁰ N1, N2, Bo, Ba *īritam*

⁵²¹ Ba // 2 //

N1 2a7-2b1, N2 2a2, Bo 2b6, Ba 2b3-2b4, N3 omit., M p.6

以上の hana-yugmam は「一对の hana という語を」という意味で取るべきだろう。これを並べ直せば、om vajrajvālena hana hana sarvabhūtān hūṃ phaṭ となり、先の BBT のマントラとほぼ一致するのが分かる。

次に別の例を挙げよう。以下は BBT 中の śmaśānavāsini-ākaraṣṇamantra である。

<サンスクリット>

om [T2 8a3] hūṃ kaṭṭa⁵²² [T1 9a3] 2⁵²³ [G 4b1] sarvabhūtīnām⁵²⁴ samayaṃ⁵²⁵
anupālaya⁵²⁶ [A 12a5] hana 2⁵²⁷ *bandha⁵²⁸ 2^(529-ākrama 2-529) bho bho
mahāraudraśmaśānavāsini⁵³⁰ āgaccha śī-[T1 9a4]ghraṃ⁵³¹ dhruṃ⁵³² phaṭ //⁵³³

「オーム フーム 行け 行け 一切ブーティニーたちに サマヤを 保持
させよ 殺せ 殺せ 縛れ 縛れ 踏め 踏め おお おお 非常に恐ろし
い尸林に住する者 (mahāraudraśmaśānavāsini) は 来い 速やかに ドゥルム
パット」

<漢訳>

唵_引 吽 羯荼 羯荼 薩哩嚩_{二合部引多引} 嚩 薩摩野摩褥波_引 羅野 賀囉 賀囉
滿駄 滿駄 阿_引訖囉_{二合摩訶引迦哩沙二合} 野普 摩賀_引 嚩捺哩_{二合尾濕摩引舍引} 曩嚩_引
悉爾 阿_引誡蹉 尸伽朗_{二合} 度嚩 發吒_{半音}⁵³⁴

次に、暗号化された HBT 中の対応するマントラを見てみよう。

viṣaṃ prātha-[Ba 10b3]mikaṃ kālābījaṃ^(535-dviḥ kṛtaṃ-535) īritaṃ⁵³⁶ //⁵³⁷
prāleyaṃ atha bhūteśabījaṃ⁵³⁸ kaṭṭa⁵³⁹ dvayaṃ puna-[N1 7b7]ḥ //⁵⁴⁰

⁵²² T1, G kaḥ

⁵²³ T1, T2, A kaṭṭa

⁵²⁴ T1 sarvabhūtīn nāsaya; T2 sarvabhūtā nāsaya; A sarvabhūtān nāsayaḥ

⁵²⁵ T1, T2, A sarvvatathāgatasamayam

⁵²⁶ T2 anupālayaḥ

⁵²⁷ T1 hana

⁵²⁸ Emend. G, T1, T2, A vandha

⁵²⁹ T1 ākramaṭṭha; T2, A ākraṃmatha

⁵³⁰ G mahāraudrīśmaśānavāsini; T2 mahāraudraśmaśānavā-[T2 8a4]sinī; A mahāraudraśmaśānavāsini

⁵³¹ T2 śighraṃ; A śrighraṃ

⁵³² G dhru

⁵³³ T1 /

⁵³⁴ T No.1129 550c2-550c6

⁵³⁵ N1 vikṛtaṃ; N2, Bo duḥkṛtaṃ; M dviguṇam

⁵³⁶ N1, N2, Bo, Ba īritaṃ

⁵³⁷ N1, Bo, Ba //

⁵³⁸ N2 bhūteśaṃ bījaṃ

⁵³⁹ N1 kaṭu; N2 rudra; Bo kaṭu; N3 kaṭ; M phaṭ phaṭ

⁵⁴⁰ N1, Bo, Ba, N3 //; N2 omit.

tataḥ⁵⁴¹ sarvabhū-[Bo 10a3]tinīnām⁵⁴² [Ba 10b4] padaṃ⁵⁴³ bhagavataḥ⁵⁴⁴ punaḥ⁵⁴⁵
⁄⁵⁴⁶ [N2 4b10]

vajradharasya⁵⁴⁷ samayaṃ⁵⁴⁸ anupālaya samlikhet⁵⁴⁹

*hanabandhākramapadaṃ⁵⁵⁰ samuddhṛtya⁵⁵¹ dva-[Ba 10b5]/[N3 5b7]yaṃ [N1 8a1]
dvayaṃ⁵⁵² ⁄⁵⁵³

bho bho rātrāv iti padāt⁵⁵⁴ śmaśānavāsinīpadam⁵⁵⁵ ⁄⁵⁵⁶

āgaccha śīghraṃ⁵⁵⁷ kūrcāstraṃ⁵⁵⁸ bhūti-[Bo 10a5]nyāhvāna-[Ba 10b6]kṛnmanuḥ⁵⁵⁹
⁄⁵⁶⁰

「viṣa(=om)、prāthamika(=hrīm)、2 度なされた kālābīja(=hūṃ hūṃ)が述べられ、

次に prāleya(=om)⁵⁶¹、bhūteśabīja(=hrīm)、また 2 度の kaṭṭa(=kaṭṭa kaṭṭa)、
それから、sarvabhūtinīnām の語、再び bhagavataḥ、

vajradharasya samayaṃ anupālaya を書け。

2 度の hana bandha ākrama の語を引き出して、

bho bho rātrau という語から śmaśānavāsinī の語を[述べ]、

⁵⁴¹ Bo tata

⁵⁴² N1 sarvabhūtinīnām; N3 sarvabhūti-[N3 5b6]nīlām

⁵⁴³ Bo padaṃ padaṃ

⁵⁴⁴ Ba śrīpadaṃ

⁵⁴⁵ Bo omit.; M padam

⁵⁴⁶ N1, Bo, Ba, N3 //

⁵⁴⁷ N2 vajradharaṃ; Bo padaṃ punaḥ vajradharasya

⁵⁴⁸ N1 samayam

⁵⁴⁹ N1, Ba, Bo //

⁵⁵⁰ Emend. N1 hanarādhākramapadaṃ; N2 haladharamkramapadaṃ; Bo hanavandhakromampa-[Bo 10a4]padaṃ; Ba hanavadhākramapadaṃ; N3 haladharākramapadaṃ; M hanavadhākramapadaṃ

⁵⁵¹ Ba samudhṛtya

⁵⁵² N1, N2, Bo, Ba dvayaṃ

⁵⁵³ N1, Bo, Ba //

⁵⁵⁴ N1 prādat; Ba padām

⁵⁵⁵ N1, Bo, N3 śmaśānavāsinīpadam; N2 śmaśānavāsinī-[N2 4b11]padaṃ; Ba śmaśānavāsinīpadaṃ

⁵⁵⁶ N1, Bo, Ba //

⁵⁵⁷ N2 śīghra

⁵⁵⁸ N1 kūrcāstraṃ; N2, Bo kūrcāstra; N3 kūrcāstraṃ

⁵⁵⁹ N1 bhūtinyājavālakṛtmanuḥ; N3 bhūtinyāhvālakṛnmanuḥ; M bhūtinyāvāhakṛnmanuḥ

⁵⁶⁰ N1, Ba //; Bo // 1 //; M // 3 //

N1 7b6-8a1, N2 4b9-4b11, Bo 10a2-10a5, Ba 10b2-10b6, N3 5b5-5b7, M p.31

⁵⁶¹ prāleya は mantrakośa 内の対応表には記載が無い。しかし、BBT の Ghoramukhī のマン
トラ (om ghoramukhiśmaśānavāsinī...(G 4b2-, T1 9b1-, T2 8a7-, A 12b4-)) に対応する HBT の
記述 (prāleyaṃ prathamam gṛhya tato ghoramukhīpadaṃ...(N1 8a6-, N2 5a1-, Bo 10b4-, Ba
10b11-, N3 6a5, M p.33)) を見れば、prāleya が om に対応すると推測できる。

āgaccha śīghraṃ kūṛca(=hūṃ)、astra(=phaṭ)を[述べよ]。ブーティニーを呼び出す呪である。」

以上を暗号化表に従って並べ直せば、om hrīm hūṃ hūṃ om hrīm kaṭṭa kaṭṭa sarvabhūtinīnām bhagavataḥ vajradharasya samayam anupālaya hana hana bandha bandha ākrama ākrama bho bho rātrau śmaśānavāsini āgaccha śīghraṃ hūṃ phaṭ となる⁵⁶²。このマントラを先に挙げた BBT のマントラと対照すれば、よく一致していることが分かる。

また、上記の HBT のマントラの中に見ることのできる bhagavataḥ vajradharasya samayam の部分は BBT の G 写本および漢訳では単に samayam (薩摩野) であり、bhagavataḥ vajradharasya に対応する語が見られない。T1, T2, A 写本の対応箇所は sarvatathāgatasamayam であり、HBT 中の上記の文はこれら写本の sarvatathāgata の語を bhagavataḥ vajradharasya に改変した上でマントラに組み込んだものと思われる。ここから、HBT の作者による仏教の sarvatathāgata という単語の使用回避の意図が読み取れる。

以上に挙げてきた例のように、BBT で直接的に説かれるマントラは HBT 中で暗号化された上で説かれている。その暗号化の法則は、HT と同様尊格名と音を対応させて、それを用いて種字やマントラを描くというものであった。しかしながら、HBT 中では HT の子音の指定方法である prathamasya prathama の様な方法は用いられていない。また、HBT は BBT 由来のタントラと考えられるが、その音と単語との対応は HT の単語の対応とは別の伝統に属し、同様に Tokunaga[1990]によって提示された Vaiṣṇava 内の対応とも異なる伝統によるものであったと言える。

この暗号化の法則に関しては、今回取り上げた Bo 写本や Ba 写本に説かれる Mantrakoṣa の様なマニュアルが存在しない場合にはその解読が非常に困難なものであると言える。

また、BBT と HBT 内のマントラの対応を通して、ヒンドゥー教版が仏教版のマントラをも踏襲していることが明らかとなった。しかし、HBT が BBT 内のマントラをその

⁵⁶² 写本 Bo には暗号化されたものを解読した後のマントラが写本の上部、下部あるいは左右の余白に書き込まれているが、種字の対応表に合わないものが多い。この部分は、om hūṃ aḥ kṛtaṃ prālaya hūṃ kaṭu kaṭu sarvabhūtinīnām bhagavata vajradharasya samayam anupālaya hana hana vaṃdha vaṃdha krama krama bho bho rātrau śmaśānavāsini āgaccha śīghraṃ hūṃ phaṭ phaṭ (Ba 10a の上部右余白記載) となる。

また、このマントラの冒頭の om hrīm hūṃ hūṃ の部分は、BBT 中で paramahṛdaya マントラとして śmaśānavāsiniākaraṣanamantra の直前に説かれるものに対応するであろう。BBT 中の paramahṛdaya マントラは om hrīḥ hūṃ aḥ (G 4a6, T1 9a2, T2 8a1, A 12a4) であり、śmaśānavāsiniākaraṣanamantra とは別のものとして説かれるが HBT では一つのものとして組み込まれている。

まま直接に利用しているわけではなく、ヒンドゥーの文脈に応じて sarvatathāgata といった仏教に特有の術語を用いることを避け、改変した上で、HBT 作成者の依った伝統に依拠して暗号化を施したと考えられる。

(表 3.2.4-1) 母音 (Vowels)

Vowel	First part			Second part			Third part 1			Third part 2		
	刊本 (p.27)	写本 Bo (53a4-53a5)	写本 Ba (38a5-38a6)	刊本 (p.30)	写本 Bo (55a5-55b7)	写本 Ba (39a8-39b5)	刊本 (p.32)	写本 Bo (57a5-57a7)	写本 Ba (40a12-40b1)	刊本 (p.32)	写本 Bo (57a7-57b1)	写本 Ba (40b1-40b3)
a	vidyujjihvā	vidyurjjihvā	vidhujjihvā	bhīṣaṇā kīrtti vidyujjihvā	bhīṣaṇā kīrtti vidyujjihvoti	bhīṣaṇā kīrti vidyujjihvā	vidyuccaṇḍāśinī	vidyuccaṇḍālinī	vidyudyamḍālinī	subhagā	subhagā	śubhadā
ā	kālavajrī	kālaṣaśrī	kālarātri	tāmasī kālavajrī(jihvā) kālabhairavī	tāmasī kālahijhveyā? kālabhairavī	tāmasī kālahijhvogrā? kālabhairavī ⁵⁶³	gaurī	gaurī	gaurī	sumukhī	sumukhī	sumukhī
i	garjinī	garjjinī	garjanī	garjinī caṇḍā rudrabhairavī	garjinī caṇḍā rudrabhayamkarī	garjinī caṇḍa bhramayamkarī	kroṣinī	koṣinī	kāminī	caṇḍī	caṇḍī	cāṇḍrī
ī	dhūmrabhairavī	dhūmrabhairavī	dhūmrabhairavī	śūlinī caṇḍogrā dhūmrabhairavī	śūcinī caṇḍogrā dhūmrabhairavī	śūcinī caṇḍogrā dhūmrabhairavī	nāginī	nāginī	nāginī	pārvatī	pārvatī	pārvatī
u	kālarātriḥ	kālakūṭā	kālavaktrā	kālakūṭā(vaktrā) pracāṇḍā caṇḍavallabhā	kālacakrā pracāṇḍā caṇḍavallabhā	kālavaktrā pracāṇḍā caṇḍavatsamā	jayā	jayā	jayā	suratapriyā	suratapri	suratapriyā
ū	vidārī	vidūrī	vidāra	vidārī tāla(nā)jaṅghā	vidārī tālājaṅghā	vidārī tālājaṅghā	kinnarī	kinnarī	kinnarī	urvaśī	urvaśī	urvaśī

⁵⁶³ この直後に u 字の挿入があるが、母音の順番からして誤りであろう

				kapālinī	kapālinī ⁵⁶⁴	kapālinī						
ṛ	mahāraudrī	mahāraudrī	mahāraudri	mahāraudrī jvālinī yoginī	mahāraudrī jvālinī yoginī ⁵⁶⁵	mahāraudrī jñānī yogin	yoginī	yoginī	yoginī	caindri(citri)ṇī	citriṇī	citraṇī
ṛ	bhayaṅkarī	bhayaṅkarī	bhayaṅkarī	kālikā pitṛkāli bhayaṅkarī	kālikādevī pitṛkāli bhayaṅkarī ⁵⁶⁶	kālikādevī pitṛkāli bhayaṅkarī	yakṣī	yakṣī	yakṣī	līlā	nīlā	nīlā
ḷ	saṃhāriṇī	saṃhāriṇī	saṃhāriṇī	saṃhāriṇī meghanāda ugrabhāṣiṇī	saṃhāriṇī meghanāda ugrahāsinī ⁵⁶⁷	saṃhāriṇī meghanāda ugravāsinī	bhūtinī	dūtinī	bhūtinī	kaṅkāli	kaṃkāli	kaṃkāli
ḷ	karālinī	karālinī	karālinī	rudracaṃḍā kālarātri karālinī	rudracaṃḍā kālarātri karālinī ⁵⁶⁸	rudracaṃḍā kālarātri (karālinī) ⁵⁶⁹	pretinī	pritinī	prītinī	mekhalā	mekhalā	mekhalā
e	ūrdhvakeśī	ūrdhvakeśī	ūrdhvaśī	ūrdhvakeśī cāmuṇḍā nādinī	ūrdhaka cāmuḍā nāḍinī	ūrdhvakeśī cāmuṇḍā nādivī	narī	naṭī	naṭī	śacī	sacī	śacī

⁵⁶⁴ Bo 写本ではこれら尊格は u 字に配される。

⁵⁶⁵ Bo 写本ではこれら尊格は ū 字に配される。

⁵⁶⁶ Bo 写本ではこれら尊格は ṛ 字に配される。

⁵⁶⁷ Bo 写本ではこれら尊格は ṛ 字に配される。

⁵⁶⁸ Bo 写本ではこれら尊格は ḷ 字に配される。

⁵⁶⁹ Ba 写本では、karālinī は ṭaṭa 字の対応するものとして描かれる。(ṭaṭakāre karālinī //)

ai	ugrabhairavī	ugrabhairavī	ūrdhva h airvī	koṭarākṣī mālinī unmattabhairavī	koṭarākṣī mālinī unmattabhairavī ⁵⁷⁰	kārarākṣī linī unmatta bhairavī	yāmi(grāsi)nī	grāsanī	grāminī	māninī	mālinī	mālinī
o	bhīmākṣī	bhīmākṣī	bhīmākṣī	jvālinī bhīmākṣī caṇḍamālinī	jvālinī bhīmākṣī muṇḍamālinī	jvālāsī bhīmākṣī muṇḍamālinī	trāsini	drāviṇī	grāsini	haṃsinī	haṃsinī	haṃsinī
au	ḍākinī	ḍākinī	gahvinī	ḍākinī siṃhanādinī caṇḍabhairavī	ḍākinī siṃhanādinī caṇḍabhairavī ⁵⁷¹	ḍākinī siṃhanādinī caṇḍabhairavī ⁵⁷²	caṇḍī	caṇḍī	caṇḍī	caulā	śyāmā	vomā
aṃ	rudrarākinī	rudraḍākinī	rudrapakinī	akrūrā vidārī rudrarā(ḍā)kinī	aukrūrā vikālī rudraḍākinī ⁵⁷³	akrūrā vikārī rudraḍākinī	kalā	kalā	kālī	kalanā	vikalā	vikārā
aḥ	caṇḍikā	caṇḍiketi	caṇḍiketanī	kapālinī yāmyā caṇḍikā kuṇḍaladvaya nāda	kapālinī yāmyā caṇḍikā kuṇḍala āḍara	kapālinī yāsya caṇḍikā kuṇḍaladvaya āḍara	evaṃ?	eva?	evaṃ?	bhū(dhū)minī	dhūminī	dhūminī

⁵⁷⁰ Bo 写本ではこれら尊格は e 字に配される。

⁵⁷¹ Bo 写本ではこれら尊格は o 字に配される。

⁵⁷² Ba 写本ではこれら尊格は aum 字に配される。

⁵⁷³ Bo 写本ではこれら尊格は au 字に配される。

(表 3.2.4-2) 子音 (Consonants)

Conso nant	First part			Second part			Third part		
	刊本 (p.27)	写本 Bo (53a6-53b3)	写本 Ba (38a6-38a10)	刊本 (pp.30-31)	写本 Bo (55b7-56a6)	写本 Ba (39b5-39b12)	刊本 (pp.32-33)	写本 Bo (57b1-57b4)	写本 Ba (40b3-40b8)
ka	krodhīśa	krodhīśa	krodhīśa	krodhīśa	krodhīśa	krodhīśa	vibhrama	vibhrama	vibhrama
kha	vāmana	vāraṇa	vāmana	vāraṇa	rāvaṇa	cāraṇa	bāhula	vāhana	bāhuka
ga	caṇḍa	caṇḍauhmatra	caṇḍra	caṇḍa	caṇḍa	caṇḍa	daṇḍī	daṇḍī	daṇṭī
gha	vikārī	kārī	vikārī	śaṅkā	ṛkārī	bhūṃkāy	bhairava	bhairava	bhairavī
ña	unmattabhairava	unmattabhairava	unmattabhairava	unmattabhairava	unmattabhairava	unmattabhairavī	naṭaka	manmatha	manmatha
ca	jvālāmukha	jvālāmu	kālāmukha	jvālāmukha	jvālāmukha	jvālāmukha	śuka	śuca	śuka
cha	raktadaṃṣṭra	raktadaṃṣṭra	vakraṣṭra	raktadaṃṣṭra	raktadaṃṣṭra	vajradaṃṣṭra	vṛkodara	vṛkodara	vṛkodara
ja	asitāṅga	sitāṃga	simtāṃga	asitāṅga	asitāṃgā	asitāṅga	jaṭa	jaṭī	jaṭī
jha	baḍavāmukha	canavāmukha	vaḍavāmukha	balayāmukha	amukha	vaḍavāmukha	bhīṣma	bhasmī	bhasmī
ña	vidyunmukha	vidyumukha	vidyunmukha	vidyunmukha	vidyumukha	vidyunmukha	kṣobhaka	kṣyaubhaka	kṣobhaka
ṭa	mahājvāla	mahājvālī	mahājvāli	mahājvālī	mahājvālī	mahājvālī	khe(kha)cara	khevara	khecara
ṭha	kapālī	kapālī	kapālī	kapālī	kapālī	bhairava	naṭa	naṭa	naṭa
ḍa	bhīṣaṇa	bhāṣaṇa	bhīṣaṇa	bhīṣaṇa	bhāṣaṇa	bhīṣaṇa	niśācarā	viśācārī	niśāvāra
ḍha	ruru	guru	ruru	guru	guru	ruha	dhvajī	dhvaja	dhvajī
ṇa	saṃhārī	prahāra	saṃhvārī	prahārī	saṃhārī	saṃhārī	bhīma	bhīma	bhīma
ta	bhairava	rauravauṃ	bhairavī	raurava	bhairava	bhairavī	vicitra	vicitra	vicitra
tha	daṇḍī	daṇḍī	daṇḍī	daṇḍī	daṇḍī	daṇḍī	kauṣika	kauṣika	kauṣika

da	balibhuk	balibhuk	balibhuk	balita	valita	balibhī	yama	yama	yama
dha	ugraśūladhṛk	śūladhṛk	ugraśūladhṛk	ugraśūladhṛk	ugraśūladhṛk	ugraśūladhṛk	liṅgī	liṅgī	liṅgī
na	siṃhanādī	siṃhamādī	sihvanādī	siṃhanādī	siṃhanādī	siṃhanādī	vatsādhika	rasādhika	vasādhika
pa	kapardī	kapardī	kapardī	kapardī	kapardī	kapardī	bhṛṅgī	bhṛṅgī	bhṛṅgī
pha	karālāgni	pralayāgni	pralayāgni	pralayāgni	pralayāgni	pralayāgni	maṇibhadra	māṇibhadra	maṇibhadra
ba	bhayaṅkara	bhayaṅkara	bhayaṅkara	bhayaṅkara	bhayaṅkara	mayakṣara	ghaṭotkaca	ghaṭotkaca	ghaṭotkaca
bha	bahurūpī	vahurūpī	bahurūpī	bahurūpī	vahurūpa	bahurūpī	mahānandī	mahāvadī	mahānādā
ma	mahākāla	mahākālasthi	mahākāla	mahākāla	mahākāla	mahākāla	śuka	śuka	śuka
ya	jīvātmā	ātmā	bijātmā	sthīrātmā	sthīrātmā	jīvātmā	daṇḍī	daṇḍī	daṇḍī
ra	kṣatajokṣita	kṣatajokṣita	kṣatajokṣita	kṣatajokṣita	kṣatajokṣita	kṣatajokṣita	sugrīva	sugrīva	sugrīva
la	balabhedī	valabhogī	balamaimdri	balabhedī	valabhedī	balabhedī	kalaha	kalaha	kālabhairava?
va	raktapaṭa	raktapaṭa	vaktapaṭaṃś	raktapaṭa	āgupāṭa	vahnipuṭa	bhava	bhava	kālabhairava?
śa	caṇḍīśa	śacaṇḍīśa	caṇḍīśa	caṇḍīśa	nāṭīśa	bhīṃḍīśa	daṇḍī	diṇḍī	ḍiṇḍī
śa	jvalanadhvaja	jvalanadhvaja	jvalanadhvaja	jvalanadhvaja	jvalanadhvaja	jvalanadhvaja	bhāṣāntaka	bhoghātakastyāgī?	bhotararūpāṃgī?
sa	dhūmadhvaja	dhūmadhvaja	dhūmadhvaja	dhūmadhvaja	dhūmadhvaja	dhūmadhvaja	ajeśa(garga)	bhoghātakastyāgī?	bhotararūpāṃgī?
ha	vyomavaktra	vyomavaktra	vyomavaktra	vyomavaktra	vyomavaktra	vyomavaktra	haṃsa	haṃsī	haṃsī
kṣa	tryailokyagrasanātmaka	trailokaprasānārmakā	trailokyagrasanātmaka	trailokyagrasanātmaka	trailokyagrasanātmaka	trailokyagrasanātmaka	pakṣaiścara?	yakṣeśvara?	pakṣeśvari?
?							halī	halī	hanī

(表 3.2.4-3) 種字 (Bījas)

Bīja	First part			Second part		
	刊本 (pp.28-30)	写本 Bo (53b4-55a5)	写本 Ba (38a11-39a9)	刊本 (pp.31-32)	写本 Bo (56a6-57a4)	写本 Ba (39b11-40a11)
om̐	viṣabīja, śrutimukha, dhruva, hālāhala	viṣabīja, śrutipatha, śruva, hālāhala	viṣabīja, śrutipatha, dhruva, hālāhala	pañcaraśmi, sṛṣṭisthitilaya, viṣa	pañcarasmi, sṛṣṭisthityavyaya, viṣa	pañcarasmi, sṛṣṭisthitavyaya, viṣa
śrīm̐	viṣṇupriyā	viṣṇupriyā	omit.	viṣṇupriyābīja	viṣṇu, priyāvīja	viṣṇupriyābīja
hrīm̐	prāthamika	prāthamika	prāthamika	adrijā, raudrī, bhūteśa, prāthamika	abhra, raumdra, bhūta, prādhyaṃmika	adri, raudra, bhūteśa, prāthamika
krīm̐ (1 st part Bo 写本で は krīaṃ?)	piṭṛbhūvāsini	piṭṛbhūvāsini?	piṭṛbhūvāsini?	drāvaṇa, kledana ⁵⁷⁴	omit.	piṭṛbhūvāsini, kāleya, balabhojana
klīm̐ ①				omit.	drāvaṇa, kledana	drāvana, kledana
hūṃ	kūrca, kāla, krodhabīja	krodha, kāla?	krodha, kāla?	kūrca, kāla, mahākāla, krodhabīja, nirañjana	kūrcca, mahākāla, krodhavīja, niraṃjana	kūrcca, mahākāla, krodhabīja, niraṃjana
aiṃ	bhautika, vāgbhava, sārasvata	bhaitika, vāgbhava	bhauktika, vāgbhava	vāgbhava, buddhivardhana	bhautika, vāgbhava, vuddhivardhana	bhauktika, vāgbhava, buddhivardhana
phaṭ	astramanu	astratva	asramanu	astra	asru, jvālāgni, vyāpaka, aṃkuśa	āstra, jakālāgni, vyāpaka, aṃkuśa
kroṃ	aṃkuśa	akruśa	aṃkuśa	jvālāgni, vyāpaka, aṃkuśa	omit.	omit.
svāhā	dviṭha, śiras, vahnijāyā,	dviṭha, śiras, vahnijāyā,	dviṭha, śiras,	śiras, dviṭha, vahnijāyā,	śiva, dviṭha, vahnijāyā,	śiva, dviṭha, vahnijāyā,

⁵⁷⁴ Bo, Ba 写本では双方 klīm̐ に配される。

	jvalanavallabhā	jvālānavallabhā	vahnijāyā, jvālānavallabhā	jvalanavallabhā, dakṣajānudevaya, sendu, devāsya, vahnisundarī	jvalanavallabhā, dakṣavāmākṣiṇī, vedapāśīrasa	jvalanavallabhā, dakṣavāmākṣiṇī, cehṛtpāśībhūta
klīm②	trimūrti, manmatha, kāma, tryailokyamohana	omit.	trimūrti, manmatha, kāmarāja, trailokyamohana	indrāsanagata, brahmā, trimūrttīndu, manmatha	drāsanagata, vratyā, sastrimūrti, manmathā	imdrāsanagata, brahmā, sastrimūrti, manmatha
huṃ	kavaca, vama	omit.	omit.	varma	varma	varma
hrauṃ	jyoti	jyoti	jyoti	jyotirmantra	jotirmantra	jyotirmantra
drīm	kiṅkiṇī, uttama	krām̐kari, uttama	kiṃkarī, uttama	以降は 2nd Part 部分では言及されない		
dr̥līm?	omit.	mahāhanu	mahāmanu			
bhrū	viśeṣārtha, mahāmanu	omit.	omit.			
drūṃ	omit.	piśitāmsana	piśitāsana			
spheṃ	yugāntakāraka	yugāṃnakāraka	yugāṃtakāraka			
pleṃ	vaitālika	vaitālika	vaitālika			
klīm svāhā	kampinībīja, manoharī	kāṃpinīvīja, manoharī	kalkinībīja, manīharī			
prīm	dhvāṅkṣa	dhvāṃsa	āṃkṣī			
ṭhaṃ ṭhaṃ ṭhaḥ ṭhaḥ	samāsana, manohara	sanādamstana?, parodhana	sanādestana?, payodhara			
sphīm	phetkārīṇī	phetkārīṇī	phetkārīṇī			
hruṃ	khadyota, grāsinī	khadyota, grāsinī	khadyota, grāsinī			
hrūṃ (Bo, Ba では rūṃ)	vaivasvata, asmaka (antaka)	vaivasvata, aṃtaka	vaivasvata, aṃtika			
hasakhaphreṃ	ānandabhairavī,	omit.	omit.			

	mūkānandakara			
--	---------------	--	--	--

3.2.5 ekaliṅga の記述を通したシヴァ派との関連

呪的要素の多分に含まれる密教経軌は、その性質からこれまであまり重視されてこなかったように思われる。しかしながら、その中には仏教の密教行者がその周辺の信仰といかに関わってきたかということに関する要素を見ることができる。それは密教が変容していく過程を明らかにすることに示唆的な事例を提供すると考えられる。

そのような要素の例として、漢訳密教経軌において「大自在天祠」や「大自在天廟」あるいは「大自在天宮殿」という訳語を以って各修法の場を表現する箇所が挙げられる。本項では、これらの訳語がいかなる場を表しているのか、そしてまた密教行者がどのような意図を以ってこれらの場を説いたのか、ということを一明らかにすることを目的とする。その方法として、これまでと同様 BT を中心としたいくつかの密教経軌に言及されるこうした記述を挙げ、その訳語の示す対象と、修法の傾向を見ていく。

3.2.5.1 Bhūtaḍāmaratantra における ekaliṅga

BT 中のいくつかの修法の中に「大自在天宮殿」あるいは「大自在天祠宮殿」の語が認められる。以下に BBT 中で「大自在天宮殿」あるいは「大自在天祠宮殿」と漢訳される記述部分をサンスクリット、チベット訳および HBT と対応させたものを挙げよう。

BBT :	<i>rātrau ekaliṅge</i> ⁵⁷⁵ <i>gatvā sahasraṃ</i> ⁵⁷⁶ <i>japet</i> ⁵⁷⁷
	「夜にエーカリングに赴いて、1000 回[マントラを]誦せ」 ⁵⁷⁸
HBT :	<i>gatvaikaṅgaṃ</i> ⁵⁷⁹ <i>yāminyāṃ</i> ⁵⁸⁰ <i>japed</i> ⁵⁸¹ <i>aṣṭasahasrakam</i> ⁵⁸² ⁵⁸³
	「夜にエーカリングに赴いて、8000 回[マントラを]誦せ」 ⁵⁸⁴

この場面は漢訳では、「復次於夜分中。往大自在天宮殿中。誦眞言一千遍」⁵⁸⁵となっ

⁵⁷⁵ A caikaṅgaṃ; T1 raikaṅge; T2 cekaliṅge

⁵⁷⁶ A, T2 aṣṭasahasraṃ; T1 aṣṭasahaśraṃ

⁵⁷⁷ T2 //

⁵⁷⁸ A 19b3-19b4, T1 12b3-12b4, T2 14a5, G 6b2

⁵⁷⁹ N1 gatvekaṅgaṃ; N2 gatvaikaṅgaṃ; Bo, N3 omit.; Ba gatvaikaṅga ṅgaṃ; M gatvaikaṅgaṅgaṃ

⁵⁸⁰ N1 yāminyā; Bo, N3 omit.

⁵⁸¹ Bo, N3 omit.

⁵⁸² N1, N2 -kaṃ; Bo, N3 omit.

⁵⁸³ N1, Bo, N3 omit.

⁵⁸⁴ N1 13a5, N2 7b11, Bo 17a2(該当部分は omit.), Ba 16b1-16b2, N3 10b3(該当部分は omit.), M p.55

⁵⁸⁵ 大正 No.1129, 551c25-551c26

ている。蔵訳では *mtshan mo ling ga*⁵⁸⁶ *gcig par song ste*⁵⁸⁷ *stong phrag gcig bzlas na*⁵⁸⁸ (「夜にエーカリングに赴いて、1000 回[マントラを]誦せば」) と説かれている。即ち *ekaliṅga* の漢訳が「大自在天宮殿」であり、蔵訳では *ling ga gcig pa* である。しかしながら、漢訳では「大自在天宮殿」とされるものの、サンスクリット語の *ekaliṅga* という語が明確に何を指しているかは不明瞭である。この文献内での *ekaliṅga* が何を指すかを明らかにするために、以下の例も見てみよう。

BBT : *(⁵⁸⁹-ekaliṅgaṃ gatvā⁵⁸⁹) līṅgaṃ⁵⁹⁰*
vāmapādenākramyāṣṭasahasraṃ⁵⁹¹ japed⁵⁹² divasāni sapta⁵⁹³
/⁵⁹⁴ tato (⁵⁹⁵-mahādeva āgacchati⁵⁹⁵) /⁵⁹⁶ (⁵⁹⁷-yadi nāgacchati⁵⁹⁷)
tatkṣaṇād⁵⁹⁸ eva mriyate⁵⁹⁹ //⁶⁰⁰
「エーカリングに赴いて、リングを左足で踏みつけ、[マントラを]7 日間、8000 回誦せば、そこに大天が来るのである。もし来ないならば、実にその瞬間に[大天は]死ぬのである」⁶⁰¹

HBT : *gatvaikaṅgaṃ⁶⁰² sampūjya⁶⁰³ japed aṣṭasahasrakam⁶⁰⁴ //⁶⁰⁵*
vāmapādena cākramyānvahaṃ⁶⁰⁶ sapta dināni⁶⁰⁷ ca⁶⁰⁸ //⁶⁰⁹
mahādevaḥ⁶¹⁰ samāgatya rājyaṃ yacchati⁶¹¹ kāmikaṃ⁶¹² //⁶¹³

⁵⁸⁶ Ph ka

⁵⁸⁷ Ph ste /

⁵⁸⁸ D 244a1-244a2, P 38b4, sT 54b5-54b6, Ph 201b5

⁵⁸⁹ A *ekaliṅga gaṃtvā*; T1 *ekaliṃṅgaṃ gatvā*; T2 *ekaliṅga gatvā*

⁵⁹⁰ T1 omit.

⁵⁹¹ T1 -pāde kramyāṣṭasahaśraṃ

⁵⁹² T1, T2, G *japed*

⁵⁹³ A *saptaḥ*

⁵⁹⁴ A //; T1, G omit.

⁵⁹⁵ A, T1 *mahādevāgacchati*

⁵⁹⁶ A, T1 omit.

⁵⁹⁷ A *yadi nāgati*; T1 omit.

⁵⁹⁸ A *tatjaṇād*

⁵⁹⁹ A, T1 *siddhayet*

⁶⁰⁰ A, T1 // //

⁶⁰¹ A 39a4-39b1, T1 23a7-23b1, T2 26a5-26b1, G 11b6-12a1

⁶⁰² N1 -*liṅga*; N2, Bo, Ba -*liṅgaṃ*

⁶⁰³ M *sampūjya*

⁶⁰⁴ N1, N2, Bo, Ba -*kaṃ*

⁶⁰⁵ N2, M /; Bo omit.; Ba // 10 //

⁶⁰⁶ N1 *cākramyānahaṃ*; N2 *cākramyanvahaṃ*; Ba *cākramyānnahaṃ*

⁶⁰⁷ N1 *saptadināvadhiḥ*; N3 *dināvadhi*

⁶⁰⁸ N1, N3 omit.

⁶⁰⁹ N2, N3, M /; Bo omit.

⁶¹⁰ N1, Ba *mahādeva*; N3 *mahādevaṃ*

⁶¹¹ N3 *yakṣati*

⁶¹² N1, N2, Bo, Ba -*kaṃ*

⁶¹³ N2, N3, M /; Bo omit.

yadī⁶¹⁴ yacchati⁶¹⁵ nāgatya mriyate⁶¹⁶ śuśyate⁶¹⁷ dhruvam⁶¹⁸ //⁶¹⁹
「エーカリングに赴いて、供養して、8000 回[マントラを]誦
せ。そして、7 日間毎日[リングを]左足で踏み、大天が来たり
て、望みの王権を[修法者に]与えるのである。もし来たりて[王
権を]与えないならば、確かに[大天は]ひからびて死ぬのであ
る」⁶²⁰

漢訳では「持誦者往大自在天祠宮殿之内。以足踏自在天身。誦前眞言八千遍。至七日
内彼天即來。若不到來即令命終」⁶²¹となり、蔵訳では *ling ga⁶²² gcig pa rkang pa g-yon pas
mnan te⁶²³ stong⁶²⁴ phrag brgyad bzlas na nyi ma bdun na lha chen po de⁶²⁵ myur du 'ong⁶²⁶ ngo
// gal te ma 'ongs na de'i mod la 'chi'o //627*（「エーカリングを左足で圧して、8000 回[マント
ラを]誦せば、7 日で彼の大天が速やかに来るのである。もし来ないならばその瞬間に[大
天は]死ぬのである」）と説かれる。漢訳は「大自在天祠宮殿」である。蔵訳は *ling ga gcig
pa* である。ここでは明らかに *ekaliṅga* と *Mahādeva*（シヴァ神）が関連付けて描かれて
いる。従って、当文献内で「大自在天」という漢訳と結び付けられている *ekaliṅga* はシ
ヴァリングのある場所を指しているものと推測されよう⁶²⁸。これを前提として、次に他
の例も見てみよう。

BBT : *rātrau⁽⁶²⁹⁾ ekaliṅgaṃ gatvā⁽⁶²⁹⁾ ayutaṃ⁶³⁰ japet⁶³¹*

⁶¹⁴ N1 yena

⁶¹⁵ Bo pṛcchati

⁶¹⁶ N2 mriyate; N3 mryate

⁶¹⁷ N1 śruśyate; Bo puśyate

⁶¹⁸ N1, N2, Bo, Ba dhruvam; N3 dhruṣaṃ

⁶¹⁹ N2, N3 /; Bo omit.; M // 8 //

⁶²⁰ N1 22b6-22b7, N2 13a4-13a6, Bo 30a3-30a6, Ba 24b10-24b12, N3 19b1-19b3, M p.102

⁶²¹ 大正 No.1129, 555c11-555c13

⁶²² D, P, Ph ka

⁶²³ Ph te /

⁶²⁴ D stod

⁶²⁵ P omit.

⁶²⁶ Ph 'ongs

⁶²⁷ D 250a5-250a6, P 44b8-45a1, sT 63a7-63b1, Ph 211a7-211a8

⁶²⁸ 仏教経論で「大自在宮」あるいは「自在天宮」という語で場所を示す記述が他にも見
られる。前者は『成唯識論』（大正 No.1585, 40b18-40b24）、後者は『俱舍論記』（大正
No.1821, 139c18-140a6）の記述であるが、双方これを「浄居天上」あるいは「色界上」に
位置させている。

⁶²⁹ T1 *ekaliṅga gatvā*; T2 *ekaliṅgaṃtvā*

⁶³⁰ T2 'yutaṃ

⁶³¹ A, T1 omit.

「夜にエーカリングに赴いて、[マントラを]10000 回誦せ」⁶³²
 HBT : *gatvaikalingam*⁶³³ *yāminyām japa*⁶³⁴ **mantrāyutam*⁶³⁵ *tataḥ*
 //⁶³⁶
 「夜にエーカリングに赴いて、そこにおいて 10000 回マント
 ラを誦せ」⁶³⁷

漢訳対応箇所は、「復次往大自在天宮觀之内。誦眞言一阿庾多」⁶³⁸であり、蔵訳は *mtshan mo ling ga*⁶³⁹ *gcig*⁶⁴⁰ *par song ste*⁶⁴¹ *khri bzlas na*⁶⁴² *rang nyid 'ongs*⁶⁴³ *shing*⁶⁴⁴ (「夜にエーカリングに赴いて、1 万回[マントラを]誦せば、[天女]自身が来たりて…」)である。漢訳は「大自在天宮觀之内」、蔵訳は先ほどと同様に *ling ga gcig pa* である。

また、サンスクリット写本からは不明瞭であるが、同様に、夜に *ekalinga* に赴いて修法をなすという記述をこの後に一例見ることができる⁶⁴⁵。その対応する箇所の漢訳は「復次持誦者往大自在天祠宮殿之中。於夜分時只以自身用紅色肉食」⁶⁴⁶であり、蔵訳は *mtshan mo ling ga*⁶⁴⁷ *gcig par song*⁶⁴⁸ *ste*⁶⁴⁹ / *gcig pu*⁶⁵⁰ *nub gsum du 'bras chan*⁶⁵¹ *dmag*⁶⁵² *po dang*⁶⁵³ *nya*⁶⁵⁴ *dang*⁶⁵⁵ *shas*⁶⁵⁶ *gtor ma sbyin zhing*⁶⁵⁷ (「夜にエーカリングに赴いて、一人で 3 日間赤い米と魚と肉で供養して…」)であり、シヴァリングのある場に赴いて *gtor ma* (供養) をなすという修法が説かれている。

⁶³² A 45b3-45b4, T1 27a5-27a6, T2 30b5, G 13b3(該当の文は omit.)

⁶³³ N1, N2, Bo, Ba *gatvaikalingam*

⁶³⁴ M *japed*

⁶³⁵ Emend. N1, N2, Bo, Ba *mantrāyutam*; N3 *mantrāyutam*; M *aṣṭāyutam*

⁶³⁶ N2, N3, M /; Bo omit.

⁶³⁷ N1 25b5-6, N2 14b1-2, Bo 34a2, Ba 27a3, N3 22b2, M p.114

⁶³⁸ 大正 No.1129, 556c21-556c22

⁶³⁹ D, P, Ph ka

⁶⁴⁰ Ph *cig*

⁶⁴¹ P *ste* /

⁶⁴² Ph *na* /

⁶⁴³ Ph *'ong*

⁶⁴⁴ Ph *zhing*

D 252b2-252b3, P 47a7-47a8, sT 66b3-66b4, Ph 214b6

⁶⁴⁵ A1 70b2-70b3, T1 43b7-44a2, T2 48b1, G 21b1

⁶⁴⁶ 大正 No.1129, 562c6-562c8

⁶⁴⁷ D, P, Ph ka

⁶⁴⁸ Ph *'ongs*

⁶⁴⁹ Ph *te*

⁶⁵⁰ P, Ph *bu*

⁶⁵¹ Ph *can*

⁶⁵² Ph *mang*

⁶⁵³ sT, Ph *dang* /

⁶⁵⁴ Ph *sha*

⁶⁵⁵ sT *dang* /

⁶⁵⁶ Ph *chang gis*

⁶⁵⁷ D 261b5-261b6, P 57a8-57b1, sT 79b7-80a1, Ph 229a7-229a8

以上のように、当儀軌にはシヴァリングのある場所を指していると考えられる *ekaliṅga* での修法をいくつか見ることができた。また、法天を主とする訳経者がこの単語を「大自在天宮殿」「大自在天祠宮殿」「大自在天宮觀」と訳していることから、これが大自在天の祠であると認識していたことは確かである。そしてこの語はそのまま HBT にも引き継がれている。

では次に、他の密教文献での類似の記述を挙げていこう。

3.2.5.2 他密教経軌内に見られる大自在天の住处

ここまで、BT 中の *ekaliṅga* に関する記述と、それがどのような場を指しているのかを見てきた。3.2.5.1 で挙げたような、仏教の密教行者が「シヴァリングに赴いて行う修法」というものが他の経軌にも見ることができるかを確認しよう。

『文殊師利根本儀軌經』(*Mañjuśrīyamūlakalpa*⁶⁵⁸) 内で、*ekaliṅga* における修法が言及されている。既に前田⁶⁵⁹によって引用されているが、該当部分のみをここで挙げよう⁶⁶⁰。

*taṃ paṭaṃ krodharājasya pariṅṛhya viveke sthāne gatvā ekaliṅge maheśvarasyāyatane taṃ liṅgaṃ viśarudhirarājikākāñjikenābhyaṃjya*⁶⁶¹ *picumardapatrair arcayitvā...*

「その忿怒主の[描かれた]布を持って寂靜な場所に赴いて、大自在天の住处であるエーカリングにおいて、そのリングに毒と血と芥子と酸い粥を塗って、ニンバ樹の葉で供養して...」⁶⁶²

この箇所での漢訳は *ekaliṅga maheśvarasyāyatana* を「摩醯首羅凌猋廟」と訳し、凌猋(リング)と音写をなしている⁶⁶³。そして、この供養の後に、左足でそのリングを踏み、

⁶⁵⁸ 従来用いられてきた *Mañjuśrīmūlakalpa* ではなく *Mañjuśrīyamūlakalpa* の使用が適していることに関しては Delhey[2012] pp.70-71 で述べられている。

⁶⁵⁹ 前田[1973] p.401

⁶⁶⁰ 当箇所は漢訳の『大方廣曼殊室利童眞菩薩華嚴本教讚閻曼德迦忿怒王眞言阿毘遮嚕迦儀軌品第三十一』(大正 No.1216) に相当する箇所であり、「個別的に成立し、次第に *Mañjuśrīmūlakalpa* に付加されていったと推定しうる」(松長[1966] p.419) とされる章である。

⁶⁶¹ Vaidya[2003] *viśarudhirarāmjikā-*

⁶⁶² Sastri[1989] p.560 (in Part 3). Vaidya[2003] p.437

⁶⁶³ 漢訳対応箇所は、「取忿怒王像住於一處。所謂於摩醯首羅凌猋廟。以毒藥芥子犬血。和漿水塗。有凌猋取白繚葉供養」(大正 No.1216, 80a2-80a4) であり、藏訳は *khro bo'i rgyal po'i ras ris de yongs su blangs la / gnas dben par song nas dbang phyug chen po'i rtags gcig pa'i gnas su / rtags de la dug dang khrag dang ske tshe dang rang skyur gyis gtor la shing pi tsu mar da'i me tog gis mchod cing* (東北 No.543, 279a5-279a6. 大谷 No.162, 243b4-243b5) である。

二つに割れるまで真言を誦することが述べられる。この修法は 3.2.5.1 で挙げた BT 内のリンガを踏みつけるものと同類の修法と言えよう。

同様に、『秘密集会タントラ』(*Guhyasamājatantra*)においても、修法の場としての *ekaliṅga* が挙げられていることが Bühnemann によって報告されている⁶⁶⁴。それは、第十二分における *catuspathaikavṛkṣe vā ekaliṅge śivālaye / sādhayet sādhamo nityam vajrākaraṣaṃ viśeṣataḥ* /⁶⁶⁵ という箇所および第十四分における *mātrgrhe śmaśāne śūnyaveśmani catuspathe / ekaliṅgaikavṛkṣe vā abhicāraṃ samārabhet* /⁶⁶⁶ という箇所である。前者は鉤召法に関するものであり、後者は調伏法に関するものである。後者はその直前で「足でリンガを踏みつける」作法が説かれ、先の『文殊師利根本儀軌經』及び BT の記述に類似するものと言えよう。

また、同様に「大自在天祠に赴く」という表現を『金剛薩埵說頻那夜迦天成就儀軌經』(以下『頻那夜迦儀軌』)⁶⁶⁷内にも見ることができる。この『頻那夜迦儀軌』は「肉や血

⁶⁶⁴ Bühnemann[1996] p.490 n.107

⁶⁶⁵ Matsunaga[1978] p.40 および松長[1998] p.75 参照。当該部分の修法の場をチベット訳は *lam gyi bzhi mdo'am shing gcig drung // mtshan ma gcig dang zhi gnas su //* (東北 No.442, 110a3-110a4)となっており、また漢訳では「當往四衢道 或於獨樹下」(大正 No.885, 482a19)と訳される。チベット訳では *ekaliṅga* に *mtshan ma gcig* が、*śivālaya* に *zhi gnas* がそれぞれ対応するが、漢訳では双方訳されない。

⁶⁶⁶ Matsunaga[1978] p.68 および松長[1998] p.126 参照。チベット訳では *ma mo'i gnas sam dur khrod dam // khang stong dang ni bzhi mdo dang // mtshan ma gcig dang shing gcig drung //* (東北 No.442, 123b7-124a1)としてこの場を訳し、漢訳では「或於彼舍或於空室。乃至四衢道獨樹下等」(大正 No.885, 492b23-492b24)としている。チベット訳では、*ekaliṅga* は *mtshan ma gcig* であり、漢訳は先の例と同様に訳出されていない。

⁶⁶⁷ 当經の漢訳に関して、この『頻那夜迦儀軌』は法賢による訳とされ、この法賢に関しては、「法天改名法賢」説と「天息災改名法賢」説とが存在し、前者は誤りだとされる(柴田[1965]および塚本[1936] p.65)。この經典の翻訳年代に関しては、『大中祥符法寶錄』卷九の中に「是年十月譯成經十四卷...金剛薩埵說頻那夜迦天成就儀軌經一部四卷大乘經藏祕密部収」(嚴靈峯[1978] pp.23123-23127。現在残る『大中祥符法寶錄』(中華大藏經 No.1675)の九卷は散逸して残っていない。しかしながら、四川支那内学院より出された『書目類編』51 卷中の「大中祥符法寶錄略出」にこの記述が出る。そしてこの記述の後「上見原礫卷九」と述べられている)と出るとされ、ここでの「是年」は淳化五(994)年である。また、『佛祖統紀』中に「天禧元年四月。詔曰。金仙垂教實利含生。貝葉騰文當資傳譯。苟師承之或異。必邪正以相參。既失精詳寢成訛謬。而況葦血之祀甚瀆於眞乘。厭詛之辭尤乖於妙理。其新譯頻那夜迦經四卷不許入藏。自今後。似此經文不得翻譯」(大正 No.2035, 405c26-406a2)とあり、また「詔新譯頻那夜迦經。葦血爲祀。不許入藏」(大正 No.2035, 452b26)と出ている。これとほぼ同じ内容の記述を『宋会要』中に見ることがで

を伴う祭祀」や「怨みや呪いの言葉」を説くため、仏教教理に背くものとして入蔵を拒否されたということが伝えられている⁶⁶⁸。実際に当経内には、「用水牛肉」や「用水牛血塗彼天像」等の記述が多く見られる。このような理由から、当経に似た経典は今後翻訳しないとの勅が出されたとされる⁶⁶⁹。

以上を前提として、当経中の「大自在天祠に赴く」という記述をいくつか見ていこう。

きる（永井[2015]pp.90-92）。天禧元年は1017年であり、実際にその後の天聖五年（1027年）の惟浄による『天聖釋教録』（『佛祖統紀』に「五年。三藏惟浄進大藏經目錄二表。賜名天聖釋教録。凡六千一百九十七卷」（No. 2035, 409a21-409a22）と出るものであり、中華大藏經中に『天聖釋教總録』の中冊と下冊が見られる（中華大藏經 No.1670））には『頻那夜迦儀軌』を見ることができない。また、現在大正藏中に見ることのできる『金剛薩埵説頻那夜迦天成就儀軌經』と入蔵を許されなかった「新譯頻那夜迦經」の巻数が同じであり、描かれる内容も合致する。そのため、『宋会要』や『佛祖統紀』中に述べられる「頻那夜迦經」は『金剛薩埵説頻那夜迦天成就儀軌經』を指すと言える。

⁶⁶⁸ 大正 No.2035, 452b26

⁶⁶⁹ 武内[1976]は「淳化三・四年（九九二・三）の訳出經典ゼロは、訳すべき原典の欠乏によるものであった。淳化二年（九九一）太宗皇帝は、西辺四州に詔して西天からの來朝僧、および帰還僧があれば、將來の梵經を逐次上進せしめた。右より、淳化二年までの訳出經典の原典は、宋室所有の梵經か淳化二年までに將來された梵經であり、淳化五年（九五五）以降の訳出經典の原典は、淳化二年以降新たに將來された梵經であったと考える」としている（武内[1976] pp.37-38。文中の「淳化五年（九五五）」部分は原文ママ。正しくは九九四年であろう）。BTの漢訳の『佛說金剛手菩薩降伏一切部多大教王經』および現在の考察対象である『金剛薩埵説頻那夜迦天成就儀軌經』は双方、淳化五(994)年の翻訳である。前者は「[淳化]五年正月...金剛手菩薩降伏一切部多大教王等經三部...」（『大中祥符法寶錄』卷八（中華大藏經 No.1675））とあり、これによれば当タントラは淳化五年（994年）正月の翻訳であり、また後者は既に述べたように淳化五年（994年）十月の翻訳である。であるならば、両經典の將來は、梵經が欠乏した後の淳化三（992年）、淳化四年（993年）および淳化五年（994年）の翻訳された月までと考えることができる。ここで再び武内[1976]の論文を参考に、梵經の將來状況を見てみよう。武内[1976]の表によれば、淳化四年（993年）の十一月に、南天竺僧惠吉祥が梵經一夾を將來し、獅子国僧覺喜が梵經六十二夾を將來したとされる（武内[1976] p.30）。また、淳化五年（994年）には于闐国沙門吉祥が大乗秘藏經を將來したが法賢等が焚棄したとされる（武内[1976] p.33。大正 No.2035, 401a22-401a27「五年。于闐國沙門吉祥進大乘祕藏經。詔三藏法賢等詳定。賢奏此經是于闐書體非是梵文。其中無請問人及聽法衆。前後六十五處文義不正。帝召賢論之曰。使邪僞得行。非所以崇佛教也。宜焚棄此本以絕後惑」）。現存する資料からでは、これら將來された經の中に『頻那夜迦儀軌』があったかは明らかではない。

持明者往尸陀林。或空舍内或大自在天祠内。用左足蹋彼天像。⁶⁷⁰

ここで説かれる「彼天像」とは頻那夜迦天の像である。この一文は、この像を作成する方法が説かれた後の記述であり、それを「大自在天祠」に行きて踏む、というものである。また、

持明者先擇作法成就之地。或尸陀林中鬪戰之地。或努摩⁶⁷¹舍旃陀羅舍。或四衢道三衢道。或大自在天神祠内。如是等處當須寂靜。⁶⁷²

と説かれるものは、成就法を行う場所の選定基準である。ここにも「大自在天祠」が挙げられている。同様に、

復用前法持明者入大自在天祠中。以左足蹋於天像。⁶⁷³

という記述も見ることができる。ここで説かれる「天像」は先の記述と同様に、頻那夜迦天像を指していると考えられる。さて、これを既述の BT と『文殊師利根本儀軌経』の記述と見比べてみれば、踏みつける対象は異なるものの、修法者が大自在天廟において或る対象を踏むという点でこれらは共通している。『頻那夜迦儀軌』の梵本および蔵訳は確認できないが、ここから推測すれば、当儀軌で散見される「大自在天祠」が *ekalinga* の訳語である可能性は高いと言えよう。

また、Yamano によって提出されている *Kakṣaputa-tantra* 中でも、エーカリングでマハーデーヴァに供養をなすという記述を見ることができる⁶⁷⁴。このタントラは「その信仰基盤はシヴァ教に認められるが、伝統的に著者はナーガールジュナに帰せられている⁶⁷⁵」とされている。これらの他に、*ekalinga* 以外の語で表現される或いは還梵され得る「大自在天祠」の記述もいくつか見ることができる⁶⁷⁶が、ここではヒンドゥー文献内に見ら

⁶⁷⁰ 大正 No.1272, 309b14-309b16

⁶⁷¹ *doma* か

⁶⁷² 大正 No.1272, 319b7-319b10

⁶⁷³ 大正 No.1272, 313c17-313c18

⁶⁷⁴ Yamano[2013] p.86, 106-107

⁶⁷⁵ 山野[2014] p.205

⁶⁷⁶ 『金剛頂経瑜伽十八会指帰』内の第十六会に置かれる『佛説無二平等最上瑜伽大教王経』で説かれる「大自在天祠」（大正 No.887, 532c05）は蔵訳では *lha chen po yi 'og* であり、サンスクリットは *mahādevāyatana* である（范[2011] p.276）。『頻那夜迦儀軌』の訳者である法賢による訳である『佛説妙吉祥最勝根本大教経』及び『佛説最上根本大樂金剛不空三昧大教王経』にも見ることができる。前者の「大自在天祠」（大正 No.1217, 81c19）は蔵訳では *lha chen gyi ni gnas*（東北 No.604, 270a6, 大谷 No.291, 5b3）であり、後者の「大自在

れる ekaliṅga の記述に関する定義を見ていこう。

3.2.5.3 ekaliṅga の定義

以上述べてきたところの ekaliṅga とは一体いかなる場所を指しているのでしょうか。BT より後のヒンドゥー文献内ではこの ekaliṅga が明確に定義されている。ここでは、修法の場として共有される ekaliṅga がそれらのヒンドゥー文献においていかに定義されるかを見ていこう。 *Encyclopedia of Tantra* によれば、「唯一つのシヴァリングがある（5 クローシャまでの）場あるいは空間。そのような場におけるシヴァリングの名称」と定義され、ここでは *Nīlatantra* というタントラに出るとされる⁶⁷⁷。また、Pal は *Nīlatantra* 及び *Phetkārīṇītantra* 双方に出るとしている⁶⁷⁸。これは *Tantrasāra* 内に現れる記述である。以下に *Tantrasāra* 中の当箇所の記述を挙げよう。

これらの Vidyā 尊たちの成就法の場合は、*Nīlatantra* および *Mahāphetkārīya[tantra]* 中で、「エーカリング、または墓地、空いた家、四辻、死体の上または頭骨[の座]の上、または首が満たされる水中、戦場、または女陰、高地、人気のない森、そこで行者は三界の主である Vidyā 尊を成就せよ。実にそこにおいて、5 クローシャ内でエーカリングとして知られる、他のリングを見ることの無い場所、その場所に最高の成就がある...⁶⁷⁹

天祠」(大正 No. 0244, 789a18) の蔵訳は *zhi ba'i gnas* (東北 No.487, 156a5, 大谷 No.119, 160a2) である。また、梵蔵の欠如から原語の推定が困難であるが、施護訳の『佛説金剛香菩薩大明成就儀軌經』にも「大自在天廟」(大正 No.1170, 694b1-694b2) での修法が説かれる。『初会金剛頂經』に対する註釈であるブツダグヒヤによる『タントラ義入』への注釈であるパドマヴァジュラによる註釈の『タントラ義入釈』(*Tantrārthāvatārvyākhyāna, rgyud kyi don la 'jug pa'i 'grel bshad*) には息災法の場合として「世間の大天の神像あるいは宮殿がある[場所]」(*'jig rten pa'i lha chen po lha rten nam khang pa yod pa*) (東北 No.3325, 344b1、北村[2016] p.927) が挙げられ、降伏の場所として「獸主 (Paśupati) の所」(*gu lang gi gnas*) (東北 No.3325, 344b5、北村[2016] p.927) が挙げられる。これら以外にも多く大自在天と関連する修法を見ることができる。例えば、『不空罽索神變真言經』内の大自在天に対する修法(密教聖典研究会[2015] pp.54-55。大正 No.1092, 323b29-323c3) の記述である。

⁶⁷⁷ Santidev[1999] p.212

この定義は Harshananda[2012] pp.584-585 にも出るが、その出典は述べられていない。

⁶⁷⁸ Pal[1981] p.72

⁶⁷⁹ *etāsāṃ vidyānāṃ sādhanasthānaṃ nīlatantra mahāphetkārīye ca : ekaliṅge* ⁽¹⁾-śmaśāne vā ⁽¹⁾-śūnyāgāre catuṣpathe / śavasyopari munḍe vā jale vā kaṇṭhapūrīte / saṃgrāmaḥ bhūmau yonau ⁽²⁾ vā sthale vā vijane vane / tatrasthaḥ sādhyed yogī vidyāṃ tribhuvaneśvarīm // 15 // tattraiva : pañcakrośāntare yatra na līṅgāntaram īkṣate / ⁽³⁾-tad ekaliṅgam ⁽³⁾-ākhyātaṃ tatra siddhir anuttamā // 16 // (①Śrīvāstava[2007] śmaśānavā ②Śrīvāstava[2007] yānau ③Śrīvāstava[2007] tadeva

ここで引用される *Nīlatantra* および *Mahāphetkārīya[tantra]* 内に上に挙げた内容に該当する記述があるかを以下に見ていこう。

上記の *Tantrasāra* は16-17世紀に位置付けられ、それ以前の成立であると考えられる *Nīla Tantra* は少なくとも15世紀または16世紀の早い時期には存在していたと推測されている⁶⁸⁰。*Nīlatantra* には類似する長い版と短い版が存在する⁶⁸¹。短い版の *Nīlatantra* には、*ekaliṅga* の記述はあるが、その定義は見られない⁶⁸²。先の *Tantrasāra* 中の記述は出版された長い版に相当するとされる *Bṛhannīlatantra* 内に見ることができる。この *Bṛhannīlatantra* の記述は

5クロージャ内で、エーカリングとして知られる、他のリングを見ることのない場所、その場所に最高の成就がある⁶⁸³

と述べられるものであり、*ekaliṅga* は一定の範囲（5クロージャ）に一つだけリングがある場所である。Banerji は、11世紀に書かれたとされる *Śrīvidyārṇavatāntra*⁶⁸⁴ で *Nīlatantra* が言及されることから、*Nīlatantra* を11世紀前半或いはそれより前に位置付けているが⁶⁸⁵、Bühnemann の見解では、*Śrīvidyārṇavatāntra* は1588年以降とする⁶⁸⁶。以上のことから、*Nīlatantra* に見られるような *ekaliṅga* の定義が、*ekaliṅga* の語を含む仏教儀軌に先行する、或いは同時期にあったとする明確な根拠はないのである。

次に、*Mahāphetkārīyatāntra* に関して、Pal はこれを *Phetkārīṇītantra* と示している⁶⁸⁷。実際、*Phetkārīṇītantra* 内に *Tantrasāra* に引用されているものに近い記述を見ることがで

liṅgam)(Catṭopādhyāya[2010] pp.408-409, Śrīvāstava[2007] p.532)

この後に挙げる *Phetkārīṇītantra* では、当箇所の *Vidyām* は *Tārām* となっている。

⁶⁸⁰ Biernacki[2007] pp.156-157

⁶⁸¹ Banerji[2007] p.167 および Biernacki[2007] pp.150-152 および Goudriaan[1981] pp.87-88

出版されている長い版に関しては *Bṛhannīla Tantra* (Kaul[1984]) が相当し、短い版の *Nīla Tantra* には Śarmā[1965 or 1966]が相当する。

⁶⁸² *ekaliṅge śmaśāne vā śūnyāgāre catuṣpathe / tatrasthaḥ sādhyed yogī vidyām tribhuvaneśvarīm /* (Śarmā[1965 or 1966] p.5) *Bṛhannīlatantra* ではこの後に *ekaliṅga* の定義が挙げられるが、*Nīlatantra* には欠落している。

⁶⁸³ *tatrasthaḥ sādhyed yogī vidyām tribhuvaneśvarīm / pañcakrośāntare yatra na liṅgāntaram īkṣate // 3 // tadekaliṅgam ākhyātaṃ tatra siddhir anuttamā /* (Kaul[1984] p.7)

⁶⁸⁴ *Śrīvidyārṇavatāntra* が11世紀のものであるとする Banerji による根拠付けを見ることができない。(Banerji[1988] p.543 および Banerji[2007] pp.217-219)

⁶⁸⁵ Banerji[1988] p.543 および Banerji[2007] p.169

⁶⁸⁶ Bühnemann[2000] p.14(vol.1)

⁶⁸⁷ Pal[1981] p.72. また、Bühnemann も両者を同一視しているようである (Bühnemann[2000] p.35(vol.1))。

きるが⁶⁸⁸、Bühnemannはこの*Phetkārīṇītantra*内のekaliṅgaを含む記述を挙げて、その記述が仏教徒による11世紀のMahācīnakramaTārāのsādhanaの記述からほぼ完全に引用されていることを指摘している⁶⁸⁹。即ち仏教内のekaliṅgaの記述がヒンドゥー教内に採用されたことを指している⁶⁹⁰。

仏教儀軌内で「5クローシャ内に一つのリングがある場所」という定義を含むekaliṅgaの記述は現在見ることができず、この定義を含む文献の時代が遡れないことから、仏教文献内で示されるekaliṅgaの定義に以上の定義を当てはめることはできないであろう。

なお、尊格としてのekaliṅgaの呼称は後971年（Vikrama暦1028年）の碑文に出てきており、パーシュパタ派との関わりから記述されていることが報告されるが⁶⁹¹、これまで挙げてきた各文献のekaliṅgaとこの碑文のekaliṅgaとの関係は明確ではない。

以上の3.2.5.1 から3.2.5.3 項で挙げてきた内容をまとめると以下のようになるだろう。

1. 密教儀軌内の「大自在天宮殿」は実際の修法の場（ekaliṅga）を指していること
2. ekaliṅga を「大自在天宮殿」等の漢訳語で表現することから、当時（10 世紀）の僧が ekaliṅga を大自在天の祠だと明確に認識していたこと
3. BT 内の Mahādeva に対する修法、もしくは『文殊師利根本儀軌經』内の Maheśvarasyāyatana という語と並列して述べられることから ekaliṅga がシヴァリングのある場と同定され得ること
4. 仏教内ではリングや像を踏みつけるという行為を伴う修法と共に ekaliṅga が描かれる場面が見られること
5. 碑文の記述から ekaliṅga に対する信仰形態が 10 世紀には存在し、パーシュパタ派との関係から述べられていること
6. 後世の解釈である可能性が高いが、ヒンドゥー教文献内で ekaliṅga が定義され、テクニカルタームとなっていること

以上を根拠として、仏教の密教行者が—おそらく頻繁に—ヒンドゥー寺院（あるいは小さな祠であろうか）に赴き、そこで修法を行っていたという状況を見ることができるのである。そしてその修法は、『初会金剛頂經』中の「降三世品」に説かれる金剛手菩

⁶⁸⁸ ekaliṅge śmaśāne ca śūnyāgāre catuṣpathe / tatrasthaḥ sādhyed yogī tārāṃ tribhavatāriṇīm // 24 // (Kaviraja[1970] p.233)

⁶⁸⁹ Bühnemann[1996] pp.473-474

⁶⁹⁰ Bühnemann は同論文内で、上に挙げた Ekaliṅga の定義と同様の「5 クローシャ内にただ一つのリングが見られる場所」という *Tārābhaktisudhārṇava* (Biernacki[2007] p.156 で 17 世紀のものとされる) の記述を挙げているが、これは後の解釈であろうとしている

(Bühnemann[1996] p.490 注 107)。

⁶⁹¹ Bhandarkar[1908] p.152, 167

薩による大自在天の降伏譚を想起させる、左足によってある対象を踏むという行為をなすことを多く目的としていたと言えよう。一方で、成就に適した場として挙げられる例も見ることができ、修法の場としても利用されていたのであろう。

この *ekalinga* という語の起源がどこにあるかは現在のところ不明である。しかしながら BBT が漢訳された、後 994 年以前の碑文に *ekalinga* という崇拜対象の記述があること、および *ekalinga* がシヴァ神の神殿を表していることから推察すれば、この語自体がヒンドゥー教から借用された可能性は完全には否定できない。この語は後にヒンドゥー教内で明確に定義されるようになる。

今回は扱わなかったが、仏教文献内で大自在天の住処は浄居（あるいは浄居より上）の位置に設定されている。例えば後 814 年の仏教語釈であるとされる『二卷本訳語釈』において *Mahāmaheśvarāyatana*（「大自在の広大なる住居」）は「色究竟天の方の或る場所」に設定される⁶⁹²。一方で、先に見たように『文殊師利根本儀軌経』では *Maheśvarasyāyatana* は *ekalinga* と並列して述べられる実際の修法の場を指しており、その示す場が異なっている。後者のような実際の修法の場としての大自在天の住処（祠）での修法（尊格を踏みつける行為）は、密教経典内での大自在天の降伏譚をモデルとして説かれるに至ったと考えられる。これらは全て、仏教が大自在天の存在というものに何等かの対応をなさなければならなかった状況を想起させる。

また、このような摩擦を生じさせるような記述を含む経軌は、当時の両宗教間での相克も孕んでいたことをも示しているであろう。大自在天が浄居に設定されるに至った経緯とその思想の発展に関しては、異宗教の仏教内への流入の変遷という観点からも興味深い題材であるが、今後の課題としたい。

次に、BT および他の密教経軌とインド文学の文献との間に認められるパラレルな記述を中心に、仏教、ヒンドゥー教で共有される修法について見ていきたい。

3.2.6 *Bhūtaḍāmaratantra* 中の行者像

仏教版、ヒンドゥー教版で同じ題を持つ文献 BT の成立過程が「仏教版を基にしてヒンドゥー教版が作成された」という流れを持つタントラであることに關しては、その発話者に焦点を当てて先に論じた。ヒンドゥー教徒が当経典内の発話者を改変してまで当経典を利用するに至ったことに關して、両宗教で共有され得る儀礼あるいは教理といったものがあつたと仮定できる。ヒンドゥー教にとって有用なもの、あるいは共有され得るものがなければ発話者の改変をなしてまで当文献が利用される理由は無いであろう。

そこで本項では、BT 内でヒンドゥー教と仏教で共通して説かれる儀礼の一つに焦点を当て、BBT の特色を明らかにすることを目的とする。その方法として、BT を中心と

⁶⁹² Ishikawa[1990] p.121, 石川[1993] p.136

したいいくつかの密教経軌に言及される「修法者が肉を売る」という修法の記述を挙げ、その傾向を見ていこう。またインド文学の文献内に描かれる類似する修法も併せて比較対象とする。

3.2.6.1 BT における肉を売る修法

BT 中の、「下男、下女の成就法」(Ceṭīcetākasādhana)に関する記述に「ブーティニーに肉を売る」修法が説かれる。それはまとまった一つの修法として説かれるものである。ここでは、その修法を概観しよう。この修法に関する BBT の該当箇所の梵蔵漢テキスト、および HBT のテキストを対照させたものを項末の 3.2.6 参考資料にまとめて挙げた⁶⁹³。

この修法では、先ず修法のためのマントラが説かれ、修法者は規定の量（8 パラ）の黒山羊の肉を持って śmaśāna（尸林/火葬場）に赴き、四方を見る。その後、śmaśāna に住むマハーブーティニーがバラモンの姿で現れ、肉と同量の黄金でその肉を受け取るとされる。サンスクリットからは主語が不明瞭であるが、漢訳に依れば、マハーブーティニーが肉を受け取らない場合は、マハーブーティニーは金剛手の勅に背いた故に死んでしまうと説かれる。

修法者が黄金を求める理由は、当タントラ中で数度説かれる言葉に見ることができるであろう。それは、この修法の中で説かれるマントラの中にも見られる「貧しき者たちの利益のために」という言葉から推察されるであろう。即ち、修法者自身のためであるか他の貧しい者たちのためであるかは明確ではないが、黄金を求める修法者がいた可能性が指摘され得る。

類似の修法は他の密教文献中にも見ることができる。以下にその記述を見ていきたい。

3.2.6.2 密教文献に見られる肉、酒を売る修法

他の密教文献内にも śmaśāna で肉を売るという行為を含む修法を見ることができる。既に大塚[2013]によって『蘇婆呼童子請問經』の蔵訳にのみ見られる「人肉による成就法」が挙げられており⁶⁹⁴、人肉 (mi yi sha) を売りたいと思う者が dur khrod (śmaśāna) に赴くことが説かれている。ここでは夜に死人の肉を切り取り、左手で肉を持ち、右手に刀 (ral gri) を持って修法を行い、「あなたたちの誰かが肉を買うことを望む」と大声

⁶⁹³ BBT Sanskrit. A 22b5-23b2, T1 16a4-16b3, T2 14b1-14b7, G 7b1-7b3. Tibetan D 244b7-245a3, P 39b3-39b7, sT 56a3-56a7, Ph 203a6-203b4. Chinese T No.1129 552b4-552b16. HBT Sanskrit. N1 14b2-14b5, N2 8b3-8b5, Bo 18b3-18b7, Ba 17a11-17b3, N3 11a7-11b2, M pp.60-61.

⁶⁹⁴ 大塚[2013] p.878, 908。また、Davidson[2002] p.203 にも紹介される

で呼びかけ、それを繰り返し言いながら東西南北を歩き回る行者の姿が描かれる⁶⁹⁵。

類似の修法は『妙吉祥最勝根本大教經』（*khro bo rnam par rgyal ba'i rtog pa gsang ba'i rgyud*）⁶⁹⁶内にも見ることができる。

⁶⁹⁵ 蔵訳部分は D No. 805 130a3-130a7, P No.428 191b3-191b8

⁶⁹⁶ T No.1217, D No.604, P No.291, Ph No.490

当經は、根本（*rtsa ba*）タントラ、続（*phyi ma*）タントラ、続続（*phyi ma'i yang phyi ma*）タントラ、そして秘密儀軌（*gsang ba'i rtog pa*）から構成される。当經典が上記のような形になるまでの詳細な議論は、デルゲ版の編集者である Si tu によって 1733 年になされたとされる（Lin[2013] pp.89-90）*zla 'od gzhon nu'i 'khri shin* 中に「詳しくは Ngor chen の *spyod rgyud rnam bshad* を見よ」（Si tu 240a5）と言及されるように、1420 年の Ngor chen による *spyod pa'i rgyud spyi'i rnam par gzhogs pa legs par bshad pa'i sngon me*（Davidson[1981] p.86）に詳しい。その中で Ngor chen は「*'phags pa 'jam dpal gyi rtsa ba'i rtog pa khro bo rnam par rgyal ba'i rgyud phyi ma* と *phyi ma'i phyi ma gsang ba'i rtog pa* というのは、22 章の全てのタントラを完全にまとめたものであり…」と述べ始め、現行の形になるまでの古い翻訳の存在と、現在の構成になるまでの由来を述べている（Ngor chen 75b5-76b4. Ngor chen によるここでの詳細な解説がどのような典拠から引き出されたものであるかは現在の所不明である。しかし、彼によって当經の古い翻訳の一つとして挙げられる *gshin rje'i gshed bkra khog bslangs* は、プトウン目録中に *gshin rje gshed khro bo rnam par rgyal bsra khog snang rtsa ba'i rgyud / rgyud phyi ma / phyi ma'i phyi ma* と記述されるもの（西岡[1983] p.65）と同定され得る。また、Phug brag 写本 No.490 の序文ではチベット名として *'phags pa 'jam dpal gsang ba'i rgyud kyi rgyal po // pra khog bslang ba'i man ngag / phyi ma'i rgyal po bsrung ba'i lung / khro bo rnam par rgyal ba'i rgyud phyi ma'i yang phyi ma* という題が挙げられており、この翻訳は上記の記述の翻訳であると言い得る）。現在、当經は東北目録、大谷目録では *khro bo rnam par rgyal ba'i rtog pa gsang ba'i rgyud* という題で挙げられるが、本文中の各章名は *'jam dpal gyi rtsa ba'i rtog pa khro bo rnam par rgyal ba las rgyud 'byung ba zhes bya ba'i skabs te dang po 'o //* といった形で述べられ、先の Ngor chen の記述と合わせ考えるならば、原題は *'jam dpal gyi rtsa ba'i rtog pa khro bo rnam par rgyal ba* であったと思われる。この題は漢訳名の『妙吉祥最勝根本大教經』により近いものと言えよう。また、1227~1305 年の人である bcom ldan ral gri あるいは bcom ldan rig ral の *bstan pa rgyas pa rgyan gyi nyi 'od*（当文献は、おそらく 1260 年代後半から 1270 年代前半に書かれたものと指摘されている。（Schaeffer[2009] p.51））内において *rtog pa'i rgyud*（儀軌タントラ）として挙げられる「*'jam dpal gshin rje gshed kyi rtog pa phyi ma'i yang phyi ma* 17 章」（Schaeffer[2009] p.180. また、ターラナータによっても *gshin rje gshed rnam par rgyal ba'i rgyud* の名で引用される（Almogi[2008] p.97.）は当經を指すと考えられる。ここで 17 章とされるのは、Ngor chen による構成説明の「忿怒 Kī li kī la などの儀軌の中の 5 儀軌」という後半部分の 5 章を除いた形であろう。この 17 章から成るという形は、『パンタンマ目録』においても *'jam dpal gshin rje gshed kyi rtog pa phyi ma'i yang phyi ma spyir le'u bcu bdun* として、続続タントラまでを含み「一般

当経に関して、1420 年の Ngor chen による *spyod pa'i rgyud spyi'i rnam par gzhogs pa legs par bshad pa'i sngon me*⁶⁹⁷内で、その由来が詳細に語られている。Ngor chen が当経の古い翻訳の一つとして挙げる Padmasambhava の弟子である Paṇḍita の Vidyākaraṇa と翻訳者 Nam mkha'i snying po の訳が存在したとするならばその翻訳時期を遡らせることが可能であるが、現在の所確実に言えることは、法賢による漢訳年代の淳化五年（994 年）⁶⁹⁸が当経の下限ということである。また、Ngor chen は、当経がチベット人によって構成された偽経である、と見なされていたという経緯を lo tsta ba 'Gos lhas の論から引用した上でその論を否定している⁶⁹⁹。チベット人によって作られた可能性は、漢訳が残ることからも否定されるものである。

漢訳で残るのは蔵訳の 10 章に当たる部分までであり、漢訳は 22 章にまで増広される前のサンスクリット写本からの翻訳であったと推測される。以下に挙げるものは漢訳、蔵訳双方に残る部分である。少し長いが、該当部分の記述を引用したい。

復た次に尸陀林の夜叉等の成就法なり。持明者は先ず自ら死人肉を収め、前の作法の如く自らの擁護を爲し已んぬ。左手を以て刀を執り、右手は肉を執れ。夜分に於て尸陀林中に往きて、無畏相を作して高聲に唱えて言はく。「我れ今、肉を賣らん」と。心に焰鬘得迦大明を念ぜよ。時に彼の林中の所有大惡夜叉羅刹鬼神等は聞きて、高聲に「肉を賣れ」と悉く皆出現す。大威力を具え、種種の大惡相を作す。彼の持明者は怖畏を得ざれ。即ち彼に告げて言はく。「汝等善來。惡相を止息して善相を化せ」と。夜叉言曰はく。高聲に「肉を賣れ。何事を求めんと欲すや」と。行人言曰はく。「我れ所願有り。眼藥及び聖藥等を求めんと欲す」と。是の如く言う時、心は須く猛利にして疑惑を生ずる勿れ。彼の夜叉等は即ち其の肉を収め已りて、一切の求むる所、皆な成就を得。⁷⁰⁰

的には 17 章」として挙げられている（川越[2005a] p.43）。しかしながら『パンタンマ目録』に記述される箇所は後世に付加された部分であることが指摘されており（川越[2005b] p.119）、9 世紀にこの翻訳があったという証拠にはならない。

⁶⁹⁷ Davidson[1981] p.86

⁶⁹⁸ 武内[1976] p.46

⁶⁹⁹ ここで挙げられる 'Gos lhas は 11 世紀の 'Gos khug pa lhas btsas を指すと考えられる。

Ngor chen によって挙げられる 'Gos lhas の論は、Si tu によって「'Gos lhas の *sngags log sun 'byin*」であると言及されるが、参照することのできる *sngags log sun 'byin* には Ngor chen によって挙げられている記述を見ることができない。近い記述は Chag lo tsā ba(1197-1264)に帰せられる *sngags log sun 'byin* 中（Chag lo pp.8-9）に見ることができ、不明瞭である。また、これら 2 つの *sngags log sun 'byin* の著者に関しては疑問が呈されている（Wangchuk[2002], Raudsepp[2009]）。

⁷⁰⁰ T No.1217 91a24-91b5, D No.604 ba 部 8a5-8b2, P No.291 29a2-29a7, Ph No.490 43b5-44a5

ここで述べられる修法では肉と刀（小刀 / chu gri）を持つ左右の手が『蘇婆呼童子請問經』と逆であるが、śmaśāna で「肉を売る」ことを大声で表明するなど強い親縁関係が認められる。

上記 2 つの經典と BT で共有される点は、「夜に śmaśāna で修法を行うこと」そして「肉を受け取ることを呼びかけること」「肉との交換で対価を得ること」である。また、異なる点として、売る肉が BT では山羊肉 (kṛṣṇachāgalamāṃsa) であることに対し、上記 2 つの經典では人肉 (sha chen (mahāmāṃsa)あるいは mi yi sha) であることである。

『蘇婆呼童子請問經』、『妙吉祥最勝根本大教經』、BT 内の類似する修法の例に関わる修法を『金剛薩埵說頻那夜迦天成就儀軌經』中にも見ることができる。当經は、漢訳のみが残るものであり、前述の『妙吉祥最勝根本大教經』と同時期（994 年）、同訳者（法賢）による翻訳であり、經典の性質から「入蔵を許さず」とされたものである⁷⁰¹。

当經では、これまで見てきた肉を売る修法ではなく、酒を売る修法を見ることができる。以下にその記述を挙げよう。

將に尸陀林中に往きて、三度白して言はく。「尸陀林中の諸鬼神等よ。當に來たりて酒を買え」と。是の如く言い已んぬ。時に彼の林中の所有鬼神、必舍佐、羅刹及び羅刹女等、各本形を現し悉く來たりて酒を買う⁷⁰²。

これは「śmaśāna で物を売る修法」という大きな枠組みに入れられ得るものである。

以上に挙げてきた、『蘇婆呼童子請問經』を除く BT および『妙吉祥最勝根本大教經』、そして『金剛薩埵說頻那夜迦天成就儀軌經』は各々宋代の漢訳であり、その成立年代は不確かであるが、śmaśāna に赴き、そこにいる鬼神やブータに肉あるいは酒といった物を渡し、対価を得るという修法を見ることができた。これら修法に関わる記述をインド文学中にも見ることができる。次項においてその記述を挙げよう。

3.2.6.3 インド文学における肉を売る修法

これまで確認してきた、śmaśāna に赴いて肉や酒といったものをブータやピシャーチャに売る、という修法の他の記述をインド文学の中に見ることができる。

7 世紀末から 8 世紀中葉に活躍したと考えられるバヴァブーティ⁷⁰³による戯曲 *Mālatīmādhava* (MM)内に同様の記述を見ることができる。

マーラティーと結ばれることが叶わない状況に落胆したマーダヴァは、以下のように

⁷⁰¹ 注 667 参照。

⁷⁰² T No.1272 314b10-314b13

⁷⁰³ 辻[1973]pp.265-266 n.463

思い立つ。

(sodvegām) saṁśayitajanmasāphalyaḥ saṁvṛtto 'smi / tat kim atra kartavyam / (iti vicintya) na khalu mahāmāṁsavikrayād anyad upāyāntaram paśyāmi /⁷⁰⁴

(心配して) ああ、私の生の目的は不確かなものになってしまった。今、私は何をすべきであろうか？ (と疑問に思って) マハーマーンサを売る以外に方法はない。

そして行者カパーラクンダラーによる Śaktinātha (シヴァ) の瞑想の描写の後、śmaśāna に入るマーダヴァを見た行者カパーラクンダラーは以下のように述べる。

(sakautukam avalokya) tat ko 'yaṁ gambhīramadhurākṛtir uttambhitakuṭilakuntalalakalāpaḥ kṛpāṇapāṇiḥ śmaśānam avatarati /...harati vinayaṁ vāmo yasya prakāśitasāhasaḥ pravigaladaśṛkpaṅkaḥ pāṇir lalannarajāṅgalaḥ // 5 // (nirūpya) sa eṣa kāmāndakīsuhr̥tputro mahāmāṁsasya paṇāyitā mādhabaḥ /⁷⁰⁵

(好奇心を以て見て) おお、あれは誰か。慎重で華奢な姿をし、髪を頭の上に巻き上げ、手にナイフを持って尸林に入る者は？...勇猛さを表した彼の左手にはだらりとした人間の肉があり、血の塊が滴り落ちて、謙虚さを失っている。(気付いて) 彼はカーマンドキーの友の息子である。マハーマーンサの売り手であるマーダヴァである。

ここでは、ナイフ (kṛpāṇa) と人肉 (narajāṅgala / mahāmāṁsa) を手に持つ肉の売り手としてのマーダヴァの姿が描かれる。そして、次の場面において、śmaśāna に赴いたマーダヴァは以下のように述べる。

bho bhoḥ śmaśānaniketanāḥ pūtanāḥ /
aśastrapūtanirvyājam puruṣāṅgopakalpitaṁ /
vikrīyate mahāmāṁsaṁ grhyatām grhyatām idam // 12 //⁷⁰⁶

おお、おお、尸林を住居とする者たちよ、プータナたちよ、
武器の跡がなく腐敗しておらず、本物の、人の肢体から用意された
マハーマーンサを売る。取れ、これを取れ。

この MM 中の描写は、先に挙げた『蘇婆呼童子請問經』、『妙吉祥最勝根本大教經』中の「肉と剣あるいは刀 (ral gri / chu gri) を持って行かう」という修法に一致する。BT では肉と刀の記述は見られないが、śmaśāna に居る者たちに対する「[肉を]取れ」という言葉はマントラの形を取って残る。

⁷⁰⁴ Coulson[1989] p.91, Kāle[1967] p.92

⁷⁰⁵ Coulson[1989] pp.95-96, Kāle[1967] pp.97-98

⁷⁰⁶ Coulson[1989] p.98, Kāle[1967] p.103

既に先行研究によって、この MM 内の「śmaśāna で肉を売る」行為と *Kathāsaritsāgara* (KSS)内の肉を売る記述の共通性が指摘されている⁷⁰⁷。また KSS よりも早く著されたと考えられている *Bṛhatkathāmañjarī* (BKM)⁷⁰⁸にも同様の「肉を売る記述」を見ることができ⁷⁰⁹。KSS および BKM では、足飾り(nūpura)を得るための手段として śmaśāna において肉を売る修法が描かれ、また、双方[肉を]取れ(KSS mahāmāṃsaṃ grhyatām iti ghoṣayan..., BKM vikīṇāno mahāmāṃsaṃ mantrākṛṣṭamahāśavaḥ / grhāṇety...)と呼びかける点は同様である。

この様に、いくつかの文学作品において類似の修法が描かれるが、殊に MM、『蘇婆呼童子請問經』と『妙吉祥最勝根本大教經』は修法者が採るべき姿、即ち手にナイフ(刀)と肉を持つという点で一致し、これら修法が共通の物語をベースとしていたことが指摘され得る。加えて MM と『蘇婆呼童子請問經』の記述では、「肉を売ることを呼びかけながら śmaśāna 内を移動する」という点でもその修法内容の近似性が示されるのである⁷¹⁰。

仏教版 BT が依ったと明確に示され得る典拠は現在の所見つかっていないが、上記の様な例と同様、少なくともこの部分に関してはモチーフとなるものが存在したと推測される。

仏教版の BT では「[肉を]取れ」という言葉を含むマントラを 8000 回誦すことで sarvamāṃsavikrayakarman (一切の肉を売る儀礼)を成就するとされる一方で、ヒンドゥー版では対応するマントラを誦すことで Piśitākaraṣṇīdevī の成就があるとされる。この改変の理由は先の BKM の記述にそのヒントを見ることができるだろう。即ちそれは、mantrākṛṣṭamahāśavaḥ (マントラによって引き寄せられた人肉を持った者=修法者)という記述である。BKM では取引に用いる肉はマントラによって得られたものであり、この描写はヒンドゥー版 BT のマントラによる piśitākaraṣṇīdevī (肉を引き寄せる女神)の成就という記述に対応するであろう。

⁷⁰⁷ Kāle[1967] p.24, Penzer[1984] pp.214-216

この記述に関しては Durgāprasād[1930] p.105, Brockhaus[1839] p.424, 岩本[1957] p.118

⁷⁰⁸ 土田[2017]p.99, 108

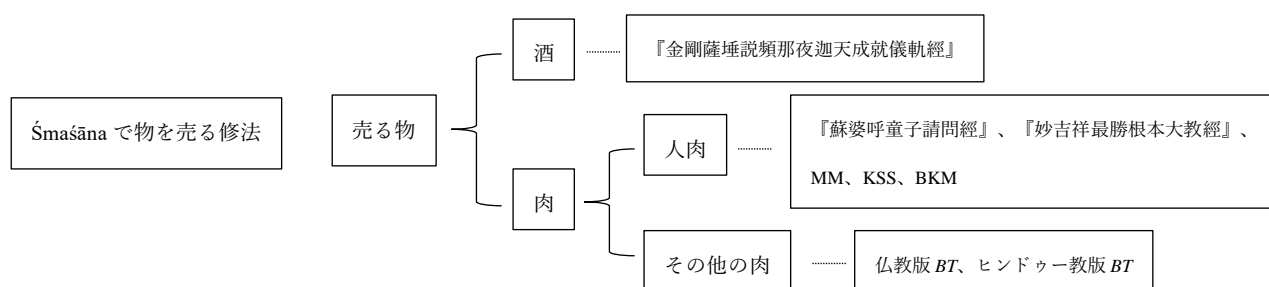
⁷⁰⁹ Śivadatta[1931] p.126

⁷¹⁰ 『蘇婆呼童子請問經』では、「東西南北を速やかに歩き回って完全に[あなたが肉を買うことを望むと]繰り返すべし」(shar dang nub dang lho dang byang phyogs su // myur du bskor cing shin tu brjod par bya //)(D No.805 130a5-130a6, P No.428 191b6)と述べられ、MM では「歩き回って、武器の跡がない[肉を売る]、ということなどを繰り返して」(parikramya aśastrapūtetyādi pathitvā)(Coulson[1989] p.101, Kāle[1967] p.107)と描かれる。尚、『蘇婆呼童子請問經』の注釈の一つ(D No.2672 81b2, P No.3497 90b7-90b8)には、この東西南北の巡り方が詳細に説かれる。この「四方に注意を払う」という要素は BT 内で「四方を観る」という形で言及される。

この点においてヒンドゥー版 BT は仏教版 BT に大枠では合意しつつも、改変者の知識或いは依って立つ他の物語に従って修正が加えられたと推察される。

前述したように、BT は「仏教からヒンドゥー教」という流れを持つと考えられる文献である。ヒンドゥー教に受け入れられる過程で、共有され得ない尊格名は修正を加えられており、今回述べてきた肉を売るという修法に関しても、大枠では共通するものの、部分的に修正を加えられ、再構成されていた。この事実は同時に、改変をなされていない部分に関してはヒンドゥー教徒にとって受容され得るものとして承認されたことを意味するであろう。

これまで提示した修法を分類すれば、「śmaśāna で物を売る修法」という大きな枠組みが存在し、その枠組みの中で「売る物」の分類が存在する。その中の「肉」を売るカテゴリで「人肉」を売る修法が『蘇婆呼童子請問經』、『妙吉祥最勝根本大教經』、MM、KSS、BKM であり、「その他の肉」即ち仏教版 BT では黒山羊肉を売る修法である。以上を図示すれば以下の様になる。



これら修法自体が何に由来する修法であるかは言明できないまでも、少なくともこの修法に関しては、人口に膾炙した物語を基礎とした、仏教・ヒンドゥー教双方に共有された修法であったと言い得る。この様な、共通の修法を扱う題材としては起屍鬼法が挙げられるが⁷¹¹、本項で取り上げた「śmaśāna で物を売る修法」も同様の題材の一つであったと言えよう。また仏教版 BT 内のこの修法に関しては、「śmaśāna で物を売る」という分類の流れに沿って作られたと考えられ、当タントラの特徴の 1 つであると言い得る。修法内で売る肉（人肉あるいは山羊肉）の異なりの背景に関しては今後の考察対象である。

<3.2.6 参考資料テキスト>

① 【仏教版】

①-1 BBT チベット訳

⁷¹¹ 上村[1978] p.289、大塚[2013] pp.820-821, pp.876-877

de nas rnam par bshad ^{(712-byā ba⁻⁷¹²) //⁷¹³} ‘byung [D 245a1] po ‘dul [P 39b4] ba’i rgyud
 chen gyi // bran pho⁷¹⁴ dang ni bran mo dag / sgrub⁷¹⁵ par byed pa’i cho ga’o // om
 rā⁷¹⁶ hu rā⁷¹⁷ hu⁷¹⁸ mahā tse du⁷¹⁹ ka nan⁷²⁰ da ri⁷²¹ dha⁷²² nan⁷²³ hi⁷²⁴ [Ph 203a7]
 ta⁷²⁵ ha⁷²⁶ ra thā⁷²⁷ [sT 56a4] ya⁷²⁸ / om ^{(729-hu hu hu hu⁻⁷²⁹) /⁷³⁰} gri⁷³¹ hna⁷³² gri⁷³³
 hna⁷³⁴ / māṃ⁷³⁵ sa si ddhiṃ⁷³⁶ me⁷³⁷ pra⁷³⁸ ya⁷³⁹ tstsha⁷⁴⁰ svāhā⁷⁴¹ / ra skyes nag po’i
 sha ^(742-btsong ba’i⁻⁷⁴²) sngags [P 39b5] te⁷⁴³ mtshan [D 245a2] mo dur⁷⁴⁴ khrod du song
 nas brgya rtsa brgyad⁷⁴⁵ bzlas na⁷⁴⁶ sha thams cad btsong⁷⁴⁷ ba’i [sT 56a5] las ‘grub⁷⁴⁸

-
- ⁷¹² Ph par bya
⁷¹³ Ph /
⁷¹⁴ P po
⁷¹⁵ Ph grub
⁷¹⁶ Ph ra
⁷¹⁷ Ph ra
⁷¹⁸ D, P - /
⁷¹⁹ sT tu; Ph tra
⁷²⁰ Ph nam
⁷²¹ Ph ra
⁷²² Ph de
⁷²³ Ph nam
⁷²⁴ P ti
⁷²⁵ Ph ta /
⁷²⁶ Ph a
⁷²⁷ Ph tha
⁷²⁸ D, P yā
⁷²⁹ D, P, sT hra hra hra hra hra
⁷³⁰ P omit.
⁷³¹ Ph ghi
⁷³² D, P, sT hṇa
⁷³³ Ph ghi
⁷³⁴ D, P, sT hṇa
⁷³⁵ P maṃ; Ph mo
⁷³⁶ P dhi ma; sT, Ph ddhi
⁷³⁷ Ph mme
⁷³⁸ D, sT bra
⁷³⁹ Ph yad
⁷⁴⁰ Ph tsha
⁷⁴¹ sT svahā; Ph sa ha
⁷⁴² P btsong pa’i; Ph la
⁷⁴³ sT te /; Ph te / ‘byung po ‘dul ba’i rgyud chen gyi / bran po [Ph 203b1] dang ni bran mo dag / grub
 par byed pa’i cho ga’o // sha bcong pa’i sngags te /
⁷⁴⁴ Ph du
⁷⁴⁵ Ph omit.
⁷⁴⁶ sT na /
⁷⁴⁷ P btsongs
⁷⁴⁸ Ph grub

par⁷⁴⁹ 'gyur⁷⁵⁰ ro // [Ph 203b2] ⁽⁷⁵¹⁻mtshan mo⁻⁷⁵¹⁾ dur⁷⁵² khrod du song nas ⁽⁷⁵³⁻sha
 srang⁻⁷⁵³⁾ brgyad khyer nas phyogs bzhir rnam par bltas⁷⁵⁴ te / kye kye dur khrod na
 gnas pa'i 'byung mo rnam ⁽⁷⁵⁵⁻sha nyo'am⁻⁷⁵⁵⁾ zhes [P 39b6] bos nas⁷⁵⁶ /⁷⁵⁷ bram ze'i [D
 245a3][sT 56a6][Ph 203b3] gzugs kyis⁷⁵⁸ mdun du 'dug ste / kye skyes bu chen po ci
 bzhed ces⁷⁵⁹ smra⁷⁶⁰ na / sgrub⁷⁶¹ pa po⁷⁶² yis⁷⁶³ gser 'dod do zhes smra⁷⁶⁴ ste⁷⁶⁵ /
 gser srang brgya⁷⁶⁶ ster bar byed do // de nas [Ph 203b4] sha sbyin⁷⁶⁷ te⁷⁶⁸ gal te mi
 'dod na mig [sT 56a7] dang spyi⁷⁶⁹ bo 'gas pa'am⁷⁷⁰ [P 39b7] 'chi bar 'gyur⁷⁷¹ ro //

①-2 BBT 漢訳

復次金剛手大教王降伏一切部多僕從成就之法眞言曰 唵_引囉_引虎囉_引虎摩賀_引唧吒
 迦_引喃捺哩捺囉_{二合}赦_引多囉_{二合}囉他_{二合}野 唵_引虎虎虎虎虎_{二合}唎_{二合}恨_{二合}拏_{二合}曼婆悉地孕
{二合}彌鉢囉{二合}野蹉娑嚩_{二合}賀_引 持誦者於夜分時。將黑殺羊肉八兩往尸陀林中。誦
 眞言八百遍加持於肉。然後以眼視四方。高聲唱言我今賣肉。即時尸陀林住部多女。
 變身為婆羅門。告誦者曰。汝大丈夫賣肉欲要何物。持誦者曰我要黃金。女與金八
 兩。即收金與肉。女不授肉違金剛手勅。女即命終。

① -3 BBT サンスクリット

[A 22b5] // [T1 16a4] athāto bhūataḍāmaramahātantrarāje ceṭicetaḥkānām⁷⁷² [T2 14b2]

-
- 749 D, P bar
 - 750 Ph 'gyu
 - 751 Ph de nas
 - 752 Ph du
 - 753 Ph ra skyes nag po'i sha sra nge
 - 754 Ph lta
 - 755 Ph omit.
 - 756 Ph na
 - 757 sT omit.
 - 758 Ph kyī
 - 759 Ph zhes
 - 760 Ph smras
 - 761 Ph gsgrub
 - 762 sT pos
 - 763 sT, Ph omit.
 - 764 Ph smras
 - 765 Ph te
 - 766 Ph brgyad
 - 767 Ph byin
 - 768 sT, Ph /
 - 769 D, P sbyi
 - 770 P ba'am
 - 771 Ph 'gyu
 - 772 A caṭacetikānām; T1 ceṭicetaḥkānām; T2 cetacetikānām

sādhana⁷⁷³ vyākhyāsyāmaḥ⁷⁷⁴ //⁷⁷⁵ om [A 23a1] rāhu 2 mahācetaṭakāṇā⁷⁷⁶
daridrāṇā⁷⁷⁷ hitārthāya⁷⁷⁸ om hu hu hu hu hu⁷⁷⁸ gr-[T1 16a5]hna⁷⁷⁹ (780-
māṃsasiddhi⁷⁸⁰) me praya-[T2 14b3]ccha svāhā //⁷⁸¹
kṛṣṇachāgalamāṃsavikrayamantraḥ⁷⁸² //⁷⁸³ rātrau svam⁷⁸⁴ śmaśāne⁷⁸⁵ gatvā aṣṭa-[A
23a3][G 7b2]sahasra⁷⁸⁶ japet⁷⁸⁷ sarvamāṃsavikrayakarmāṇi⁷⁸⁸ siddhyanti⁷⁸⁹ //⁷⁹⁰
tataḥ⁷⁹¹ śmaśāna⁷⁹² [T1 16b1] gatvā māṃsam⁷⁹² a-[A 23a4]ṣṭapalaṃ grhītvā⁷⁹³
caturdiśa⁷⁹⁴ avalokya⁷⁹⁵ mocayet⁷⁹⁶ /⁷⁹⁷ tataḥ śmaśāna-[T2
14b5]vāsinīmahābhūtinī⁷⁹⁸ brāhma-[A1 23a5]narūpeṇa⁷⁹⁹ puratastīṣṭhati⁸⁰⁰ /⁸⁰¹ bho
mahāpuruṣa⁸⁰² kim iccha-[T1 16b2]si⁸⁰³ //⁸⁰⁴ sādakena⁸⁰⁵ vaktavya⁸⁰⁶ suvarṇa-

⁷⁷³ T2 sādhanā

⁷⁷⁴ A vyākhyāsyāma; T2 vyāsyāsyāma

⁷⁷⁵ T2 // //

⁷⁷⁶ A mahācetaṭakā; T1 mahācetaṭakā; T2 mahācetaṭakā

⁷⁷⁷ A hitārthā // // ya; G hitārthāya

⁷⁷⁸ A hu 5; G hūṃ hūṃ hūṃ hūṃ

漢訳に従い、T1, T2 の記述を用いた。

⁷⁷⁹ G grhna 2

漢訳に従い、T1, T2, A の記述を用いた。

⁷⁸⁰ A māṃsam si-[A1 23a1]ddhiṃ; T1 māsam saṃsiddhiṃ; T2 māṃsam siddhiṃ; G māṃsasiddhiṃ

⁷⁸¹ T2 // //

⁷⁸² A kṛṣṇachāgalamāṃsavikrayamantraḥ; T1 kṛṣṇachāgalamāṃsa / vikrayamantraḥ; T2

kṛṣṇachāgalamāṃsavikrayamantra; G kṛṣṇachāgalamāṃsavikrayamaṃtraḥ

⁷⁸³ T1 /; T2 // //

⁷⁸⁴ A, T1 omit.; T2 sa

⁷⁸⁵ A, T1, T2 śmaśānaṃ

⁷⁸⁶ T1 'ṣṭasahasraṃ; T2 aṣṭasahaśraṃ

⁷⁸⁷ A, T2 omit.

⁷⁸⁸ A sarvvaṃsaviṣṭakarmāṇi; T1 sarvvaṃsaviṣṭakarmāṇi; T2 sarvvaṃsavi-[T2
14b4]kriyakarmāṇi; G sarvvaṃsaviṣṭakarmāṇi

⁷⁸⁹ A, T2 siddhya

⁷⁹⁰ T1 /

⁷⁹¹ T2 tata

⁷⁹² A, T1, T2 chāgalamāṃsam; G māṃsam

⁷⁹³ A, T1, T2 grhya

⁷⁹⁴ A, T1, G caturddiśaṃ; T2 catudisam

⁷⁹⁵ A, T2 avalokād

⁷⁹⁶ A yojayet; T2 yojaya

⁷⁹⁷ A, T2 omit.

⁷⁹⁸ T1 -vāsinīmahābhūtinī; T2 -vāsinimāhābhūtinī; G śmaśānanivāsinīmahābhūtinī

⁷⁹⁹ T1 brāhmarūpeṇa

⁸⁰⁰ A, T2 puratastīṣṭati; T1 puratastīṣṭhanti

⁸⁰¹ A, T1, T2 omit.

⁸⁰² T2 mahāpuruṣa

⁸⁰³ T2 icchati

⁸⁰⁴ A, T1, T2 /

⁸⁰⁵ A sādakena

⁸⁰⁶ A, T1, T2 omit.

[T2 14b6]m⁸⁰⁷ i-[A 23b1][G 7b3]cchāmi⁸⁰⁸ /⁸⁰⁹ suvarṇṇam⁸¹⁰ aṣṭapalaṃ prayacchati⁸¹¹
 //⁸¹² tato māṃsam⁸¹³ dātavyaṃ //⁸¹⁴ (815-yadi na⁸¹⁵) gr̥hnāti akṣi-[A 23b2]mūrdhni⁸¹⁶
 sphuṭati⁸¹⁷ mriyate⁸¹⁸ vā⁸¹⁹ //⁸²⁰

(和訳：次に、『ブータダーマラ・マハータントララージャ』における下女、下男たちの成就を詳説しよう。「オーム ラーフ ラーフ 偉大なる下男たちの 貧しき者たちの 利益のために オーム フ フ フ フ 取れ 肉の成就を⁸²¹ 私に 与えよ スヴァーハー」[以上が]黒山羊の肉を売るマントラである。行者自身は、夜に火葬場に赴いて、8000回[マントラを]誦せ。一切の肉を売る儀礼を成就する。次に、火葬場に赴いて、8パラの[山羊]肉を取って、四方を覩て[肉を]投げよ。その時、火葬場に住むマハーブーティニーはバラモンの姿で面前に現れる。[その者は]「おお、偉大なる聖者よ。あなたは何を望むのか」[と言う]。修法者は、「私は黄金を望みます」と言うべきである。彼女は8パラの黄金を与える。次に、[修法者は]肉を与えるべきである。もし、肉を取らないならば、眼と頭は破裂し或いは死ぬ。)

② 【ヒンドゥー教版】

⁸⁰⁷ G suvaṇṇam

⁸⁰⁸ T2 icchati

⁸⁰⁹ A //

⁸¹⁰ A, T1 tataḥ suvarṇṇam; T2 tata suvarṇṇam; G suvaṇṇam

⁸¹¹ T1 prayacchāmi

⁸¹² A, T1 /; T2 omit.

⁸¹³ A, T1 māṃsam; T2, G māṃsa

⁸¹⁴ A, T2 omit.; T1 /

⁸¹⁵ A, T2 dīna

⁸¹⁶ A ajimūrdhni; T2 akṣimūrdhni; G akṣimūdhni

⁸¹⁷ T2 sphuṭanti

⁸¹⁸ T1 mriyā [T1 16b3]

⁸¹⁹ T2 omit.

⁸²⁰ T2 // //

⁸²¹ 写本 T2 と G の読みを採用すれば「取れ 肉の成就を 私に 与えよ」となるが、A 及び T1 の読みに従えば「取れ 肉を 成就を 私に 与えよ」となる。チベット語の音写および漢訳音写の「曼婆悉地孕」に従えば、肉の成就を与えよという前者の読みであるが、直後にこのマントラは「黒山羊の肉を売るマントラ」と言われるため、「取れ 肉を」という呼びかけの方が自然であるか。

viṣabījāt⁸²² tato ⁽⁸²³⁻varma ta-[Ba 17a12]to astram samuddharet⁻⁸²³⁾ /⁸²⁴
 [N1 14b3] māṃsam⁸²⁵ me padam ābhāṣya prayacchānalavallabhā⁸²⁶ /⁸²⁷
⁸²⁸ [Ba 17b1] rātrau pitṛbhuvam⁸²⁹ gatvā⁸³⁰ japed aṣṭasahasrakam⁸³¹ /⁸³²
 piśitā-[N3 11b1]karṣiṇīdevī⁸³³ siddhā⁸³⁴ bha-[N1 14b4]vati niścitam⁸³⁵ /⁸³⁶
 nītvā⁸³⁷ māṃsapalāny⁸³⁸ aṣṭau [N2 8b4][Ba 17b2] vilokyai-[Bo 18b6]va⁸³⁹ caturdiśam⁸⁴⁰
 /⁸⁴¹
⁽⁸⁴²⁻yojayed brahmarūpeṇa⁻⁸⁴²⁾ puras⁸⁴³ ti-[N3 11b2]ṣṭhati⁸⁴⁴ bhūtinī /⁸⁴⁵

⁸²² N1 viṣabījā; Bo viṣabījān; Ba viṣam bījam; M viṣabījam

⁸²³ N1 varmma toyaghnam śukram uddharet; N2 varma toyaśya samuddharet; Bo varmato yaś ca samuddharet; N3 varmmato yañ cāpi samu-[N3 11a8]ddharet; M varma toyaghnañ ca samuddharet
 この viṣabīja- から -vallabhā までは、暗号化されたマントラ部分である。刊本ではこの暗号化を解いたマントラが記されるが、その解読法については言及されていない。写本 Bo には写本の上下左右の空いたスペースに暗号化されたものに対応するマントラが記される。写本 Bo においては対応するマントラは om hrīm hūm phaṭ māṃsam me prayaccha svāhā と記される (B 18b 上部に記述)。また、Ba 写本においても、この記述の後に対応するマントラが記述され、それは om hūm phaṭ māṃsam me prayacha svāhā // というものであり、おおよそ Bo 写本のマントラと一致する。ここで説かれる phaṭ は、Ba 写本の astra に対応するものである。Mantrakośa 中には刊本の toyaghna や toya といった単語は見出せない。そのため、ここでは Ba の記述を採ったが、tato 'stram が正しい形であるが、韻律の関係から、記述をそのまま残した。

⁸²⁴ N1, Bo, Ba //

⁸²⁵ N1 māsam; N2 māse; N3 māsam

⁸²⁶ N1 prayached anavarllabhā; N2, Bo, Ba pra-[Bo 18b4]yachānalavalla-[N2 8b3]bhā; N3 prayachelenavandabhā

⁸²⁷ N1, Bo, Ba //

⁸²⁸ Ba add. om hūm phaṭ māṃsam me prayacha svāhā //

⁸²⁹ N3 pitṛbhuvan

⁸³⁰ B gatvā //; N3 datvā

⁸³¹ N1, N2, Bo, Ba -srakam; M -sakam

⁸³² N1, Bo, Ba //

⁸³³ N1, N2 piśitākarṣaṇīdevī; Bo piśatā-[Bo 18b5]karṣaṇīdevī; Ba piśācākarṣiṇī

⁸³⁴ Bo sidhā

⁸³⁵ N1, N2, Bo, Ba -tam

⁸³⁶ N1, Bo, Ba //

⁸³⁷ Ba dattvā

⁸³⁸ N1 māṃsaphalāy; Bo māṣaphalāy; N3 māṃsapadāny

⁸³⁹ N1, M vilokya ca

⁸⁴⁰ N1 caturddāsam; N2, N3 caturddiśam; Bo, Ba caturdiśam

⁸⁴¹ N1, Ba //

⁸⁴² M yoṣibrahmasvarūpeṇa

⁸⁴³ N1 pura

⁸⁴⁴ Bo purastiṣṭati

⁸⁴⁵ N1, Ba //

tato māṃsaṃ pradā-[N1 14b5][Bo 18b7]tavyaṃ bhuktvā⁸⁴⁶ māṃsaṃ⁸⁴⁷ prayacchati⁸⁴⁸ [Ba 17b3] /⁸⁴⁹

(⁸⁵⁰-māṃsādāne ca⁻⁸⁵⁰) mriyate⁸⁵¹ akṣimūrdhni⁸⁵² sphuṭaty api // //⁸⁵³

(和訳： viṣabīja (=om)、それから varma (=hum)、次に astra (=phaṭ) を取れ。
māṃsaṃ、me という言葉を言って、prayaccha、analavallabhā (=svāhā)。(om hum phat
māṃsaṃ me prayaccha svāhā / オーム フン パット 肉を 私に 与えよ スヴァ
ーハー)

夜に、祖霊の地（墓場）に赴いて、8000 回[上の]マントラを誦せ。Piśitākaraṣiṇī 女神
は確かに成就される。8 パラの肉を持って行き、四方を見て、専心せよ。ブーティ
ニーはバラモンの姿で面前に現れる。次に、与えるべき肉を持って、[修法者は]肉
を捧げる。[修法者が]肉を与えない時、[修法者は]死に、眼と頭は破裂するのであ
る。)

⁸⁴⁶ Bo, Ba bhuktā

⁸⁴⁷ N2, M māṃsa

⁸⁴⁸ N1, Bo, Ba, N3 prayacchati; N2 palānyaṣṭau vilaukyai-[N2 8b5]va caturddiśaṃ

⁸⁴⁹ N1, N2, Bo, Ba //

⁸⁵⁰ N1 māṃsadānān; Bo māṃsādane ca; Ba māṃsādānā ca; N3 māṃsadāne ca; M māṃsādānena

⁸⁵¹ N1 mṛte yāvat

⁸⁵² N1, N2, Bo akṣimūrdhni; N3 yo 'kṣimūrdhni; M akṣikukṣiḥ

⁸⁵³ N2 /; Bo 1 //; Ba // 8 //; M // 23 //

結論 異宗教間の混交のシステムの一端

本論文では、異宗教が対峙した際にどのように対応し、どのような関係性を持つかという問題に関し、密教とヒンドゥー教のテキストを検討することにより、その具体的事例を提示し、特色を明らかにすることを目的とした。

第1章では、密教とヒンドゥー教の関わりに関する先行研究を検討し、両宗教の関係性においては諸要素の「ヒンドゥー教から仏教」への流れと、「仏教からヒンドゥー教」への流れという2つのパターンがあることを指摘した。

第2章では主として「ヒンドゥー教から仏教」への流れの具体例として、「授記」あるいは殺を伴う「降伏」と再生という形での仏教によるヒンドゥー教の尊格（主として大自在天）の取り込みの事例と、その行為に対する仏教徒の解釈を見た。その解釈の方法には2つのパターンがあり、「殺」が自性の変化であるとする態度と、「大悲心」に依る「殺」を肯定する態度があることを明らかにした。

そして第3章では、「ヒンドゥー教から仏教」とは逆の方向性である「仏教からヒンドゥー教」への流れの具体例として、*Bhūtaḍāmaratantra* という共通する名称を持つ文献である BBT と HBT を分析した。HBT が BBT の記述を取り込む事例を取り上げ、HBT が BBT の元の記述を、自宗教の文脈に合わせるために改変を加えている事実を指摘した。この中には、Bhattacharyya によって言及されてはいたがこれまでの研究史において放置されてきた問題が含まれている。

両 BT の比較を通して、BBT がヒンドゥー教の HBT として取り込まれた際の具体的な操作の事例としては、①登場する尊格の名称の変更、②マントラの暗号化、③術語の改変、という大きく3つの項目を挙げてきた。これら具体的事例は、特定の文献を取り入れる際に行った、宗教的混交の過程を示す恣意的操作の事例である。

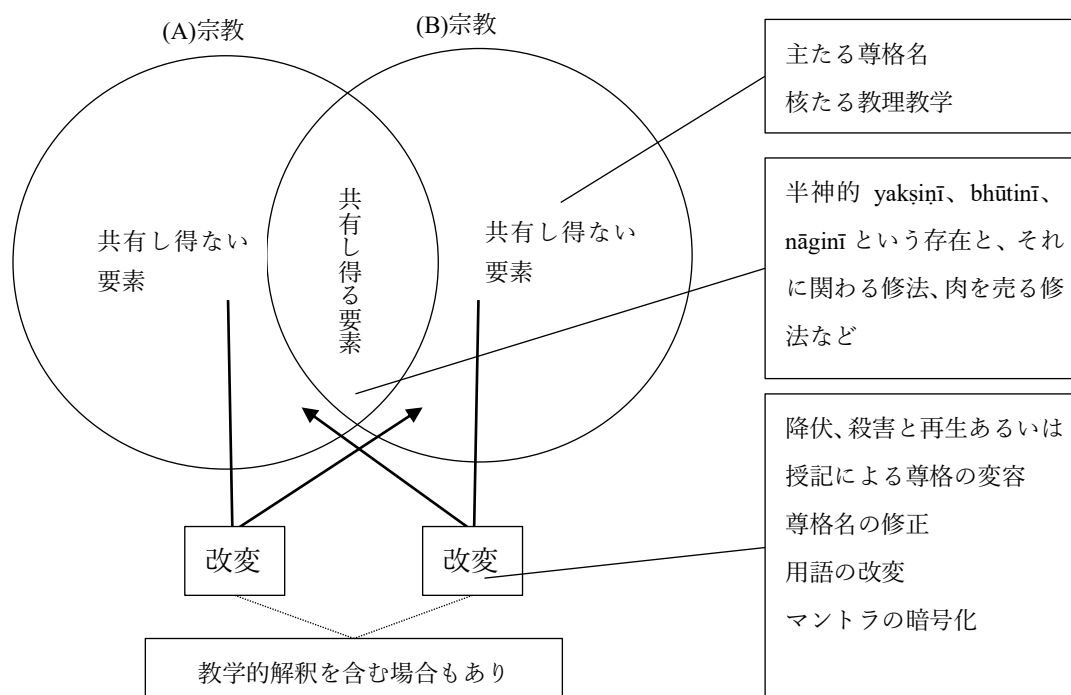
bodhisattva や vajrapāṇi などの仏教的用語の利用、それに伴う文章の混乱、リングを踏みつける修法をほぼそのままに利用しているという点などを考慮すれば、HBT は BBT を改変して作成されたと言い得るであろう。Ruegg の言葉を用いるならば、HBT は「借用モデル」(borrowing model) の範疇に含まれるであろう。

ここまで述べてきた両 BT の比較や、降伏と再生による尊格の変容という点からは、少なくとも、密教とヒンドゥー教の「共有し得る要素」と「共有し得ない要素」の二つの範囲が設定でき、次ページに示した図のような形が想定される。

「共有し得ない要素」は、ある宗教で重要な位置を占める尊格や、核となる教理教学が当てはまるであろう。この「共有し得ない要素」の範囲に関わるものは、宗教内の文脈に合わせて修正と変更が行われる。BT の場合は、3.2.2 で見てきたように Mañjuśrī や Krodhahairava といった尊格が修正と変更を加えられていた。『初会金剛頂経』『降三世品』では、Mahādeva の再生と成仏という文脈の中で尊格を改変し、仏教内に取り込ん

でいる。この再生と成仏に対する教学的解釈に関しては2.3.4で見えてきた。

また、3.2.5で見えてきたような *ekalinga* を足で踏むというような修法も「共有し得ない要素」に含まれると考えるべきであろうが、BBT と HBT 双方のこの修法の記述に大きな違いが認められないことに疑問が残るのは事実である。但し、*ekalinga* の記述が全て、何らかの対象を足で踏むという修法を伴うわけではなく、修法に適した場として描かれるものに関しては「共有し得る要素」に含められるであろう。



ここでの「共有し得る要素」内に含まれるのは、3.2.3 で扱った *Yakṣiṇī* の修法や、その他の BT 内に説かれる *Bhūtiṇī* などの半神の修法、3.2.6 で扱ったインド文学中でも扱われている肉を売る修法などである。しかしながら、各修法の記述が大枠では共有されるものの、3.2.3 で挙げた *śiraḥsthāna* と *śivasthāna* の関係のように、細かな改変も施されている。この細かな改変は、BBT と HBT 内で説かれるマントラの暗号化という点にも見ることができる。マントラの暗号化という操作を行い、かつ仏教特有のテクニカルタームを改変したマントラの記述は、「共有し得る要素」と「共有し得ない要素」を明確に判断して操作を行った例と言える。

一方で、BBT を改変せずに利用したと考えられる UT のような例も挙げられるため、各文献の利用方法にはいくつかの展開過程が認められるであろう。

この BT、即ち文献自体の借用と改変に関して、何故わざわざ他宗教の文献に以上のような操作を加えてまで、場合によっては改変という操作を加えずに当文献を利用しようとしたのであろうか。その仮説として挙げるのが、「そもそも BBT が共有し得る要素を多分に含んでいた文献であった」という仮説である。3.2.6 で見たように、いくつかの

密教経軌と BBT、インド文学の中にパラレルな修法が確認できることから、人口に膾炙した共通のモチーフがあったと推測される。現段階では、その初出と由来を特定することはできていないため仮説の域を出ることは無いが、BBT がこのような「共有し得る要素」を多分に組み込んだものであり、その要素故に HBT がこれを再利用可能であったと仮定され得る。

3.1.1 や 3.1.2、3.2.3 で見てきたように、このような共通の要素と共有される要素を含んだ BT のような文献が各宗教において等閑視された、あるいは異教のものとして排除されたというわけではなく、ある修法の根拠として、あるいは引用元としても後世用いられた。

文献の編纂者にとって「共有し得ない要素」は改変、修正され、あるいは「降伏」と「再生」あるいは「授記」のようなイニシエーションの記述を以て自派の中に取り込まれる。少なくとも本論文で扱った内容に関しては、それは仏教であれヒンドゥー教であれ似通った操作を行っている。また、大枠では「共有し得る要素」に対しては若干の改変を伴って受容されていた。

以上、仏教とヒンドゥー教間の要素貸借とその取り込みの方法の具体例を挙げ、そのモデルを提示した。また、いくつかの「共有し得る要素」と「共有し得ない要素」という範囲から、異宗教間の混交のシステムの一端を考察した。本論文のタイトルである「相克」は、上述の「共有し得ない要素」の範囲を示し、「調和」は「共有し得る要素」の範囲と、改変の後に受容された要素を示すものである。

ここで、宗教学的視点からの「包括主義」(Inclusivism) という概念についても少し言及すべきであろう。「包括主義」は、宗教間の関係性を示す分類の中の一つの形であり、「排他主義」(Exclusivism)、「多元主義」(Pluralism) と共に多く言及される概念である⁸⁵⁴。インドにおける文脈での「包括主義」に関しての主張を行ったのが Paul Hacker であり、Hacker によって「包括主義」は以下のように定義される。

包括主義は、我々がインドの宗教、特にインドの宗教哲学と呼んでいる分野から得られるデータを記述する際に、私が使っている概念である。包括主義とはつまり「異なる宗教や世界観を持つ集団にとり中心的となっている見解が、自分が属する集団のそれと同一であるのだ、と説明すること」を意味する。他者の持つものを、自分のものと同一視しておきながら、さらに、この他者がなんらかの仕方で自らの下に位置していたり劣等であったりすることを主張する

⁸⁵⁴ この類型論に関しては岸根[2001]に詳説されている。また、この概念は、キリスト教が他宗教を捉えるという所から始まっているが、「この他宗教理解の類型論は、任意の宗教がそれ以外の宗教に対してとりうる立場の違いという形に一般化して考えることができると思う」(岸根[2001] p.12) としている。

場合、この主張はたいがい包括主義に属するものだということができる。しかも、他者のものが自分のものと同一であるということの証明は、多くの場合行われない。⁸⁵⁵

この包括主義の例として提示される一人が Vivekananda (1863-1902) である。確かに、Vivekananda の用いた「あらゆるブッタの教えは、すべてヴェーダーンタの中に見出すことができます」⁸⁵⁶や「ブッタは偉大なヴェーダーンティストでした」⁸⁵⁷といった言葉⁸⁵⁸は、上記の概念に当てはまるものだと考えられる。

少なくとも本論文で扱った範囲に関して、仏教とヒンドゥー教は確かに互いを取り込み合っている。大自在天が成仏する例は、実際、他宗教であるヒンドゥー教の尊格を自宗教の文脈に引き込むものである。しかし、降伏される対象、あるいは授記を受ける対象としてみなされた大自在天が成仏し、他の仏と同様に崇拜されるべき存在となる点は上述のような「包括主義」を検討する際に、着目すべきであろう。両 BT の場合はどうであろうか。今回例示した範囲では、「全ての宗教は結局は宗教 A に帰一する」というような全体的な包括に関わる例は見られなかった。また、他宗教を引き入れる際には明確な「修正」や「改変」を行っていた。それ故に、無批判に、あるいは何の改変も施さずに「宗教 B は宗教 A に完全に包括される」という包括関係とは言うことができない。各々の宗教理解、解釈によって他宗教の部分的な改変と修正を行った形である。先に述べた「共有し得ない要素」は、自己の宗教にとって無批判に受け入れ不可能な要素であり、だからこそ改変がなされる。

本論文で提示してきた諸例が Hacker の述べる所のいくつかの「包括主義」に果たして組み込まれるかどうかは、他の諸事例と合わせ概念分類することで今後明らかになるであろう。本論文で中心的に扱った、*Bhūtaḍāmaratantra* は、豊富な儀軌の用例を含み、仏教とヒンドゥー教で共有し得る要素を備え、異宗教であるヒンドゥー教にとっても有益なものであり、再利用されるほど当時のインドの人々のニーズに応え得る文献であったと言える。

⁸⁵⁵ 邦訳は北田信による和訳である、パウル・ハッカー[2010] p.504 に依った。Hacker によるこの定義は研究者によって頻繁に言及される。例えば Kiblinger[2005] pp.7-8、Ruegg[2007] p.97、丸井[2010] pp.111-112、丸井[2015] pp.22-23 などが挙げられる。これに対応する出版物である Hacker[1983]の該当ページは Hacker[1983] p.12。Hacker の Inclusivism については、赤松[2007] pp.167-169 においても言及されている。

⁸⁵⁶ "Every one of Buddha's teachings is founded in the Vedantas". (*The Complete Works of Swami Vivekananda*. vol. II. p.509)

⁸⁵⁷ "Buddha was a great Vedantist...". (*The Complete Works of Swami Vivekananda*. vol. VII. p.59)

⁸⁵⁸ 上記の言葉を含む Vivekananda の仏教に対する態度に関する言説の変容は外川[2017]に詳しい。

本論文でのモデルはあくまでごく一部の文献の記述を扱った上でのものである。先述の「共有し得る要素」が具体的にどのような起源を持つものから引き出され、利用されるようになったかを特定するには、時代的に更に遡り得る文献内の類似する記述の提示によって明らかにされる。そのため、より包括的で更に複雑なモデルの提示は、本論文で扱いきれなかった問題と合わせて、今後の課題としたい。

謝辞

「研究は現代に活かなければ意味がない」。私が博士前期課程の際にある先生から聞いたこの言葉が、今でも頭の中に残っている。この言葉が私の研究の羅針盤になっていることは間違いないが、本論文がこの言葉に適うものになったかどうかは分からない。諸先生、先達の方々からのご指導を頂きたい。

私の研究過程において、東洋大学の先生方はもちろん、国内外の大学、機関の先生方からも多くのご指導を頂き、また研究発表の場も頂いたことに感謝申し上げたい。また、面識の無い私からの失礼な質問に対しても、快く回答して下さいました諸先生、諸先輩方、インド・ネパールに保管される諸写本の蒐集に対しても貴重なアドバイスを下さり、時間を割いて下さった方々にもお詫びと共に感謝の気持ちを記させて頂きたい。

特に、主査の山口しのぶ教授は、若干異端とも言えるような本論文を「ナンセンス」と否定することなく、本論文の完成までご指導を続けて下さった。インドで学ぶ機会も頂き、滞在先のインドの先生方からご教示頂いた情報は本論文作成に生かされている。心から謝意を表させて頂きたい。

また、仏教の道を指し示し、大きな期待を寄せ、見守り続けて下さっている師僧に、この場を借りて心から御礼申し上げる。

数え挙げていけば、「あの先生にも、あの先生にも、あの方にもお世話になった」と、お世話になった方々が多過ぎて、感謝してもしきれないものであるが、ここに感謝の意を表したい。

2019年10月22日

藤井明

第Ⅱ部

テキスト編

Bhūtaḍāmaratantra,

BBT 10 章, HBT 11 章

梵蔵漢対照テキスト、和訳

凡例

omit.	omitted
illeg.	illegible
add.	additional sign
+	判読不能な文字
:	T2 写本中で多くダンダの代わりに用いられる為、注に付した
*	emendation (emend.)
(Note No.- - Note No.)	大幅な写本間の異同がある場合は同じ注番号の間の記述を注に付した
(Ms. No. omit.- - Ms. No. omit.)	特定の写本、刊本に大幅な欠落がある際には、その範囲を上付き()で示した
[写本 insert to ロケーション]	以下の〈各写本中の追加記号、修正記号一覧〉の表に提示した修正記号中、挿入記号によって文章欄外に書き加えられた挿入に関しては、insert to によって挿入される行を示した（例 [G insert to 16a5]）
[写本 back to ロケーション]	上記の挿入の後、該当行に戻る際には、back to によって戻る行を示した（例 [G back to 16b1]）

○代用アヌスヴァーラの使用箇所については、写本の記述を残す為に全て注に付した。

○また、cha と ccha、va と vva、ma と mma、dha と ddha といった記述の交代に関しても写本の記述を残す為に全て注に付した。

○テキスト本文中に出る 2 や 3 という数字は写本中で多く用いられる、直前の単語の繰り返し回数を示している。これは特にマントラの記述部分で多く見ることが出来る。

○HBT はシュローカで説かれており、それぞれの韻律の形をテキスト内に()で記した。韻律が崩れているものに関しては記入せず、註にその内容を付した。

○対応表の左に付した 18.1 以下の番号は、それぞれ漢訳、チベット訳対応表の番号および和訳の番号に対応する。

○HBT サンスクリット和訳中の、各マントラの説明の後の()内のマントラは、暗号を解読した後の実際のマントラである。

○BBT のテキスト校訂方針に関しては名取[2018b]に提示される方法を参照し、G 写本の読みを基本的に採用した。漢訳の読みに対応する他写本の記述があった際には注記して、他写本の記述を採用した。

○HBT のテキスト校訂に際しては、今回利用した写本中の書写年代が確定でき、かつ

比較的古い書写年代の N3 写本を基本として採用した。韻律や BBT との対応関係から他写本の読みを採用した際には注記した。

- テキスト及び和訳を対照出来るように見開きで提示した関係上、各テキスト、和訳に各々独立して 1 から始まる注が存在する。
- 本テキスト、和訳は冊子形式で見開き対応するページ配列になっている。PDF データで閲覧する場合は、白紙ページを挿入するか、本論文の白紙ページを削除することで PDF の「見開き」設定に対応する。PDF データを使用する場合は以上の作業を行えば、見開きで対照テキスト、和訳として使用できる。
- 見開きページでの対応関係は以下の通り。

BBT サンスクリット テキスト	HBT サンスクリット テキスト	<BBT10 章、HBT11 章 Sanskrit 対照テキスト>
------------------------	------------------------	-----------------------------------

BBT 漢訳	BBT チベット語訳	<BBT 漢訳、BBT チベット語訳対照テキスト>
-----------	---------------	---------------------------

BBT サンスクリット 和訳	HBT サンスクリット 和訳	<BBT、HBT サンスクリット和訳>
----------------------	----------------------	---------------------

<各写本中の追加記号、修正記号一覧>

	G	T1	T2	N1	N2	N3	Bo	Ba
add \bar{a} (The symbol like the number 3 is written in the upper right corner of the letters)		क		क		क	क	
insertion sign (The letters for insertion are often written in the margin)	४ ५		वृद्धि	य	दिध	नां	ए	प्रीध
cancellation sign (Frequently a double slash)		मे			र	झ	हं	
replacement of order (The numbers in the correct order are written upon the letters)			रने	धारे	नैमिलु	दसे	यमा	वेभ
some passages are surrounded by parenthesis.							(३ ७)	
partly modifying				नौवा			ख	
continue to next line (used at the end of a line)		माः	दः	निः		दाः		

* 以上の表では、各写本の記述を基に筆者が作成したデータを用いた。

BBT 10 章 細分番号 18 サンスクリット対照テキスト

BBT

10 章（細分番号 18）

- 18.1 atha *sarvayakṣiṇy¹ utthāya² [A 53a5][T1 36a1] śrīvajradharasya³ pā-[T2 32a6]dau śirasābhivanditvā⁴ svahrdayam⁵ adāt⁶ //⁷

¹ Emend. A sarvvayakṣiṇī; T1 sarvvayakṣaṇī; T2 sarvayakṣaṇī; G sarvayakṣi-[G 16a2]ṇī

² A unthāya

³ T2 śrīvajradharasya; G śrīvajrarasya

⁴ A śiraśirasābhivanditvā; T1 śirasābhivandā; G śirasābhivaditvā

⁵ T2 svahrtrayam; G svahr̥yam

⁶ A udāhṛtaḥ; T1 udāt

⁷ A omit.; T1 /; T2 // //

HBT 11 章、細分番号 18 サンスクリット対照テキスト

HBT

11 章 (細分番号 18)

- 18.1 unmattabhairavy¹ u-[Bo 39a3]vāca //²
[N2 16b6] samastaduṣṭaśamana³ surāsuranamaskṛta⁴ /⁵ (na-vipulā)
*tuṣṭo'si⁶ devadeveśa⁷ ya-[N3 26b6]kṣiṇīsāadhanam⁸ vada⁹ // // ¹⁰ (pathyā)
(¹²-u-[Bo 39a4]nmattabhairava uvāca // ¹¹⁻¹²)
athātaḥ ¹³ [N2 16b7] sampravakṣyāmi ¹⁴ yakṣiṇīsiddhisāadhanam ¹⁵ / ¹⁶
(pathyā)
krodhādhipam¹⁷ namaskṛtyotpattisthitilayātmakam¹⁸ /¹⁹ (pathyā)
yakṣiṇyāṣṭau²⁰ samākhyātā (²¹-yās tā-[N2 16b8]sām⁻²¹) siddhikāraṇam²² /²³
(pathyā)
[N1 30a1] ma-[Bo 39a6]num²⁴ tam ²⁵ api va-[N3 26b8]kṣyāmi ²⁶
vāñchitārthapradāyakam²⁷ /²⁸ (pathyā)

¹ Bo unmattabhairavyu; M śrīunmattabhairavy

² N2, Bo, M omit.

³ N1 samastaduṣṭamanah; N2, Bo, Ba samastaduṣṭamana

⁴ N1 su-[N1 29b6]rāsuranamaskṛtāḥ; Bo surāsuranamaskṛtya; Ba surāsuranamaskṛtaḥ

⁵ N1, Ba //; Bo omit.

⁶ Emend. N1 draṣṭāmsi; N2, N3, Bo, Ba tuṣṭo-[Ba 30a6]si ; M santuṣṭo

⁷ N1, N2, Bo, Ba yadi me deva; M yadi deveśa

⁸ N1, Bo yakṣaṇīsāadhanam

⁹ N1 vadaḥ

¹⁰ N2 /; Bo omit.; Ba // 3 //; M // 1 //

¹¹ N2 /; Bo omit.

¹² M omit.

¹³ N1 athāta

¹⁴ M sampravakṣyāmi

¹⁵ N1 yakṣaṇī-[N1 29b7]siddhisāadhanam; N2, Bo yakṣiṇīsiddhisāadhanam

¹⁶ N1 //; Bo omit.

¹⁷ N1 krodhāpipam; N3 krodhādhi-[N3 26b7]po

¹⁸ N1, N2 namaskṛtyotpattisthitilayātmakam; Bo nama-[B 39a]skṛtyo sthitilayātmakam

¹⁹ N1 //; Bo omit.; Ba // 2 //

²⁰ N1 yakṣiṇyāṣṭau; Bo yakṣanyaste; Ba yakṣiṇyau hi; M yakṣiṇyo'ṣṭau

²¹ N3 yas tasām

²² N1 siddhisāadhanam; N2, Bo, Ba si-[Ba 30a8]ddhikāraṇam; M siddhisāadhanam

²³ N1 //; Bo omit.

²⁴ Ba manut

²⁵ N1 tad

²⁶ M vakṣyābhi

²⁷ N1, N2, Bo, Ba vāñchitārthapradāyakam

²⁸ N1 //; Bo omit.; Ba // 3 //; M // 2 //

18.2 om āgaccha⁸ surasu-[A 53b1]ndarī⁹ svāhā // surasundarī¹⁰ //¹¹

18.3 [T2 32a7] om sarvamanohārīṇī¹² namaḥ¹³ svāhā // manohārī¹⁴ //¹⁵

⁸ T2 āgaccha 2

⁹ T1 sarvvasundarī

¹⁰ T1 surasundarī

¹¹ A // 1 //; T1 /; T2 // //

¹² A, T1 sarvamanohārīṇī

¹³ A, T1, T2 omit.

¹⁴ A, T1, T2 manoharī

¹⁵ A // 2 //; T1 /; T2 // //

18.2 ādibījaṃ samuddhṛtya²⁹ *āgaccha³⁰ surasundarī³¹ /³² [Bo 39a7][Ba 30a9]
(pathyā)
(³³-ā-[N2 16b9]bhraṃ bījaṃ⁻³³) śiro³⁴ yuktam³⁵ uddharet³⁶ [N1 30a2] su-[N3
27a1]rasundarī³⁷ /³⁸

18.3 sṛṣṭeḥ³⁹ sarvamanohāriṇīpadānvitam⁴⁰ uddharet⁴¹ /⁴² (pathyā)
[Bo 39a8] (⁴³-ābhraṃ bījaṃ⁻⁴³) [Ba 30a10] śiro⁴⁴ yuktam⁴⁵ (⁴⁶-tan mano-[N2
16b10]hāriṇīmanu-[N3 27a2]ḥ⁻⁴⁶) //⁴⁷

²⁹ N1 samudhṛtya; Ba samudhṛtya

³⁰ Emend. N1, N2, Bo, Ba, N3 āgacha; M hyāgāccha

³¹ N2, Bo, Ba surasumdarī; M surasundari

³² N1, Ba //; Bo omit.

³³ N1 astrabījaṃ; M śaktibījaṃ

³⁴ N2 śirom; M śive

³⁵ Ba yuktām

³⁶ Ba uddhare; M uddhared

³⁷ N2, Bo, Ba surasumdarī;

M vahnīsundarīm

³⁸ Bo omit.; Ba // 4 //

³⁹ N1 sṛṣṭiḥ; N2 prṣṭe; Ba syaṣṭaiḥ; N3 sṛṣṭheḥ; M om

⁴⁰ N1 sarvvāmanoharīpadānnati; Ba sarvamanohāriṇīpadātritam; N3
sarvvamanohāriṇīpadānnitam; M sarvamanohariṇīpadasthitim

⁴¹ N1, M samuddharet

⁴² N1, Ba //; Bo omit.

⁴³ N2 ābhraṃ bīja; Bo āghaṃ bījaṃ; M ādibījaṃ

⁴⁴ N2 śirom; M śive

⁴⁵ N3 yuktam; M yuktaḥ

⁴⁶ N2 tan manohāriṇīmukhaṃ; Bo tanamanohāriṇīm manuḥ; M sarvamanoharo manuḥ

⁴⁷ N2, M /; Bo omit.; Ba // 5 //

18.4 oṃ ⁽¹⁶⁾kanakavatī maithunapriye⁻¹⁶⁾ svāhā // kanakavatī¹⁷ //¹⁸

18.5 [T2 32b1] oṃ āgaccha kāmeśvarī¹⁹ svāhā //²⁰ ⁽²²⁻kāmeśvarī //²¹⁻²²⁾

18.6 oṃ ratipriye²³ svāhā // [G 16a3] rati²⁴ //²⁵

18.7 oṃ padminī²⁶ svāhā // pa-[T1 36a3]dminī²⁷ //²⁸

¹⁶ A kanakamatī [A 53b2] maithunapriye; T1 kanakamati mai-[T1 36a2]thunapriye; T2 kaṇakamati maithunapriya

¹⁷ A kanakamatī; T1 kanakamati; T2 kaṇakamati

¹⁸ A // 3 //; T1 /; T2 // //

¹⁹ T1 kāmeśvari

²⁰ T2 // //

²¹ T1 /

²² A kāmeśvarī svāhā // [A 53b3] kāmeśvarī // 4 //

²³ T2 ratipriya

²⁴ A 5; T1 ratipriyā

²⁵ T1 /; T2 // //

²⁶ A, T1 padmanī; T2 padmini

²⁷ A padmanī; T2 padmi-[T2 32b2]ni

²⁸ A // 6 //; T1 /; T2 // //

- 18.4 brahmabījaṃ samuddhṛ-[N1 30a3]tya⁴⁸ tataḥ kanakavatya⁴⁹ a-[Bo 39b1]pi /⁵⁰
(pathyā)
(⁵¹-maithunapriya ābhāṣya⁻⁵¹) raudrā⁵² vahnivadhūs tataḥ /⁵³ (pathyā)
khyātā⁵⁴ (⁵⁵-kanakavatya eṣā⁻⁵⁵) sarvasiddhi-[Bo 39b2]pradāyini⁵⁶ /⁵⁷ (pathyā)
- 18.5 viṣaṃ⁵⁸ [N1 30a4] (⁵⁹-ābhrād āgaccha tu⁻⁵⁹) (⁶⁰-kāmeśvary analapriyā⁻⁶⁰) /⁶¹
kāmeśvarīmanur asau⁶² vāñchitārtha-[N3 27a4]pradāyakaḥ⁶³ /⁶⁴ (na-vipulā)
- 18.6 viṣaṃ bhūteśvarībījaṃ⁶⁵ (⁶⁶-kṣatajārṇam ataḥparam⁻⁶⁶) /⁶⁷ (pathyā)
rauravaṃ⁶⁸ garjinīyuktaṃ⁶⁹ *(⁷⁰-priye 'to 'nalavallabhā⁻⁷⁰) /⁷¹ (pathyā)
ratipriyāmanuḥ⁷² [N2 17a1] prokto⁷³ vāñchitārthapradāyakaḥ⁷⁴ /⁷⁵ (pathyā)
- 18.7 viṣāt⁷⁶ [Ba 30b2] prāthamikaṃ [Bo 39b5] bījaṃ padminī [N1 30a6]

⁴⁸ Ba samudhṛtya

⁴⁹ N3 kalakaraty

⁵⁰ N1, Ba //; Bo omit.

⁵¹ N1 bhaithunaṃ priyam ābhāṣya; N2, Bo bhaithunapriya ābhāṣya; N3 maithunapriye ābhāṣya;
M maithunapriyetyābhāṣya

⁵² N1 raudrā; Bo raudrāt

⁵³ N1 //; Bo omit.; Ba // 6 //

⁵⁴ N3 khyāto

⁵⁵ N2 ka-[N2 16b11]nakavatya āsā; Bo kanakayāsā; Ba kanakavatya āsya; N3 kalaka-[N3
27a3]tīsāra

⁵⁶ N1 sarvasiddhipradāyiniṃ; N3 sarvasiddhipradāyini

⁵⁷ N1, Ba //; Bo omit.

⁵⁸ N1 viṣaṃ; M viṣa me

⁵⁹ N1 mābhīd āgacchamtu; N2 ābhād āgacha tu; Ba ābhrād āgacchamtu; N3 āprīd(上部に ābhīd
の記載) āgacha tu; M mātar āgaccha

⁶⁰ N1 kāmeśvaryānalapriyā

⁶¹ N1 //; Bo omit.; Ba // 7 // この偈の韻律は不詳

⁶² Ba asye

⁶³ N2 sarvasi-[N2 16b12]ddhipradāyakaḥ; N1, Bo vāñchitārthapradāyakaḥ; Ba
vāñchitārthapradāyini

⁶⁴ N1, Ba //; Bo omit.; M /

⁶⁵ N1, Bo bhūteśvaraṃ bījaṃ; N3 bhūteśvaraṃ

⁶⁶ N1 kṣatrajāntamaḥ pa-[N1 30a5]raṃ; N2 kṣatajārṇam ataḥparam; Bo chaṃtajārṇam ataḥ; Ba
kṣatajāyām ataḥ-[Ba 30b1]param; N3 kṣataja / nvamataḥparam

⁶⁷ N1, Ba //; Bo omit.

⁶⁸ N2 kauravaṃ; Bo kaurayaṃ

⁶⁹ N2, Ba garjanīyuktaṃ; Bo tarjanīyukataṃ; N3 garjanīyuktaṃ; M ratisamyukta

⁷⁰ Emend. N1, N2 priyatonalavallabhā; Bo priyām [Bo 39b4] tonalavallabhā; Ba priye
tonalavallabhā; N3 priye tonalavavallabhā; M priye jvalanavallabhā

⁷¹ N1, Ba //; Bo omit.

⁷² N1, Bo, Ba, N3 ratipriyāma-[N3 27a5]nu

⁷³ N1, N3 proktā

⁷⁴ N1, N2, Ba vāñchitārthapradāyakaḥ; Bo vāñchitārthapradāyakaḥ

⁷⁵ N1 //; N2, Bo omit.; Ba // 9 //

⁷⁶ N1, Ba, M viṣaṃ; Bo viṣāmn

18.8 oṃ ⁽²⁹⁾na-[A 53b4]tī mahānaṭī⁻²⁹⁾ surūpamatī³⁰ svāhā // naṭī³¹ //³²

18.9 oṃ ⁽³³⁾anurāgiṇī maithunapriye⁻³³⁾ svāhā // anurāgiṇī³⁴ //³⁵

18.10 [A 53b5] aṣṭayakṣiṇīsādhanaividhivistaro³⁶ bhavati //

18.11 vajrapāṇiḡrhe³⁷ gatvā gugguludhūpaṃ³⁸ datvā trisaṃdhyam³⁹ sa-[A 54a1]hasraṃ⁴⁰ [G 16a4] japet /⁴¹ māsābhyantareṇa⁴² niyatam⁴³ āgacchati //⁴⁴ āgatāyās candanodakenārgho⁴⁵ [T1 36a5] deyaḥ⁴⁶ /⁴⁷ mātābhāryābhaginīkarmamāṇi⁴⁸ karoti /⁴⁹

²⁹ T2 naṭī mahānati

³⁰ A surapatī; T1 surayati; T2 surapati

³¹ A 7; T2 naṭī

³² T1 /; T2 // //

³³ A anurāgiṇī maithunapriye; T1 anurāgiṇī maithunapriye; T2 anurāgini maithunapriya

³⁴ A, T2 anurāgi-[T2 32b3]nī

³⁵ A // 8 //; T2 // //

³⁶ A athāṣṭau yakṣiṇīsādhanaividhivistaro; T1 aṣṭau yakṣiṇīsādhanaividhivista-[T1 36a4]ro; T2 atha aṣṭau yakṣaṇīsādhanaividhivistaro

³⁷ A, T1 vajrapāṇiḡrhaṃ; T2 vajrapāṇiḡrhaṃ

³⁸ A gurgulīdhūpaṃ; T1 guggulīdhūpaṃ; T2 gurgurudhūpa

³⁹ T2 trisaṃ-[T2 32b4]dhyā; G trisadhyaṃ

⁴⁰ T2 omit.

⁴¹ A //; T2 omit.

⁴² A, T2 māsātyantare; T1 māsābhyantare

⁴³ T2 niyutam

⁴⁴ T1 /; T2 omit.

⁴⁵ A candanādakenārgho

⁴⁶ T2 deya

⁴⁷ A, T2 omit.

⁴⁸ A mātābhaginībhāryā vā karmamāṇi; T1 mātābhaginībhāryā vā karmāṇi; T2 mātābhaginībhāryāka-[T2 32b5]rmmāṇi

⁴⁹ A1 //; T2 :

- jvalanapriyā⁷⁷ (pathyā)
 abhiṣṭārthaprado⁷⁸ nṛṇām⁷⁹ ity uktaḥ⁸⁰ padminīmanuḥ⁸¹ /⁸² (old-anuṣṭubh)
 18.8 [N2 17a2] ādibījāc⁸³ ca⁸⁴ [Ba 30b3] bhūteśam⁸⁵ naṭito'pi⁸⁶ mahānaṭi⁸⁷ /⁸⁸
 (pathyā)
 (89-svarṇād rūpavatī⁸⁹) *bhāṣye⁹⁰ (91-śiro 'nto 'sau⁹¹) naṭīmanuḥ⁹² /⁹³ (pathyā)
 18.9 (94-anādir adriyābījam⁹⁴) [Ba 30b4] (95-uccared anurāgiṇīm⁹⁵) /⁹⁶ (pathyā)
 (97-maithunapriya ābhāṣya⁹⁷) dviṭhayuktānurāgiṇī⁹⁸ /⁹⁹ (pathyā)
 18.10
 18.11 athāsām [N3 27a8] sādhanam vakṣya¹⁰⁰ ekaikam¹⁰¹ [Bo 30b5]
 krodhabhāṣitam¹⁰² /¹⁰³ (pathyā)
 vajrapāṇigr-[N2 17a4]ham gatvā [Bo 40a2] datvā¹⁰⁴ dhūpaṇ¹⁰⁵ ca

⁷⁷ N1, Ba //; Bo omit.

⁷⁸ N1, Ba abhiṣṭārthaprado; N2 abhiṣṭārtham pradā; Bo abhiṣṭārthapradām; N3 abhiṣṭārthapradā

⁷⁹ N1 nṛṇām; Bo nṛṇām

⁸⁰ N1 ukta; N3 u-[N3 27a6]kteḥ

⁸¹ N3 padminīmanuḥ

⁸² N1 //; N2, Bo omit.; Ba // 10 //

⁸³ N1 ādipūjām; Bo, Ba ā-[B 39b6]dibījā

⁸⁴ Bo yā; Ba va

⁸⁵ Ba bhūteśī; M bhūteśīm

⁸⁶ N1 naṭitopi; N2 naṭijopi; Bo, Ba naṭitopi; M naṭito'pi

⁸⁷ N1, M mahānaṭīm; N2, Bo, Ba mahānaṭī

⁸⁸ N1 Ba //; Bo omit.

⁸⁹ N1 svarūpavatīm; N2 svarṇād bhūpavatī; Bo svarṇād uparvatī; N3 svarṇād rūpavatī; M svarṇād rūpavatīm

⁹⁰ Emend. N1 ā-[N1 30a7]bhāṣye; N2, Bo, Ba, N3 bhāṣya; M paścāt

⁹¹ N1 śīrontosau; N2 śīromto; Bo, Ba śīromtosau; N3 śivontosau

⁹² Bo naṭī-[B 39b7]manu; N3 naṭīmu-[N3 27a7]nuḥ

⁹³ N1 //; Bo omit.; Ba // 11 //

⁹⁴ N1 anādevābhimaṃ bījam; N2 anāderāpriyaṃ bījam; Bo anāderaudriyaṃ bījam; Ba anādi hrīmḍriyaṃ bījam; N3 anāder ābhimaṃ bījam

⁹⁵ N1 uccared anurāgiṇīm; N2 uccaredenu-[N2 17a3]rāgiṇīm; Bo uccared anurāgiṇī; Ba uccarair anurāgiṇī; N3 uccaretranurāgiṇī

⁹⁶ N1, Ba //; Bo omit.

⁹⁷ N1 maithunam priyam ābhāṣya; N3 maithunapriye ābhāṣye; M maithunapriyety ābhāṣya

⁹⁸ N1 dviṭayuktānurāgi-[N1 30b1]nī; Bo dviṣadu-[B 40a1]ktānurāgiṇī; Ba dviṭhātomanurāgiṇī; N3 dviṭhīdvaktānurāgiṇī; M dviṭhāntoktānurāgiṇī

⁹⁹ N1 //; Bo 8; Ba // 12 //; M // 3 //

¹⁰⁰ N1, N2, Bo, Ba vakṣye; N3 vakṣe

¹⁰¹ N3 ekaikam

¹⁰² N1, N2, Bo, Ba –tam

¹⁰³ N1, Ba //; Bo omit.

¹⁰⁴ N1, N3 omit.; M dattvā

¹⁰⁵ N1, N2, Bo, Ba dhūpaṃ

18.12 yadi mātā bhavati /⁵⁰ (58-cittan na dūṣayati⁵¹ /⁵² rasarasāyanam dadāti⁵³ /⁵⁴
dīnāralakṣaṃ⁵⁵ dadāti /⁵⁶

18.13 [T1 36b1] yadi bhaginī bhavati /⁵⁷⁻⁵⁸ (59-siddhadravya-[G 16a5]rasarasāyanam
dadāti /⁵⁹) [G insert to 16a5][A 54a4] divyadevakanyām⁶⁰ ānīya⁶¹ dadāti //⁶²
[G back to 16a5] atītānāgatavarttamānaṃ⁶³ kathayati⁶⁴ /⁶⁵

⁵⁰ A, T1, T2 /

⁵¹ A cirttamarddayitavyaṃ; T1 cittaṃmadayapitavyaṃ

⁵² A //

⁵³ A, T1, T2 pratidinaṃ

⁵⁴ A, T1, T2 omit.

⁵⁵ A dīnācalakṣaṃ rā-[A 54a3]jyaṃ vā; T1 illeg.

⁵⁶ A, T2 //; T1 omit.

⁵⁷ A omit.

⁵⁸ T2 omit.

⁵⁹ A divyastrikāmapradā bhavati rasarasāyanasiddhadravya ca dadāti //; T1
divyastīsarvvakāmapradā bhavati / siddhidravyaṃ rasarasāyanam dadāti /; T2
divyastrikāmaprakāmapradā bhavati rasarasāyanam siddhidravya ca dadā-[T2 32b6]ti :

⁶⁰ T2 divyadevakamnyām

⁶¹ T1, T2 āniya

⁶² T2 :

⁶³ T1-vartta-[T1 36b2]mānaṃ; T2 atitānāgata-

⁶⁴ T2 kayati

⁶⁵ A //; T2 :

- guggulaṃ¹⁰⁶ /¹⁰⁷ (pathyā)
^{(108-japet trisaṇḍhyaṃ⁻¹⁰⁸) *māsānta¹⁰⁹ [N3 27b1] āyāti¹¹⁰ surasundarī¹¹¹ /¹¹²}
 (ma-vipulā)
 janānī bhaginī [Bo 40a3] bhāryā¹¹³ svechayā¹¹⁴ kāmitā¹¹⁵ [N2 17a5] bhavet
 /¹¹⁶ (pathyā)
 18.12 ^(121-rājyaṃ dīnāralakṣaṇ¹¹⁷ ca rasa-[N3 27b2]ñ¹¹⁸ cāpi rasāyanam¹¹⁹ /¹²⁰⁻¹²¹)
 (pathyā)
 [Ba 30b7] ^(125-mātā bhūtvā¹²² mahāyakṣī mātṛvat paripālayet¹²³ /¹²⁴⁻¹²⁵)
 (pathyā)
 18.13 yadi¹²⁶ syād bhaginī divyakanyām¹²⁷ ā-[1 N3 27b3]nīya yacchati¹²⁸ /¹²⁹
 (pathyā)
 [Bo 40a5][Ba 30b8] rasaṃ rasāya-[N1 30b4]naṃ siddhadraṇḍyaṃ¹³⁰ bhāryā¹³¹
 bhaved yadi¹³² /¹³³ (pathyā)

¹⁰⁶ N1 gurggulaṃ dahet; N2 guggulaṃ; N3 gulgulaṃ illeg.; M guggulaṃ
¹⁰⁷ N1 //; Bo, N3 omit.; Ba // 13 //
¹⁰⁸ N1 japetrisaṇḍhyaṃ; N2 japet trisaṇḍhya; Bo, Ba japet trisaṇḍhyaṃ
¹⁰⁹ Emend. N1, N3, M māsānte; N2 māsānte; Bo, Ba māsānte
¹¹⁰ N1 mā-[N1 30b2]yānte māyānti; M hyāyāti
¹¹¹ N2, Bo, Ba suraṣaṃ-[Ba 30b6]darī
¹¹² N1, Ba //; Bo omit.
¹¹³ N1, N3 bhāryā
¹¹⁴ Bo svecha; M svechayā
¹¹⁵ Bo kāyāmitā
¹¹⁶ N1 //; Bo omit.; Ba // 14 //
¹¹⁷ N1 dīnāraṃ lakṣaṃ; Bo dīnāralakṣaṃ; Ba dīnāralasyaṃ
¹¹⁸ N1, Bo, Ba rasaṃ
¹¹⁹ N1, Bo, Ba rasā-[N1 30b3]yaṇaṃ
¹²⁰ N1, Ba //; Bo omit.
¹²¹ N2 omit.
¹²² Bo, Ba bhū-[B 40a4]tā
¹²³ N1 pratipālayet
¹²⁴ N1 //; Bo omit.; Ba // 15 //
¹²⁵ N2 omit.
¹²⁶ Ba yadī
¹²⁷ N1, Ba divyakanyām; N2 divyaṃ kanyām; M divyaṃ kanyām
¹²⁸ N1, N2, Bo, Ba, N3 yacchati
¹²⁹ N1, Ba, N3 //; Bo omit.
¹³⁰ N1 siddhaṃ draṇḍyaṃ
¹³¹ N1, Ba, N3 bhāryā
¹³² N3 yati
¹³³ N1 //; Bo omit.; Ba // 16 //

18.14 yadi bhāryā⁶⁶ bhavati /⁶⁷ *sarvāsām⁶⁸ paripūrayati⁶⁹ /⁷⁰ mahāadhanapatir⁷¹
bhavati // //⁷²

18.15 atha manohārīsāadhanam⁷³ bhavati /⁷⁴
nadīsaṅgame⁷⁵ gatvā⁷⁶ [T1 36b3] candane-[A 54b1]na⁷⁷ [T2 33a1]
maṇḍalakam⁷⁸ kṛtvā mahatīm⁷⁹ (80-pūjām kṛtvā⁻⁸⁰) (81-agurum dahatā⁻⁸¹)
ayutam japet⁸² di-[G 16a6]va-[A 54b2]sāni sapta /⁸³ sa-[T2 33a2]ptame⁸⁴
divase [T1 36b4] udārām⁸⁵ pūjām⁸⁶ kṛtvā japet⁸⁷ tato'rddharātre⁸⁸ niyatam
āgacchati /⁸⁹

18.16 ya-[A 54b3]di nāgacchati tadā⁹⁰ mri-[T2 33a3]yate /⁹¹ ājñām⁹² dehīti⁹³

⁶⁶ A bhāryā; T1 tātā

⁶⁷ A //; T2 omit.

⁶⁸ Emend. A sarvasamya-[A 54a5]ttim; T1 sarvasampratim; T2 sarvasamya-[T2 32b7]ti; G sarvāsām

⁶⁹ A, T1, T2 pūrayati

⁷⁰ A, T1 omit.

⁷¹ T1 mahāadhanapatim; T2 mahāadhanapati; G mahāmadhanapati

⁷² A // 1 //; T1 //

⁷³ A manāhārīṇīdhanam; T1 manohārīṇīsāadhanam; T2 manāhārīṇīsāadhanam

⁷⁴ A, T2 //

⁷⁵ A, T1 nadītatam; T2 nadītatam

⁷⁶ A tvā

⁷⁷ G omit. 漢訳「用白檀香作曼拏羅」に従って A, T1, T2 の記述を採った。

⁷⁸ T2 mandala

⁷⁹ A, T1 mahatī; T2 mahati

⁸⁰ A, T1, T2 pūjākṛtvā

⁸¹ A 'ṣṭasahasram japet // gurgurudhūpe dhūpayet //; T1 'ṣṭasahasram japet / gugguludhūpena dhūpayet /; T2 aṣṭasahasram japet gurgurudhūpena dhūpayat

⁸² T1, G japet /; T2 japet

⁸³ A, T2 omit.

⁸⁴ A saptamed

⁸⁵ T2 udārā

⁸⁶ T1 omit.; T2 pūjā

⁸⁷ A, T2 sakalarātrim japet; T1 sakalarātrim japet /

⁸⁸ T2 tato arddharātre; G tatorddharātre

⁸⁹ A //; T2 :

⁹⁰ A, T1, T2 omit.

⁹¹ A //; T2 :

⁹² T2 ājñā

⁹³ T1 deheti

- 18.14 sarvāsām¹³⁴ pūrayaty¹³⁵ evaṃ¹³⁶ mahādhanapatir¹³⁷ bhave-[N3 27b4]t /¹³⁸
(pathyā)
- 18.15 [Bo 40a6] gatvā sa-[Ba 30b9]rittataṃ¹³⁹ kṛtvā maṇḍalaṃ¹⁴⁰
candanātmakam¹⁴¹ /¹⁴² (pathyā)
pūjām vidhāya mahatīm¹⁴³ dadyād¹⁴⁴ dhūpañ¹⁴⁵ ca guggulam¹⁴⁶ /¹⁴⁷ (na-
vipulā)
[Bo 40a7] ā-[N2 17a7][N3 27b5]saptadivasaṃ¹⁴⁸ yā-[Ba 30b10]vaj¹⁴⁹ japed
ayutasamkhyakam¹⁵⁰ /¹⁵¹ (pathyā)
saptame divase rātrau [N1 30b6] kṛtvā pūjām¹⁵² manoramām¹⁵³ /¹⁵⁴ (pathyā)
prajaped ardharātre¹⁵⁵ tu śīghram¹⁵⁶ ā-[Ba 30b11]yāti [N2 17a8] yakṣiṇī¹⁵⁷
/¹⁵⁸ (pathyā)
- 18.16 sādhaḥ kim karomīti bhaved¹⁵⁹ (¹⁶⁰-cety āha⁻¹⁶⁰) sādha-[Bo 40b2]kaḥ¹⁶¹ /¹⁶²
(pathyā)

¹³⁴ N1 sarvāsā; N2, Ba sarvāsām; Bo sarvāsā; N3 sarvvāsām

¹³⁵ N1 pūrayety

¹³⁶ N2, Bo, Ba, N3 e-[N2 17a6]vam

¹³⁷ N2, Ba, N3 evaṃ yadi patir; Bo evaṃ yadipati

¹³⁸ N1, Ba //; Bo omit.; M // 4 //

¹³⁹ N2 saribhaṭaṃ

¹⁴⁰ N1, N2, Bo, Ba maṇḍalaṃ; M candanena

¹⁴¹ N1 candanātmā-[N1 30b5]kaṃ; N2, Bo, Ba caṇḍanātmakam; M ca maṇḍalam

¹⁴² N1 //; Bo omit.; Ba // 17 //

¹⁴³ N3 mahatīm

¹⁴⁴ N1, N2 dadyāt; Bo dayād; Ba dadyā; M dattvā

¹⁴⁵ N1, N2, Ba, Bo dhūpaṃ

¹⁴⁶ N1 gurgulam; N2 guggulu; Bo, Ba guggulam; N3 gulgulum; M guggulum

¹⁴⁷ N1, Ba //; Bo omit.

¹⁴⁸ Ba asaptadivasaṃ

¹⁴⁹ N1 yāvat; M mantraṃ

¹⁵⁰ N1, N2 ayutasamkhyakam; Bo ayutaṃ samkhyakam; ayutasamkhyayā; M ayutasamkhyakam

¹⁵¹ N1 //; Bo omit.; Ba // 18 //

¹⁵² Ba pūjā

¹⁵³ N1, N2, Bo, Ba mano-[B 40b1]ramām

¹⁵⁴ N1, Ba //; Bo omit.

¹⁵⁵ N1, N3 arddha-[N3 27b6]rātre; N2 arddharātrau; Bo adharātrau; Ba ardharātrau

¹⁵⁶ N3 śīghram

¹⁵⁷ Ba yakṣiṇī

¹⁵⁸ N1 //; Bo omit.; Ba // 19 //

¹⁵⁹ Bo, Ba bhava; M vade

¹⁶⁰ N1 cedyohi; N2, M cety āha; Bo cedy āha; Ba cedrāha

¹⁶¹ N3 sādhaḥ

¹⁶² N1, Ba //; Bo omit.

vadati⁹⁴ /⁹⁵ sādakena [T1 36b5] vaktavyam⁹⁶ /⁹⁷ asmākam⁹⁸ ceti⁹⁹
bhavasveti /¹⁰⁰ (101-aṣṭaśatajanāni pratipālayati /⁻¹⁰¹) dīnāraśaṭam¹⁰²
pratidinam niyatam¹⁰³ dadāti¹⁰⁴ /¹⁰⁵ (106-tac ca⁻¹⁰⁶) niravaśeṣam¹⁰⁷
vyayikarttavyam¹⁰⁸ /¹⁰⁹ [T1 37a1] yadi kiñcit¹¹⁰ sthāpayati /¹¹¹ [A 54b5]
bhūyo na bhavati // //¹¹²

- 18.17 atha kanakavatīsāadhanam¹¹³ bhavati /¹¹⁴
vaṭavṛkṣe¹¹⁵ gatvā *(116-matsamāṃsavidhinā surām⁻¹¹⁶) [A 55a1] dāpayet¹¹⁷
/¹¹⁸ [T1 37a2] *(119-ātmanā pītvocchiṣṭena jāpo⁻¹¹⁹) deyaḥ¹²⁰ /¹²¹ [G insert to
16b1] sahasram¹²² ekam^{(124-japet /¹²³}

⁹⁴ T2 vadaṃti

⁹⁵ A //; T2 omit.

⁹⁶ A vaktavyam

⁹⁷ A, T2 omit.

⁹⁸ T2 masyākam; T1 masākam

⁹⁹ A, T1 ceti; T2 ceti

¹⁰⁰ A //; T2 omit.

¹⁰¹ A aṣṭaśata-[A 54b4]vārān pālayati //; T1 aṣṭaśatavārān pālayati /; T2 aṣṭaśatavārānapālayati :

¹⁰² T1 dīnāraśaṭam; T2 dīnā-[T2 33a4]raśaṭam

¹⁰³ A, T1, T2 omit.

¹⁰⁴ G da-[G 16b1]dadāti

¹⁰⁵ A //; T2 :

¹⁰⁶ A, T1, T2 omit.

¹⁰⁷ T1 niravaśeṣa; T2 niravasyaṣam

¹⁰⁸ T2 vyayikarttavyam

¹⁰⁹ A //; T2 omit.

¹¹⁰ A kiñci

¹¹¹ A, T1, T2 omit.

¹¹² A // 2 //; T1 //

¹¹³ A kanakamatisāadhanam; T1 kanakamaīsāadhanam; T2 ka-[T2 33a5]ṇakamatisādhana

¹¹⁴ A, T2 //

¹¹⁵ A, T1 vaṭavṛkṣam; T2 vaṭavṛkṣa

¹¹⁶ Emend. A, T2 matsamāṃsavidhinā surām; T1 matsamāṃsavidhimāsurām; G

matsamāṃsavidhinā surā

¹¹⁷ T2 dāpayat

¹¹⁸ A //; T2 omit.

¹¹⁹ Emend. A ātmanam bhāvayitvā ucchitenārgho; T2 ātmanam bhāvayitvā ucchistenā-[T2

33a6]rgho; T1 ātmānā+yī gatvā ucchiṣṭenārgho; G ātmanā pītvotsiṣṭena jāpo

¹²⁰ T2 deya

¹²¹ A, T2 omit.

¹²² T2 sahaśram

¹²³ A //; T2 omit.

- (¹⁶³-śatā-[N1 30b7]ṣṭau parivārāṇi pālayaty api⁻¹⁶³) yacchati¹⁶⁴ /¹⁶⁵ (pathyā)
 śatam¹⁶⁶ ekañ¹⁶⁷ ca (¹⁶⁸-dīnāraṃ [N2 17a9] sāvaśeṣaṃ [Bo 40b3] vyayed
 budhaḥ⁻¹⁶⁸) /¹⁶⁹ (pathyā)
 tadvyayābhāvato¹⁷⁰ bhūyo¹⁷¹ na dadā-[N1 31a1]ti [N3 27b8] kadācana¹⁷² /¹⁷³
 na dadāti¹⁷⁴ na¹⁷⁵ cāyāti mriyate [Bo 40b4] 'sau¹⁷⁶ manoharī /¹⁷⁷ (pathyā)
 18.17 vaṭavṛkṣatālam¹⁷⁸ gatvā matsyamāmsādi dā-[N3 28a1]payet /¹⁷⁹ (pathyā)
 ucchiṣṭena¹⁸⁰ [Ba 31a2] svayaṃ¹⁸¹ rā-[N1 31a2][Bo 40b5]trau sahasraṃ sapta
 vāsarān¹⁸² /¹⁸³ (pathyā)

¹⁶³ N2 śatāny aṣṭau pravālāni pālayaty api; Bo śatāny aṣṭau palāninicapālayaty api; Ba śatānaṣṭau parivārāṇi pālayaty api [Ba 30b12]; N3 śatāny aṣṭau purāṇāni [N3 27b7] pālayaty api; M śatāṣṭaparivārādhyā vāñchitārthaṃ ca

¹⁶⁴ N1, N2, Bo, Ba, N3 yachati

¹⁶⁵ N1 //; Bo omit.; Ba // 20 //

¹⁶⁶ N2 śatam

¹⁶⁷ N1 ekadināraṃ; N2, Bo, Ba ekam

¹⁶⁸ N1 sāvaśeṣaṃ vyayed budhaḥ

¹⁶⁹ N1, Ba //; Bo omit.

¹⁷⁰ N1 tadvyayād bhāvato; N2 tavyayābhāvato; Bo tadvyayobhāvato; N3 tadvyayābhāratau

¹⁷¹ N1, N3 bhūmo

¹⁷² N1 kadācanaḥ; M prakupyati

¹⁷³ N1 //; Bo omit.; Ba // 12 //

¹⁷⁴ N1 catir

¹⁷⁵ N1, N3 na ca ここで ca を挿入した場合、韻律が狂う為 N2, Bo, Ba, M を採った

¹⁷⁶ N1, N2, Bo, Ba sau; M sā

¹⁷⁷ N1 //; Bo omit.; Ba // 2 //; M // 5 //

¹⁷⁸ N1 vaṭakṛkṣatālam; N2 caṭavṛkṣa-[N2 17a10]talam; Bo, Ba vaṭavṛkṣatāle

¹⁷⁹ N1 //; Bo omit.; Ba // 22 //

¹⁸⁰ N1 uttiṣṭhena; N2, Bo, Ba, N3 uchiṣṭhena

¹⁸¹ Ba tato

¹⁸² Ba vāsarāt

¹⁸³ N1, Ba //; Bo omit.

- 18.18 evaṃ⁻¹²⁴) saptadivase¹²⁵ rātrau [A 55a2] sādhayet¹²⁶ /¹²⁷ *(¹²⁸-tāvaj japet⁻¹²⁸)
yā-[T1 37a3]vad¹²⁹ arddharātram¹³⁰
*sarvālāṅkārabhūṣitāṣṭaśataparivāraparivṛtena¹³¹ (¹³²-svayam evāgacchati⁻¹³²)
/¹³³
- 18.19 (¹³⁴-āgatā yāḥ⁻¹³⁴) [G back to 16b1] kā-[A 55a3]mayitavyā¹³⁵ bhāryā¹³⁶ [T1
37a4] bhavati¹³⁷ /¹³⁸ dvādaśajanāni¹³⁹ vastrāla-[G 16b2]ṅkārabhojanādīni¹⁴⁰
pratidinam¹⁴¹ dadāti¹⁴² /¹⁴³ aṣṭau¹⁴⁴ dīnāram¹⁴⁵ prayacchati // //¹⁴⁶

¹²⁴ G omit. 漢訳「持誦眞言一千遍」に従って A, T1, T2 の記述を採った。

¹²⁵ A, T1, T2 saptame divase

¹²⁶ T2 sādhayat

¹²⁷ A //; T2 omit.

¹²⁸ Emend. A, T1, T2 omit.; G tāva japet

¹²⁹ T2 yāvat

¹³⁰ A, T1, T2 arddharātre

¹³¹ Emend. A sarvvālāṅkāravibhūṣitenāṣṭaśataparivān; T1 sarvvālāṅkārabhūṣitāṣṭaśataparivāro;
T2 savālāṅkāravibhūṣite a-[T2 33a7]ṣṭaśataparivārāna; G sarvālāṅkārabhūṣitā
aṣṭaśataparivāraparivṛtena

¹³² A, T1 sayam evāgacchati; T2 samayavācchati

¹³³ A //; T2 omit.

¹³⁴ A āgatya; T1 āgatā; T2 āgatā yā

¹³⁵ T1 kāmāyitavyā /; T2 kāyayitavyā

¹³⁶ A, T1, T2 bhāryyā

¹³⁷ T1 vati

¹³⁸ A //; T2 omit.

¹³⁹ A dvādaśajanām; T1 dvādaśajanānām; T2 dvādaśanānām

¹⁴⁰ A, T2 vastrālaṅkā-[T2 33b1]rakāmikabhojanam ca; T1 vastrālaṅkārakāmikabhojanāni

¹⁴¹ A, T1, T2 omit.

¹⁴² T2 damdāti

¹⁴³ A //; T2 omit.

¹⁴⁴ A, T1, T2 pratidinam [A 55a4] aṣṭau

¹⁴⁵ A, T2 dīnārān; T1 dīnārāṇa

¹⁴⁶ A // 3 //; T1 //

- 18.18 prajapet¹⁸⁴ (185-saptame 'hny arddharātre 'bhyarcya⁻¹⁸⁵) sugandhibhiḥ¹⁸⁶ /¹⁸⁷
(pathyā)
[N3 28a2] sarvālaṅkārasaṃyuktā¹⁸⁸ [Ba 31a3] sarvāvayavasundarī¹⁸⁹ /¹⁹⁰
(pathyā)
*śatāṣṭaparivārāḍhyākhyātāgacchati¹⁹¹ sannidhim¹⁹² /¹⁹³ (pathyā)
- 18.19 a-[N2 17a12]nvaham¹⁹⁴ [Bo 40b7] dvā-[N3 28a3]daśānāñ¹⁹⁵ ca
vastrālaṅkārabhojanam¹⁹⁶ /¹⁹⁷ (pathyā)
(198-dadāty aṣṭau dinārāṇi⁻¹⁹⁸) [N1 31a4] bhāryā¹⁹⁹ bhavati kāmītā^{/200} (pathyā)
[Bo 40b8] devī²⁰¹ kanakavatī e-[N3 28a4]vam²⁰² *āgacchati²⁰³ ca²⁰⁴
nānyathā²⁰⁵ /²⁰⁶ (pathyā)

¹⁸⁴ N1 pramjapet; Ba prajape

¹⁸⁵ N1, N3 saptamedarddharātrebhyarcya; N2 saptamehni arddharātre '-[N2 17a11]bhyarcya;
Bo samenherdharātre bhyarcya; Ba saptamehy arddharātre bhyarcya; N3 saptamed arddharātre
bhyarcya

¹⁸⁶ N1, N2, Bo, Ba sugamdhbhiḥ

¹⁸⁷ N1 //; Bo omit.; Ba // 23 //

¹⁸⁸ N1 sarvvālaṅkārasaṃ+ktā; N2 sarvāvayavasamuktā; Bo srāvayava-[B 40b6]saṃyuktā;
Ba sarvāvaysamuktā; N3 sarvvāvayavasamuktā

¹⁸⁹ N1, N3 sarvvāvayavasundarī; N2, Bo, Ba sarvāvayavasundarī

¹⁹⁰ N1, Ba //; Bo omit.

¹⁹¹ Emend. N1 śa-[N1 31a3]tāṣṭaparivārāḍhyākhyātāgacchati; N2, Ba śatāṣṭaparivārāḍhyā
dhyātāgacchati; Bo śatāṣṭaparivārāḍyā dhyātāgacchati; N3 śatāṣṭaparivārāḍhyā 'khyātām gacchati;
M śatāṣṭaparivārāḍhyā dhyātā "gacchati

¹⁹² N1, N2, Bo sannidhim; Ba samnidhim

¹⁹³ N1 //; N2, Bo omit.; Ba // 24 //

¹⁹⁴ Bo anvamham

¹⁹⁵ N1, Ba dvādaśānām; N2 dvādaśānī; Bo dvādaśāna

¹⁹⁶ N1 vastrālaṅkārasundarī; N2, Ba vastrālaṅkā-[Ba 31a4]rabhojanam; Bo
vastrālaṅkarabhojanam

¹⁹⁷ N1, Ba //; Bo omit.

¹⁹⁸ N1 dadāty aṣṭau vinārāṇi; N3 dadyāty aṣṭau dinārāṇi; M dīnārāṇi dadāty aṣṭau

¹⁹⁹ N1 bhāryā

²⁰⁰ N1 //; Bo omit.; Ba // 25 //

²⁰¹ Bo deva

²⁰² N1 aiṣā; M eṣā

²⁰³ Emend. N1 siddhaty eva; N2, Bo, Ba, N3 ā-[N2 17b1]gacchati; M siddhyaty evam

²⁰⁴ N1, N2, Bo, Ba, M na

²⁰⁵ N1, N2, Bo, Ba, M cānyathā

²⁰⁶ N1, N3 //; Bo 3; Ba // 3 //; M // 6 //

- 18.20 [T1 37a5] atha kāmeśvarīsāadhanam bhavati /¹⁴⁷ bhūrjapatre¹⁴⁸
 gorocanenālikhya¹⁴⁹ (150-ekākinā śayanam āruhya⁻¹⁵⁰) sahasram¹⁵¹ japed¹⁵²
 /¹⁵³
- 18.21 tato¹⁵⁴ māsānte udārām [T2 33b3] pūjām¹⁵⁵ [A 55b1] kṛtvā ghṛtapradīpam¹⁵⁶
 prajvālya¹⁵⁷ maunībhūtvā¹⁵⁸ japed /¹⁵⁹ tato'rddharātre¹⁶⁰ ni-[G 16b3]yatam
 āgaccha-[T1 37b2]ti¹⁶¹ / (162-āgatā yā⁻¹⁶²) kāmāpra-[A 55b2]dā [T2 33b4]
 bhavati¹⁶³ /¹⁶⁴ (165-bhāryā bhavati /⁻¹⁶⁵) divyālaṅkāram¹⁶⁶ śayane parityajya¹⁶⁷
 prabhāte¹⁶⁸ gacchati¹⁶⁹ /¹⁷⁰
 (171-varjayitvā parastrīgamanam⁻¹⁷¹) [A 55b3] a-[T1 37b3]nyathā vinaśyati¹⁷²
 // //¹⁷³

¹⁴⁷ A //

¹⁴⁸ T2 bhūja-[T2 33b2]patre

¹⁴⁹ A gorocanena [A 55a5] pratikṛtim ālikhya; T1 gorocanena pratikṛti likhya; T2 golocandanena pratikṛtim āliṣya

¹⁵⁰ A ekākināṃyāmpatanam āruhya; T1 ekākināyāmpatanāruhyam; T2 ekākināṃyāmpatanam ācuhya

¹⁵¹ A, T1 jñāna-[T1 37b1]sahasram; T2 jñānasahaśram

¹⁵² T2 jape

¹⁵³ A //

¹⁵⁴ A omit.; T2 omit.

¹⁵⁵ T2 pūjā

¹⁵⁶ A, T1 ghṛtapradīpān; T2 ghṛtapradīpān

¹⁵⁷ A prajālya

¹⁵⁸ T2 maunibhūtvā

¹⁵⁹ A //; T2 omit.

¹⁶⁰ T1 tato'rātre; T2 tatorddharātre; G tatorddharātre

¹⁶¹ G āga / cchati

¹⁶² A āgatya; T1 āgatā

¹⁶³ T2 tati

¹⁶⁴ A //

¹⁶⁵ A, T1, T2 omit.

¹⁶⁶ A divyālaṅkāram

¹⁶⁷ T2 parityatya

¹⁶⁸ T1 prabhāta

¹⁶⁹ A, T2 pragacchati

¹⁷⁰ A //

¹⁷¹ A parastriyābhigamanam varjjayet //; T1 varjayitvā parastrīgamanam /; T2

parastriyābhigamanam varjjayat

¹⁷² T1, T2 vina-[T2 33b5]syati

¹⁷³ A // 4 //

- 18.20 gorocanena²⁰⁷ pratimām²⁰⁸ bhūrjapatre²⁰⁹ nidhāya²¹⁰ ca /²¹¹ (bha-vipulā)
 (212-śayyām āruhya⁻²¹²) ekākī sa-[N3 28a5]hasraṃ prajapen²¹³ manum²¹⁴ /²¹⁵
 (pathyā)
- 18.21 māsānte²¹⁶ mahatīm²¹⁷ pū-[N2 17b2]jām kṛtvā rātrau [Bo 41a2] (218-japet
 punaḥ⁻²¹⁸) /²¹⁹ (pathyā)
 tato *'rdharātre²²⁰ āyāti bhāryā²²¹ [N1 31a6] bhava-[N3 28a6]ti kāmītā /²²²
 (ma-vipulā)
 divyālaṅkāraṇaṃ²²³ bhojyaṃ²²⁴ śayane²²⁵ [Bo 41a3] pratyahaṃ vrajet²²⁶ /²²⁷
 (pathyā)
 [N2 17b3] (228-parastrīgamanatyāgo 'nyathā⁻²²⁸) *(229-mṛtyur bhaved tataḥ⁻²²⁹)
 /²³⁰ (pathyā)
 iyaṃ²³¹ kā-[N1 31a7]meśvarīde-[Ba 31a8]vī vāñchitārthapradāyinī²³² /²³³
 (pathyā)

²⁰⁷ N1 golocanena; Bo go 4 rocanena; N3 golo(上部に ro の記述)canena

²⁰⁸ N1 pratimā

²⁰⁹ Bo bhūryyapa-[Bo 41a1]tre; N3 bhūrjjapatre

²¹⁰ N1, M vidhāya

²¹¹ N1, Bo omit.; Ba // 26 //

²¹² N1 ā-[N1 31a5]ruhya saryyām

²¹³ N1, N2 prajapet

²¹⁴ N1, N2, Bo, Ba manum

²¹⁵ N1, Ba //; Bo omit.

²¹⁶ N2, Ba mā-[Ba 31a6]sānte; Bo māmsāte

²¹⁷ Bo mahahatīm; Ba mahatī

²¹⁸ N1, M punar japet

²¹⁹ N1 //; Bo omit.; Ba // 27 //

²²⁰ Emend. N1 rddharātram; N2 rddharātre; Bo, Ba rdharātre; N3 'rddharātre; M 'rdharātre

²²¹ N1, N3 bhāryyā

²²² N1, Ba, N3 //; Bo omit.

²²³ N1, Bo divyālaṅkāraṇaṃ; N2, Ba divyālaṃ-[Ba 31a7]karaṇaṃ

²²⁴ N1 tyaktā; M tyaktvā

²²⁵ Ba śayanaṃ

²²⁶ Ba tyajet

²²⁷ N1 //; Bo omit.; Ba // 28 //

²²⁸ N1 parastrīgamanatyāgo 'nyathā; Ba parastrīgamanam tyāgo anyathā; N3

parastrīgamanatyāgo anyathā

²²⁹ Emend. N1 mṛtyu bhavet tataḥ; N2, Bo, Ba mṛtyur adbhutaḥ; N3 mṛtyur udbhū-[N3

28a7]taḥ; M mṛtyuradūrataḥ

²³⁰ N1, Ba, N3 //; Bo omit.

²³¹ N1 evaṃ

²³² N1, N2, Bo, Ba vāñchitā-[Bo 41a3]rthapradāyinī

²³³ N1 //; Bo omit.; Ba // 29 // 4 //

- 18.22 atha ratisādhanam¹⁷⁴ bhavati //¹⁷⁵
 *(¹⁷⁶-paṭe citrāpayitavyām⁻¹⁷⁶) kanakavarṇṇām¹⁷⁷ sarvālaṅkārabhūṣitām¹⁷⁸
 utpalaha-[G 16b4]stām¹⁷⁹ kumārīm¹⁸⁰ jātipuṣpeṇa¹⁸¹ pūjayet¹⁸² /¹⁸³
 gugguludhūpaṃ¹⁸⁴ *datvāṣṭasahasraṃ¹⁸⁵ japed /¹⁸⁶ māsānte¹⁸⁷
 yathāvivhavataḥ¹⁸⁸ pūjām¹⁸⁹ kṛtvā ghr̥tapradīpaṃ¹⁹⁰ prajvālya¹⁹¹ tāvaj
 japed¹⁹² yā-[A 56a1]vad arddharātraṃ¹⁹³ [T1 38a1] (¹⁹⁴-svayam evāgacchati⁻
 194) /¹⁹⁵
- 18.23 (¹⁹⁶-ā-[T2 34a1]gatā yā⁻¹⁹⁶) tūṣṇībhāvena¹⁹⁷ kāmāyitavyā¹⁹⁸ /¹⁹⁹ evaṃ
 bhāryā²⁰⁰ bhavati /²⁰¹ sādhaḥ-[A 56a2]sya [G 16b5] saparivārasya²⁰²

¹⁷⁴ A ratiprisādhanam; T1 ratīsādhanam; T2 ratipriyasādhanam

¹⁷⁵ A omit.; T1 /

¹⁷⁶ Emend. A yaṭe citrāpatitavyām; T1 paṭe citrāpayitavyā; T2 paṭe citrarūpi / nīṣitamvyām; G paṭas citrāpayitavyām

¹⁷⁷ A kanakavarṇṇā; T2 kaṇakavarṇu

¹⁷⁸ A sarvvā-[A 55b4]laṅkārabhūṣitām; T1 sarvvālaṅkārabhū-[T1 37b4]ṣitā; T2 sarvālaṅkāravi-[T2 33b6]bhūṣitām; G sarvvālaṅkārabhūṣitām

¹⁷⁹ T1 utpalahastā; T2 utpalahastam

¹⁸⁰ A, T2 kumārīm; T1 kumārī

¹⁸¹ A, T2 jātikusumena; T1 jāṭikusumena

¹⁸² T2 pūjayat

¹⁸³ A, T1 //; T2 omit.

¹⁸⁴ A gurgurudhūpaṃ; T2 gurgurudhūpaṃ

¹⁸⁵ Emend. A datvā'datvā'ṣṭa-[A 55b5]sahasraṃ; T1 datvā'ṣṭasahasraṃ; T2 datvā aṣṭasahaśraṃ; G datvā aṣṭasahasraṃ

¹⁸⁶ A, T2 omit.

¹⁸⁷ A, T1, T2 māsam ekaṃ [T1 37b5] mā-[T2 33b7]sānte

¹⁸⁸ T2 -vibhūvataḥ

¹⁸⁹ T2 pūjā

¹⁹⁰ A ghr̥tapradīpaṃ; T1 ghr̥tam pradīpaṃ

¹⁹¹ A prajālya; T1 jvālya

¹⁹² T2 japed

¹⁹³ A, T1, T2 arddharātre

¹⁹⁴ A svayammevāgacchati; T2 svayam evāgacchatī

¹⁹⁵ A //; T2 omit.

¹⁹⁶ A āgatya; T1 āgatā

¹⁹⁷ A tūṣṇībhāvena; T2 tūṣṇibhāvena

¹⁹⁸ T2 kāmāyitavyām

¹⁹⁹ A //; T2 ::; G omit.

²⁰⁰ A, T2 bhāryā

²⁰¹ A //; T2 omit.

²⁰² A, T2 pariḥṣāṇi; T1 pariḥṣāṇi

- 18.22 *citradantām²³⁴ svarṇavarṇām²³⁵ *sarvālaṅkārabhūṣitām²³⁶ /²³⁷ (ra-vipulā)
 [N3 28a8] jātīprabhṛtibhiḥ²³⁸ pu-[Ba 31a9]ṣpaiḥ [Bo 41a5] ⁽²³⁹⁻samabhyarcya
 dhṛtotpalām⁻²³⁹⁾ /²⁴⁰ (pathyā)
 dhūpañ²⁴¹ ca gugguḷam²⁴² datvā²⁴³ japed aṣṭasahasrakam²⁴⁴ /²⁴⁵ (pathyā)
 ā-[N2 17b5][N3 28b1]saptadivasam²⁴⁶ [Bo 41a6] saptadivasānte²⁴⁷ tu²⁴⁸
 vaiṣṇavīm²⁴⁹ /²⁵⁰ (pathyā)
 pūjām kṛtvā²⁵¹ prayatnena²⁵² ghṛtadīpam²⁵³ vidhāya ca /²⁵⁴ (pathyā)
 prajaped *(²⁵⁵⁻ardharātre 'sau'⁻²⁵⁵⁾ samāyāti [N2 17b6] ratipriyā /²⁵⁶ (pathyā)
 18.23 kāmītā sā²⁵⁷ [N1 31b3] bhaved bhāryā²⁵⁸ divyabhogyam²⁵⁹ rasāyanam²⁶⁰ /²⁶¹
 (pathyā)

²³⁴ Emend. N1 cintām mantām; N2 citradantām; Bo citrāpitām; Ba citrārpitām; N3 citrāyitām;
 M cintayettām

²³⁵ N1 suvarṇābhām; N3 svarṇavarṇām

²³⁶ N1 sarvvālaṅkārabhūṣitām; N2, Bo, Ba sa-[N2 17b4]rvālaṅkārabhūṣitām; N3
 sarvvālaṅkārabhūṣitām; M divyālaṅkārabhūṣitām

²³⁷ N1, Ba //; Bo omit.

²³⁸ Bo jātīprabhṛtibhiḥ; Ba jātīprabhṛtibhiḥ; M sarvābhīṣṭapradām śaktim sarvajñānābhayapradām
 / jātīprabhṛtibhiḥ

²³⁹ N1 samairbhyarcyā-[N1 31b1]stutoyamaiḥ; N2, Bo, Ba samabhyarcya dhṛtotpalām; M
 samabhyarcya ghṛtotpalām

²⁴⁰ N1 //; Bo omit.; Ba // 30 //

²⁴¹ N1 evam prasārito mamtre mamtrasiddhi pradāyete // dhūpaṃ; N2, Bo, Ba dhūpaṃ; M evam
 prasādhite mantre mantrasiddhiḥ prajāyate // 7 // dhūpaṃ

²⁴² Bo, Ba guggulam; N3 gulggulam

²⁴³ M dattvā

²⁴⁴ N1, N2, Bo, Ba -kam

²⁴⁵ N1, Ba //; Bo omit.

²⁴⁶ Ba asaptadivasam

²⁴⁷ N1 saptadi-[N1 31b2]vaśante; N2, Bo, Ba saptadivasānte-[Ba 31a10]ṣu; M saptadivasānte

²⁴⁸ Bo omit.; M ca

²⁴⁹ N1 sundarī; N2 vaiṣṇavīm; Bo vaiṣṇavīm; Ba vaiṣṇavī

²⁵⁰ N1 //; Bo omit.; Ba // 31 //

²⁵¹ M vidhāya

²⁵² M yatnena

²⁵³ N1 ghṛteyam ca

²⁵⁴ N1, Ba //; Bo omit.

²⁵⁵ Emend. N1 arddharātrau sau; N2 arddharātre sau; Bo, Ba arddharātre [Bo 41a7] sau; N3
 arddharā-[N3 28b2]tre 'sau; M addharātre'sau

²⁵⁶ N1 //; Bo omit.; Ba // [Ba 31a11] // 32 //

²⁵⁷ Bo sa

²⁵⁸ N1, Bo, N3 bhāryā

²⁵⁹ N1, Bo divyabhogyam; Ba, M divyam bhojyam

²⁶⁰ N1, N2, Bo, Ba, N3 rasāyanam

²⁶¹ N1, Ba //; Bo omit.

pratipālayati²⁰³ divyakāmikabhojaṃ²⁰⁴ dadāti²⁰⁵ /²⁰⁶ (207-rasarasāyanam
pañcaviṃśatidīnāraṃ⁻²⁰⁷) prayaccha-[A 56a3]ti // //²⁰⁸

18.24 atha padminīsādhanaṃ bhavati /²⁰⁹ svagrhe śiraṣsthāne²¹⁰ [T2 34a3]
candenena²¹¹ maṇḍalakam kṛtvā gugguludhūpaṃ²¹² datvā²¹³

18.25 tataḥ²¹⁴ pūrṇamāsyāṃ yathā vibhavataḥ²¹⁵ pūjāṃ²¹⁶ kṛ-[T2 34a4]tvā
tāvaj²¹⁷ jape-[G 16b6]t²¹⁸ yā-[A 56a5]vad arddharātre niyatam āgacchati /²¹⁹
(220-āgatā yāḥ⁻²²⁰) kāmā-[T1 38a4]yitavyā²²¹ bhāryā²²² bhavati²²³ /²²⁴ (225-
divyakāmapradā bhavati /⁻²²⁵) (226-rasarasāyanam dadāti / siddhadravyaṃ
dadāti // //⁻²²⁶)

²⁰³ T2 pratipāmlayati; T1 pālayati /

²⁰⁴ A divyakāmikabhajanāni; T1 divyākāmikabhojanāni; T2 divyakāmika-[T2 34a2]bhojanāni

²⁰⁵ A, T2 ca dadāti

²⁰⁶ A //; T2 omit.

²⁰⁷ A, T2 aṣṭaśatadīnārān; T1 aṣṭā-[T1 38a2]śatidīnācāna; G rasarasāyanam
pañcaviṃśatidīnāraṃ

²⁰⁸ A // 5 //

²⁰⁹ A //

²¹⁰ A, T2 śiraṣsthāne

²¹¹ T2 candenena

²¹² A gurgu-[A 56a4]rudhūpaṃ; T2 gurgurudhūpa

²¹³ G dahatā

²¹⁴ A sahasraṃ japet māsam ekaṃ tataḥ; T1 ja-[T1 38a3]pet / sahasramāsam ekaṃ / tataḥ; T2
śaḥśraṃ japet māsam ekaṃ tata

²¹⁵ T1 yathā vibhavataḥ; T2 yathā vibhavataṃ

²¹⁶ T1, T2 pūjā

²¹⁷ T1 tāvad

²¹⁸ A japed; T1 varjjayed

²¹⁹ A //

²²⁰ A āgatya; T1 āgatā; T2 āgatā yā

²²¹ T1 kāmāyitavyā /

²²² A, T1 bhāryā

²²³ A bhavatiḥ

²²⁴ A, T1 omit.

²²⁵ A cirā vā kāmāpradā; T1 civā kāmāpradā /; T2 cirā vā kāmāpra-[T2 34a5]dā

²²⁶ A casara-[A 56b1]śāyanasiddhidravyaṃ ca dadāti // 6 //; T1 rasarasāyanam siddhi uktaṃ
dadāti // //; T2 rasarasāyanasiddhidravyaṃ ca dadāti // //

- pañcaviṃśatidīnāraṃ²⁶² vastrālaṃkaraṇāni²⁶³ ca /²⁶⁴ (pathyā)
 [N2 17b7] āśāṃ²⁶⁵ prapūrayety²⁶⁶ eva²⁶⁷ siddhadravyaṃ²⁶⁸ prayacchati²⁶⁹
 /²⁷⁰ (pathyā)
- 18.24 sva-[Bo 41b2]gr̥he vā śivasthāne [N3 28b4] maṇḍalaṃ²⁷¹ candanātmakam²⁷²
 /²⁷³ (pathyā)
 [Ba 31b1] kṛtvā²⁷⁴ gugguludhūpaṇ²⁷⁵ ca²⁷⁶ datvābhya-[N2 17b8]rcya²⁷⁷
 vidhānataḥ²⁷⁸ /²⁷⁹ (pathyā)
- 18.25 [Bo 41b3] japed aṣṭasahasraṃ²⁸⁰ tu mā-[N1 31b5]sam e-[N3 28b5]kaṃ
 nirantaram²⁸¹ /²⁸² (pathyā)
 paurṇamāsyāṃ²⁸³ [Ba 31b2] samabhyarcya²⁸⁴ yathā vibhavato²⁸⁵ ni-[Bo
 41b4]śi²⁸⁶ /²⁸⁷ (pathyā)

²⁶² N1 paṃvavīṃśativīmāraṃ;

N2, Bo paṃcaviṃśa-[B 41b1]tidinārāṇi; Ba paṃcaviṃśatidīnārāṇi; N3 pañcaviṃśatidinā-[N3 28b3]rāṇi

韻律の関係上、M の記述を採った

²⁶³ N1 vastrāraṃkaraṇāni; N2, Ba vastrālaṃkaraṇāni; Bo vastrālaṃkārāṇi

²⁶⁴ N1, Ba //; Bo omit.; Ba // [Ba 31a12] // 33 //

²⁶⁵ N1 āśāḥ; Bo āśā; M āśās ca

²⁶⁶ N1 pūrayatīty; N2 pūrayat; M pūrayatyāśu

²⁶⁷ N1, N2, Bo, Ba evaṃ; M omit.

²⁶⁸ M siddhidravyaṃ

²⁶⁹ N1, N2, Bo, Ba, N3 prayacha-[N1 31b4]ti

²⁷⁰ N1 //; Bo 556; Ba // 5 //; M // 8 //

²⁷¹ N1, Bo, Ba maṇḍalaṃ; N2 maṇḍala

²⁷² N1 candanārthakaṃ; N2, Bo, Ba candanātmakaṃ

²⁷³ N1, N3 //; Bo omit.; Ba // 34 //

²⁷⁴ N1 mudrā

²⁷⁵ N1 gurguludhūpaṃ; N2, Bo gugguludhūpaṃ; Ba gugguladhūpaṃ; N3 gulguluṃ dhūpaṇ

²⁷⁶ Bo caṃ

²⁷⁷ M dattvābhycya

²⁷⁸ Ba yathāvidhiḥ

²⁷⁹ N1, Ba //; Bo omit.

²⁸⁰ N1, N2, Bo, Ba aṣṭasahasraṃ

²⁸¹ N1, N2, Bo, Ba nirantaram

²⁸² N1 //; Bo omit.; Ba // 35 //

²⁸³ N1 pūrṇamāsyāṃ; N3 paurṇamāsyāṃ; M paurṇamāsyā

²⁸⁴ N1 samābhycya

²⁸⁵ N1 -vibhavaḥ

²⁸⁶ Ba niśi

²⁸⁷ N1, Ba //; Bo omit.

- 18.26 atha naṭisāadhanam²²⁷ bhavati /²²⁸
 aśokavṛkṣasyādhastāt²²⁹ sādhayet²³⁰ /²³¹ [A 56b2][T2 34a6] māṃsāhāreṇa²³²
 gandhapuṣpadhūpaṃ²³³ datvā sa-[G 17a1]hasraṃ²³⁴ jayet /²³⁵
 *māsasyāntareṇa²³⁶ niyatam āgacchati /²³⁷ [T1 38b1] āgatā²³⁸ sā²³⁹ mātā
 bha-[A 56b3]gi-[T2 34a7]nī bhāryā²⁴⁰ bhavati²⁴¹ /²⁴²
 18.27 ⁽²⁴⁹⁻yadi bhāryā²⁴³ bhavati /²⁴⁴ divyarasarasāyanam²⁴⁵ dadāti /²⁴⁶ aṣṭau
 *dīnārāṃ²⁴⁷ prayaccha-[A 56b4]ti /²⁴⁸⁻²⁴⁹⁾

²²⁷ A naṭisāadhanam; T2 natisāadhanam

²²⁸ A, T2 //

²²⁹ A aśokavṛkṣādhastāntam; T1 aśovṛkṣa'dhastyata; T2 aśokavṛkṣādhastāntam

²³⁰ A jāpayet; T2 jayet

²³¹ A //; T2 omit.

²³² A māṃsāhāreṇa; T1 mātsāhāreṇa; T2 māṃsāhāreṇa

²³³ A, T2 puṣpadhūpagandham; T1 gandhapuṣpadhūpan

²³⁴ T2 śahaśraṃ

²³⁵ A //; T2 omit.

²³⁶ Emend. A māṃsātyantareṇa; T1 māṃsātyanareṇa; T2 māṃsātyantareṇa; G māṃsātyantareṇa

²³⁷ A //

²³⁸ A āgatya

²³⁹ A, T1, T2 omit.

²⁴⁰ A, T2 bhāryā

²⁴¹ A dāsīsaṃkṣapataḥ; T1 dāsāṃkṣapataḥ; T2 dāsīsaṃkṣapata

²⁴² A omit.; T2 :

²⁴³ A, T2 bhāryā

²⁴⁴ A, T2 omit.

²⁴⁵ A divyavyarasarasāyanam

²⁴⁶ A //; T2 omit.

²⁴⁷ Emend. A, T1, T2 dīnārāṃ

²⁴⁸ A //; T2 omit.

²⁴⁹ G omit. G 写本では G 17a2 に bhāryā の記述が認められるが、漢訳の順番に合わせ、A, T1, T2 の記述を用いた。

- prajaped *ardharātre²⁸⁸ tu²⁸⁹ samāgacchati²⁹⁰ padmi-[N3 28b6]nī²⁹¹ /²⁹²
(pathyā)
sarvāśāḥ²⁹³ [N1 31b6] pūrayaty²⁹⁴ eṣā bhā-[Ba 31b3]ryā²⁹⁵ bhavati kā-[Bo 41b5]mitā /²⁹⁶ (pathyā)
rasaṃ rasāyanam divyam²⁹⁷ siddhadraavyam²⁹⁸ prayacchati²⁹⁹ /³⁰⁰ (pathyā)
18.26 aśo-[N3 28b7]kavṛkṣam āgatyā matsyamāmśam³⁰¹ pradāpayet /³⁰² (pathyā)
dhūpaṃ³⁰³ ca gugguḷam³⁰⁴ datvā³⁰⁵ japed aṣṭasahasrakam³⁰⁶ /³⁰⁷ (pathyā)
māsānte³⁰⁸ maha-[N2 17b11][N3 28b8]tīm³⁰⁹ pūjām kṛtvā [Bo 41b7] (310-
prāgvaj japen niśi⁻³¹⁰) //³¹¹ (pathyā)
ardharātre³¹² [N1 32a1] samāyāti janani bhaginī vadhūḥ³¹³ /³¹⁴ (pathyā)
18.27 svecchayā³¹⁵ janani³¹⁶ bhūtvā [N3 29a1] bho-[Bo 41b8]jyam³¹⁷ [N2 17b12]
yacchati³¹⁸ vāsasi³¹⁹ /³²⁰ (pathyā)

²⁸⁸ Emend. N1, N2, N3, M arddharā-[N2 17b9]tre; Bo arddharātre; Ba arddharātram

²⁸⁹ Ba ta

²⁹⁰ N1, N2, Bo, Ba, N3 samāgacchati

²⁹¹ Bo padmanī

²⁹² N1 //; Bo omit.; Ba // 36 //

²⁹³ N1 sarvāśāḥ; Bo sarvāśā; Ba sarvāśā; N3 sarvvāśāḥ

²⁹⁴ N1 pūrayety

²⁹⁵ N1, N3 bhāryyā

²⁹⁶ N1, Ba //; Bo omit.

²⁹⁷ M dravyam

²⁹⁸ N2 siddhadraavya; Bo siddhe dravyam; M siddhidraavyam

²⁹⁹ N1, N2, Ba, N3 pra-[N2 17b10]yachati; Bo prayachatiḥ

³⁰⁰ N1 //; Bo omit.; Ba // 37 // 6 //; M // 9 //

³⁰¹ N1 matsyamām-[N1 31b7]sa; Bo matsyamām-[Bo 41b6]sām; Ba matsyamā-[Ba 31b4]sam

³⁰² N1, Ba //; Bo omit.

³⁰³ N1, N2, Bo, Ba dhūpaṃ

³⁰⁴ N1 gurguḷam; Bo, Ba gugguḷam; N3 gulguḷam

³⁰⁵ M dattvā

³⁰⁶ N1, N2, Ba aṣṭasahasrakam; Bo aṣṭasahasramkam

³⁰⁷ N1 //; Bo omit.; Ba // 38 //

³⁰⁸ N1, N2, Ba māsānte; Bo māsyate

³⁰⁹ Ba mahatī

³¹⁰ N1 prāgvajapeniśi; Bo prāgvaj japeniśi; Ba prāgvaj japen ni-[Ba 31b5]śi; prāgvat japen niśi

³¹¹ N2, M /; B omit.

³¹² N1, N3, M arddharātre; N2 addharātre

³¹³ Ba vadhū

³¹⁴ N1 //; Bo omit.; Ba // 39 //

³¹⁵ N1 svachayā; N2, Ba, N3 svechayā; Bo svechaya

³¹⁶ N1 janani

³¹⁷ N1 rājyam

³¹⁸ N1, N2, Bo, Ba, N3 yachati

³¹⁹ Ba vāsasi

³²⁰ N1, Ba //; Bo omit.

- 18.28 yadi [T2 34b1] mātā bhavati²⁵⁰ kāmikabhojanam²⁵¹ dadāti²⁵² /²⁵³
 vastrayugalam dadāti²⁵⁴ /²⁵⁵ (257-²⁵⁷-suvarṇṇapalaśatam dadāti /
 *rasarasāyanam²⁵⁶ dadāti /-²⁵⁷)
- 18.29 yadi bhaginī bhavati /²⁵⁸ yojanasahasrāt²⁵⁹ stri-[A 56b5]yam²⁶⁰ ānīya²⁶¹
 dadāti /²⁶² [T2 34b2][G 17a2] (266-
 *vastrālaṅkāṛakāmikabhojanarasarasāyanam²⁶³ ca²⁶⁴ dadāti // //²⁶⁵⁻²⁶⁶)
- 18.30 athānurāginīsāadhanam²⁶⁷ bhavati /²⁶⁸
 kuṃkumena yakṣiṇīm²⁶⁹ ālikhya²⁷⁰ bhūrjapatre²⁷¹ tataḥ²⁷² pratipadam
 ārabhya²⁷³ gandhapuṣpadīpavidhinā²⁷⁴ trisaṃdhyam²⁷⁵ japet²⁷⁶ māsam

²⁵⁰ T1, G bhavati /

²⁵¹ T1, T2 kāmikabhoja-[T1 38b2]na

²⁵² A, T2 omit.

²⁵³ A, T2 omit.

²⁵⁴ A ca dadāti

²⁵⁵ A //; T2 :

²⁵⁶ Emend. G sarasāyanam

²⁵⁷ A, T1, T2 omit.

²⁵⁸ A //; T2 omit.

²⁵⁹ T2 yojanasahasrāt; G rasarasāyanam dadāti /

漢訳の「於千由旬内」に従って A, T1 の記述に従った。

²⁶⁰ G divyatrīm

²⁶¹ T1 ānayitvā; T2 āniya

²⁶² A //; T2 omit.

²⁶³ Emend. A vastrālaṅkāṛakāmike bhojanarasarasāyanam; T1 vastrālaṅkāṛakāmikabhojanam;

T2 vastrālaṅkāṛakāmikabhojanarasarasāyanam

²⁶⁴ T1 omit.

²⁶⁵ A // 7 //; T1 / ra-[T1 38b3]sarasāyanam dadāti // //

²⁶⁶ G yadi bhāryā bhavati / divyarasarasāyanam dadāti / aṣṭau dīnāraṃ prayacchati // //

G では漢訳の「供給飲食衣服種種聖藥等」が omit している為、A, T1, T2 写本に従う。

²⁶⁷ A athānucāginī-[A 57a1]sāadhanam; T1 anurāginīsādhana; T2 atha anurāginīsāadhanam

²⁶⁸ A, T2 //

²⁶⁹ A, T1 bhūrjapatre yakṣiṇīm; T2 bhū-[T2 34b3]japatre yakṣaṇīm

²⁷⁰ G alikhya

²⁷¹ A, T1, T2 omit.

²⁷² T2 tata

²⁷³ A T1 ārabhyaḥ

²⁷⁴ A, T1, T2 puṣpadhūpavidhinā

²⁷⁵ A trisaṃ-[A 57a2]dhyam; T1 tri-[T1 38b4]sadhyam; T2 trisaṃdhyā

²⁷⁶ T1 japodayaḥ /; G japet /

- 18.28 bha-[Ba 31b6]ginī ⁽³²¹⁻cet tadā⁻³²¹⁾ kāmyaṃ³²² bhojyālāṅkaraṇādikam³²³ /³²⁴
(pathyā)
⁽³²⁵⁻sahasrayojanād divyāṃ⁻³²⁵⁾ striyam³²⁶ ā-[N3 29a2]nīya yacchati³²⁷ /³²⁸
(pathyā)
- 18.29 [N2 18a1] bhāryā³²⁹ ce-[Ba 31b7]t³³⁰ pūrayaty³³¹ āśāṃ³³² rasañ³³³ cāpi³³⁴
rasāyanam³³⁵ /³³⁶ (pathyā)
⁽³³⁷⁻dadāty a-[Bo 42a2]ṣṭau dīnārāṇi⁻³³⁷⁾ [N1 32a3] pratyaham parito-[N3
29a3]ṣitā /³³⁸ (pathyā)
- 18.30 kuṅkumena ³³⁹ samāli-[Ba 31b8]khyā ³⁴⁰ yakṣiṇīm ³⁴¹ bhū-[N2
18a2]rjapatrake³⁴² /³⁴³ (pathyā)
pratipattithim³⁴⁴ ārabhya trisandhyam³⁴⁵ paripūjayet /³⁴⁶ (pathyā)
pu-[N3 29a4]ṣpādyaiḥ ³⁴⁷ pūjayed ³⁴⁸ aṣṭasahasram ³⁴⁹ anurāgiṇīm ³⁵⁰ /³⁵¹
(pathyā)

³²¹ Bo, Ba cetadā

³²² N1 kāryyam; Bo, Ba kāmya; N3 kāmśyam

³²³ N1, N2, Bo, Ba bhojyālam-[N1 32a2]karaṇādikam

³²⁴ N1 //; Bo omit.; Ba // 40 //

³²⁵ N1 sahasrabhojanādivyam; Bo sahasrayojanādi-[Bo 42a1]vyām; Ba sahasrayojanādivyam

³²⁶ Ba strīyam

³²⁷ N1, N2, Bo, Ba, N3 yachati

³²⁸ N1, N2, Ba //; Bo omit.

³²⁹ N1, N3 bhāryā

³³⁰ N2 cat

³³¹ N1 pūrayet; Bo pūrayāty; M pūrayat

³³² N1 māśām; Bo āśām; M prāśā

³³³ N1, N2, Ba rasam; Bo rasām

³³⁴ N1, M caiva

³³⁵ N1, N2, Bo, Ba rasāyanam; N3 rasāyaṇam

³³⁶ N1 //; Bo omit.; Ba // 41 //

³³⁷ M dīnārāṇi dadāty aṣṭau

³³⁸ N1 //; Bo omit.; Ba // 7 //; M // 10 //

³³⁹ N1, N2, Ba kuṅkumena; Bo kuṅkamena

³⁴⁰ N1 samālikhyam; N2 samāgiṃkhyā

³⁴¹ N1 yachāṇīm; Ba, N3 yakṣiṇī

³⁴² N1 bhuḥjapatrake; N3 bhūrjjapatrake

³⁴³ N1 //; Bo omit.; Ba // 42 //

³⁴⁴ N1 pratipattithim; N2 pratipaddinam; Bo pratipattipim

³⁴⁵ N1, N2, Bo, Ba trisandhyam; M pratyaham

³⁴⁶ N1, Ba //; Bo omit.

³⁴⁷ N1, N2, Bo, Ba dhūpādyai-[N1 32a4]h; M dhūpādhaiḥ

³⁴⁸ N1, N2, Bo, M prajaped; Ba prajapedy

³⁴⁹ Ba aṣṭasahasram-[Ba 31b9]m

³⁵⁰ N1, N3 anurāgiṇī; N2 anurāgiṇīm; Bo anurāgi-[Bo 42a4]nī; Ba anurāgiṇīm

³⁵¹ N1 //; Bo omit.; Ba // 43 //

ekaṃ²⁷⁷ tataḥ²⁷⁸ *paurṇṇamāsyāṃ²⁷⁹ [T2 34b4] yathā vibhavataḥ²⁸⁰ pū-[G
17a3]jāṃ²⁸¹ kṛtvā gṛhapradīpaṃ²⁸² prajvālya²⁸³ (284-sakalāṃ rātriṃ⁻²⁸⁴) [A
57a3] japet /²⁸⁵ tataḥ²⁸⁶ prabhāte²⁸⁷ niyatam ā-[T1 38b5]gacchati /²⁸⁸

18.31 āgatā²⁸⁹ *yā²⁹⁰ kā-[T2 34b5]mapradā bhavati²⁹¹ /²⁹² (293-bhāryā bhavati /⁻²⁹³)
(294-divyārasahasrāṇaṃ dadāti /⁻²⁹⁴) (295-dīnārasahasraṃ dadāti /⁻²⁹⁵) (296-
varṣasahasraṃ dadāti //⁻²⁹⁶)

18.32 bhūtaḍāmaramahātāntre²⁹⁷ yakṣiṇīśādhana vidhivistaratantraḥ²⁹⁸ // //²⁹⁹

²⁷⁷ A ekaṃ //

²⁷⁸ T2 tata

²⁷⁹ A, T2 paurṇṇamāsyāṃ; T1 pūrṇamāsyāṃ; G pauṇṇamāsyā

²⁸⁰ T2 yathā vibhavataṃ

²⁸¹ T1, T2 pūjā

²⁸² A gṛhapradīpaṃ; T2 gṛhaśadipa

²⁸³ A prajālya

²⁸⁴ A, T1 sakalarātriṃ; T2 sakalarātri

²⁸⁵ A //; T2 omit.

²⁸⁶ A, T1, T2 omit.

²⁸⁷ T1 prasyate

²⁸⁸ A //; T2 :

²⁸⁹ A āgatya

²⁹⁰ Emend. A, T1, T2 omit.; G yāḥ

²⁹¹ A, T2 bhāryā bhavati

²⁹² A //; T1, T2 omit.

²⁹³ A, T2 omit.; T1 bhāryā ca

²⁹⁴ A divyadinārasahasraṃ prayaccha-[A 57a4]ti rasarasāyaṇaṃ ca dadāti //; T1

dīvyadinārasahasraṃ prayacchati / rasarasāyaṇaṃ vā dadāti; T2 divyadinārasahaśraṃ

prayacchati rasarasāyaṇaṃ ca dadāti

²⁹⁵ A, T1, T2 omit.

²⁹⁶ A varṣasahasrāṇi jīvati // 8 //; T1 varṣasahasrāṇi jīvayati // //; T2 varṣasahaśrāṇi jivati // [T2
34b6] //

²⁹⁷ A iti bhūtaḍāmaratantra; T1 bhūtaḍāmaratantrarāje; T2 iti bhūtaḍāmaratantrarāje

²⁹⁸ A yayakṣiṇīśādhana-[A 57a5]navidhivistaratantraḥ; T1 yayakṣiṇīśādhana vidhivistaratantra; T2
yakṣiṇīśādhana vidhivistaratantra; G yakṣiṇīśā-[G 17a4]dhanavidhivistaratantraḥ

²⁹⁹ T1 // 8 //

- paurṇamāsyām³⁵² punā³⁵³ rātrau [N2 18a3] ghṛtadīpaṃ³⁵⁴ prakalpayet /³⁵⁵
(pathyā)
pūjayed³⁵⁶ [N3 29a5] gandhapuṣpādyaiḥ³⁵⁷ sakalām [Bo 42a5] prajape-[Ba
31b10]n³⁵⁸ niśām³⁵⁹ /³⁶⁰ (pathyā)
prabhāte 'sau³⁶¹ samāyāti bhāryā³⁶² bhavati kāmītā /³⁶³ (pathyā)
18.31 ⁽³⁶⁴⁻mudrāsahasraṃ bhojya-[N3 29a6]ñ^{- 364)} [Bo 42a6] ca rasañ³⁶⁵ cāpi
rasāyanam³⁶⁶ /³⁶⁷ (ma-vipulā)
saṃprayacchati³⁶⁸ vastrā-[N1 32a6]ṇi jīved³⁶⁹ varṣasahasrakam³⁷⁰ /³⁷¹
(pathyā)
18.32

³⁵² N1, N2, Bo, Ba paurṇamāsyām; N3 paurṇamāsyām

³⁵³ Ba punar

³⁵⁴ N1 dhṛtadīpaṃ; Bo ghṛtadīpa

³⁵⁵ N1, Ba //; Bo omit.

³⁵⁶ N3 pūjayet

³⁵⁷ N2 gamdhapūjādyaiḥ; Bo, Ba gamdhapūṣpādyaiḥ

³⁵⁸ N3 pūjāyen

BBT との対応から prajapen を採った。

³⁵⁹ N1, N2, Bo, Ba, N3 ni-[N1 32a5]śām

³⁶⁰ N1 //; Bo omit.; Ba // 44 //

³⁶¹ N1, N2, Bo, Ba sau

³⁶² N1, N3 bhāryā

³⁶³ N1, Ba //; Bo omit.

³⁶⁴ N1 mudrāsāsahasratyajyam; N2, Bo, Ba mu-[N2 18a4]drāsahasrabhojyam

³⁶⁵ N1, N2, Ba, Bo rasaṃ

³⁶⁶ N1 rasāyanam; N2, Bo, Ba rasāyanam; N3 rasāyanam

³⁶⁷ N1 //; Bo omit.; Ba // [Ba 31b11] // 45 //

³⁶⁸ N1 pradadāti ca; N2, Bo, Ba, N3 saṃprayacchati; M prayacchati ca

³⁶⁹ N1, Bo jīve

³⁷⁰ N1, N2, Bo, Ba varṣasahasrakam

³⁷¹ N1, Ba //; Bo 8

BBT 10 章 細分番号 19 サンスクリット対照テキスト

BBT

10 章 (細分番号 19)

- 19.1 atha³⁰⁰ vajrapāṇiguhyakādhipatir³⁰¹ idam³⁰² uvāca /³⁰³ yadi yakṣiṇyaḥ³⁰⁴
 samaye³⁰⁵ na³⁰⁶ tiṣṭhanti³⁰⁷ /³⁰⁸ anena krodhasahitenākṛṣya³⁰⁹ japet //³¹⁰
- 19.2 om dhrūṃ kaṭṭa 2³¹¹ [T1 39a2] amukayakṣiṇīm³¹² [T2 35a1] hrīḥ³¹³ jaḥ³¹⁴
 hūṃ phaṭ //³¹⁵
 anena krodhasahite-[A 57b2]na sahasraṃ³¹⁶ japet //³¹⁷ [G 17a5] śīghraṃ³¹⁸
 āgacchati³¹⁹ /³²⁰ yadi śīghraṃ³²¹ nāgacchati³²² /³²³ *akṣimūrdhni³²⁴
 sphuṭati³²⁵ /³²⁶ (327- tatkṣaṇāt eva mriyate [T1 39a3] /-³²⁷ aṣṭamahānarake³²⁸
 patati³²⁹ //³³⁰

³⁰⁰ A, T1, T2 atha khalu

³⁰¹ T2 vajrapāṇiguhyakādhi-[T2 34b7]patir

³⁰² T2 idam

³⁰³ A //; T2 :

³⁰⁴ A, T1, T2 omit.

³⁰⁵ T2 samaya

³⁰⁶ G omit. ここは漢訳の読み、および意味合いから考えても na を補う方が良いであろう。

³⁰⁷ A, T2 tiṣṭa-[A 57b1]ti

³⁰⁸ A //; T2 omit.

³⁰⁹ A, T2 krodhasahitena; T1 krodhasahitenā

³¹⁰ T2 // //

³¹¹ G 2 /

³¹² A amukayakṣiṇī; T1, T2 amukayakṣaṇī

³¹³ T2 hrīṃḥ

³¹⁴ A, T1 jaḥ jaḥ; T2 jaḥ ja

³¹⁵ T2 // //

³¹⁶ T2 sahaśraṃ

³¹⁷ A, T2 omit.; T1 /

³¹⁸ A cchīgam; T2 sighraṃ; G śīghraṃ

³¹⁹ T1 āgaccā

³²⁰ A //; T2 omit.

³²¹ A, T1, T2 omit.

³²² G nnāgacchati

³²³ A, T2 omit.

³²⁴ Emend. A, T1 akṣimūrdhni; T2 acchimudh; G akṣimūdhni

³²⁵ T2 sphu-[T2 35a2]tati

³²⁶ A, T1, T2 omit.

³²⁷ A tatkṣaṇāt mriyate //; T2 tamtkṣaṇāt mriyate; G omit. 漢訳の「刹那命終」に従って T1 の記述を採った。

³²⁸ A aṣṭau mahānarake; T2 vā aṣṭau māhānarake; G illeg.

³²⁹ A patinti; T2 patanti

³³⁰ A, T2 // //

HBT 11 章 細分番号 19 サンスクリット対照テキスト

HBT

11 章 (細分番号 19)

- 19.1 yadi kālam ³⁷²atikramya nāgacchati⁻³⁷²) [N2 18a5] na siddhyati³⁷³ /³⁷⁴
(pathyā)
- 19.2 [Ba 31b12] viṣaṃ³⁷⁵ krodhātmakam³⁷⁶ *proktāmukayakṣiṇy³⁷⁷ ataḥparam³⁷⁸
[N1 32a7] /³⁷⁹ (pathyā)
³⁸⁰bhūteśāt sādaram⁻³⁸⁰) vā-[Bo 42a8]yudvayaṃ³⁸¹ krodhāstrasamyutam³⁸²
/³⁸³ (pathyā)
kro-[Ba 32a1]dhenā-[N2 18a6]nena cākramya³⁸⁴ japed aṣṭasahasrakam³⁸⁵ /³⁸⁶
(pathyā)
tathākṛte samāyā-[Bo 42b1]ti vāñchitārtham³⁸⁷ prayacchati³⁸⁸ /³⁸⁹ (pathyā)
[N3 29b1] yadi nāyāti [Ba 32a2] mriyate³⁹⁰ akṣimūrdhni³⁹¹ sphu-[N2
18a7]taty api /³⁹²
raurave narake [Bo 42b2] vāpi³⁹³ pātayet krodhabhūpatiḥ³⁹⁴ /³⁹⁵ (pathyā)

³⁷² Emend. N1 iti kramya nāga kṛti; N2, Bo atikrā-[Bo 42a7]men nāgacchati; Ba iti
kramyenogachati; N3 atikramya nāgacha-[N3 29a7]ti; M atikrāmen nāgacchati

³⁷³ Bo, M sidhyati; N3 siddhati

³⁷⁴ N1 //; Bo omit.; Ba // 46 //

³⁷⁵ M vidham

³⁷⁶ M krodhāstrayuk

³⁷⁷ N1 proktāmuka+kṣiṇy; N2 proktā amukayakṣiṇy; Bo, Ba proktā amukayakṣaṇy; N3 proktā
'strakayakṣiṇy

BBT との対応から amukayakṣiṇī の記述を採った。

³⁷⁸ N1, N2, Ba ataḥparam; Bo ataḥ

³⁷⁹ N1, Ba //; Bo omit.

³⁸⁰ N2, Ba bhūteśa ādaram; Bo bhūteśa sodaram; N3 bhūteśy ādaram; M bhūteśīm sādaram

³⁸¹ M yugmaṃ dvayaṃ

³⁸² N1, N2, Bo, Ba, N3 krodhā-[N3 29a8]strasamyutam

³⁸³ N1 //; Bo omit.; Ba // 47 //

³⁸⁴ N2 cākṛṣya; Bo cākṛṣyam; Ba nākramya

³⁸⁵ N1, N2, Ba, Bo aṣṭasahasrakam

³⁸⁶ A, Ba //; Bo omit.

³⁸⁷ N1, Bo, Ba vāñchitārtha; N2 vāñchitārtham

³⁸⁸ N1, N2, Bo, Ba, N3 prayachati

³⁸⁹ N1 //; Bo, N3 omit.; Ba // 48 //

³⁹⁰ N1 mriyamte; N2 mriyate

³⁹¹ N1, N2 akṣimūrdhni; Bo achimūrdhni; N3 akṣnimūdhni; M ākṣṇi mūrdhni

³⁹² N1, Ba //; Bo omit.

³⁹³ N2 pāti; M ghore

³⁹⁴ N1 krodhabhūdhābhūpatiḥ

³⁹⁵ N1 //; N2, Bo omit.; Ba // 41 //; M // 11 //

- 19.3 atha *krodharājamudrālakṣaṇam³³¹ /³³²
 anyonyamuṣṭim³³³ kṛtvā kaniṣṭhādvayam³³⁴ veṣṭayet³³⁵ /³³⁶
 *tarjanīdvayam³³⁷ prasārya³³⁸ kuñcayet³³⁹ /³⁴⁰ *eṣāpratihatā³⁴¹
 krodhāṅkuśamudrā³⁴² //³⁴³ anena³⁴⁴ mudrā-[A 57b5]rājena trailo-[G
 17a6]kyākarṣaṇyākarṣati³⁴⁵ //³⁴⁶
- 19.4 atha yakṣiṇīmudrālakṣaṇam³⁴⁷ bhavati /³⁴⁸
 samakatalapāṇim³⁴⁹ [A 58a1][T2 35a5] kṛtvā /³⁵⁰
 *madhyamāṅguliviparītenānāmikātīryaṅgate³⁵¹ (352-bāhyataḥ sthāpya⁻³⁵²)
 *(353-tarjanyabhiniṣṭe kaniṣṭhāgarbhasamsthita⁻³⁵³) /³⁵⁴ sarvayakṣiṇīnām³⁵⁵
 paramamūlamudrā³⁵⁶ /³⁵⁷

³³¹ A, T1 krodharājamudrālakṣaṇam bhavati; T2 krodharājarājamudrālakṣaṇam bhavati; G kromudrelakṣaṇam

³³² A, T2 //

³³³ T2 a-[T2 35a3]nyonyanamuṣṭi

³³⁴ A kaniṣṭha-[A 57b4]dvaya; T2 kaniṣṭhādvaya

³³⁵ T2 veṣṭayat

³³⁶ A //; T2 omit.

³³⁷ Emend. A tarjjanīdvaya; T1 tarjjanīdvayam; T2 tarjjanīdvayam; G tarjjanīdvaya

³³⁸ A, T2 prasāryya

³³⁹ T2 kuñcayat

³⁴⁰ A, T2 omit.

³⁴¹ Emend. A, T2 teṣāmm apratihātā; T1 teṣām 'pra-[T1 39a4]tihatā; G eṣā apratihātā

³⁴² T2 krodhākuśa-[T2 35a4]mudrā; G krodhāṅkuśamudrā

³⁴³ T2 :

³⁴⁴ T2 aṣṭena

³⁴⁵ A trailokyam ākarṣadyati; T1 trailokyamayākarṣayati; T2 trailokem ākarṣadyati

³⁴⁶ A // 1 //; T2 // //

³⁴⁷ T2 yakṣiṇīmudrālakṣaṇam

³⁴⁸ A, T2 //

³⁴⁹ A, T2 samakaratayāni; T1 samakaratalayāni

³⁵⁰ A, T1, T2 omit.

³⁵¹ A madhyamāṅgulyā punaravpalitaṃ // anāmikā tarjjanī; T1 madhyamāṅgulya [T1 39a5] punalamviparitaṃ / anāmikātrijarṅga; T2 madhyatāṅgulyā punarapipalitaṃ anāmikā tarjjanī

³⁵² A bāhyatvavasthāpyate; T1 bāhyatyevasthāpyate ; T2 bāhyavasthāpyete

³⁵³ Emend. A tarjjanī a-[A 58a2]siniveṣkakaniṣṭhāgarvbhasasthitā; T1 tarjjanī aśinirvasthā kaniṣṭhāgarbhasasthitā; T2 asinivesthe kaniṣṭha-[T2 35a6]garbhasasthitā; G tarjjanī abhinivīṣṭhe kaniṣṭhāgarbhasamsthita

³⁵⁴ A, T2 //

³⁵⁵ A, T1 sarvvayakṣiṇīnām; T2 sarvayakṣaṇīnām

³⁵⁶ A, T2 paramudrā; T1 paramamudrā

³⁵⁷ A, T1, T2 //

- 19.3 muṣṭi-[N1 32b2][N3 29b2]m anyonyam³⁹⁶ āsthā-[Ba 32a3]ya kaniṣṭhe³⁹⁷
 veṣṭayed³⁹⁸ ubhe³⁹⁹ (pathyā)
 *prasāryākuñcayet⁴⁰⁰ tatra⁴⁰¹ tarjanyāv⁴⁰² aṅkuśākṛti⁴⁰³ /⁴⁰⁴ (pathyā)
 [Ba 32a4] iyaṃ⁴⁰⁵ krodhāṅkuśā-[N3 29b3]mudrā⁴⁰⁶ trailokyākaraṇakṣamā⁴⁰⁷
 /⁴⁰⁸ (pathyā)
 19.4 pāṇi⁴⁰⁹ samau⁴¹⁰ vidhāyāto⁴¹¹ viparītamadhyamādvaye⁴¹² /⁴¹³
 kṛtvā⁴¹⁴ (415-tiryag anāmānte-⁴¹⁵) bāhyataḥ⁴¹⁶ [Bo 42b5] sthāpayet⁴¹⁷
 budhaḥ⁴¹⁸ /⁴¹⁹ (pathyā)
 tarjanyābhiniṣṭena⁴²⁰ kaniṣṭhāgarbhasamsthita⁴²¹ /⁴²² (pathyā)

³⁹⁶ M anyo'nyam

³⁹⁷ N1, Bo, Ba kaniṣṭhe; N2 kaniṣṭā

³⁹⁸ N1 veṣṭayeddh; N3 vaddhayed

³⁹⁹ N1, Ba //; Bo omit.

⁴⁰⁰ N1 prāsāryyakumcā; N2 prasārya kuṃcaye-[N2 18a8]t; Bo prasāryo [Bo 42b3] kuṃcame;
 Ba prasāryākuṃcaye; N3 prasāryyākuñcaye; M prasāryākuñcyam

⁴⁰¹ N1, M omit.

⁴⁰² N1 tarjanyo; Bo tarjjamyāv; N3 tarjjanyār; M tarjanyau

⁴⁰³ N1 kāryyācaiṣāṃkuśākṛti; N2, Bo aṃkuśākṛti; Ba akuśākṛtiḥ; M kāyaum tāvaṅkuśākṛti

⁴⁰⁴ N1, N3 //; Bo omit.; Ba // 50 //

⁴⁰⁵ Ba ityaṃ

⁴⁰⁶ N1, N2, Bo, Ba, M krodhāṃkuśi mudrā

⁴⁰⁷ N1 trailo-[N1 32b3]kyāṃ karaṇakṣamā; Bo trailokyākaraṇakṣamā ~~krodhī~~ [Bo 42b4]mudrā
 (krodhīmudrā には取り消し線) ; Ba trailokyākaraṇakṣamaḥ; N3 trailokyakarṇakṣamā

⁴⁰⁸ N1, Ba //; Bo omit.; M // 12 //

⁴⁰⁹ N1 pāṇi

⁴¹⁰ N1 sāmo

⁴¹¹ N1 nidhāyātau; Ba vidhāyāte

⁴¹² N1, N3 viparītaṃ madhyamādvaye; N2 viparītaṃ [N2 18a9] madhyamādvaye; Ba viparītaṃ
 madhyāmā-[Ba 32a5]dvayam; M vyatyayān madhyamādvayam

⁴¹³ N1, N3 //; Bo omit.; Ba // 51 //

⁴¹⁴ N2, Bo, Ba kṛtā

⁴¹⁵ N1 tiryagatāmāstāt; N2 niryag anāmāṃte; Bo tītiryag anāmāṃte; Ba tīryg anāmāṃte; N3
 tīryasanāmāstā-[N3 29b4]d

⁴¹⁶ N1, Ba bāhyata

⁴¹⁷ N1 sthāpayet

⁴¹⁸ N1 budha

⁴¹⁹ N1, Ba //; Bo omit.

⁴²⁰ N1 tarjanyā-[N1 32b4]bhiniṣṭyaina; N2 tarjanyāpi niṣṭena; N3 tarjjanyābhiniṣṭena

⁴²¹ N2, Ba kaniṣṭhāgarbhasamsthita; Bo kaniṣṭhāgarbham samsthitaḥ

⁴²² N1, N3 //; Bo omit.; Ba // [Ba 32a6] // 52 //

- anayā baddhamātrayā³⁵⁸ *sarvayakṣiṇya³⁵⁹ *āgacchanti³⁶⁰ /³⁶¹ asyā eva³⁶²
 mudrāyā³⁶³ *dakṣiṇāṅguṣṭhenāvāhanam³⁶⁴ /³⁶⁵
 19.5 om hrīḥ³⁶⁶ āgaccha 2³⁶⁷ sarvayakṣiṇīnām³⁶⁸ svāhā //³⁶⁹ (377-
 āvāhanamantraḥ³⁷⁰ //
 19.6 asyā eva mudrāyā³⁷¹ *vāmāṅguṣṭhena³⁷² *visarjanam³⁷³ //³⁷⁴
 om hrīḥ gaccha 2 yakṣiṇī śīghram³⁷⁵ punar āgamanāya svāhā //³⁷⁶ -377)

³⁵⁸ A, T2 baddhamātrayā

³⁵⁹ Emend. A sarvayakṣa-[A 58a3]nīm; T1 sarvayakṣi-[T1 39b1]nī; T2 sarvayakṣaṇīm; G sarve [G 17b1] yakṣiṇya

³⁶⁰ Emend. A, T1 āgacchanti; T2 āgacchati; G agacchanti

³⁶¹ A, T1 //; T2 // //

³⁶² A, T1, T2 evaṃ

³⁶³ A, T2 mudra-[T2 35a7]yā

³⁶⁴ Emend. A dakṣiṇāṅguṣṭhenāvāhanam; T1 dakṣiṇāṅguṣṭhenāvāhanam; T2 dakṣiṇāṅguṣṭhenāvāhanam; G dakṣiṇāṅguṣṭhena āvāhanam

³⁶⁵ A, T1 //; T2 // //

³⁶⁶ A hrīḥ

³⁶⁷ T1 omit.

³⁶⁸ A yakṣiṇī śī-[A 58a4]ghram punar āgaṣaṇāya; T1 sarvayakṣiṇām; T2 yakṣaṇī śīghram punar āgamaṇāya

³⁶⁹ A // 2 //; T2 // //

³⁷⁰ G āvāhanamantraḥ

³⁷¹ T1 mudrāyām

³⁷² Emend. T1, G vāmāṅguṣṭhena

³⁷³ Emend. T1 visa-[T1 39b2]rjanīyam; G visarjanam

³⁷⁴ T1 /

³⁷⁵ T1 śīghram

³⁷⁶ T1 /

³⁷⁷ A, T2 omit.

*(423-aṅguṣṭhenāhvayet sarvā yakṣiṇīmudrayānāyā⁻⁴²³) /424

- 19.5 viṣabījaṃ⁴²⁵ samuddhṛtya⁴²⁶ bījaṃ⁴²⁷ prāthamikaṃ⁴²⁸ tataḥ /⁴²⁹ (pathyā)
 [N1 32b5] ābhāṣya⁴³⁰ tāmasiṃ⁴³¹ gaccha-[Bo 42b7]saṃyuktāṃ⁴³² dviḥ⁴³³
 [N2 18a11][N3 29b6] samuddharet /⁴³⁴ (pathyā)
 yakṣiṇyagnipriyānto⁴³⁵ 'yaṃ⁴³⁶ yakṣiṇyāhvānakṛnmanuḥ⁴³⁷ /⁴³⁸ (pathyā)
- 19.6 āhvānamu-[Bo 42b8]drayā⁴³⁹ vāmā-[N1 32b6]aṅguṣṭhenāpi⁴⁴⁰ visarjayet⁴⁴¹
 /⁴⁴² (pathyā)
 [N2 18a12] (⁴⁴³-yakṣiṇī manunānena⁻⁴⁴³) vakṣyamāṇena⁴⁴⁴ pūjitā⁴⁴⁵ /⁴⁴⁶
 (pathyā)

⁴²³ Emend. N1 kaniṣṭhena dvaye yakṣiṇīm sarvvamudrayānanyām; N2 aṅguṣṭhe-[N2 18a10]nāhvayet sarvā yakṣiṇīmudrayānāyā; Bo aṅguṣṭhena dvauet sarvo yakṣiṇīmudrayānāyā; Ba aṅguṣṭhenāhvayet sarvā yakṣiṇīmudrayānāyā; N3 aṅgulīm yojayet sarvvām yakṣi-[N3 29b5]nīmudrayā 'nāyā; M jyeṣṭhāṅguṣṭhanāvāhayed mudrayā yakṣiṇīm śubhām

この文は各写本、刊本で大幅に記述が異なっている。各刊本は刊本 M と同様に jyeṣṭha で始まる記述を備えている。しかし、その後に続く記述に若干の異なりが認められる。例えば、刊本 U では jyeṣṭhāṅguṣṭhenāvāhayed yakṣiṇīm sarvām hi mudrayā となっている (U p.93)。

⁴²⁴ N1, Ba //; Bo 1; M // 13 //

⁴²⁵ Bo, Ba viṣaṃ bījaṃ

⁴²⁶ N1 samudhṛtya; Ba samudhṛtyaṃ

⁴²⁷ N1 bīja

⁴²⁸ N1 prāmathikaṃ; N3 prāthamikan

⁴²⁹ N1, N3 //; Bo omit.; Ba // 53 //

⁴³⁰ Ba ā-[Ba 32a7]bhāṣa

⁴³¹ N1 tāmasiṃ; N2, Bo, Ba, N3 tāmasī

⁴³² N1, Bo, Ba, N3 gaccha-; M gaccha saṃyuktā

⁴³³ M hi

⁴³⁴ N1, Ba //; Bo omit.

⁴³⁵ N1, Ba yakṣiṇyagnipriyānto; N2 yakṣiṇyasipriyānto; Bo yakṣiṇyāgnipriyānto; M yakṣiṇāgnipriyānto

⁴³⁶ N1, N2, Bo, Ba yaṃ; N3 yam

⁴³⁷ N1 yakṣiṇyājñānakṛnmanuḥ; N2 yakṣiṇyādhyānakṛnmanuḥ; Bo yakṣaṇyāhvānakṛnmanuḥ; N3 mātmaḥnmanuḥ

⁴³⁸ N1, Bo //; N2 omit.; Ba // 54 //

⁴³⁹ N1, N3 ātmānamudrayā; Ba ahvā-[Ba 32a8]namudrayā

⁴⁴⁰ N2, Ba vāmāṅguṣṭhenāpi; Bo vāmāṅguṣṭhenāpi

⁴⁴¹ N3 visa-[N3 29b7]rjayet

⁴⁴² N1, Ba //; Bo omit.

⁴⁴³ N1 yakṣiṇī manunāmena; N2 yakṣiṇīm manunānena; N3 yakṣiṇīm manunāmena

⁴⁴⁴ N1 vahumānena; Bo vakṣamāṇena; N3 vakṣamāṇeṇa

⁴⁴⁵ N2 pūjitāṃ; Bo, Ba pūjanaṃ; N3 pūjitām

⁴⁴⁶ N1, N3 //; Bo omit.; Ba // 55 //

19.7 anyonyamuṣṭim³⁷⁸ kṛtvā madhyamāṅgulyau³⁷⁹ prasāraye-[G 17b2]t³⁸⁰ /³⁸¹
 [A 58a5] *sarvayakṣiṇy³⁸² abhimukhīmudrā³⁸³ //³⁸⁴
 om⁽³⁸⁵⁻ mahāyakṣiṇī maithunapriye⁻³⁸⁵⁾ svāhā //³⁸⁶

19.8 [T2 insert to 35b2] *(³⁸⁷⁻anyonyamuṣṭim kṛtvā⁻³⁸⁷⁾ kaniṣṭhādvayaṃ³⁸⁸
 prasārya³⁸⁹ kuñcayet³⁹⁰ /³⁹¹
 *sarvayakṣiṇīsānnidhyakaraṇīmudrā³⁹² //³⁹³
 om kāmabho-[A 58b2][T1 39b4]geśvarī³⁹⁴ svāhā //³⁹⁵

³⁷⁸ T2 anyonya-[T2 35b1]muṣṭi

³⁷⁹ A, T2 madhyamāṅgulyau

³⁸⁰ T2 prasārayat

³⁸¹ A //; T2 omit.

³⁸² Emend. A, T1 sarvvayakṣiṇīnām; T2 sarvayakṣaṇīnām; G sarvayakṣiṇī

³⁸³ A, T1 abhimukhīkara-[T1 39b3]ṇamudrā; T2 abhimuṣikaraṇamudrā

³⁸⁴ T2 // //

³⁸⁵ A mahāyakṣiṇīnām maaithunapriye; T2 mahāyakṣaṇīnāḥ mai-[T2 35b2]thunapri

³⁸⁶ A // 3 //

³⁸⁷ Emend. A, G anyo-[A 58b1]nyamuṣṭikṛtvā; T1 anonyamuṣṭikṛtvā; T2 anyonenamuṣṭikṛtvā

³⁸⁸ A, T1 kaniṣṭām; T2 kaniṣṭā

³⁸⁹ A prasārya

³⁹⁰ T2 kuñcavat

³⁹¹ A //; T2 omit.

³⁹² Emend. A sarvvayakṣiṇīsānnidhyakaraṇīmudrā; T1 sarvvayakṣiṇīnām

sānnidhyakaraṇīmudrā; T2 sarvayakṣaṇīnāsānnidhyakaranamudrā; G

sarvayakṣiṇīsānnidhyakaraṇīmudrā

³⁹³ T2 // //

³⁹⁴ T2 kāmabhogeśvari

³⁹⁵ A // 4 //; T1 // //; T2 // [T2 back to 35b2] //

- prāleyaṃ⁴⁴⁷ raudrīyaṃ⁴⁴⁸ [Ba 32a9] bījaṃ⁴⁴⁹ gacchadvayasamanvitam⁴⁵⁰
 [N3 29b8] /⁴⁵¹ (pathyā)
 (452-amukayakṣiṇy uddhṛtya⁻⁴⁵²) (453-pu-[N2 18b1]nar āgamanāya⁻⁴⁵³) ca /⁴⁵⁴
 dviṭhāntam⁴⁵⁵ uddha-[Bo 43a2]ren mantraṃ⁴⁵⁶ *(457-yakṣiṇīnām visarjanam⁻
 457) /⁴⁵⁸ (pathyā)
 19.7 (N1 omit.- kṛtvānyo-[N3 30a1]nyam⁴⁵⁹ ubhau⁴⁶⁰ muṣṭi⁴⁶¹ prasārya⁴⁶²
 madhyamādvayaṃ⁴⁶³ /⁴⁶⁴ (pathyā)
 sammukhīkaraṇī⁴⁶⁵ [N2 18b2] mudrā yakṣiṇīmanunāmuna⁴⁶⁶ /⁴⁶⁷ (pathyā)
 viṣaṃ mahāyakṣiṇī-[N3 30a2]ti⁴⁶⁸ uddharen⁴⁶⁹ mai-[Bo 43a4]thunapriye /⁴⁷⁰
 -N1 omit.) (ra-vipulā)
 vahnipriyānta⁴⁷¹ *(472-ukto 'yaṃ⁻⁴⁷²) sammukhīkaraṇo⁴⁷³ manuḥ /⁴⁷⁴ (pathyā)
 19.8 [N2 18b3][Ba 21a12] (475-a-[N1 33a1]nyonyaṃ muṣṭim⁻⁴⁷⁵) ā-[Bo 43a5]sthāya

⁴⁴⁷ Bo āleyaṃ

⁴⁴⁸ N2, Bo rau-[Bo 43a1]driyaṃ; Ba raudrayaṃ

⁴⁴⁹ N3 bījaṃ

⁴⁵⁰ N1, N2, Bo, Ba gachadvayasamanvitam; N3 gachadvayasamanvitam

⁴⁵¹ N1, Ba //; Bo omit.

⁴⁵² N1 amukaṃ yakṣi-[N1 32b7]ny uddhṛtya; N2 amukayakṣiṇī vṛtya; Bo amukaṃ yakṣiṇī
 kṛtya; Ba amukayakṣaṇy uddhṛtya; N3 me amukayakṣiṇī vṛtya

⁴⁵³ N3 purāgamaṇāya

⁴⁵⁴ N1 //; Bo omit.; Ba // 56 //

⁴⁵⁵ N2 dviṣaṃtam; Bo dviṣaṃtam; Ba dviṭhāntam

⁴⁵⁶ N1, N2, Bo, Ba maṃtraṃ

⁴⁵⁷ Emend. N1 uddharemaithunaṃ priye; N2 yakṣiṇīnām visarjanaṃ; Bo yakṣiṇīnām visarjane;
 Ba yakṣaṇī-[Ba 32a10]nām visarjanaṃ; N3 yakṣiṇīnām visarjjane; M yakṣiṇīnām visarjayet

⁴⁵⁸ N1, Ba //; Bo omit.; M // 14 //

⁴⁵⁹ M kṛtvānyo 'nyam

⁴⁶⁰ M ubhe

⁴⁶¹ Ba muṣṭi

⁴⁶² N3 prasārya

⁴⁶³ N2, Bo, Ba madhyamādvayaṃ

⁴⁶⁴ Bo omit.; Ba // 57 //; N3 //

⁴⁶⁵ N2 sanmukhīḥ karaṇī; Bo, Ba saṃmukhīka-[Bo 43a3]raṇī; N3 samukhīkaraṇī

⁴⁶⁶ Bo yakṣaṇīmanunāmuna; Ba yakṣaṇīmanu-[Ba 32a11]nāmuna; N3 yakṣiṇīmanunā
 'munā; M yakṣiṇīnām pradarśayet

⁴⁶⁷ Bo omit.; Ba //

⁴⁶⁸ N2 mahāyakṣiṇīni; Bo mahāyakṣaṇīti

⁴⁶⁹ Bo coddharen; M hyuddharen

⁴⁷⁰ Bo omit.; Ba // 58 //

⁴⁷¹ N2 vahnipriyānta; Bo vahnipriyāntam; Ba vahnipriyāntam; M vahnijāyāṃ

⁴⁷² Emend. N1, N2, Ba, N3 ukto yaṃ; Bo ukto ya; M tathokto 'yaṃ

⁴⁷³ N1 sanmukhīkaraṇaṃ; N2 sammukhīkāraḥ; Bo samukhīkāraḥ; Ba saṃmukhīkāraḥ

⁴⁷⁴ N1, Ba, N3 //; N2, Bo omit.; M // 15 //

⁴⁷⁵ Bo anyonya 4 muṣṭim; Ba anyonyamuṣṭim; M anyo 'nyamuṣṭim

19.9 anyonyahastam³⁹⁶ kṣāṭakākāreṇa³⁹⁷ sthāpya sarvayakṣiṇīhṛdayamudrā³⁹⁸ [A 58b3] //³⁹⁹

*(⁴⁰⁰-kṣīṃ // hṛdayamantra // -400)

19.10 [T2 35b3] anyonyamuṣṭim⁴⁰¹ kṛtvā *tarjanīmadhyamām⁴⁰² prasārayet⁴⁰³ /⁴⁰⁴
sarvayakṣiṇīgandhapuṣpadhūpadīpamudrā⁴⁰⁵ //⁴⁰⁶
om sarvamanohārīṇī⁴⁰⁷ svāhā //⁴⁰⁸

³⁹⁶ A, T2 anyonyam hastam

³⁹⁷ T2 kṣāṭakāreṇa

³⁹⁸ A, T1 sarvvayakṣiṇīnām hṛdayamudrā; T2 sarvayakṣanīnāhṛdayamudrā

³⁹⁹ T2 // //

⁴⁰⁰ A kṣyī // hṛdayamantra // 5 //; T1 illeg. // hṛdayamantraḥ //; T2 kṣyīṃ // hṛdayamantra // //; G kṣīṃ [G 17b3] //

漢訳での「一字真言」の記述に従って A, T1 写本の hṛdayamantra を採った。

⁴⁰¹ A anyonye muṣṭim; T1 anyonyamuṣṭi; T2 anyonyanemuṣṭi

⁴⁰² Emend. A, T2 tarjanīmadhyamām; T1 tarjanīmadhyamā; G tarjanīrmmadhyamām

⁴⁰³ T2 prasārayat; G prasāraye+

⁴⁰⁴ A, T2 omit.

⁴⁰⁵ A sarvvaya-[A 58b4]kṣiṇīnām puṣpadhūpadīpamudrā; T1 sarvvayakṣiṇīnām puṣpadhūpadīpamudrā; T2 sarvayakṣanīnām puṣpadhūpadīpamudrā

⁴⁰⁶ T2 // //

⁴⁰⁷ A sarvvamanohārīṇī; T1 sarvvamanohārīṇī; T2 sarvamanohārī-[T2 35b4]ni

⁴⁰⁸ A // 6 //; T1 // //; T2 // //

- prasāryākūṇcayed⁴⁷⁶ ubhe /⁴⁷⁷ (pathyā)
 kaniṣṭhe⁴⁷⁸ cāpi⁴⁷⁹ mudreyaṃ⁴⁸⁰ sānnidhyakāriṇī⁴⁸¹ smṛtā /⁴⁸² (pathyā)
 [Ba 32b1] vi-[Bo 43a6]ṣāt⁴⁸³ kāmāpradād⁴⁸⁴ bhogeśvarī⁴⁸⁵ [N1 33a2] svā-
 [N3 30a4]heti samyutā /⁴⁸⁶ (pathyā)
 19.9 kṛtvā muṣṭim⁴⁸⁷ (488- tato 'nyonyaṃ⁻⁴⁸⁸) khaṭvākāraṃ⁴⁸⁹ hr̥di nyaset /⁴⁹⁰
 (pathyā)
 viṣabījaṃ⁴⁹¹ [N1 33a3] samuddhṛtya⁴⁹² [Bo 43a8] trailokyagrasanātmakam⁴⁹³
 /⁴⁹⁴ (pathyā)
 samyuktam dhūmrabhairavyā⁴⁹⁵ nādabindusamanvitām⁴⁹⁶ /⁴⁹⁷ (pathyā)
 hr̥dayā-[N3 30a6]ya⁴⁹⁸ (499-śiro'nto 'yaṃ⁻⁴⁹⁹) hr̥di sam-[N2 18b6]sthāpako⁵⁰⁰
 ma-[N1 33a4]nuḥ⁵⁰¹ /⁵⁰² (pathyā)
 19.10 kṛtvā muṣṭim⁵⁰³ *(504- tato 'nyonyaṃ⁻⁵⁰⁴) tarjanīm⁵⁰⁵ a-[Ba 32b4]pi⁵⁰⁶

⁴⁷⁶ N1 prasāryākūṇjayed; N2, Bo, Ba prasāryākūṇcayed; N3 pra-[N3 30a3]sāryyāṅkucayed

⁴⁷⁷ N1 //; Bo omit.; Ba // 59 //

⁴⁷⁸ N2, Bo, Ba kaniṣṭe

⁴⁷⁹ N1 vāpi

⁴⁸⁰ Bo mu / dreyam

⁴⁸¹ N1 samnidhyakaraṇī; N2 sānidhyakāriṇī; Ba sām̐nidhyakāriṇī; M sannidhyakāriṇī

⁴⁸² N1, Ba, N3 //; N2, Bo omit.

⁴⁸³ N1 vipram; M viṣam

⁴⁸⁴ N1 kāmāpadāt; M kāmāpadād

⁴⁸⁵ N1, Bo, Ba, N3 bhogīśvarī; N2 bhoga-[N2 18b4]śvarī

⁴⁸⁶ N1 //; Bo omit.; Ba // 60 //; M // 16 //

⁴⁸⁷ N1 muṣṭi; Bo muṣṭim

⁴⁸⁸ N1, N2, Bo, Ba tato nyonyaṃ; M tato 'nyo 'nyam

⁴⁸⁹ N1 śadvākāraṃ; N2 khadvākāraṃ; Bo khadvām̐kā-[Bo 43a7]rim; Bo khaṭvākārī; M

sādhakānām

⁴⁹⁰ N1, Ba, N3 //; Bo omit.

⁴⁹¹ Ba viṣam bījaṃ; M viṣam samam

⁴⁹² Ba samudhṛtya

⁴⁹³ N1 trailokyagrahaṇātmakam; N2 trailaukyaprasamāntaram; Bo trailokyanasamātaram; Ba trailokyaprāsamātaram; N3 trailokyaprasamāntaram

⁴⁹⁴ N1, Ba //; Bo omit.

⁴⁹⁵ Ba dhūmrabhaira-[Ba 32b3]vā

⁴⁹⁶ N1 nādabindu vibhūṣitam; N2, Bo nādabim̐dusamanvitām; Ba nādabim̐dusamanvitam

⁴⁹⁷ N1 //; Bo omit.; Ba // 62 //

⁴⁹⁸ Ba hr̥dayādi

⁴⁹⁹ N1 śirontoyam; N2, Ba śiroṃtoyam; Bo śiro-[Bo 43b1]toyam; N3 śirontoyam

⁵⁰⁰ M samsthāpayen

⁵⁰¹ M manum

⁵⁰² N1, Ba, N3 //; Bo 5; M // 17 //

⁵⁰³ N3 muṣṭi

⁵⁰⁴ Emend. N1, N2 tatonyānyam; Bo, Ba tatonyonyam; N3 tato'nyonyaṃ; M tato 'nyo'nyam

⁵⁰⁵ N3 tarjanīm

⁵⁰⁶ M ati

- 19.11 ⁴⁰⁹ bhūtaḍāmaramahā-[A 58b5]tantrarāje⁴¹⁰
yakṣiṇīsādhanaṣṭakavivastaratantraḥ⁴¹¹ (⁴¹²-// //⁴¹²) [T2 35b5]

⁴⁰⁹ A, T2 add. iti

⁴¹⁰ T2 bhūtaḍāmaramāhātāntrarāje

⁴¹¹ A yakṣiṇīsādhanaṣṭakavivastaratantra aṣṭamaḥ; T2 yakṣaṇīsādhanaṣṭakavivastaratantraḥ
aṣṭama paṭhala; G yakṣiṇīsādhanaṣṭakavivastaratantraḥ

⁴¹² T1 // 8 //

- madhyamām⁵⁰⁷ /⁵⁰⁸ (pathyā)
 prasā-[Bo 43b2]rya⁵⁰⁹ *(⁵¹⁰-gandhapra-[N3 30a7]mukhā mudrā⁵¹⁰)
 mantrasamanvitā⁵¹¹ /⁵¹² (bha-vipulā)
 viṣaṃ⁵¹³ sarva-[N2 18b7]manohārīm⁵¹⁴ [N1 33a5] *(⁵¹⁵-dviṭhāntām tām⁻⁵¹⁵)
 samuddharet⁵¹⁶ /⁵¹⁷ (pathyā)
 pañcopacāramudreyam⁵¹⁸ (⁵¹⁹-manum evam udīrayet⁻⁵¹⁹) // //⁵²⁰ ⁵²¹ (pathyā)
 19.11 (M omit.- iti śrībhūtaḍāmare⁵²² mahātantre⁵²³ yakṣiṇīsāadhanavidhir⁵²⁴ ekādaśa-
 [N1 33a6]ḥ⁵²⁵ pāṭalaḥ // //⁵²⁶ -M omit.)

⁵⁰⁷ N1, N2, Bo, Ba, N3 madhyamām

⁵⁰⁸ N1 //; Bo omit.; Ba // 63 //

⁵⁰⁹ N1, Ba, N3 prasāryya

⁵¹⁰ Emend. N1, Ba pramukhīmudrā proktā; N2, Bo gaṇdhapramukhā mudrā; N3
 gandhapramukhā; M pramukhī vedyā mudrā

⁵¹¹ N1, Ba manusamanvitā; N2 maṃtrasamanvitā; Bo maṃtrasamanvitām

⁵¹² N1, Ba //; Bo omit.

⁵¹³ N2 vipaṃ; M oṃ

⁵¹⁴ N1 sarvvaṃ manohārīṇīm; Bo sarvamanohārī; N3 sarvvamanoharīm; M sarvamanohārīṇī
 韻律の関係から N2, Ba の記述を採った。BBT との対応では M の記述が適切であろう

⁵¹⁵ Emend. N1, N3 dviṭhāntām; N2 dvigaṃtām tām; Bo dviṭhām tām; Ba dviṭhām tām tām; M
 dviṭhāntāñ ca

⁵¹⁶ M samuddhet

⁵¹⁷ N1 //; Bo omit.; Ba // [Ba 32b5] // 64 //

⁵¹⁸ N1 paṃcopacāramudreyam; N2, Bo, Ba paṃ-[Bo 43b3]copacāramudrāyām; M
 pañcopacāramudrāyā

⁵¹⁹ N1, N3 manume-[N3 30a8]namudīrayet; M manur eṣa udāhṛtaḥ

⁵²⁰ N2 ///; Bo 6; Ba //; M // 18 //

⁵²¹ Ba add. maṃtraḥ // oṃ jū kaṭṭaṭṭa amukayakṣiṇī hrīm yaḥ 2 hūṃ phaṭ // 1 // [Ba 32b6] oṃ
 hrīm āgacha sarvayakṣaṇī svāhā // avāhanamaṃtraḥ // asya mudrām vāmāṃguṣṭhena visarjanaṃ
 // oṃ hrī gacha sa-[Ba 32b7]rvayakṣiṇī śīghraṃ punar āgamanāya svāhā // oṃ kāmēśvarī svāhā
 // hrdayamaṃtraḥ // oṃ mahāyakṣiṇīmaithu-[Ba 32b8]napriye svāhā // iti abhimukhīkaraṇam //
 oṃ sarvamanohārī svāhā // pūjanamaṃtraḥ // //

⁵²² N1, N2, Ba bhūtaḍā-[Ba 32b9]mare; Bo omit.

⁵²³ N1, Ba mahātaṃtrarāje; N2, Bo omit.

⁵²⁴ N2, Bo omit.; Ba yakṣiṇīsādhana

⁵²⁵ Bo ekādaśa

⁵²⁶ N1 // 11 //; N2 /; Bo 11; Ba // 11 // //

BBT 10 章、細分番号 18 漢訳

漢訳

10 章（細分番号 18）

18.1 爾時會中一切夜叉女。即從座起五體投地。禮金剛手菩薩足。各各說自根本眞言曰

18.2 唵_引 阿_引 誝_引 蹉_{二合} 酥囉遜那哩_引 娑嚩_{二合} 賀_引

18.3

18.4 此是羯諾羯嚩帝夜叉女眞言。

18.5 復說迦彌濕嚩_{二合} 哩夜叉女眞言曰

唵_引 阿_引 誝_引 蹉_{二合} 迦_引 彌濕嚩_{二合} 哩_引 娑嚩_{二合} 賀_引

BBT 10 章、細分番号 18 チベット訳

チベット訳

10 章（細分番号 18）

- 18.1 de nas gnod sbyin mo thams cad langs te / dpal rdo rje 'chang gi zhabs la¹ (2-
spyi bos⁻²) phyag 'tshal [sT 70b4] nas³ rang gi snying po phul [D 255a6][P
50a8] ba /⁴
- 18.2 om̐ ā⁵ ga tstsha⁶ su ra⁷ sun da⁸ ri swā hā /⁹ sdug gu mdzes ma'i'o¹⁰ //
- 18.3 om̐¹¹ ma¹² no¹³ ha ri¹⁴ na maḥ¹⁵ swā hā /¹⁶ yid 'phrog ma'i'o¹⁷ //
- 18.4 om̐¹⁸ ka¹⁹ na (20-ka mai⁻²⁰) thu na pri²¹ ye swā hā /²² gser ldan ma'i-[sT 70b5]'o
//²³ [Ph 219a4]
- 18.5 om̐ ā²⁴ ga²⁵ tstsha²⁶ kā²⁷ me shwa²⁸ ri swā hā / 'dod pa'i dbang phyug ma'i'o²⁹
// [P 50b1]

¹ Ph la la
² Ph phyag 'tshal lo //
³ sT te
⁴ P omit.
⁵ P, Ph a
⁶ Ph tsa
⁷ Ph la
⁸ P dha; Ph dha [Ph 219a3] da
⁹ Ph //
¹⁰ Ph ma yī'o
¹¹ Ph om̐ sarba
¹² sT na
¹³ P ṇo; sT mo
¹⁴ Ph ri ni
¹⁵ P Ph ma
¹⁶ P omit.
¹⁷ Ph ma yī'o
¹⁸ Ph o
¹⁹ Ph ma
²⁰ P mī; Ph ka ma ti mi
²¹ Ph sri
²² P omit.
²³ P /
²⁴ Ph a
²⁵ Ph ka
²⁶ Ph tsha
²⁷ Ph tsha
²⁸ Ph sha
²⁹ Ph ma yi'i'o

- 18.6 復説囉底夜叉女眞言曰
唵_引 囉底必哩_{二合}曳_引 娑嚩_{二合}賀_引
- 18.7 復説鉢訥彌儼夜叉女眞言曰
唵_引 鉢訥彌_{二合}儼_引 娑嚩_{二合}賀_引
- 18.8 復説曩致夜叉女眞言曰
唵_引 曩致_引 摩賀_引曩致_引 酥嚩波曩致_引 娑嚩_{二合}賀_引
- 18.9 復説阿努囉儼夜叉女眞言曰
唵_引 努囉_引擬拏_引 每_引度曩鉢哩_{二合}曳_引 娑嚩_{二合}賀_引
是名夜叉女眞言祕密之法
- 18.10 復説八大夜叉女成就法。
- 18.11 持誦之人往金剛手菩薩宮殿之內燒安悉香。每日三時誦眞言三千遍。至一月內彼夜叉女即來現身。用白檀香水獻闕伽。時夜叉女或爲母或爲姉妹。或爲妻子等隨行人之意。

- 18.6 oṃ ra ti pri³⁰ ye³¹ swā hā / ⁽³²⁻rgan mo'i'o⁻³²⁾ //³³ [D 255a7]
- 18.7 oṃ padmi³⁴ ni³⁵ ye³⁶ swā hā / padma ma'i'o³⁷ //³⁸
- 18.8 oṃ na ti³⁹ ma⁴⁰ [Ph 219a5] hā na⁴¹ ti⁴² su rū⁴³ pa⁴⁴ ma⁴⁵ ti swā hā /⁴⁶ [sT 70b6] gar byed ma'i'o⁴⁷ //⁴⁸
- 18.9 oṃ a⁴⁹ nu rā⁵⁰ gi⁵¹ ni⁵² mai⁵³ thu ni⁵⁴ swā hā /⁵⁵ rdzes⁵⁶ su chags ma'i'o //⁵⁷
- 18.10 de nas gnod sbyin mo brgyad kyi [Ph 219a6] sgrub⁵⁸ [P 50b2] pa'i thabs kyi
cho ga rgyas par bshad pa /
- 18.11 rdo rje 'chang gi khyim du song ste⁵⁹ gu [sT 70b7] gul gyi bdug⁶⁰ pa sbyin⁶¹

³⁰ Ph sri
³¹ Ph yi
³² Ph dga' ma yi'o
³³ P /
³⁴ Ph padma
³⁵ sT nī
³⁶ Ph omit.
³⁷ Ph yi'o
³⁸ P /
³⁹ D, sT rti
⁴⁰ P mi
⁴¹ D, P ni; sT ti
⁴² sT ni; Ph tri
⁴³ P, Ph ru; sT rā
⁴⁴ P ba; Ph swa
⁴⁵ Ph wa
⁴⁶ Ph //
⁴⁷ Ph ma ya'i'o
⁴⁸ P /
⁴⁹ D ā
⁵⁰ P, Ph ra
⁵¹ Ph gyi
⁵² Ph ne
⁵³ P mī; Ph ma'i
⁵⁴ Ph ni sri ye
⁵⁵ Ph //
⁵⁶ Ph rjes
⁵⁷ P /
⁵⁸ Ph bsgrubs
⁵⁹ Ph ste /
⁶⁰ Ph dud
⁶¹ Ph byin

- 18.12 若令爲妻不得別行邪慾。彼即歡喜日給金錢十萬。及與種種聖藥所作自在。
- 18.13 若爲姉妹亦與種種聖藥及聖物等。復取最上天女令其承事。又彼姉妹所有過去未來現在之事一一宣說。
- 18.14 令彼行人獲得種種快樂之事
- 18.15 佛說金剛手菩薩降伏一切部多大教王經卷下 西天譯經三藏朝散大夫試鴻臚卿傳教大師臣法天奉 詔譯
復次持誦者往於河岸。用白檀香作曼拏羅。獻廣大供養。時誦真言一阿庾多。至第七日復作廣大供養。至夜半彼摩拏賀哩尼夜叉女。即來現身甚大苦惱。

- [D 255b1] zhing⁶² dus⁶³ gsum du stong phrag re⁶⁴ bzlas na⁶⁵ [Ph 219a7] zla
ba gcig gi nang du nges par 'ong ngo //⁶⁶ 'ongs pa la (⁶⁷tsa nda na⁻⁶⁷) gyi⁶⁸
chus⁶⁹ mchod yon [P 50b3] byin na⁷⁰ ma dang /⁷¹ sring mo⁷² dang /⁷³ chung
ma'i las [sT 71a1] byed do //
- 18.12 gal te mar gyur na sems [Ph 219a8] sun dbyung⁷⁴ bar mi bya ste / dngul chu
dang⁷⁵ bcud kyis len⁷⁶ ster zhing /⁷⁷ nyi ma re re zhing⁷⁸ [D 255b2] dong⁷⁹
tse⁸⁰ stong ster ro //
- 18.13 gal te sring mor gyur na ni grub pa'i [sT 71a2] rdzas [P 50b4] dang / dngul chu
dang⁸¹ [Ph 219b1] bcud kyis len ster zhing⁸² lha'i⁸³ bu⁸⁴ mo bzang mo blangs
nas ster la / 'das pa dang /⁸⁵ ma 'ongs pa dang / da ltar byung ba smra bar byed
do //
- 18.14 gal te chung mar [sT 71a3] gyur na⁸⁶ bsam [Ph 219b2] pa thams cad⁸⁷ rdzogs
par byed cing⁸⁸ [P 50b5] nor [D 255b3] gyi bdag po chen po⁸⁹ byed do //⁹⁰
- 18.15 de nas yid 'phrog ma'i sgrub⁹¹ pa'i thabs bshad pa /⁹²

⁶² Ph zhing /

⁶³ Ph nyi ma

⁶⁴ Ph re re

⁶⁵ Ph na /

⁶⁶ P /

⁶⁷ P, Ph, sT tsan da na

⁶⁸ Ph gyis

⁶⁹ Ph omit.

⁷⁰ Ph na /

⁷¹ P, Ph omit.

⁷² Ph ngo

⁷³ P omit.

⁷⁴ Ph 'byung

⁷⁵ Ph dang /

⁷⁶ Ph len dang

⁷⁷ Ph, sT omit.

⁷⁸ Ph de ni; sT omit.

⁷⁹ Ph omit.

⁸⁰ P tshe; Ph omit.

⁸¹ Ph, sT dang /

⁸² Ph zhing /

⁸³ Ph lha

⁸⁴ Ph omit.

⁸⁵ P omit.

⁸⁶ Ph na ni

⁸⁷ Ph cad yong su

⁸⁸ Ph cing /

⁸⁹ Ph por

⁹⁰ P /

⁹¹ Ph bsgrub

⁹² P omit.

18.16 女言呼我何作。持誦者言汝爲我婢女。即聽允日給金錢一百。贍彼行人等
八人豐足使盡復與。若不使盡不復與之

18.17 復次持誦者往彼尼拘陀樹下。以自飲酒肉食已不潔淨盥漱。持誦真言一千
遍。

- chu bo'i 'gram du song ste /⁹³ [Ph 219b3] (⁹⁴-tsa nda na⁻⁹⁴) gyis⁹⁵ ma ṇḍa⁹⁶ la
nye⁹⁷ bar⁹⁸ [sT 71a4] byugs te⁹⁹ /¹⁰⁰ mchod pa shin tu chen po byas nas¹⁰¹ a
ga¹⁰² ru'i bdug pa sbyin¹⁰³ zhing¹⁰⁴ nyi [P 50b6] ma bdun du khri bzlas nas¹⁰⁵
nyi ma bdun pa la mchod pa rgyas par byas¹⁰⁶ [Ph 219b4] te¹⁰⁷ /¹⁰⁸ nam [D
255b4] phyed (¹⁰⁹-kyi bar du bzlas na de ni nges par 'ong [sT 71a5] ngo⁻¹⁰⁹) //¹¹⁰
18.16 gal te ma 'ongs na 'chi bar 'gyur¹¹¹ ro // bka' stsal¹¹² cig ces smra bar byed
cing¹¹³ des bdag [P 50b7] gi bran mo gyis shig¹¹⁴ ces bsgo¹¹⁵ na 'khor brgyad
brgya'i¹¹⁶ [Ph 219b5] zhal ta byed cing¹¹⁷ (¹¹⁸-dong tse⁻¹¹⁸) brgya nyi ma re re¹¹⁹
la¹²⁰ ster [sT 71a6] te¹²¹ /¹²² des kyang ma lus par zad¹²³ par bya'o¹²⁴ //¹²⁵
gal te [D 255b5] cung zad 'jog na phyin chad¹²⁶ 'byung bar mi 'gyur ro //
18.17 de nas gser [P 50b8] lngan [Ph 219b6] ma'i sgrub¹²⁷ pa'i thabs bshad pa / ba ru

⁹³ Ph //; sT omit.

⁹⁴ P, sT tsan da na

⁹⁵ P, Ph gyi

⁹⁶ Ph ṇḍa

⁹⁷ Ph omit.

⁹⁸ Ph omit.

⁹⁹ Ph la

¹⁰⁰ Ph omit.

¹⁰¹ P na /; Ph te /; sT na

¹⁰² Ph ka

¹⁰³ Ph byin

¹⁰⁴ Ph zhing /

¹⁰⁵ Ph la /

¹⁰⁶ Ph bya

¹⁰⁷ Ph ste

¹⁰⁸ Ph omit.

¹⁰⁹ Ph na 'ong ngo

¹¹⁰ P /

¹¹¹ Ph 'gyu

¹¹² sT stsol

¹¹³ Ph cing /

¹¹⁴ Ph cig

¹¹⁵ Ph sgo

¹¹⁶ Ph pa'i

¹¹⁷ Ph cing /

¹¹⁸ P, sT dong tshe; Ph di na ra

¹¹⁹ sT omit.

¹²⁰ Ph omit.

¹²¹ Ph omit.

¹²² Ph omit.

¹²³ Ph bzad

¹²⁴ Ph byed do

¹²⁵ P /

¹²⁶ D cad

¹²⁷ Ph bsgrub

- 18.18 至第七日復誦眞言。至中夜已來。彼羯諾羯嚩帝夜叉女莊嚴具足。與其僕從八百人俱悉現本身。
- 18.19 與彼行人同作歡樂。即結爲妻。給與衣服飲食及金錢八文。贍彼行人等一十二人悉得豐足
- 18.20 復次持誦者。於樺皮上用牛黃。畫彼迦彌濕嚩二合哩夜叉女形像。於寂靜處置一臥床。於此床上誦眞言一千遍。

- ra'i shing gnas par song ste¹²⁸ [sT 71a7] nya dang shas bsgrub¹²⁹ cing chang
yang byin nas bdag nyid kyang¹³⁰ btung zhing¹³¹ (132-lpags par⁻¹³²) gnas [Ph
219b7] par¹³³ bzlas¹³⁴ pa¹³⁵ bya ste / stong phrag re re bzlas so //
- 18.18 de bzhin [D 255b6][P 51a1] du nyi ma bdun pa'i¹³⁶ mtshan mo bsgrub par bya
ste / [sT 71b1] ci¹³⁷ srid nam phyed kyi bar du bzlas na /¹³⁸ nam phyed na
rgyan thams [Ph 219b8] cad kyis brgyan te 'khor brgyad brgyas¹³⁹ bskor nas¹⁴⁰
rang nyid 'ong ngo //¹⁴¹
- 18.19 'ongs pa la chags pa byas [P 51a2] na chung mar¹⁴² 'gyur¹⁴³ ro // 'khor bcu
gnyis [sT 71b2] kyi¹⁴⁴ gos dang / rgyan dang /¹⁴⁵ [Ph 220a1] bza' [D 255b7]
ba bzang po rnams nyin cig¹⁴⁶ bzhin du ster zhing (147-dong tse⁻¹⁴⁷) brgyad ster
ro //
- 18.20 de nas 'dod pa'i dbang phyug ma'i sgrub¹⁴⁸ pa'i¹⁴⁹ thabs bshad pa¹⁵⁰ gro¹⁵¹
[Ph 220a2] ba'i¹⁵² 'dab [P 51a3] ma la [sT 71b3] ba¹⁵³ la¹⁵⁴ glang¹⁵⁵ gi gi'u¹⁵⁶

128 Ph, sT ste /

129 sT sgrub

130 Ph kyis

131 Ph zhing /

132 D, sT spags par; Ph yang dag par

133 Ph nas

134 sT bzla

135 sT bar

136 P ba'i

137 Ph, sT ji

138 sT omit.

139 Ph rgyas; Ph brgyas yong su

140 Ph te

141 P /

142 Ph ma

143 Ph 'gyu

144 Ph kyis

145 P omit.

146 D, sT gcig

147 P, sT dong tshe; Ph di na ra

148 Ph bsgrub

149 Ph omit.

150 sT pa /

151 P bgro

152 Ph, sT ga'i

153 P pa

154 P, Ph, sT omit.

155 Ph, sT lang

156 Ph ghi

18.21 於月盡日作廣大供養燃以酥燈。時誦者默然。彼女即來隨行人意而爲妻子。於臥床上留最上莊嚴。至明旦時却還本處。持誦之者不得邪慾。若有所犯即令破壞

18.22 復次持誦者於其幃上。畫彼女像。身作金色一切莊嚴。手執優鉢羅華如童女相。用惹底華作供養。燒安悉香誦眞言八千遍。至月盡日隨力供養。燃以酥燈。復誦眞言至中夜時。彼囉帝夜叉女即來現身。

- wang gis gzugs brnyan bris te /¹⁵⁷ gcig pu¹⁵⁸ stan la 'dug la¹⁵⁹ stong phrag re
re bzlas so¹⁶⁰ //¹⁶¹
- 18.21 de nas zla¹⁶² ba'i¹⁶³ tha ma [D 256a1] la mchod pa rgyas par byas te /¹⁶⁴ [Ph
220a3] mar¹⁶⁵ gyi¹⁶⁶ mar me rab tu spar nas¹⁶⁷ [sT 71b4] mi smra bar¹⁶⁸ gyur
pas¹⁶⁹ [P 51a4] bzlas na mtshan mo de'i¹⁷⁰ phyed na nges par 'ong ngo //¹⁷¹
'ongs pa la chags pas longs¹⁷² spyod¹⁷³ na chung mar 'gyur ro // lha'i rgyan mal
[Ph 220a4] du dor te¹⁷⁴ tho rangs kyis 'gro bar 'gyur¹⁷⁵ ro //¹⁷⁶ [sT 71b5] gzhan
gyi [D 256a2] ^{(178-chung} ^(177-ma la⁻¹⁷⁷) mi bgrod par yang bya ste /⁻¹⁷⁸ [P 51a5]
gal te bgrod¹⁷⁹ na rnam par 'joms par byed do //
- 18.22 de nas rgan¹⁸⁰ mo'i¹⁸¹ [Ph 220a5] sgrub¹⁸² thabs bshad pa /
gser gyi mdog can¹⁸³ rgyan thams cad kyis brgyan [sT 71b6] ^(184-ma / lag⁻¹⁸⁴)
na ^(185-u dpa la⁻¹⁸⁵) thogs pa¹⁸⁶ gzhon nu ma ras la ri mo bris te /¹⁸⁷ sna ma'i me
[P 51a6] tog gis [Ph 220a6] mchod cing¹⁸⁸ [D 256a3] gu gul gyi bdug pa byin

¹⁵⁷ sT omit.¹⁵⁸ P bu¹⁵⁹ Ph nas¹⁶⁰ Ph omit.¹⁶¹ Ph /¹⁶² Ph bzlas¹⁶³ Ph ba¹⁶⁴ Ph omit.¹⁶⁵ Ph omit.¹⁶⁶ Ph omit.¹⁶⁷ P, Ph nas /¹⁶⁸ D par¹⁶⁹ Ph nas¹⁷⁰ Ph de nam¹⁷¹ P /¹⁷² Ph long¹⁷³ D, sT spyad¹⁷⁴ Ph te /¹⁷⁵ Ph 'gyu¹⁷⁶ P /¹⁷⁷ D mal¹⁷⁸ Ph chung mar 'gyur ro // spyad na spang bar bya'o //¹⁷⁹ Ph bgrod pa¹⁸⁰ Ph dga'¹⁸¹ Ph ma'i¹⁸² Ph bsgrub¹⁸³ Ph can ma'i¹⁸⁴ Ph pa la sogs pa lags¹⁸⁵ P, Ph ud pa la; sT utpa la¹⁸⁶ Ph, sT pa /¹⁸⁷ Ph, sT omit.¹⁸⁸ Ph cing /

18.23 同作歡樂即爲妻子。日給金錢二十五文及聖藥等。瞻彼行人及其徒衆悉令
豐足

18.24 復次持誦之者。於自本舍臥床頭邊。用白檀香作曼拏羅。燒安悉香誦眞言
至一月。

- la¹⁸⁹ stong phrag¹⁹⁰ brgyad brgyad bzlas te / zla ba tha ma la ci¹⁹¹ ltar 'byor
 pa'i [sT 71b7] mchod pa byas nas¹⁹² mar¹⁹³ gyi mar me rab tu spar te¹⁹⁴ ci¹⁹⁵
 srid nam phyed [Ph 220a7] kyi bar du bzlas na¹⁹⁶ nam phyed na¹⁹⁷ nges par
 'ong¹⁹⁸ ngo // [P 51a7]
- 18.23 'ongs pa la^(199-dga' bas-199) chags pa byas na chung mar 'gyur²⁰⁰ ro // sgrub²⁰¹
 [D 256a4] pa po [sT 72a1] 'khor dang bcas pa yongs²⁰² su skyong bar byed [Ph
 220a8] cing²⁰³ lhas²⁰⁴ 'dod par²⁰⁵ bya²⁰⁶ ba'i²⁰⁷ zas dang / dngul chu dang
 /²⁰⁸ bcud kyis len²⁰⁹ ster zhing²¹⁰ (211-dong tse⁻²¹¹) nyi shu rtsa lnga ster bar [P
 51a8] byed do // [sT 72a2]
- 18.24 de nas padma²¹² ma'i sgrub²¹³ thabs bshad pa / rang gi [Ph 220b1] khyim du
 mgo'i²¹⁴ gnas su tsandana²¹⁵ gyi dkyil 'khor byas te²¹⁶ gu [D 256a5] gul gyi

-
- 189 Ph na
 190 Ph phra
 191 Ph, sT ji
 192 Ph nas /
 193 Ph rab
 194 Ph nas /; sT /
 195 Ph, sT ji
 196 Ph na /
 197 Ph na rang nyid
 198 Ph 'ongs
 199 Ph mi smra bar
 200 Ph 'gyu
 201 Ph bsgrub
 202 Ph yong
 203 Ph, sT cing /
 204 Ph lha
 205 Ph pa
 206 Ph byas
 207 Ph pa'i
 208 P omit.
 209 Ph len dang
 210 Ph te
 211 P, sT dong tshe; Ph di na ra
 212 Ph pad
 213 Ph bsgrub pa'i
 214 Ph 'gro ba'i
 215 sT tsan dana
 216 Ph, sT te /

18.25 於十五日夜隨力獻供養。復誦眞言至中夜。彼鉢訥彌爾夜叉女。即來現身隨誦者意。以結爲妻。即與種種聖藥及聖物等

18.26 復次持誦者往無憂樹下。食於酒肉已。用塗香好華作供養已。誦眞言一千遍。彼曩致夜叉女即來現身。或爲母或爲姉妹或爲妻子。

- bdug pa sbyin²¹⁷ zhing zla ba phyed²¹⁸ du²¹⁹ bzlas²²⁰ pa²²¹ bya'o //²²²
- 18.25 de nas zla ba nya la ci²²³ 'byor [sT 72a3] pa'i mchod pa [P 51b1][Ph 220b2]
 byas te /²²⁴ ci²²⁵ srid²²⁶ nam phyed kyi bar du bzlas na²²⁷ nam phyed na nges
 par 'ong²²⁸ ngo²²⁹ //
- 'ongs pa la chags pa byas na chung mar 'gyur te²³⁰ /²³¹ lha mos²³² 'dod pa ster
 zhing²³³ [Ph 220b3] dngul chu dang bcud [D 256a6] kyis²³⁴ len²³⁵ [sT 72a4]
 ster bar byed do //
- 18.26 de nas gar byed ma'i sgrub²³⁶ [P 51b2] pa'i thabs bshad pa / a sho²³⁷ ka'i shing
 gi rtsar song ste bsgrub par bya'o // sha'i bza' ba dang /²³⁸ spos [Ph 220b4] dang
 /²³⁹ dri dang / me tog sbyin zhing [sT 72a5] stong phrag brgyad bzlas na /²⁴⁰
 zla ba gcig gi nang du²⁴¹ nges par 'ong ngo //²⁴² mdor [D 256a7] bsdu na²⁴³
 'ongs na²⁴⁴ ma [P 51b3] dang /²⁴⁵ sring²⁴⁶ mo dang /²⁴⁷ chung mar 'gyur [Ph

217 Ph byin
 218 Ph gcig
 219 Ph tu
 220 sT bzla
 221 sT bar
 222 P /
 223 Ph ji ltar
 224 sT omit.
 225 Ph, sT ji
 226 Ph ltar
 227 Ph pa bya'o //
 228 P 'od
 229 P do
 230 Ph ro
 231 Ph //
 232 Ph mo'i
 233 Ph zhing //
 234 Ph kyi
 235 D lan
 236 Ph bsgrub
 237 D shra
 238 P omit.
 239 P, Ph omit.
 240 sT omit.
 241 Ph na
 242 P /
 243 Ph nas
 244 sT nas /
 245 P, Ph omit.
 246 Ph srid
 247 P omit.

- 18.27 若得爲妻日給金錢八文及種種聖藥等。
- 18.28 若得爲母供給衣食及金百兩。
- 18.29 若爲姉妹於千由旬内。所須女人即爲取來。及供給飲食衣服種種聖藥等
- 18.30 復次持誦者。於樺皮上用恭俱摩香。畫彼阿努囉擬尼夜叉女形。於月初一日。以香華燈及塗香等。作供養一日三時。持誦眞言至十五日。燃以酥燈隨力作供養。持誦夜至明旦。彼夜叉女即來現身。

- 220b5] ro²⁴⁸ //²⁴⁹
- 18.27 gal te chung mar gyur na bza' ba dang / ras zung re dang /²⁵⁰ [sT 72a6] dngul chu dang /²⁵¹ bcud kyis len ster zhing²⁵² (253-dong tshe⁻²⁵³) brgyad ster bar byed do //²⁵⁴
- 18.28 gal te mar gyur na²⁵⁵ bza' ba [Ph 220b6] bzang po dang /²⁵⁶ ras zung re ster zhing²⁵⁷ [D 256b1][P 51b4] gser srang brgya²⁵⁸ ster ro //
- 18.29 gal te sring mor gyur na [sT 72a7] dpag tshad stong nas bud med bzang mo blangs nas ster zhing²⁵⁹ gos dang /²⁶⁰ [Ph 220b7] rgyan dang / bza' ba bzang po ster ro²⁶¹ //²⁶² dngul chu²⁶³ dang²⁶⁴ /²⁶⁵ bcud kyis len yang ster bar byed do //²⁶⁶
- 18.30 de nas (267-sring mo⁻²⁶⁷) [P 51b5] sgrub²⁶⁸ pa'i [sT 72b1] thabs bshad pa / gur gum²⁶⁹ [D 256b2] gyis²⁷⁰ gro [Ph 220b8] ba'i²⁷¹ 'dab ma la gnod sbyin mo'i gzugs bris te / de nas tshes gcig nas brtsams²⁷² nas /²⁷³ spos dang / me tog dang /²⁷⁴ mar me sbyin zhing dus gsum du [sT 72b2] bzlas pa byas nas²⁷⁵ [Ph

²⁴⁸ Ph omit.
²⁴⁹ Ph omit.
²⁵⁰ sT omit.
²⁵¹ P, Ph omit.
²⁵² Ph zhing /
²⁵³ D dong tsa; Ph di na ra
²⁵⁴ P /
²⁵⁵ Ph na ni
²⁵⁶ sT omit.
²⁵⁷ Ph zhing /
²⁵⁸ Ph brgya re
²⁵⁹ Ph zhing /
²⁶⁰ P omit.; Ph //
²⁶¹ Ph zhing
²⁶² P, Ph /
²⁶³ Ph chul
²⁶⁴ Ph omit.
²⁶⁵ P, sT omit.
²⁶⁶ P /
²⁶⁷ Ph rje su chags ma'i
²⁶⁸ Ph bsgrub
²⁶⁹ sT kum
²⁷⁰ Ph gyi
²⁷¹ D, Ph, sT ga'i
²⁷² Ph brtsams
²⁷³ P, Ph, sT omit.
²⁷⁴ P omit.
²⁷⁵ Ph na //

18.31 隨行人意即爲彼妻。日給金錢一千及與種種聖藥壽命一千歲。

18.32 如是名爲所說降伏諸部多大教王夜叉女成就之法

- 221a1] zla ba [P 51b6] nya la ci²⁷⁶ ltar 'byor ba'i²⁷⁷ mchod pa byas te²⁷⁸ /²⁷⁹
 mar gyi mar me rab tu spar nas²⁸⁰ mtshan thog²⁸¹ [D 256b3] thag²⁸² bzlas na
 de'i tho rangs nges [Ph 221a2] par 'ong ngo //²⁸³
- 18.31 'ongs pa la 'dod pas²⁸⁴ longs²⁸⁵ spyod²⁸⁶ na [sT 72b3] chung mar 'gyur ro²⁸⁷
 // lha'i²⁸⁸ dong tse²⁸⁹ stong²⁹⁰ ster zhing²⁹¹ dngul chu dang [P 51b7] bcud kyis
 len ster zhing²⁹² lo stong 'tsho'o //
- 18.32 'byung po 'dul ba'i [Ph 221a3] rgyud kyi rgyal po chen po²⁹³ las²⁹⁴ gnod sbyin
 mo'i²⁹⁵ sgrub²⁹⁶ pa'i thabs kyis cho [D 256b4][sT 72b4] ga rgyas pa'i le'u'o²⁹⁷
 // //

276 Ph, sT ji
 277 sT pa'i
 278 Ph ste
 279 sT omit.
 280 Ph nas /
 281 Ph thogs
 282 Ph thags
 283 P /
 284 Ph pa
 285 Ph omit.
 286 D, sT spyad; Ph sbyin
 287 Ph to
 288 Ph lha mo
 289 Ph rtse; sT tshe
 290 Ph omit.
 291 Ph zhing /
 292 Ph te
 293 Ph chen po chen po
 294 Ph, sT las /
 295 Ph ma
 296 Ph bsgrub
 297 Ph le'u

BBT 10 章、細分番号 19 漢訳

漢訳

10 章（細分番号 19）

19.1 爾時金剛手菩薩大祕密主言。若有夜叉女不依我三昧住者。誦此忿怒明王
眞言決定破壞。

19.2 眞言曰

唵_引 度_囉_{二合} 羯茶 羯茶 阿目迦藥乞叱_{二合} 尼_引 紇哩_{二合} 惹_囉_入 吽 發吒_半

音

誦此眞言一千遍。彼女速來。若不速來頭目俱破。剎那命終墮八大地獄。

19.3 復說印相法。以二手作拳。二小指相交。此大不空忿怒鉤印能鉤三界

BBT 10 章、細分番号 19 チベット訳

チベット訳

10 章 (細分番号 19)

- 19.1 de nas gsang ba²⁹⁸ pa'i²⁹⁹ bdag po [Ph 221a4] phyag na rdo rjes 'di skad ces [P 51b8] gsungs so // gal te dam tshig la³⁰⁰ mi gnas na³⁰¹ khro bo 'di dang bcas te dgug pa'i phyir [sT 72b5] bzlas³⁰² par³⁰³ bya'o //
- 19.2 om dhum³⁰⁴ ka tya³⁰⁵ ka tya³⁰⁶ che ge mo [Ph 221a5] ya kṣi³⁰⁷ ni³⁰⁸ hrīḥ³⁰⁹ dza³¹⁰ dza³¹¹ /
khro bo 'di dang bcas [D 256b5] te³¹² /³¹³ sngags stong bzlas na⁽³¹⁴⁻myur du⁻
³¹⁴⁾ 'ong ngo // gal te myur [P 52a1] du ma³¹⁵ 'ongs na³¹⁶ mig dang spyi bo 'gas shing³¹⁷ de'i [Ph 221a6] mod la 'chi [Ph 221a6] ste /³¹⁸ dmyal ba chen po brgyad du ltung ngo //
- 19.3 de nas khro bo'i phyag rgya'i mtshan nyid bshad pa / khu tshur so sor³¹⁹ bcangs te³²⁰ mthe'u chung gnyis 'khyud nas³²¹ [P 52a2] mdzub³²² mo gnyis [D 256b6] brkyang³²³ ste³²⁴ bkug pa 'di³²⁵ ni khro bo'i³²⁶ [sT 72b7] mi phyed

-
- ²⁹⁸ Ph omit.
²⁹⁹ P, Ph ba'i
³⁰⁰ Ph las
³⁰¹ Ph na /
³⁰² sT bzla
³⁰³ Ph pa; sT bar
³⁰⁴ D, P dhum /
³⁰⁵ Ph ṭa; sT ṭu
³⁰⁶ Ph ṭa; sT ṭu /
³⁰⁷ Ph kṣa
³⁰⁸ Ph na; sT ṇi
³⁰⁹ P hri; Ph hrīḥ
³¹⁰ sT dzaḥ
³¹¹ sT dzaḥ; Ph dza hūṃ phat
³¹² Ph pa
³¹³ P Ph, sT omit.
³¹⁴ Ph nges par
³¹⁵ P omit.
³¹⁶ Ph na /
³¹⁷ Ph shing skams nas
³¹⁸ sT omit.
³¹⁹ Ph so
³²⁰ Ph te /
³²¹ Ph nas /
³²² P, Ph 'dzub
³²³ Ph brkyangs
³²⁴ Ph te /
³²⁵ Ph omit.
³²⁶ Ph bo'i bdag po

19.4 復説夜叉女印。以二手平掌。二中指顛倒。以無名指出外。頭指與小指相捻。此是一切夜叉女最上根本印。結此印時彼夜叉女速來現身。復用此印。以右手母指作鉤召。

19.5 復誦此真言曰
唵_引 紇哩_{二合引} 阿_引 譚蹉
誦此真言。能鉤召一切夜叉女。

- pa'i lcags kyu'i phyag rgya'o // phyag rgya 'dis 'jig rten gsum yang 'gugs³²⁷ par
byed do //
- 19.4 de nas gnod [Ph 221a8] sbyin mo'i phyag rgya bshad pa / ⁽³²⁹⁻gang mo'i sor mo
gnyis [P 52a3] mi mnyam par byas te /^{328 -329)} [sT 73a1] srin lag gnyis³³⁰
rnam³³¹ par brkyang zhing³³² mdzub³³³ mo [D 256b7] gnyis sbyar bar³³⁴
byas nas³³⁵ mthe'u chung gnyis³³⁶ snying por³³⁷ byas pa ni³³⁸ gnod sbyin mo
thams cad kyi rtsa ba'i phyag rgya dam³³⁹ pa ste / 'di [sT 73a2] bcangs³⁴⁰ pa
[P 52a4] tsam gyis gnod sbyin mo thams cad 'ong ngo //
- phyag rgya 'di nyi la mthe [Ph 221b2] bo³⁴¹ g-yas pas³⁴² bod³⁴³ par³⁴⁴
bya'o³⁴⁵ //
- 19.5 om hrīḥ³⁴⁶ ā³⁴⁷ ga³⁴⁸ tstsha³⁴⁹ ā³⁵⁰ ga³⁵¹ tstsha³⁵² sarba [D 257a1] yakṣiṇi³⁵³
swā³⁵⁴ hā /³⁵⁵

³²⁷ Ph 'gug
³²⁸ sT omit.
³²⁹ Ph khu tshur so sor mnyam par byas ste /
³³⁰ sT omit.
³³¹ Ph rnam
³³² Ph zhing /
³³³ P, Ph 'dzub
³³⁴ D par
³³⁵ Ph, sT nas /
³³⁶ Ph gnyis [Ph 221b1] kyi
³³⁷ Ph po
³³⁸ Ph ni /
³³⁹ Ph de
³⁴⁰ Ph bcings
³⁴¹ Ph, sT bong
³⁴² Ph pa
³⁴³ Ph bde
³⁴⁴ Ph bar
³⁴⁵ Ph byed do
³⁴⁶ P, Ph hri
³⁴⁷ Ph a
³⁴⁸ Ph ka
³⁴⁹ Ph tsa
³⁵⁰ P, Ph a
³⁵¹ Ph ka
³⁵² D tstsha /; Ph tsa
³⁵³ P yakṣi ni; Ph yakṣi ni ni
³⁵⁴ sT swa
³⁵⁵ P //

- 19.6 復用前印。以左手母指作發送。誦此真言曰
唵_引 紇哩_{二合引} 誚蹉 誚蹉 藥乞叱_{二合引} 尼_引 尸伽囉_{二合} 補曩囉_引 誚摩曩_引 野 娑
嚩_{二合引} 賀_引
- 19.7 復說印相。以二手作拳舒二中指。此印能令一切夜叉女速來現前。誦此真
言曰
唵_引 摩賀_引 藥乞叱_{二合引} 尼_引 昧上曩必哩_{二合引} 曳_引 娑嚩_{二合引} 賀_引
- 19.8 復用二手作拳舒二小指。此印能令一切夜叉女速來親近。真言曰
唵_引 迦_引 摩菩疑濕嚩_{二合} 哩 娑嚩_{二合引} 賀_引

- 19.6 bod pa'i sngags so // phyag [sT 73a3] rgya 'di³⁵⁶ nyid las³⁵⁷ mthe bong g-yon
 pas slar³⁵⁸ [P 52a5] gtang³⁵⁹ bar³⁶⁰ bya'o // [Ph 221b3]
 (361-om yakṣi ā ga tṣtsha / ā ga tṣtsha⁻³⁶¹) che ge mo ya kṣi ṇi³⁶² shī³⁶³ ghram³⁶⁴
 pu³⁶⁵ na rā³⁶⁶ ga ma³⁶⁷ na³⁶⁸ ya swā hā /³⁶⁹
- 19.7 khu tshur^(370-so sor⁻³⁷⁰) bcangs te³⁷¹ gung mo'i^(372-sor mo⁻³⁷²) rab tu [sT 73a4]
 brkyang ba³⁷³ ni³⁷⁴ gnod sbyin mo [D 257a2] thams cad mngon [Ph 221b4]
 du phyogs³⁷⁵ par byed pa'i phyag rgya'o //³⁷⁶
 om^(377-ma [P 52a6] hā⁻³⁷⁷) ya kṣi ni³⁷⁸ mai³⁷⁹ thu na pri³⁸⁰ ye³⁸¹ swā hā /
- 19.8 khu tshur³⁸² phan tshun³⁸³ bcangs la mthe'u chung brkyang ste /³⁸⁴ bkug³⁸⁵
 pa ni gnod sbyin³⁸⁶ thams [sT 73a5] cad nye bar [Ph 221b5] byed pa'i phyag
 rgya'o //

³⁵⁶ Ph omit.

³⁵⁷ Ph lus

³⁵⁸ Ph sngar

³⁵⁹ P, Ph gtad

³⁶⁰ P, Ph, sT par

³⁶¹ P om shrī ga tṣtsha ga tṣtsha; Ph om kṣim hri / ga tsa ga tsa /; sT om yakṣi ā ga tṣtsha ā ga tṣtsha /

³⁶² Ph ni /; sT ṇi /

³⁶³ P, sT shrī; Ph shi

³⁶⁴ Ph ghrim

³⁶⁵ P bu

³⁶⁶ P, Ph ra

³⁶⁷ D, P, sT na

³⁶⁸ D, P, sT ma

³⁶⁹ P, Ph //

³⁷⁰ Ph saur

³⁷¹ Ph te /

³⁷² Ph so sor

³⁷³ P pa

³⁷⁴ Ph ni /

³⁷⁵ Ph phyags

³⁷⁶ P /

³⁷⁷ Ph sarba

³⁷⁸ D, P ni; sT bhī

³⁷⁹ P me; Ph me'i

³⁸⁰ P bri; Ph ti

³⁸¹ Ph yi

³⁸² sT tshu

³⁸³ Ph tshun du

³⁸⁴ Ph, sT omit.

³⁸⁵ sT dgug

³⁸⁶ Ph, sT sbyin mo

19.9 復用二手如執刀劍勢。此是一切夜叉女心印。誦此一字眞言曰
翅_{入引}

19.10 復用二手作拳。舒於頭指中指。此是一切夜叉女香華燈塗供養印。誦此眞
言曰
唵_引 薩哩嚩_{二合} 摩努賀_引 哩尼_引 娑嚩_{二合引} 賀_引

19.11 如是説此降伏諸部多大教王夜叉女成就法已

- om kā³⁸⁷ ma bho³⁸⁸ ge shwa³⁸⁹ ri swā hā /³⁹⁰
- 19.9 khu tshur phan tshun ba snol te³⁹¹ lag pa gnyis [D 257a3] mdzub³⁹² mo [P 52a7] gcig gi steng du gcig bskyon³⁹³ pa'i³⁹⁴ sbyor ba³⁹⁵ bzhag pa ni³⁹⁶ [Ph 221b6] gnod sbyin³⁹⁷ mo thams cad kyi [sT 73a6] dam tshig gi phyag rgya'o // kṣi³⁹⁸ snying po'o //³⁹⁹
- 19.10 khu tshur phan tshun bcangs te /⁴⁰⁰ mdzub⁴⁰¹ mo (402-dang gung mo⁻⁴⁰²) brkyang⁴⁰³ ba⁴⁰⁴ ni gnod sbyin mo thams cad kyi⁴⁰⁵ bdug⁴⁰⁶ [P 52a8][Ph 221b7] pa dang / me tog dang /⁴⁰⁷ dri dang /⁴⁰⁸ mar me'i phyag [D 257a4] rgya'o // [sT 73a7]
- om sarba ma⁴⁰⁹ no⁴¹⁰ ha ra pri⁴¹¹ yi⁴¹² swā hā /
- 19.11 'byung po 'dul ba'i⁴¹³ rgyud (414-kyi rgyal po⁻⁴¹⁴) chen po las⁴¹⁵ gnod sbyin mo'i⁴¹⁶ sgrub⁴¹⁷ pa'i thabs kyi cho ga [Ph 221b8] rgyas pa'i le'u'o // //

387 Ph ka
 388 Ph po
 389 Ph sha
 390 Ph //
 391 Ph te /
 392 P, Ph 'dzub
 393 Ph sbyong
 394 Ph bar
 395 Ph bas
 396 Ph ni //
 397 Ph sbyi
 398 P kshi; sT kṣi /
 399 P /
 400 P, sT omit.
 401 P, Ph 'dzub
 402 Ph gnyis
 403 Ph bkyang
 404 P pa
 405 Ph kyis
 406 Ph bkug
 407 P, Ph omit.
 408 P omit.
 409 Ph na; sT me
 410 Ph mo
 411 P bri; Ph nī
 412 P, Ph omit.
 413 Ph byed kyi
 414 Ph omit.
 415 sT las /
 416 Ph mo
 417 Ph bsgrub

BBT 10 章、細分番号 18 サンスクリット和訳

BBT

10 章（細分番号 18）

18.1 次に、一切のヤクシニーたちは立って聖持金剛の足に頭で敬礼して、
自己の心[真言]を与えた。

18.2 オーム 来い スラスンダリーは スヴァーハー
[これは]スラスンダリー[のマントラ]である。

18.3 オーム 一切マノーハーリーニ 敬礼致します スヴァーハー
[これは]マノーハーリー[のマントラ]である。

18.4 オーム カナカヴァティ 交接を享受する者よ スヴァーハー
[これは]カナカヴァティ[のマントラ]である。

HBT 11 章、細分番号 18 サンスクリット和訳

HBT

11 章（細分番号 18）

- 18.1 ウンマッタバイラヴィーは言った。
「一切の罪を破壊する者よ。神とアスラに崇拝される者よ。
あなたは満足している。神々の主よ。ヤクシニーの成就法を説いて下さい」
ウンマッタバイラヴァは言った。
「さて、ヤクシニーの成就を獲得する方法を私は説こう。
創造、維持、破壊を本質とする忿怒主に敬礼して、
8 ヤクシニーと名付けられるこれらの成就をもたらすものと、
また望みの富を与える呪を、私は説こう」
- 18.2 ādibīja (=om̐) を取って、それから āgaccha surasundarī、
śiro (=svāhā) と結びついた ābhra (=hrīm̐?) という種字を取るべきである。
[これが]スラスンダリー[のマントラ]である。
(om̐ āgaccha surasundarī hrīm̐ svāhā / オーム 来い スラスンダリーは
フリーム スヴァーハー) ¹
- 18.3 sṛṣṭi (=om̐) から、ābhra (hrīm̐?) という種字と結びついた sarvamanohāriṇī
という語、śiro (=svāhā) を伴うもの、これがマノーハーリニーの呪である。
(om̐ sarvamanohāriṇī hrīm̐ svāhā / オーム 一切マノーハーリニーは
フリーム スヴァーハー) ²
- 18.4 次に、brahmabīja (=om̐)、kanakavatī を取って、maithunapriye を言って、
次に raudra (=hūṃ?) から vahnivadhū (=svāhā?) である。
これは、一切の成就を与えるカナカヴァティー[のマントラ]と呼ばれる。
(om̐ kanakavatī maithunapriye hūṃ svāhā / オーム カナカヴァティー
交接を享受する者よ フーム スヴァーハー) ³

¹ N1 の astrabīja という記述を採れば、om̐ āgaccha surasundarī phaṭ svāhā となる。Bo 39a の写本上部には om̐ āgaccha surasundarī hūṃ svāhā と記述され、M には om̐ āgaccha surasundarī hrīm̐ haum̐ svāhā と示される。

² Bo 39a の写本右側には om̐ sarvamanohāriṇī hūṃ svāhā と記述され、M には om̐ sarvamanohāriṇī om̐ haum̐ と示される。

³ Bo 39a の写本上部には om̐ kanakavatīmaithunapriya hūṃ svāhā と記述され、M には om̐ kanakavatīmaithunapriye haum̐ svāhā と示される。

- 18.5 オーム 来い カーメーシュヴァリーは スヴァーハー
[これは]カーメーシュヴァリー[のマントラ]である。
- 18.6 オーム 性愛を享受する者よ スヴァーハー
[これは]ラティ[のマントラ]である。
- 18.7 オーム パドミニーは スヴァーハー
[これは]パドミニー[のマントラ]である。
- 18.8 オーム ナティー 偉大なるナティー 美しき姿を持つ者は スヴァー
ハー
[これは]ナティー[のマントラ]である。
- 18.9 オーム アヌラーギニー 交接を享受する者よ スヴァーハー
[これは]アヌラーギニー[のマントラ]である。

- 18.5 viṣa (=oṃ)、ābhra (=hrīm?) から、āgaccha、kāmeśvarī、anālapriyā (=svāhā)。これが、望みの富を与えるカーメーシュヴァリーの呪である。
(oṃ hrīm āgaccha kāmeśvarī svāhā / オーム フリーム 来い カーメーシュヴァリーは スヴァーハー) ⁴
- 18.6 viṣa (=oṃ)、bhūteśvarībījaṃ (=hrīm)、その後に kṣataja (=ra) の字、garjinī (=i) と結びついた raurava (=ta) と priye、次に analavallabhā (=svāhā)。これは、望みの富を与えるラティプリヤーの呪と呼ばれる。
(oṃ hrīm ratipriye svāhā / オーム フリーム ラティプリヤーよ スヴァーハー) ⁵
- 18.7 種字 viṣa (=oṃ) より、prāthamika (=hrīm)、padminī、jvalanapriyā (=svāhā)。人々に望みの富を与えるパドミニーの呪と言われる。
(oṃ hrīm padminī svāhā / オーム フリーム パドミニーは スヴァーハー) ⁶
- 18.8 ādibīja (=oṃ) から、bhūteśa (=hrīm)、また naṭi の後 mahānaṭi、svarṇa から rūpavatī の語、最後に śiras (=svāhā)。これがナティーの呪である。
(oṃ hrīm naṭi mahānaṭi svarṇarūpavatī svāhā / オーム フリーム ナティーよ マハーナティーよ 黄金の姿を持つ者は スヴァーハー) ⁷
- 18.9 anādi (=oṃ)、種字 adriṣā (=hrīm)、anurāgiṇī を誦すべし。maithunapriye を言って、dviṭha (=svāhā) を伴う[これが]アヌラーギニー[の呪]である。
(oṃ hrīm anurāgiṇīmaithunapriye svāhā / オーム フリーム アヌラーギニー交接を享受する者よ スヴァーハー) ⁸

⁴ Bo 39b の写本上部には oṃ huṃ āgaccha kāmeśvarī svāhā と記述され、M には oṃ mātārāgaccha kāmeśvari svāhā と示される。

⁵ Bo 39b の写本右側には oṃ huṃ chatajīrṇa kaurayaṃ tarjanīpriya svāhā と記述されるが、この記述は上記のマントラとは全く異なっている。M には oṃ hrīm ratipriye svāhā と示される。

⁶ Bo 39b の写本下部には oṃ huṃ padminī svāhā と記述され、M は oṃ padminī svāhā と示す。

⁷ Bo 39b の写本下部には oṃ huṃ naṭimāhānaṭi svarṇarūpavatī svāhā と記述され、M は oṃ hrīm naṭi mahānaṭi svarṇarūpavati haum と示す。BBT との関係から考えれば、naṭimāhānaṭi、そして svarṇarūpavatī ではなく surūpamatī が適切であろうか。

⁸ Bo 39b の写本上部には oṃ huṃ anurāgiṇīmaithunapriye svāhā と記述されるが、M は

- 18.10 8 ヤクシニーサーダナの詳細なる儀軌である。
- 18.11 金剛手(vajrapāṇi)の家に赴いて、ググルの香を捧げて、彼は1日に3度（夜明け、正午、日没）、1000回[マントラを]誦すべきである。彼女は一か月の内に必ず来るのである。来た者に、チャンダナ（栴檀）を混ぜた闍伽水が捧げられるべきである。
彼女は母、妻あるいは姉妹の行為をなすのである。
- 18.12 もし母となるならば、心を損なわず、彼女は妙薬、霊薬を与え、10万のディーナーラを与えるのである。
- 18.13 もし姉妹となるならば、彼女は成就物¹、妙薬、霊薬を与えるのである。天界の聖なる乙女を連れてきて[修法者に]与えるのである。彼女は過去、未来、現在を告げるのである。
- 18.14 もし妻となるならば、一切の望みを叶えるのである。[彼（修法者）は]偉大なる富の王となるのである。
- 18.15 次にマノーハーリーの成就法である。
河の合流点に赴いて、チャンダナでマンダラを作って、盛大な供養をなして、アグルを燃やしている間、彼は7日間 10000回[マントラを]誦すべし。7日目に、入念な供養を捧げて、彼（修法者）は[マントラを]誦すべし。それから彼女は真夜中に確かに来るのである。
- 18.16 もし彼女が来ないならば、その時死ぬのである。彼女は「あなたは命令せよ」と言うのである。修法者は「あなたは我々の下女となれ」と言うべきである。彼女は800の眷属を世話するのである²。彼女は常に毎日100ディーナーラを与えるのである。それ（ディーナーラ）は完

¹ ここでの成就物 (siddhadravya) に関して、Hatley[2007]は magical substance という訳語を用いている。また、*Guhyasūtra* 中の、siddhadravya によって不可視性 (antarhita) を得ることが出来るという記述を提示している (Hatley[2007] p.141, p.141 n.25)。この例からは、siddhadravya が呪的効能を与える物質であると考えられる

² T1, A, T2 写本の記述では「800日[修法者を]保護する」という意味合いで採れる。チベット訳の'khorを「眷属」の意味で採れば「800の眷属の世話をして」と読める。漢訳においては「瞻彼行人等八人」となっておりサンスクリットでの śataが欠落していたと言える。漢訳は行者に八人[の眷属を]与える、という意味合いで読めるがサンスクリットの pratipālayati あるいは pālayati の「保護する、世話する」という意味から考えれば、漢訳を、行人等の八人を助けるとも訳し得る。

18.10

- 18.11 次に、忿怒[バイラヴァ]の説いた成就法を私は一つずつ説こう。
ヴァジュラを手に持つ者(vajrapāṇi)⁹の家に赴いて、ググルの香を捧げて、
1日に3度（夜明け、正午、日没）、[マントラを]誦すべきであり、月の終わりにスラスンダリーが来るのである。
彼女は彼（修法者）の望みに従って、母、姉妹、妻となるであろう。
- 18.12 王権、10万のデーナーラ、また妙薬、霊薬を[彼女は与え]、
[修法者の]母となって、その偉大なるヤクシニーは、母の如く[修法者を]保護するであろう。
- 18.13 もし彼女が姉妹となるならば、聖なる乙女を連れてきて、彼女（乙女）と妙薬、霊薬、成就物を与えるのである。
もし妻となるならば、
- 18.14 彼女は[修法者の]一切の望みを満たし、同様に彼（修法者）は非常に裕福な者となるであろう。
- 18.15 川岸に赴いて、チャンダナでマンダラを作り、
盛大な供養を準備して、ググルの香を捧げよ。
7日間、計 10000 回[マントラを]誦すべし。
7日目の夜に、喜ばしい供養をなして、
真夜中に彼は[マントラを]誦すべし。ヤクシニーが速やかに近づくのである。
- 18.16 [彼女は]修法者に「私は何をなすか？」と言って、修法者は「下女となれ」[と命令すべきである]。
彼女は 800 の眷属たちの世話をし、また 100 ディーナーラを与えるのである。賢者は残り[のディーナーラ]を費やすべきである。
それ（デーナーラ）を費やさない場合、彼女が再び[ディーナーラを]与えることは決してないのである。
マノーハリーが与えず、近付かないならば、彼女は死ぬのである¹⁰。

om hrīm anurāgiṇīmaithunapriye svāhā とする。

⁹ 原語は BBT と同様 vajrapāṇi であるが、HBT 内の文脈である為、「金剛手」の訳語を避けた。

¹⁰ ここでの代名詞 asau が修法者を指すかマノーハリーヤクシニーを指すかは不明瞭である。

全に使い果たされるべきである。もし何か残すならば、[彼女が]再び現れることはないのである。

18.17 次にカナカヴァティーの成就法である。

ヴァニヤン樹の元に赴いて、彼は魚と肉の順序に従って酒を与えよ。彼（修法者）自身が酒を飲んで、残り[の供物]と共に持誦者は与えられるべきである³。彼は 1000 回[マントラを]誦せ。

18.18 この様に彼は 7 日間、夜に修すべきである⁴。真夜中に 800 の眷属によって囲まれ、一切の装飾によって飾られた彼女（マノーハーリー）自身が来るまで彼（修法者）は[マントラを]誦すべし。

18.19 来た者たちは望まれるべきであり、彼女は妻となるのである。彼女は毎日 12 の眷属と衣、装飾品そして食事などを与えるのである。[また]彼女は 8 ディーナラを与えるのである。

18.20 次に、カーメーシュヴァリーの成就法である。

ゴーローチャナで樹皮に[画を]描いて⁵、ベッドに一人で上がり、彼は 1000 回[マントラを]誦すべきである。

18.21 それから、月の終わりに、盛大なる供養をして、ギーの灯を燃やして、黙然として[マントラを]誦せ。それから、彼女は確かに真夜中に来るのである。来た彼女は[修法者の]願望を満たすのである。彼女は妻となり、ベッドに輝かしい装飾品を残して、夜明けに去るのである。
[行者は]他人の妻との性行為を避け、さもなければ[修法者は]破壊されるのである。

18.22 次に、ラティの成就法である。

布に黄金色の、一切装飾で飾られた、睡蓮を手を持つ少女を描いて、

³ 漢訳の「以自飲酒肉食已」から考えれば、ここでは行者自身が酒を飲み供物の残りの肉や魚を食べてからマントラを誦すことを意味すると言える。また、漢訳では「不潔淨盥漱」とあるが、サンスクリットには「不潔淨盥漱」の意味合いを持つ文は認められない。

⁴ 漢訳「至第七日」及びチベット訳 nyi ma bdun pa に従えば、A, T1, T2 写本の *saptame divase* が適切であろう。

⁵ G 写本では *bhūrjapatra*（樹皮/樺皮）に何を描くのか明確ではないが、A, T1, T2 写本では *pratīkṛti*（図像/肖像）を、チベット訳では *gzugs brnyan*（肖像）を描くとされる。漢訳ではより明確に、「畫彼迦彌濕嚩_{二合}哩夜叉女形像」と説かれ、カーメーシュヴァリーの図像を描くべきであるとする。

- 18.17 ヴァニヤン樹の元に赴いて、彼は魚と肉などを捧げるべきである。
夜に[魚などの]残りのものを彼自身[食べて]、7 日間 1000 回[マントラ
を]誦すべし。
- 18.18 7 日目の真夜中に良い香り[の塗香]で礼拝して、
[マントラによって]呼ばれた、800 の眷属を伴った、一切装飾を備え一
切の美しき四肢の女が[修法者の]近くに来るのである¹¹。
- 18.19 彼女は毎日、12 の衣、装飾品、食事、8 ディーナラを与えるのであ
る。望ましき妻となるのである。
他でもなくこの方法で、女神カナカヴァティーは来るのである。
- 18.20 ゴーローチャナで樹皮に画を描いて、
ベッドに一人で上がり、1000 回呪を誦すべきである。
- 18.21 月の終わりに、盛大なる供養をなして、夜に再び[マントラを]誦すべし。
それから、彼女は真夜中に来りて、望ましき妻となるのである。
彼は毎日、ベッドの上で輝かしい装飾品と食事を得るであろう。
他の妻との性交を放棄する[べきであり]、さもなければ死ぬのである。
これが、望みの物を与えるカーメーシュヴァリー女神である。
- 18.22 睡蓮を手に持ち、美しい歯を持ち、黄金色で一切装飾で飾られた者をジ
ャスミンを始めとする花によって礼拝して、
また、ググルの香を捧げて、7 日に至るまで[マントラを]8000 回誦す
べし。
7 日の終わりに、ヴァイシュナヴィーに入念に供養をなして、ギーの灯
をなして、
彼（修法者）は真夜中に[マントラを]誦すべし。ラティプリーヤーが近づ
くのである。

¹¹ N2, Bo, Ba, N3 では sarvālaṅkārasaṃyuktā は sarvāvayavasāṃyuktā とされるが、BBT との対応からは sarvālaṅkārasaṃyuktā を採るべきであろう。

ジャスミンの花で供養すべきである。ググルの香を捧げて、8000 回 [マントラ] を誦すべし。月の終わりに、富に従って供養をなして、ギーの灯を燃やして、真夜中に彼女（ラティ）自身が来るまで [マントラ] を誦すべし⁶。

18.23 来た彼女は、黙然として望まれるべきである。同様に、彼女は [修法者の] 妻となるのである。彼女は、眷属を伴った修法者を世話し、天界の望まれる食事を与えるのである。妙薬、霊薬、25 ディナーラを与えるのである。

18.24 次に、パドミニの成就法である。
自己の家の頭の場所に⁷、チャンダナでマンダラを描き、ググルの香を捧げて⁸、

18.25 それから満月の時に、同様に富に従って供養をなして、真夜中に彼女が確かに来るまで [マントラ] を誦せ。来た者たちが望まれるならば、妻となるのである⁹。彼女は望ましい聖なるものを与えるのである。妙薬、霊薬を与え、成就物を与えるのである。

18.26 次に、ナティーの成就法である。彼は Aśoka の樹の元で修法せよ。肉の食事と共に、塗香と花と香を捧げて、1000 回 [マントラ] を誦せ。1 か月の内に、彼女は確かに来るのである。来た彼女は母、姉妹、妻となる。

18.27 もし妻となるならば、彼女は天界の妙薬、霊薬を与えるのである。彼

⁶ 修法者の元に来る主語がサンスクリットでは説かれていないが、漢訳では明確に「彼囉帝夜叉女即來現身」と説かれ、ラティ自身が姿を現すことが明確に示されている。

⁷ この śiraḥsthāna に関しては、3.2.3.2 項で少しく触れた。śiraḥsthāna には chief place の意味合いもあるが、この部分のチベット訳は rang gi khyim du mgo'i gnas であり、漢訳では「於自本舍臥床頭邊」と説かれており、寝所の頭の位置にマンダラを作成することを意味していると言えよう。

⁸ 漢訳では「焼安悉香誦眞言至一月」と説かれるため、これに対応するのは A, T2 写本の japet māsam ekaṃ あるいは T1 の japet sahasramāsam ekaṃ という記述であるが、G 写本には認められない。

⁹ 漢訳では、ここで修法者の元に来るのが「鉢訥彌爾夜叉女」であることが明確に示されている。

- 18.23 彼女は望ましき妻となって、天界の食事、霊薬、25 ディーナーラ、衣、装飾品を[与えるのである]。
[修法者は]「望みを満たせ」と言い、彼女は成就物を与えるのである。
- 18.24 自己の家あるいはシヴァの寺院（祠）に、チャンダナでマンダラを作って、ググルの香を捧げて、規則に従って礼拝し、
- 18.25 1 か月間絶えず[マントラを]8000 回誦すべし。
満月の夜に、富に従って礼拝して、
真夜中に[マントラを]誦すべし。パドミニーが現れるのである。
彼女は一切の望みを満たし、望ましい妻となるのである。
天界の妙薬、霊薬、成就物を与えるのである。
- 18.26 Aśoka の樹に赴いて、魚と肉を捧げるべし。
また、ググルの香を捧げて、8000 回[マントラを]誦せ。
月の終わりに、広大な供養をなして、夜に、先の如く[マントラを]誦せ。
彼女は真夜中に、母、姉妹、妻として現れるのである。
- 18.27 彼（修法者）の望みに従って、母となり、彼女は食事と衣を与えるのである。

- 女は 8 ディーナラを与えるのである。¹⁰
- 18.28 もし母となるならば、彼女は望みの食事を与えるのである。彼女是一对の服を与え、100 パラの黄金を与え、妙薬、霊薬を与えるのである。
- 18.29 もし姉妹となるならば、1000 ヨージアナから女性を連れてきて、[修法者に]与えるのである。また、服、装飾、望ましい食事、妙薬、霊薬を与えるのである。
- 18.30 次に、アヌラーギニーの成就法である。
クンクマで樹皮にヤクシニーを描いて、月の最初に始めて、塗香、花、灯明の[供養の]順番に従って、1 か月間日に 3 度（夜明け、正午、日没）[マントラを]誦せ。それから、満月の時に、富に従って供養をなして、ギーの灯明を燃やして、一晩中[マントラを]誦せ。それから、彼女は確かに夜明けに来るのである。
- 18.31 来た彼女は、望みのものを与える者となり、妻となる。彼女は妙薬、霊薬を与え、1000 ディーナラを与えるのである。彼女は 1000 年[の寿命を]与えるのである。
- 18.32 偉大なるブータダーマラタントラにおけるヤクシニーの成就法の詳細なる儀軌タントラ

¹⁰ この記述は G 写本では bhaginī の記述の後に記述される。G 写本では mātā、bhaginī、bhāryā の順で修法が説かれるが、A, T1, T2 写本および漢訳、チベット訳では、bhāryā、mātā、bhaginī の順である。

- 18.28 もし姉妹となるならば、望ましい食事、装飾品などを[与え]、
1000 ヨージャナから天界の女性を連れてきて、[修法者に]与えるので
ある。
- 18.29 もし妻となり、毎日彼女が満足するならば、彼女は望みを満たし、妙
薬、霊薬、8 ディーナラを与えるのである。
- 18.30 クンクマで樹皮にヤクシニーを描いて、
太陰日 (tithi) の 1 日目に始めて、日に 3 度礼拝すべし。
花などでアヌラーギニーを 8000 回供養すべし。
再び、満月の夜にギーの灯明を用意すべし。
香や花などによって供養して、一晩中[マントラを]誦せ。
彼女は夜明けに来て、望ましい妻となる。
- 18.31 彼女は、1000 の刻印されたコイン、食事、また妙薬、霊薬、衣を与
えるのである。彼（修法者）は 1000 年生きるのである。
- 18.32

BBT 10 章、細分番号 19 サンスクリット和訳

BBT

10 章（細分番号 19）

- 19.1 次に、金剛手秘密主はこう言った。もしヤクシニーたちが三昧耶に住さないならば、この忿怒[のマントラ]と共に鉤召して[マントラを]誦せ。
- 19.2 オーム ドゥルーム カッタ カッタ 某のヤクシニーを フリーヒ ジャハ フーム パット
[修法者は]この忿怒[のマントラ]と共に 1000 回誦すべし。彼女は速やかに来るのである。もし速やかに来ないならば、眼と頭は破裂するのである¹¹。まさにその瞬間に死んで、八大地獄に堕ちるのである。
- 19.3 次に、クロードラージャ（忿怒王）の印相である。両拳をなして、両小指を結ぶべし。両人差し指を伸ばして、曲げよ。これが、妨げられることのないクロードアンクシャ（忿怒鉤）の印である。三界を鉤召するこの印の王によって、鉤召するのである。

¹¹ ここで死に至る者が修法者であるか、ヤクシニーであるかは判断がつかない。

HBT 11 章、細分番号 19 サンスクリット和訳

HBT

11 章（細分番号 19）

19.1 もし時間が経ち[ヤクシニーが]来ないならば、成就しないのである¹²。

19.2 viṣa (=om)、krodhātmaka (=hūṃ?)、更に amukayakṣiṇī と言い、bhūteśa (=hrīm) から、sādaraṃ¹³、krodha (=hūṃ) と astra (=phaṭ) を伴った 2 度の vāyu¹⁴。

(om hūṃ amukayakṣiṇī hrīm hūṃ phaṭ/ オーム フーム 某のヤクシニーは フリーム フーム パット) ¹⁵

この忿怒[のマントラ]によって、踏んで、8000 回[マントラを]誦すべし。このようになしたならば、[ヤクシニーは]来るのである。望む物を[修法者に]与えるのである。

もし彼女が来ないならば、死に、また眼と頭が破裂するのである¹⁶。あるいはまた、クロードブーパティがラウラヴァ（叫喚）地獄に墮つのである。

19.3 相互に拳を近づけて、双方の小指を結ぶべし。

その[拳の]鉤の形の両人差し指を伸ばした後曲げるべし。

これは三界を鉤召することの出来るクロードンクシャー（忿怒鉤）の

¹² HBT で用いられる kāla は BBT の samaya に対応するものであろう。密教でのテクニカルタームとしての三昧耶戒を指す samaya が、HBT では「時」の意味として捉えられ、kāla に言い換えられたものと推察される。

¹³ mantrakośa 内にこの語を見ることは出来ない。しかし、N2, Bo 写本の ādaraṃ は aḥ を示す。

¹⁴ vāyu も mantrakośa 内に対応文字を見ることが出来ない為、現在の所解読不可能である。

¹⁵ M では om hūṃ phaṭ phaṭ anurāgiṇī yakṣiṇī hrīm ṣaṃ ṣaṃ hūṃ hūṃ phaṭ (M p.145) となっているが、これは krodhāstra という読みを用いている為であろう。この部分のマントラは対応する文字が解読出来ない箇所がある為、完全な形を示すことが出来なかった。BBT との対応から考えれば、sādaraṃ、ādaraṃ、あるいは vāyu の語が jaḥ を示している可能性が示される。

¹⁶ ここで死に至る者が修法者であるか、ヤクシニーであるかは判断がつかない。刊本 M では「彼女の頭は破裂し」として、ヤクシニーが死に至るとしている。韻律に合わせるのならば、N1 写本の mriyante を採るべきであろうが、意味が不明瞭となろう。

19.4 次に、ヤクシニーの印相である。

両手を水平になして、中指を交えて、薬指を外に斜めに立てて、人差し指は中に入れて、小指を中に留める¹²。

これが一切ヤクシニーたちの最上の根本の印である¹³。

これ（印）が結ばれるとすぐに、一切ヤクシニーたちが来るのである¹⁴。実にこの印より右の親指で召請するのである。

19.5 オーム フリーヒ 来い 来い 一切ヤクシニーたちに スヴァーハー¹⁵

[これが]召請のマントラである。

19.6 まさにこの印より左の親指で発遣するのである。

オーム フリーヒ 行け 行け ヤクシニーは 速やかに 再び 戻るために スヴァーハー¹⁶

¹²ここでの viparīta は漢訳では「顛倒」、チベット訳では mi mnyam par byas te である。以降の印相についての記述は不明瞭な箇所が多い。

¹³ここでの印は漢訳では「最上根本印」であり、チベット訳では rtsa ba'i phyag rgya dam pa である。A, T1 では paramudrā、T2 写本では paramamudrā であり、G 写本は paramamūlamudrā であり、G 写本の記述が漢訳、チベット訳に最も合致する。

¹⁴G 写本は agacchanti であるが、漢訳は「彼夜叉女速來現身」であり、チベット訳は gnod sbyin mo thams cad 'ong ngo となっているため、A, T1 写本の āgacchanti を採った。

¹⁵この部分のマントラは漢訳では「唵 紇哩 阿 識蹉」のみである。一方、チベット訳は om āgaccha āgaccha sarvayakṣiṇī svāhā である。T1, G 写本の記述がこれに近いものとなっている。内容から考えれば sarvayakṣiṇīnām の部分は、sarvayakṣiṇī に直すのが適切であろう。

¹⁶デルゲチベット訳では āgaccha āgaccha であるが、ここは発遣のマントラである為 gaccha gaccha が適切であろう。

印である。

- 19.4 両手を水平にして、交差した両中指を作って¹⁷、
賢者は、水平に、両薬指の端を外側に置くべし。
人差し指を中に入れて、小指を内部に入れる。
このヤクシニー印の親指によって、一切[ヤクシニーを]召請すべし¹⁸。

- 19.5 viṣabīja (=om) を取って、それから種字 prāthamika (=hrīm) を述べて、
gaccha と結びついた tāmasī (=ā) を 2 度取るべし。
yakṣiṇī、agnipriyā (=svāhā?)¹⁹ で終わる、これがヤクシニーを召請する
呪である。

(om hrīm āgaccha āgaccha yakṣiṇī svāhā / オーム フリーム 来い 来い
ヤクシニーは スヴァーハー)²⁰

- 19.6 [この]召請の印および左の親指によって発遣すべし。
以下のこの呪によってヤクシニーは崇拜される。
prāleya (=om)、raudrīya (=hrīm)、2 度の gaccha と結びついた種字を、
amukayakṣiṇī を取って、そして punar āgamanāya²¹、
dviṭha (=svāhā) で終わるものを取るべし。ヤクシニーたちを発遣する
マントラである。

(om hrīm gaccha gaccha amukayakṣiṇī punar āgamanāya svāhā / オーム
フリーム 行け 行け 某のヤクシニーが 再び 戻るために スヴァ
アーハー)

¹⁷ 各写本の記述では韻律の崩れが認められる。

¹⁸ BBT の āvāhana の記述に従って、N2, Ba 写本の記述を採った。

¹⁹ Mantrakośa 内にこの agnipriyā に対応する語は見られないが、BBT と対照すれば svāhā に対応すると言える。

²⁰ 刊本 M では om hrīm āgacchāgaccha "name of yakṣiṇī" yakṣiṇī svāhā (M p.146) として、amuka の語を入れ込んでいる。

²¹ 韻律不詳

19.7 両拳をなして、両中指を伸ばすべし。一切ヤクシニーが現前する印である。

オーム 偉大なるヤクシニー 交接を享受する者よ スヴァーハー

19.8 両拳をなして、両小指を伸ばして、曲げるべし。一切ヤクシニーを近寄らせる印である。

オーム カーマボーゲーシュヴァリーは スヴァーハー

19.9 両手を半分閉じた手の形にして、一切ヤクシニーの心印（心のムドラ）である¹⁷。

クシーム

[これが]心真言（心のマントラ）である¹⁸。

19.10 両拳をなして、人差し指と中指を伸ばすべきである。[これが]一切ヤクシニーへの塗香、花、香、燈の印である。

オーム 一切マノーハーリニーは スヴァーハー

¹⁷ ここはサンスクリットでは *sarvayakṣiṇīhṛdayamudrā* であり、漢訳では「一切夜叉女心印」、チベット訳では *gnod sbyin mo thams cad kyi dam tshig gi phyag rgya* である。チベット訳では三昧耶の印という意味合いとなり、サンスクリットの *hṛdayamudrā* に良く対応するのは漢訳の「心印」であろう。

¹⁸ チベット訳ではこの真言は *kṣi* となっている。また、サンスクリットの A, T1 写本の *hṛdayamantra* に対応する漢訳は「一字真言」であり、チベット訳では *snying po* と記されるのみである。

- 19.7 相互に、両拳をなして、両中指を伸ばして、
この（以下の）ヤクシニーの呪と共に、[ヤクシニーが]現前する印である。
viṣa (=om)、mahāyakṣiṇī と行って、maithunapriye を取るべし。
vahnipriyā (=svāhā) で終わると言われる。これが、[ヤクシニーが]現前する呪である。
(om mahāyakṣiṇī maithunapriye svāhā / オーム 偉大なるヤクシニー 交接を享受する者よ スヴァーハー)
- 19.8 相互に拳をなして、そして両小指を伸ばして曲げるべし。
この印が、[ヤクシニーを]近寄らせるものであると知られる。
viṣa (=om) の後、kāmapradā、bhogeśvarī、svāhā と結びついたもの。
(om kāmapradā bhogeśvarī svāhā / オーム 願望を与える者であるボーゲーシュヴァリーは スヴァーハー) ²²
- 19.9 拳をなして、それから、相互に拳の形を心臓に置くべし²³。
viṣabīja (=om) を取って、trailokyagrasanātmaka (=kṣa) ²⁴、
dhūmrabhairavī (=ī) を伴い、nādadbindu (=ṃ) と結びつき、
hṛdayāya、śiras (=svāhā) で終わる、これが心臓に置く呪である。
(om kṣīm hṛdayāya svāhā / オーム クシーム 心臓に スヴァーハー) ²⁵
- 19.10 それから、相互に拳をなして、人差し指と中指を伸ばして、
マントラを伴った、塗香などの印である。
viṣa (=om)、dviṭha (=svāhā) で終わる sarvamanohārī を取れ。
(om sarvamanohārī svāhā / オーム 一切マノーハーリーは スヴァーハー)
これが 5 種供養の印である。[修法者は]同様に呪を誦すべし。 ²⁶

²² BBT では kāmabhogeśvarī となっている。HBТ の各写本の kāmapradāt ではなく刊本 M の読みである kāmapadāt を採用すれば、「kāma という語から bhogeśvarī」となり、BBТ の kāmabhogeśvarī の語に対応する。刊本 M では om kāmabhogeśvarī svāhā とする (M p.148)。

²³ HBТ では BBT の hṛdayamudrā という単語をテクニカルタームとして扱わず、「心臓に置くべし」という形で使用している。

²⁴ HBТ 内のこの単語の表記には揺れがあり、同様に Mantrakośa 内の kṣa の記述にも揺れがある。何れが正確な表記であるかは不明瞭である。

²⁵ 刊本 M ではこれを om hrīm hṛdayāya namaḥ としている。(M p.148)

²⁶ ここにも Ba 写本に特有の補足的記述が認められる。Ba 写本ではこれまで述べられ

- 19.11 ブータダーマラマハータントララージャ中、ヤクシニーの成就法の詳細なる儀軌タントラ

19.11 マハータントラたる吉祥なるブータダーマラタントラ中、ヤクシニー
サーダナ儀軌 11 章

てきたマントラの暗号を解いた形を補足的に記述している。この記述は text 内の注に記入したが、以下に各々のマントラの対応を示そう。om jū kaṭṭaṭṭa amukayakṣiṇī hrīm yaḥ 2 hūṃ phaṭ というマントラは 19.2 のマントラに対応する。avāhanamamtraḥ と述べられる、om hrīm āgacha sarvayakṣaṇī svāhā というマントラは 19.5 に対応する。次に説かれる om hrī gacha sarvayakṣiṇī śīghraṃ punar āgamanāya svāhā は 19.6 に対応する。om kāmēśvarī svāhā は hrdayamamtraḥ として提示され、19.8 に対応する。om mahāyakṣiṇīmaithunapriye svāhā は abhimukhīkaraṇa として提示され、19.7 に対応する。om sarvamanohārī svāhā は 19.10 に対応する。

略号一覧 Abbreviations

* 略号を使用したもののみを挙げ、略号を用いずに利用した文献は省略する。

BKM	<i>Brhatkathāmañjarī</i>
BT	<i>Bhūtaḍāmaratantra</i>
BBT	仏教版 <i>Bhūtaḍāmaratantra</i>
D	チベット大蔵経デルゲ版
GST	<i>Guhyasamājatantra</i>
HBT	ヒンドゥー教版 <i>Bhūtaḍāmaratantra</i>
HT	<i>Hevajratantra</i>
KSS	<i>Kathāsaritsāgara</i>
MM	<i>Mālatīmādhava</i>
NṢA	<i>Nityāṣoḍaśikārnava</i>
P	チベット大蔵経北京版
Ph	チベット大蔵経 Phug Brag 版
PU	<i>Pradīpoddhyotana</i>
PUAP	<i>Pradīpoddhyotanābhisamdhīprakāśikā</i>
sT	チベット大蔵経 sTog Palace 版
T	Taishō Shinshū Daizōkyō (大正新脩大蔵経)
UT	<i>Uḍḍīśatantra</i>
UDT	<i>Uḍḍāmareśvaratantra</i>
YM	<i>Yogaratnamālā</i>
『降三世釈』	<i>'phags pa 'jig rten gsum las rnam par rgyal ba shes bya ba'i 'grel pa</i>
『降三世大儀軌』	<i>'jig rten gsum las rnam par rgyal ba rtog pa'i rgyal po chen po</i>
『コーサラ荘嚴』	<i>de kho na nyid bsds pa'i rgya cher bshad pa ko sa la'i rgyan</i>
『金剛手灌頂タントラ』	<i>'phags pa lag na rdo rje dbang bskur ba'i rgyud chen po</i>
『三卷本底哩三昧耶』	『底哩三昧耶不動尊聖者念誦秘密法』
『十八会指帰』	『金剛頂経瑜伽十八会指帰』
『初会金剛頂経』	『仏説一切如来真實撰大乘現証三昧大教王経』
『真性光明』	<i>de bzhin gshegs pa thams cad kyi de kho na nyid bsds pa theg pa chen po mngon par rtogs pa zhes bya ba'i rgyud kyi bshad pa de kho na nyid snang bar byed pa zhes bya ba</i>
『大日経』	『大毘盧遮那成佛神變加持経』
『大日経義釈』	『毘盧遮那成仏神変加持経義釈』
『大日経疏』	『大毘盧遮那成仏経疏』

『タントラ義入』 *rgyud kyi don la 'jug pa*
『タントラ義入釈』 *rgyud kyi don la 'jug pa'i 'grel bshad*

大谷 西藏大蔵経研究会編 1962『影印北京版西藏大蔵経 総目録』鈴木学術財団
東北 東北帝国大学法文学部編 1970『西藏大蔵経総目録』名著出版
大正 大正新脩大蔵経

参考文献一覽 References

一次資料 Primary Sources

- Avalon, A. and Vedantatirtha, G. C (edit.). 1915. *Kulachūdāmani tantra*. in Tantric texts vol.4. The Sanskrit Press.
- Avalon, A. and Bhaṭṭāchārya, P.(edit.) 1937 (2nd edition.). *Tantrik Texts vol.1 Tantrābhidhāna*. London: Luzac & Co.
- Bhattacharya, B. (edit.) 1928. *Sāadhanamālā Vol. II*. Baroda: Oriental Institute.
- Bhattacharya, B. 2016. *Kāraṇḍavyūha Sūtra: A Bi-lingual Critical Edition for the First Time from Sanskrit-Tibetan Manuscripts with an Introduction*. New Delhi: Kaveri Books.
- Brockhaus, H. 1839. *Katha sarit sagara*. Leipzig.
- Caṭṭopādhyāya, R.M. (ed.) Tarkālaṅkāra, C.K. (trans). 2010. *Śrīmad Kṛṣṇānanda Āgamavāgīśa Kṛta Vṛhat Tantrasāraḥ*. Kolikātā: Navabhārata Pāvaliśārsa. (Bengali Script. Reprint)
- Chag lo. *Sngags log sun 'byin gyi skor bzugs so. Chag lo tsā ba dang 'gos khug pa lha btsas sogs kyis mdzad pa*. 1979. Thimphu: Kunsang Topgyel and Mani Dorji.
- Chakravarti, C. 1984. *Guhyasamājatantrapradīpodyotanaṭīkāṣaṭkoṭīvyākhyā*. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute.
- Chandra, L. and Snellgrove, S. 1981. *Sarva-tathāgata-tattva-saṅgraha: Facsimile Reproduction of a Tenth Century Sanskrit Manuscript from Nepal*. New Delhi: Sharada Rani.
- Chandra, L. 1987. *Sarva-tathāgata-tattva-saṅgraha: Sanskrit Text with Introduction of Maṇḍalas*. Motilal Banarsidass.
- Coulson, M. 1989. *A critical edition of the Mālatīmādhava*. Oxford University Press.
- Durgāprasād and Parab, K. P. 1930 (4th edition). *The kathāsaritsāgara of somadevabhattacha*. Bombay.
- Dviveda, V (edit.). *Nityāśoḍaśikārṇava*. in *Yogatantragranthamālā* No.1. Varanasi: Varaseya Sanskrit Vishvavidyalaya.
- Goudriaan, T. 1985. *The Vīṇāśikhatantra: A Śaiva Tantra of the Left Current*. Motilal Banarsidass.
- Farrow, G. W. and Menon, I. 1992. *The Concealed Essence of the Hevajra Tantra*. Motilal Banarsidass.
- Ishikawa, M. 1990. *A Critical Edition of the SGRA SBYOR BAM PO GNYIS PA an old and basic commentary on the Mahāvīyutpatti*. Tokyo: Toyo Bunko.
- Kaul, M., ed. 1984. *Brhannīla Tantra*. Delhi: Butala & Company.
- Kāle, M. R. 1967. *Bhavabhūti's Mālatīmādhava: With the commentary of Jagaddhara*. Delhi: Motilal Banarsidass.

- Kaviraja, G., ed. 1970. *Pheṭkārīṇī Tantram in Tantrasangraha, Yogatantra-Granthmala Vol.IV, Part.II*. Varanasi: Varanaseya Sanskrit Uishvavidyalaya.
- Krishnanand Agamavagish (edit. Ram Kumar Rai). 1985. *Brihat Tantrasara*. Varanasi: Prachya Prakashan.
- Mallinson, J. 2007. *The khecarīvidyā of ādinātha: A critical edition and annotated translation of an early text of haṭhayoga*. Routledge.
- Matsunaga, Y. 1978. *The Guhyasamāja Tantra*. Toho Shuppan.
- Mette, A. 1997. *Die Gilgitfragmente des Kāraṇḍavyūha*. in Indica et Tibetica 29. Swisttal-Odendorf: Indica et Tibetica Verlag.
- Mette, A., Kudo, N., Sakuma, R., Tudkeao, C. and Hirabayashi, H. 2017. *Gilgit Manuscripts in the National Archives of India Facsimile Edition volume II.4 Further Mahāyānasūtra*. The National Archives of India and The International Research Institute for Advances Buddhismology, Soka University.
- Miyasaka, Y. 1995. *Mahāvairocanābhisambodhivikurvitādhiṣṭhāna-vaipulyasūtrendrarāja-nāma-dharmaparyāya: Bam po dañ po (Tibetan)*. in Acta Indologica VII. Narita: Naritasan Shinshoji.
- Ngor chen. *Spyod pa'i rgyud spyi'i rnam par gzhag pa legs par bshad pa'i sgron me*. In Bsod nams rgya-mtso(compiled). 1969. *The complete works of the great masters of the sa skya sect of the tibetan buddhism*. Vol.10. No.134 Toyo-bunko.
- Pāṇḍeya, V. 2006. *Bhūtaḍāmaramahātantram*. Vārāṇasī: Pracya Prakāśan.
- Rai, R. K(ed). 1985. *Brihat Tantrasara by sadhaka chudamani krishnanand agamavagish*. Varanasi: Prachya Prakashan.
- Rai, R. K. 1993. *Brahmānanda's śāktānandatarāṅgiṇī*. Prachya Prakashan.
- 2005. *Dictionaries of Tantra Śāstra*. Varanasi: Prachya Prakashan.
- Śarmā, B. 1965 or 1966 (saṃvat 2022). *Nīla Tantra*. Prayāga: Kalyāṇa Mandira.
- Sastri, T.G., ed. 1989. *The Āryamañjuśrīmūlakalpa*. 3Parts. Bibliotheca Indo-Buddhica Series No.57, 58 and 59. Delhi: Sri Satguru Publications. (2nd Edition of the 1st Edition of 1925)
- Schiefner, A. 1963. 復刊叢書2 *Tāranāthae de Doctrinae Buddhicae in India Propagatione*. 鈴木學術財団 (1st ed. 1868).
- Si tu. *Bde bar gshegs pa'i bka' gangs can gyi brdas drangs pa'i phyi mo'i tshogs ji snyed pa par du bsgrubs pa'i tshul las nye bar brtsams pa'i gtam bzang po blo ldan mos pa'i kuṇḍa yongs su kha bye ba'i zla 'od gzhon nu'i 'khri shing*. In Sherab, G. 1990. *Collected works of the grea Ta'i si tu pa kun mkhyen chos kyi byun gnas bstan pa'i nyin byed*. Vol.9. Kangra.
- Śivadatta, M. P. and Parab, K. P. 1931. *The Brihatkāthāmañjarī of kshemendra*. in *Kāvya-mālā* 69. Second edition. Bombay: Pāṇḍurang Jāwajī.
- Snellgrove, D. L. 1959. *The Hevajra Tantra: A Critical Study*. London: Oxford University Press.

- Śrīvāstava, M. and Rāya, Ś., eds. Pāṇḍeya, V. and Muṃśī, D.S., trans. 2007. *ŚrīKṛṣṇānanda Āgamavāgīśa Kṛta Vṛhat Tantrasāra*. 2vols. Vārāṇasī: Prachya Prakashan.
- Vaidya, P. L. 1961. *Buddhist Sanskrit Texts-No.17 Mahāyānasūtrasaṃgraha part 1*. Darbhanga: The Mithila Institute.
- Vaidya, P. L. ed. 2003. *Mahāyānasūtrasaṃgraha. Part II*. Buddhist Sanskrit Texts 18. Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning. (2nd Edition of the 1st Edition of 1964)
- Vivekananda, S. 1968 (11th Edition). *The Complete Works of Swami Vivekananda: Mayavati Memorial Edition vol.II*. Calcutta: Advaita Ashrama.
- 1964 (6th Edition). *The Complete Works of Swami Vivekananda: Mayavati Memorial Edition vol.VII*. Calcutta: Advaita Ashrama.
- Yamada, I. 1981. *Sarva-tathāgata-tattva-saṅgraha nāma mahāyāna-sūtra: A Critical Edition Based on a Sanskrit Manuscript and Chinese and Tibetan Translation*. New Delhi: Sharada Rani.
- Zadoo, J. D. 1947. *Uddamareshvara tantram*. in Kashmir series of texts & studies No.LXX. The Normal Press.
- 酒井真典 1979『梵文初会の金剛頂經 S 本 遍照光院歴世全書第六卷』高野山遍照光院歴世全書刊行会
- 天台宗典籍編纂所 1993『續天台宗全書 密教 1 大日經義釈』春秋社
- 堀内寛仁 1974『初会金剛頂經の研究 梵本校訂篇 下』密教文化研究所
- 1983『初会金剛頂經の研究 梵本校訂篇 上』密教文化研究所
- 堀内寛仁編 2009『Giuseppe Tucci 博士将来『初会の金剛頂經』梵文原典』(高野山大学図書館所蔵)

二次資料 Secondary Sources

- Almogi, O. 2002. "Sources on the life and works of the eleventh-century tibetan scholar rong zom chos kyi bzang po: A brief survey." *Tibet, past and present: Tibetan studies I*. Brill, 67-80.
- 2008. "How authentic are titles and colophons of tantric works in the tibetan canon? The case of three works and their authors and translators." *Contributions to tibetan buddhist literature. PIAT 2006: Tibetan studies: Proceedings of the Eleventh Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Königswinter 2006*. Halle, 87-124.
- Avalon, A. 1952(First edition is 1914). *Principles of tantra*. Madras: Ganesh & Co., LTD.
- Bagchi, P. C. 1939. *Studies in the tantras*. Part1. University of Calcutta.
- 1956. "Evolution of the tantras." *The cultural heritage of India* 4: 211-226.
- 1989. "Evolution of the tantras." *Studies on the tantras*. Rama Art Press, 6-24.
- Bandurski, F. 1994. "Übersicht über die Göttinger Sammlungen der von Rāhula Sāṅkrītyāyana in Tibet aufgefundenen buddhistischen Sanskrit-Texte." *Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen texte aus den Turfan-Funden Beiheft5: Untersuchungen zur buddhistischen Literatur*. Göttingen: Vandenoek & Ruprecht in Göttingen.
- Banerji, S.C. 1988. *A Brief History of Tantra Literature*. Calcutta: Naya Prokash.
- 1992. *Tantra in bengal: A study in its origin, development and influence*. Delhi: Manohar.
- 2007. *A companion to tantra*. Delhi: Abhinav Publications.
- Bhandarkar, M. A. 1908. "An Êkaliṅgî stone inscription and the origin and history of the Lakulisâ sect." *The Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society Vol.XXII*. Bombay: The Society, 151-167.
- Bharati, A. 1965. *The Tantric Tradition*. London: Rider & Company.
- Bhattacharyya, B. 1930. "Buddhist Deities in Hindu Garb." *Proceedings and Transactions of the Fifth Indian Oriental Conference*: 1277-1298.
- 1932. *An introduction to Buddhist Esoterism*. Oxford University Press.
- 1933. "THE CULT OF BHŪTAḌĀMARA." *Proceedings and Transactions of The Sixth All-India Oriental Conference*. The Bihar and Orissa Research Society, 349-370.
- Bhattacharyya, N. N. 1982. *History of the Tantric Religion: A Historical, Ritualistic and Philosophical Study*. New Delhi: Manohar Publications.
- Biernacki, L. 2007. *Renowned Goddess of Desire: Women, Sex, Speech in Tantra*. New York: Oxford University Press.
- Bose, P. 2015. *Indian Teachers of Buddhist Universities*. Delhi: Facsimile Publisher. reprint (1st ed.1923, Theosophical Publishing House, Madras)
- Brooks, D. R. 1990. *The Secret of the Three Cities: An Introduction to Hindu Śākta Tantrism*. The

- University of Chicago Press.
- Bühnemann, G. 1996. "The Goddess Mahācīnakrama-Tārā (Ugra-Tārā) in Buddhist and Hindu Tantrism." *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*:59 (3): 472-493.
- 1999. "Buddhist Deities and Mantras in the Hindu Tantras: I The Tantrasārasaṃgraha and the Īśānaśivagurudevapaddhati." *Indo-Iranian Journal*, volume 42, Issue 4. Kluwer Academic Publishers, 303-334.
- 2000. "Buddhist Deities and Mantras in the Hindu Tantras: II The Śrīvidyārṇavatāntra and the Tantrasāra." *Indo-Iranian Journal*, volume 43, Issue 1. Kluwer Academic Publishers, 27-48.
- 2000. *The Iconography of Hindu Tantric Deities*. 2vols. Groningen: Egbert Forsten.
- Burnouf, E. 1844. *Introduction a l'histoire du Bouddhisme Indien*. Paris.
- Burnouf, E. Buffetrille, K and Lopez Jr., D. S.(Trans.) 2010. *Intoroduction to the History of Indian Buddhism*. The University of Chicago Press.
- Chakravarti, C. 1963. *Tantras: Studies on their religion and literature*. Culcutta: Punthi Pustak.
- Chattopadhyaya, L. C.A.(transl.) 2010. *Tāranātha's History of Buddhism in India*. Delhi: Motilal Banarasidass Publishers. (1st ed. 1970)
- Conze, E. 1953. *Buddhism: Its Essence and Development*. Oxford: Bruno Cassirer
- Dasgupta, S. B. 1946. *Obscure Religious Cults As Background Of Bengali Literature*. University of Calcutta.
- 1950. *An Introduction to Tāntric Buddhism*. Universty of Calcutta.
- Davidson, R. M. 1981. "The nor pa tradition." *Wind horse: Proceedings of the north american tibetological society* 1: 79-98.
- 2002. *Indian Esoteric Buddhism: A Social History of the Tantric Movement*. New York: Columbia University Press.
- Dehejia, V. 1986. *Yoginī cult and temples: A tantric tradition*. New Delhi: National Museum.
- Delhey, M. 2012. "The Textual Sources of the *Mañjuśrīyamūlakalpa* (*Mañjuśrīmūlakalpa*), With Special Reference to Its Early Nepalese Witness NGMPP A39/4*." *Journal of the Nepal Research Centre*. Vol. XIV: 55-75.
- Deva, R. R. K. 1967 (3rd edition). *Shabda-kalpadrum*. Part.2. The Chowkhamba Sanskrit Series Office.
- Dikshit, S. K. 1947. "Mahāmāmsa-vikraya (The sale of human flesh)." *Proceedings of the indian history congress* 10: 102-109
- Dyczkowski, M. S. G. 1988. *The canon of the śaivāgama and the kubjikā tantra of the western kaula tradition*. State University of New York Press.
- Eliade, M. 1954. *Le Yoga: Immortalité et Liberté*. Paris: Payot.
- Eliade, M. Trask, W. R.(Trans.) 1958. *Yoga: Immortality and Freedom*. Routledge & Kegan

Paul LTD.

范慕尤、2011『梵文写本《无二平等经》的对勘与研究』中西書局、上海

Farquhar, J. N. and Griswold, H. D. 1920. *The religious quest of india: an outline of the religious literature of india*. Oxford University Press.

Finn, L. M. 1986. *The kulacūḍāmaṇi tantra and the vāmakeśvara tantra*. Otto Harrassowitz.

Fujii, A. 2018. "The dwelling place of Maheśvara in Indian esoteric buddhism: Focusing on descriptions of ekaliṅga in the *Bhūtaḍāmaratantra*." *Journal of Indian and Buddhist Studies* 66(3): 158-162.

—— 2019. "Flesh-selling rituals in Indian tantric buddhism: Descriptions in the Buddhist and Hindu *Bhūtaḍāmaratantra*." *Journal of Indian and Buddhist Studies* 67(3): 141-146.

Giebel, R. W. 2001. *Two Esoteric Sutras*. Numata Center.

—— 2005. *The Vairocanābhisaṃbodhi Sutra: Translated from the Chinese (Taishō Volume 18, Number 848)*. Numata Center.

Goudriaan, T. 1973. "Tumburu and his Sisters." *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für Indische Philosophie* 17: 49-95.

—— 1979. "Introduction, History and Philosophy." *Hindu Tantrism*. Brill, 3-67.

Goudriaan, T. and Gupta, S. 1981. *Hindu Tantric and Śākta Literature*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Gray, D.B. 2007. "Compassionate Violence?: On the Ethical Implications of Tantric Buddhist Ritual." *Journal of Buddhist Ethics* 14: 239-271.

Harshananda, S. 2012. *A Concise Encyclopedia of Hinduism*. 3volumes. Bangalore: Ramakrishna Math. (3rd Edition of the 1st Edition of 2008)

Hatley, S. 2007. *The Brahmayāmalatantra and Early Śaiva Cult of Yoginīs*. PhD dissertation. University of Pennsylvania.

Hodge, S. 2003. *The Maha-Vairocana-Abhisambodhi Tantra: With Buddhaguhya's Commentary*. Routledge.

Humboldt, W. V. 1836. *Über die Kawi-sprache auf der insel Java, nebst einer einleitung über die verschiedenheit des menschlichen sprachbaues und ihren einfluss auf die geistige entwicklung des menschengeschlechts*. Berlin: Druckerei der Königlichen akademie der wissenschaften.

Isaacson, H. 1998. Lecture transcript: "Tantric Buddhism in India(From c. A. D. 800 to c. A. D. 1200)." *Buddhism in Past and Present*. Vol.2. University of Hamburg, Asia-Africa-Institute, Department for Indian and Tibetan Studies. (Continuing Academic Education)

Kapoor, S. 2002. *Encyclopaedia of indian heritage: Tantra philosphy*. vol. 78. Cosmo Publications.

Kaviraja, G., ed. 1970. *Pheṭkāriṇī Tantram in Tantrasangraha, Yogatantra-Granthmala Vol.IV*,

- Part.II. Varanasi: Varanaseya Sanskrit Uishvavidyalaya.*
- Kern, H. 1896. *Manual of Indian Buddhism*. Strassburg: Verlag Von Karl J. Trübner.
- Kittay, D. R. 2011. *Interpreting the Vajra Rosary: Truth and Method Meets Wisdom and Method*. Columbia University.
- Kiyota, M. 1990. "The Mahāvairocana-Sūtra (First Chapter): An Annotated English Translation." 『大乘仏教から密教へ 勝又俊教博士古稀記念論集』 春秋社、(17)-(43)
- Lessing, F. D. and Wayman, A. 1978 (1st edition 1968). *Introduction to the Buddhist Tantric Systems*. Motilal Banarsidass.
- Lin, N. G. 2013. "Purity in the pudding and seclusion in the forest: Si tu paṇ chen, monastic ideals, and the buddha's biographies." *Journal of the international association of tibetan studies* 7: 86-124.
- Lorenzen, D. N. 1972. *The Kāpālikas and Kālāmukhas: Two lost śaivite sects*. New Delhi: Thomson Press.
- Martin, D. 1997. *Tibetan histories: A bibliography of tibetan-language historical works*. London: Serindia publications.
- Mcdaniel, J. 2004. *Offering flowers, feeding skulls: Popular goddess worship in west Bengal*. New York: Oxford University Press.
- Mette, A. and Sakuma, R. 2017. "Introduction: Kāraṇḍavyūha". *Gilgit Manuscripts in the National Archives of India Facsimile Edition volume II.4 Further Mahāyānasūtra*. The National Archives of India and The International Research Institute for Advances Buddhology, Soka University.
- Nambiyar, Raghavan. 1950. *An Alphabetical list of Manuscripts in the Oriental Institute Baroda vol.II*. Oriental Institute Baroda.
- Obermiller, E. 1932. *The History of Buddhism in India and Tibet by Bu-ston*. Heidelberg.
- Orzech, C. D., Sørensen, H. H. and Payne, R. K. (eds.) 2011. *Esoteric Buddhism and the Tantras in East Asia*. Brill.
- Padoux, A. 1987. "Tantrism." *The Encyclopedia of Religion*. vol.14. New York: Macmillan Publishing Company, 272-274.
- 2011. *Tantric Mantras: Studies on Mantrasastra*. Routledge
- Pal, P. 1981. *Hindu religion and iconology according to the Tantrasāra*. Los Angeles: Vichitra Press.
- Payne, R. K.(edit.) 2006. *Tantric Buddhism in East Asia*. Boston: Wisdom Publication.
- Penzer, N. M. 1984. *The ocean of story*. Vol.2. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Poussin, L. V. 1921. "Tāntrism (Buddhist)". *Encyclopaedia of Religion and Ethics*.vol. 12. Edinburgh: T. & T. Clark, 193-197.
- Raudsepp, K. 2009. "Dating and authorship problems in the sngags log sun 'byin attributed to

- chag lo tsā ba chos rje dpal." *Contemporary visions in tibetan studies*: 281-297
- Renou, L. & Fillozat, J.(edit.) 1953. *L'inde Classique: Manuel des Etudes Indiennes*. Tome 2. Paris: Imprimerie Nationale.
- Ruegg, D. S. 1964. "Sur le Rapports entre le Bouddhisme et le "Substrat Religieux" Indien et Tibétain". *Journal Asiatique*. CCLII(1): 77-95
- 2001. "A Note on the Relationship between Buddhist and 'Hindu' Divinities in Buddhist Literature and Iconology: The Laukikailokottara Contrast and the Notion of an Indian 'Religious Substratum' ." *Le Parole e i Marmi*. Roma: Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente, 735-742.
- 2007. *The symbiosis of Buddhism with Brahmanism/Hinduism in South Asia and of Buddhism with 'local cults' in Tibet and the Himalayan region*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Śākya, R. 2000. *A short catalogue of āśā archives*. Kathmandu: Āśā Archives.
- Samten, J. 1992. *A catalogue of the Phug-Brag manuscript Kanjur*. Dharamsala: Library of Tibetan Works & Archives.
- Samuel, G. 2008. *The Origins of Yoga and Tantra: Indic Religions to the Thirteenth Century*. Cambridge University Press.
- Sanderson, A. 1988. "Śaivism and the Tantric Traditions." *The World's Religions*: 660-704
- 1994. "Vajrayāna: Origin and Function." *Buddhism into the Year 2000: International Conference Proceedings*. Dhammakaya Foundation, 87-102.
- 2009. "The Śaiva Age: The Rise and Dominance of Śaivism during the Early Medieval Period." *Genesis and Development of Tantrism*. Tokyo: Institute of Oriental Culture, 41-349.
- Santidev, S. 1999. *Encyclopedia of Tantra vol. I*. New Delhi: Cosmo Publications.
- Schaeffer, K. R. / van der Kuyp, L. 2009. *An early tibetan survey of buddhist literature: The bstan pa rgyas pa rgyan gyi nyi 'od of bCom ldan ral gri*. Harvard oriental series vol.64. Cambridge, Massachusetts, London: Harvard University Press.
- Schlieter, J. 2006. "Compassionate Killing or Conflict Resolution? The Murder of King Langdarma according to Tibetan Buddhist Sources." *Buddhism and Violence*. ed. Michael Zimmermann. Lumbini: Lumbini International Research Institute, 131-157.
- Sharma, H. D. 1976. *Descriptive Catalogue of the Government Collections of Manuscripts, deposited at the Bhandarkar Oriental Research Institute Vol.XVI: Part II TANTRA*. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- Shaw, M. 1994. *Passionate enlightenment: Women in tantric Buddhism*. Newjersey: Princeton University Press.
- Skorupski, T. 1985. *A catalogue of the stog palace kanjur*. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.

- Snellgrove, D. 1987. *Indo-Tibetan Buddhism: Indian Buddhists and their Tibetan Successors*. London: Serindia Publications.
- Sørensen, H. H. 2011. "On Esoteric Buddhism in China a Working Definition." *Esoteric Buddhism and the Tantras in East Asia*: 155-175.
- Sotomura, A. 2015. *The buddhist heavens, Nalanda-sriwijaya centre working paper series No.18*. The Nalanda-Sriwijaya Centre Institute of Southeast Asian Studies. Singapore.(<https://www.iseas.edu.sg/articles-commentaries/nsc-working-papers>)
- Studholme, A. 2002. *The Origis of Oṃ Mañipadme Hūṃ: A Study of the Kāraṇḍavyūha Sūtra*. State University of New York Press.
- Tajima, R. 1936. *Étude sur le Mahāvairocana-sūtra (Dainichikyō)*. Paris : Adrien Maisonneuve.
- Tokunaga, M. 1990. "Names of the Alphabets in some Pāñcarātra Saṃhitās." 『東アジアにおける文化交流と言語接触の研究—中国・チベット・インドを中心に—』 特定研究報告書、21-64
- Tomabechi, T. 2007. "The extraction of mantra (mantroddhāra) in the Sarvabuddhasamāyogatantra." *Pramāṇakīrtiḥ: Papers dedicated to Ernst Steinkellner on the occasion of his 70th birthday* part. 2: 903-923.
- 2016. "Bhavyakīrti's Sub-commentary on the Pradīpodyotana as a Doxography: Some Preliminary Remarks and a Synopsis." *Oriental culture* 96: 81-94.
- Tribe, A. 2016. *Tantric Buddhist Practice in India: Vilāsavajra's commentary on the Mañjuśrī-nāmasaṃgīti A critical edition and annotated translation of chapters 1-5 with introductions*. Routledge.
- Tatz, M. 2001(reprint). *The skill in means (upāyakauśalya) sūtra*. Delhi: Motilal Banarasidass.
- Tsuda, S. 1990. "The cult of śmaśāna, the realities of tantra." *The sanskrit tradition and tantrism*. Brill.
- Tucci, G. 1932. *Indo-Tibetica I*. Roma: Reale Accademia d'Italia.
- 1935. *Indo-Tibetica III parte I*. Roma: Reale Accademia d'Italia.
- 1999(first edition 1949). *Tibetan Painted Scrolls I*. SDI Publications.
- Tucci, G.(auth.) Vesci, U. M.(trans.) Chandra, L.(edit.) 1988a. *Stupa: art, architectonics and symbolism (English version of Indo-Tibetica I)*. New Delhi: Aditya Prakashan.
- Tucci, G.(auth.) Chandra, L. (Trans.) 1988b. *The Temples of Western Tibet and their Artistic Symbolism (English version of Indo-Tibetica III.1)*. New Delhi: Aditya Prakashan.
- Vasu, N. 1912. *The archaeological survey of Mayurabhanja*. vol.1. Calcutta: The Mayurabhanja State.
- Vira, R. and Taki, S. 1938. *Dakshināmūrti's Uddhāra-kośa: A dictionary of the secret Tantric syllabic code*. International Academy of Indian Culture.
- Waddell, L. A. 1895. *The Buddhism of Tibet or Lamaism*. London: W. H. Allen & Co.

- Wangchuk, D. 2002. "An eleventh-century defence of authenticity of the guhyagarbha tantra." *The many canons of tibetan buddhism*: 265-291.
- Wayman, A. 1968. "Concerning saṃdhā-bhāṣā / Saṃdhi-bhāṣā / Saṃdhyā bhāṣā" *Melanges d'indianisme a la memoire de Louis Renou*. Paris: Éditions E. de Boccard, 789-796.
- 1973. *The Buddhist Tantras: Light on Indo-Tibetan Esotericism*. London: Routledge & Kegan Paul LTD.
- 1977(Reprint 1980). *Yoga of the Guhyasamājatantra: The Arcane Lore of Forty Verses A Buddhist Tantra Commentary*. New York: Samuel Weiser.
- Wedemeyer, C. K. 2001. "Tropes, Typologies and Turnarounds: A Brief Genealogy of the Historiography of Tantric Buddhism". *History of Religions* 40(3): 223-59.
- 2013. *Making sense of Tantric Buddhism: History, semiology, & Transgression in the Indian Traditions*. New York: Columbia University Press.
- White, D. G. 2011. "Tantra". *Brill's Encyclopedia of Hinduism Vol. III*. Brill, 574-588.
- Wilson, H. H. 1828. "Notice of Three Tracts received from Nepal." *Asiatic Researches. Vol. XVI*. Calcutta: The Government Gazette Press, 450-478.
- Winternitz, M. 1933. *A History of Indian Literature. vol.2*. University of Calcutta.
- Woodroffe, J. 1929 (third edition). *Shakti and Shākta: Essays and Addresses on the Shākta Tantrashāstra*. Madras: Ganesha & Co.
- Yamamoto, C. 1990. *Mahāvairocana-Sūtra*. New Delhi: International Academy of Indian Culture and Aditya Prakashan.
- Yamano, C. 2013. "The Yakṣiṇī-sādhana in the Kakṣapuṭa-tantra: Introduction, Critical Edition, and Translation." *Journal of the international college for postgraduate buddhist studies* XVII: 61-118
- 嚴靈峯編輯 1978『書目類編』51 卷、成文出版社
- ヴィンテルニッツ著、中野義照訳 1978『インド文献史 3 卷 仏教文献』日本印度学会
- ギーブル・ロルフ 2000『『蘇悉地羯羅經』原典研究初探—漢字音譯奉獻願偈等の推定還梵を中心に—』『東方学』99: 91-105.
- エドワード・J・D・コンゼ著、平川彰、横山紘一訳 1975『コンゼ佛教—その教理と展開』大蔵出版
- S・B・ダスグプタ著、宮坂宥勝、桑村正純訳 1981『タントラ仏教入門』人文書院
- パウル・ハッカー著、北田信訳 2010「包括主義」『インド宗教思想の多元的共存と寛容思想の解明』平成 19-21 年度科学研究費補助金基盤研究 (A) (課題番号 19202003) 研究成果報告書、山喜房佛諸書林、503-522.
- バッタチャリヤ著、神代峻訳 1988『インド密教学序説』東洋書院
- ミルチャ・エリアーデ 1975『エリアーデ著作集第十巻 ヨーガ 2』せりか書房
- L.ルヌー、J.フィリオザ著、山本智教訳 1981『インド学大事典 第 3 巻』金花舎

- 飯塚秀譽 1997 「『Mañjuśrīmūlakalpa』の基本資料」『豊山教学大会紀要』25:85-100.
- 石川海浄 1959 「一闡提思想について」『大崎学報』109: 1-14.
- 石川美恵 1993 『二卷本訳語釈—和訳と注解—』東洋文庫
- 井田克征 2012 『ヒンドゥータントリズムにおける儀礼と解釈—シュリーヴィディヤー派の日常供養—』昭和堂
- 伊藤堯貫 1994 「『金剛手灌頂タントラ』の一考察」『智山学報』43: 1-15.
- 1995a 「『金剛手灌頂タントラ』試訳(1)」『大正大学大学院研究論集』19: 278-290.
- 1995b 「『金剛手灌頂タントラ』試訳(2)」『智山学報』44: 27-51.
- 2000 「『蘇悉地経』とインド社会」『現代密教』13: 267-283.
- 伊原照蓮 1957 「小乗咒と密教経典」『智山学報』6: 24-37
- 岩本裕 1957 『カタール・サリット・サーガラ(二)』岩波書店
- 遠藤祐純 1999 「金剛頂経研究—密教におけるタントラの諸相—」宮坂宥勝博士古稀記念論文集刊行会編『インド学 密教学研究 上—宮坂宥勝博士古稀記念論文集』法蔵館、
- 2005 『続金剛頂経入門2 初会金剛頂経降三世品』ノンブル社
- 2008 『金剛頂経研究』ノンブル社
- 2012 『『大日経撰義』和訳 全』ノンブル社
- 2013 『蓮花寺仏教研究所研究叢書『タントラ義入』和訳 全』ノンブル社
- 横超慧日 1935 「新出金版蔵経を見て」『東方学報・東京』5号続編、東方文化学院東京研究所、283-307.
- 大塚伸夫 2013 『インド初期密教成立過程の研究』春秋社
- 大山仁快 1982 「蘇悉地経に関する一考察」『密教文化』140: 44-68
- 越智淳仁 1973 「Buddhaguhya の Tantra 分類法」『印度学仏教学研究』21(2): 1008-1004
- 1974 「Buddhaguhya の年代考」『印度学仏教学研究』22(2): 130-134
- 小野玄妙編 1933 『仏書解説大辞典 第五卷』大東出版社
- 1964 『佛書解説大辞典 第八卷』大東出版社
- 金沢篤 2000 「タントラ学事始—インド学の曙、もしくは註記の為の本の旅(1)」『駒澤大学仏教学部研究紀要』58: (1)-(18).
- 上村勝彦 1978 『屍鬼二十五話』平凡社
- 辛嶋静志 2017 「大衆部と大乘」『印度学仏教学研究』66(1): 82-88
- 川越英真 2005a 『dkar chag 'Phang thang ma』東北インド・チベット研究会
- 2005b 「『パンタン目録』の研究」『日本西藏学会々報』51: 115-131
- 川嶋健 1989 「“Trailokyavijaya mahākālpārāja”の研究—mūlatantra を中心にして—」『印度学仏教学研究』37(2): (197)-(199).
- 北村太道 1980 『チベット語和訳 大日経略釈』文政堂

- 1993「『Tantrārthāvatāra』を中心とした『金剛頂経』の研究（その17）」『密教学』29: (1)-(39).
- 1994「『Tantrārthāvatāra』を中心とした『金剛頂経』の研究（その18）」『密教学』30: (1)-(19).
- 2016『初会金剛頂経概論『タントラ義入』の研究—ブツダグヒヤ本論・パドマヴァジュラ註釈の全訳と解説—』起心書房
- 北村太道・タントラ仏教研究会 2012『『金剛頂経』系密教 原典研究叢刊 1 全訳金剛頂大秘密瑜伽タントラ』起心書房
- 清田寂雲 1974「大日経義釈に引用する金剛頂経」『印度学仏教学研究』23(1): 106-113.
- 齋藤直樹 2001「Lo tsā ba (翻訳者) Vairocanarakṣita—skad gsar bcad (語改定)以前の翻訳の特徴—」『日本仏教学会年報』66:121-132.
- 佐伯和彦 2003『世界歴史叢書 ネパール全史』明石書店
- 酒井紫朗 1950「金剛頂降三世大儀軌法王教中觀自在菩薩心眞言一切如來蓮華大曼荼羅品に就いて」『密教文化』12: 16-22.
- 1952「文殊菩薩の五字呪法に就いて」『密教文化』18: 28-37.
- 1955「真言(Mantra)の記憶詩について」『密教文化』31: 1-8.
- 酒井真典、白石真道 1958「初会金剛頂経降三世品の一節について」『密教文化』41/42: 99-118.
- 酒井真典 1962『大日経の成立に関する研究 遍照光院歴世全書 第二巻』高野山出版社
- 1973『修訂大日経の成立に関する研究』国書刊行会
- 1983『酒井真典著作集 第一巻 大日経研究』法蔵館
- 1985『酒井真典著作集 第三巻 金剛頂経研究』法蔵館
- 佐久間留理子 2005「『カーランダ・ヴェーハ』の研究—メッテ校訂本とサマスラミ校訂本の相違点」『印度学仏教学研究』54(1): 421-426
- 2006「『カーランダ・ヴェーハ』における觀自在菩薩の身体觀」『印度学仏教学研究』55(1): 416-421
- 2012「『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』の展開とその宗教的背景」『日本佛教学会年報』77: 109-129
- 2013a「『カーランダ・ヴェーハ』の翻訳研究（1）—サマスラミ校訂本第一部第二章」『東方』28: 243-255
- 2013b「サマスラミ校訂本『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』の原典批判研究」『印度学仏教学研究』62(1): 318-322
- 佐々木大樹 2013「『陀羅尼集経』初期密教の諸尊・陀羅尼を統合する経典」『初期密教思想・信仰・文化』春秋社、57-68.
- 佐藤直実 2012「大乘『大般涅槃経』重訳チベット語訳の有用性」『日本佛教学会年報』77: (197)-(212).

- 静春樹 2006「金剛乗とインド仏教史」『密教文化』216: (5)-(35).
- 2015『ガナチャクラと金剛乗—後期インド仏教論の再構築を目指して—』起心書房
- 二楞生 1915「安祥寺恵運禅師の請来録に就きて」『仏書研究』15: 3-6.
- 柴田泰 1965「法天改名法賢説について」『宗教研究』39:80-81.
- 島岩 2003「印の結び方—『十六ニティヤー女神の海』第三章和訳—」『印度哲学仏教学』18: 97-106.
- 2004「シュリー・チャクラの描き方とヴィディヤーの抽出法:NṢA 1.1-119ab 和訳」『東洋文化研究所紀要』145: (177)-(214).
- 清水明澄 2008「唐土における『大日経』注釈書の成立過程—『温古序』を中心として—」『密教文化』221: 49-72.
- 高田仁寛 1978『インド・チベット真言密教の研究』密教学術振興会
- 1988「インドにおける真言密教と外教との関係—『蘇婆呼童子請問経』を中心として—」『密教文化』163: 1-16.
- 高橋尚夫、木村秀明、野口圭也、大塚伸夫編 2013『初期密教 思想・信仰・文化』春秋社
- 高橋良海 2004「底哩三昧耶経」『新国訳大蔵経 密教部 4』大蔵出版、335-384.
- 武内孝善 1976「宋代翻訳経典の特色について—附・宋代翻訳経典編年目録—」『密教文化』113: 27-53.
- 田中於菟弥、指田清剛訳 1966『十王子物語』平凡社
- 田中公明 2010『インドにおける曼荼羅の成立と発展』春秋社
- 種村隆元 2010「密教の出現と展開」『新アジア仏教史 02 インドⅡ 仏教の形成と展開』佼成出版社、209-262.
- 2013「密教とシヴァ教」『大乘仏教のアジア シリーズ大乘仏教第十巻』春秋社、73-102.
- 2019「Sarvatathāgatatattvasaṃgraha における āveśa について」『密教学研究』51: 31-53.
- 塚本啓祥、松長有慶、磯田熙文編 1989『梵語仏典の研究 IV』平楽寺書店
- 塚本善隆 1936「仏教史料としての金刻大蔵経—特に北宋釈教目録と唐遼の法相宗関係章疏に就いて—」東方文化学院京都研究所『東方学報』6:26-100.
- 辻直四郎 1973『サンスクリット文学史』岩波書店
- 土田龍太郎 2017『大説話ブリハットカター』中央公論新社
- 寺本婉雄訳 1974『ターラナータ印度佛教史』国書刊行会
- 梶尾祥雲 1927『曼荼羅の研究』高野山大学出版部
- 1930『理趣経の研究』高野山大学出版部
- 1933『秘密佛教史』高野山大学出版部
- 梶尾祥瑞 1952「印度密教の一側面」『密教文化』19: 28-45.

- 1976「外国人の密教研究—現代における密教理解の方法—」『現代密教講座 第8巻』大東出版
- 外川昌彦 2017「スワミー・ヴィヴェーカーナンダにおける宗教とナショナリズム—仏教とヒンドゥー教の関係を通して見た」『南アジア研究』29: 61-91.
- 中野義照 1973『インドの学術書—インド文献史 第6巻—』日本印度学会
- 永井政之他 2015『『宋会要』道釈部訓注(10)』『駒澤大学仏教学部論集』46:53-110.
- 名取玄喜 2018a「Bhūtaḍāmaratantra の原典資料について」『豊山教学大会紀要』46: 13-27.
- 2018b「Bhūtaḍāmaratantra の原典研究—原典資料の相互関係を中心に—」『密教学研究』50: 51-65.
- 2018c「Subhūtipālita 著〈Bhūtaḍāmarabhaṭṭārakasādhana〉所説の灌頂儀礼について」『印度学仏教学研究』67(1): 342-345.
- 2019「スプーティパーリタとその著作」『豊山教学大会紀要』47: 1-13.
- 西岡祖秀 1983「『プトゥン仏教史』目録部索引 III」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』6: 47-182.
- 野口圭也 1993「インド密教のサハジャ思想」『仏教学』34: 1-24.
- 2000「密教におけるサハジャ思想の形成」『密教の形成と流伝 高野山大学密教文化研究所紀要』別冊 2: 165-188.
- 2016「インド中期密教とは何か」『空海とインド中期密教』春秋社、5-24.
- 引田弘道 1997『ヒンドゥータントリズムの研究』山喜房佛書林
- 平川彰 1999『律蔵の研究I』春秋社
- 福田亮成 1998『新国訳大蔵経 密教部 1』大蔵出版
- 藤井明 2015「インド初期密教と他宗教との関わり—特に大自在天の記述を中心にして—」『東洋大学大学院紀要』52: 191-215.
- 2016「『ブータダーマラ・タントラ』における発話者—仏教文献とシヴァ派文献との比較を通して—」『東洋大学大学院紀要』53: 141-159.
- 2017「密教における殺と降伏」『東洋学研究』54: 157-172
- 前田崇 1972「密教の形成についての一考察—Āryamañjuśrīmūlakalpa における真言 Mantra を中心として」『論集』3: 51-74
- 1973「密教の形成」『印度学仏教学研究』21(2): 400-402.
- 松長恵史 2000「特集<不動明王>事典 経典篇」『大法輪』平成 12 年 11 月号: 111-115.
- 松長有慶 1961「タントラ仏教に対する批判と擁護の立場」『密教文化』53/54: 110-134.
- 1966「Mañjuśrīmūlakalpa の成立年代について」『印度学仏教学論集：金倉博士古稀記念』407-421.
- 1969『密教の歴史』サーラ叢書 19、平楽寺書店
- 1972「大乘思想の儀軌化」『密教文化』98: 19-33.

- 1980『密教経典成立史論』法蔵館
- 1998『松長有慶著作集第一巻 密教経典成立史論』法蔵館
- 1998『松長有慶著作集第五巻 秘密集会タントラの研究』法蔵館
- 丸井浩 2010「宗教の多元的共存の場に展開するインドの哲学的思惟の特質をさぐる」
『インド宗教思想の多元的共存と寛容思想の解明』平成 19-21 年度科学研究費補助
金基盤研究（A）（課題番号 19202003）研究成果報告書、山喜房佛諸書林、44-118.
- 2015「インドの寛容精神と包括主義—中村博士の思想研究の眼差し」『比較思想研
究』41: 18-27
- 望月良晃 1969「一闡提とはなにか」『印度学仏教学研究』17(2): 112-118.
- 1988『大乘涅槃経の研究—教団史的考察』春秋社
- 森雅秀 2001『インド密教の仏たち』春秋社
- 2004「金剛界マンダラのヒンドゥー神」大正大学真言学豊山研究室小野塚幾澄博士
古稀記念論文集刊行会編『小野塚幾澄博士古稀記念論文集 空海の思想と文化〈上〉』
ノンブル社、523-543.
- 密教聖典研究会 2015「Amoghapaśakalparāja Preliminary Edition および和訳註—サンスク
リット語写本 ff. 97v4-99r2—」『大正大学総合仏教研究所年報』37:41-69
- 宮坂宥勝 1995『インド学密教学論考』法蔵館
- 1998「密教とヒンドゥー教との交渉—『大日経』の一断面」『仏教教理・思想の研
究』山喜房佛書林、607-634.
- 山口しのぶ 2013「「グシュメーシュヴァラ・ジョーティルリンガ」の縁起譚」『東洋学論
叢』38: 104-116.
- 山野千恵子 2014「死者の蘇生—『カクシャプタ・タントラ』の呪術世界—」『蓮華寺佛
教研究所紀要』7: (58)-(74).
- 山本匠一郎 2004「ブッダグヒヤのタントリズム」『智山学報』67: 83-96
- 2012「『大日経』の資料と研究史概観」『現代密教』23: 73-102
- 横山裕明 2016『Dākinīvajrapaṇjara の文献学的研究』博士学位請求論文、大正大学
- 吉崎一美 1981「Bhūtaḍāmara 尊の諸文献」『印度学仏教学研究』58(2): 85-92
- 芳村修基 1951「ブトンのチベット仏教史」『仏教学研究』6:1-52
- 1974「デンカルマ目録の研究」『インド大乘仏教思想の研究 カマラシーラの思想』
百華苑
- 頼富本宏 1977「Hevajratāntra に見られる mantra について」『印度学仏教学研究』25(2):
951-945
- 1990『密教仏の研究』法蔵館
- 2005『『金剛頂経』入門—即身成仏への道』大法輪閣
- 李薇 2014「断人命戒における「誤殺」からみる律の「動機主義」」『印度学仏教学研究』
63(1): (192)-(195).

渡辺照宏 1975『不動明王』朝日新聞社

SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース <http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>